

此バシユバチナート堂の建てるあたりの、バグマチ川に臨める火葬場で最後のいきを引とることが、印度教徒の最後の望みださうで、ここで死ねば極樂往生疑無しだといふ事である。ここには王家の火葬場もあるさうで、私はみなかったが、【ネバル】には Royal burning ghat として挿繪があるから確かであらう。さういふ風な神聖中の最も神聖なる場所に、サチの場所が設けられてあつた事は、當然と考へられるのである。二二二・二二三の寶形造の石造小建築は、既に記した様に、有力者の殉死夫妻の記念堂だといふことである。

バシユバチナート堂から、バグマチ川を渡つて東方にあるラムチャンドラ (Ramchandra) ・ビスワループ (Biswarup) 等の印度教祠の境内には、此種の寶形造石造など建築が多数見出されるが、此等が總て同様にサチの記念堂だかどうかは聞き洩らした。ビスワループの北隣にグヘスワリ (Gheswari) といふ一廓があるが、これは周圍に樹木が多く、まるで見えないが、やはり祠堂ださうである。ここを隔てて東北方にボドナート寺の大塔が一目に見え、洵に絶景である。高地から俯瞰すると大塔を中心に、周圍の部落がよく見えるが、惜しい事に少し遠すぎる。

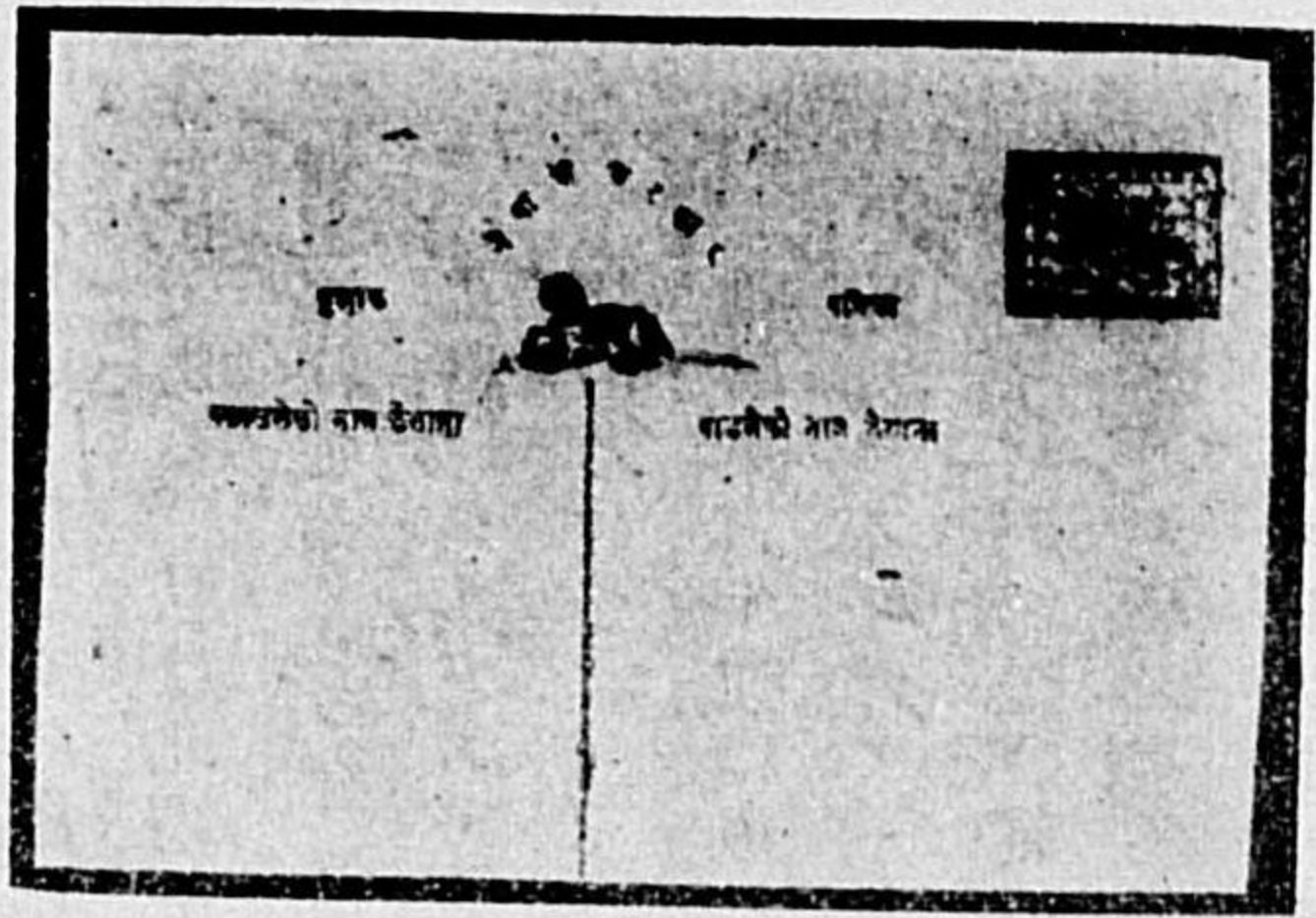
(昭和十二年十月十二日稿了)



ハンピ路傍の殉死記念石 其一 (昭和十年十二月二十日)
カマラプラム (Kamalapuram) の D.R. からハンピ (Hampi) の遺跡の方へ行く路傍にある。此様式のものをごーラカル (Virakal) といふ。英雄石といふ意ださうである。ここにあるのは何れも板碑式のもので、男子は常に合掌し、妻妾は右手を上にし上げてゐる。向つて左の石の左方の婦のみは合掌してゐるが、これはどういふ次第か、私は詳しいことは調べてゐないので、遺體ながら判然しない。右端の石は殘闕で、上の方がどうなつてゐるか判らないが、左から二つ目の様に牛と「リツガ」と夫婦が坐つてゐるところがはつきりと見えてゐる。

印度佛塔巡禮記

(第十五回)

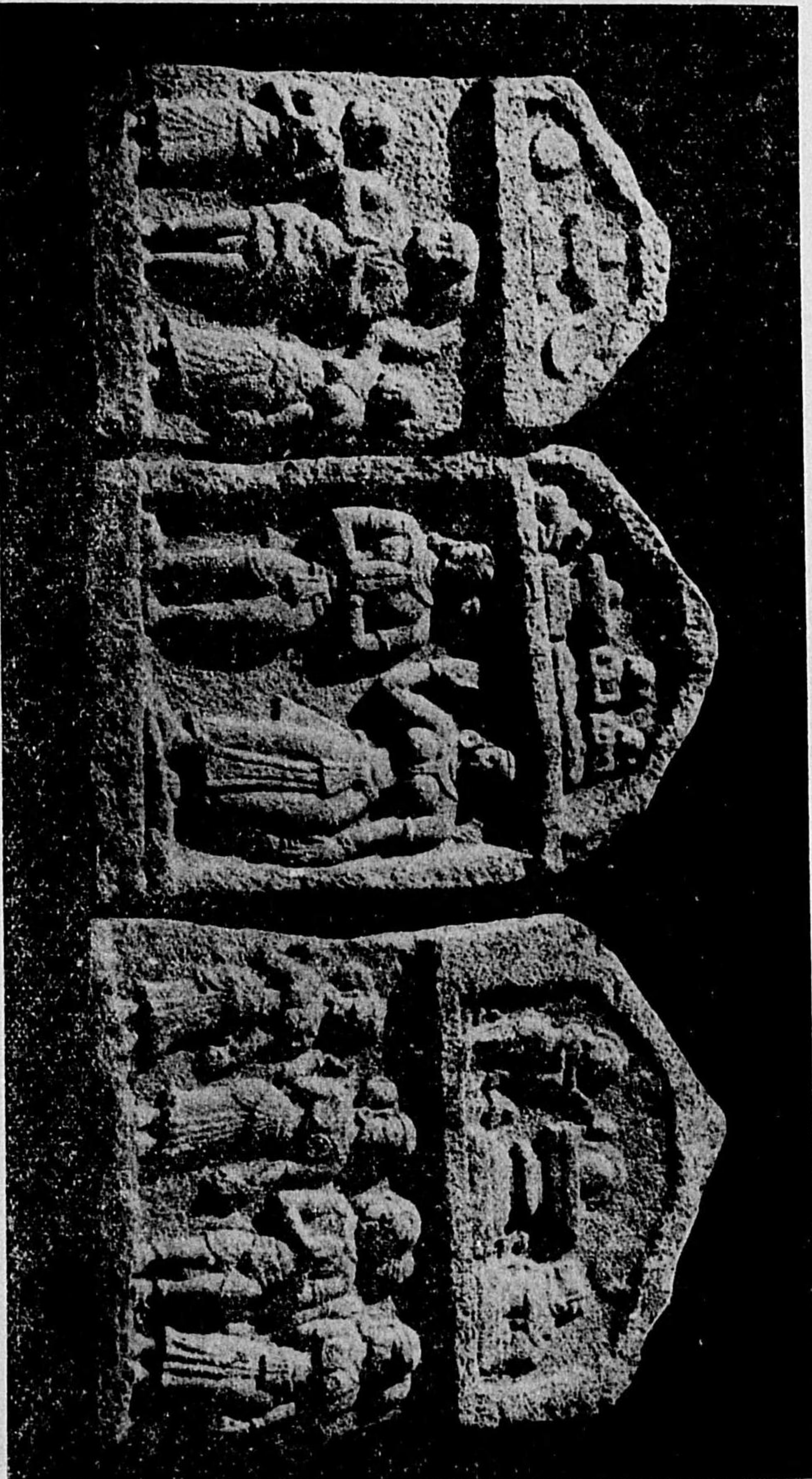


ネパール國郵便はがき

此國は萬國郵便聯合に入っていないので、郵便切手も端書も國內に通用するだけ。紙は國産だが、形は歪である。
(4寸7分×3寸2分)



同上部分 (地色黄土、印刷コバルト)



ハント路傍の殉死記念石 其二 (昭和十年十二月二十日)

前頁の左の三つを上部三角形の部分をはっきり見せるため大きくしたものの。左のは「リンガ」次は「牛」と「リンガ」と夫婦、右端は「主人」が「リンガ」に供物を捧げてゐる所と「牛」。左と右のは夫れに日・月を配してあるが、これはこの意い行をしたといふ證據が「天地日月」と共に永久に残るといふ事を現はしてゐると解されてゐる様である。日本の庚申塔の様で可なり面白い。

九六、パータンの四方塔 (一六〇ウ・ウ四・ウ五・ウ五)

パータン市の東西南北と市内とに佛塔がある。何れも有名なもので、【ヒストリー・オブ・ネバル】には、其二(塔)が彩色版で掲げてあるし、【ネバル】には四基共挿繪とし、南塔は特にセピア色か何かで、一枚の圖版として登載してある。此等の四方塔は何れも煉瓦を積み、土を以て被覆したもので、つまり謂はゆる土饅頭。朝鮮慶州あたりの新羅王陵の頂上へ、何か四角な小さいものをつけた様な形だと思へばよろしい。だから外觀は何れも大同小異だが、實は其極端の場合で、うっかりしてゐると皆同じに見える位である。私は北塔をみただけで、東西南の三塔は何れも見ずにしまった。併し参考のため次に其名稱を掲げておく。

- 一、東塔。タイタス・タウツ (Traitas Taudu)。「トライタス」とかいて「タイタス」と發音するさうである。
- 二、西塔。フルチャ・タウツ (Phulcha Taudu)。バグマチ川に架せる橋を渡り、市に入る邊にあるさうだが、つい氣がつかなかった。
- 三、南塔。ラガン・タウツ (Laghan Taudu)。最大塔で市の南方練兵場にある。此塔はライト博士の【ヒストリー・オブ・ネバル】の第十圖版に彩色石版を以て掲げてあるもので、マチラジャ・

チャイチャ (Matiraja Chaitya) としてあるものと思はれる。但しこれは繪だから、形は少し誇張してある様である。

四、北塔。イビ・タウツ (Zimpi Taudu が本名だが、通稱 Ipi Taudu とする)。此は周圍に精舎があり、尙ほ塔の下から清泉が湧出しているといふのである。而つて以上四塔は何れも阿育王の創立と傳ふ。

* ".....four chaityas built by Raja Asoka of Patna, during his visit to Nepal....." (Daniel Wright—Hist. Nepal, p. 116)

"Two thousand years ago and more, the famous and pious Emperor Asoka seeking one Buddhist site after another, came at last to Patan on his pilgrimage beneath the Himalayas..... First in the heart of the Town he set up a stupa—which has been a'orned and reconstructed in later days out of all recognition—and then all round Patan at each of the four cardinal points, north and south, east and west, he built others—hemispherical mounds of plain unadorned brick. And these remain to this day almost in the state in which he left them, Ipi and Laghan, Tetos and Phulcha. They are the challenge of one age to another, for deep within themselves they contain both relics and records—even if the latter be but some illuminating title upon an alabaster or crystal pot and the former tiny gold-foil blossoms or a squarely cut point of cornelian or sapphire honoring the little pinch within the pot of those most holy ashes from the pyre of Kusinara. Here might be found something to tell us what it was that Asoka found in Patan of such surpassing interest." ("NEPAL", Vol. I, pp. 208—210)

二一四・二一五は即北塔である。遠方から全景を入れようとすると障碍物が多く入り、何にもならなくなるし、土饅頭に過ぎぬのだから、それより特徴のある頂上のところをだしたのである。私はこれを南塔と誤つてゐた。だから前にもさういふことをかいておいたが第9頁、ゆつくりと書物をひっくり返してゐたうちに、四方塔を皆掲げてある事を見出した【ネバル】第一卷(第13・16頁)。肝心の頂上の部分は全部寫つてはないが、*"It has a three-railed wooden gate above its toran"*とあるので、先づ確かだと思ふのである。

バータン市の四方塔は何れも「Taudu」といふ様である。これは「タウツ」とよむらしいが、それが訛音か或はきき様が不良で「ツドゥ」となり、Tsudo Temple だといつたのであらう。こんなものスバがるたら誤らなかつたらうし、大きな書物は家においてきて、ただベンダルの書物一冊だけでは、かいてなかつたので失敗をしたのであつた。尙ほもう少し早く解説をよめばよかつたが、圖は87・88頁にあり、解説は遙か先きの方の第209・210頁のft. nt. にあつたので、つい見付けなかつたが、今度探して眞の名を書き得た事を喜ぶものである。本名は Zimpi Taudu だが Zimpi を Ipi といふさうである。だから其名は「イビ・タウツ」である。さうして何れもこの「タウツ」がつくところを見ると、この字に何か意味があらう。塔とか土饅頭とかいふのなら、差向き「イビ塔」といふようなわけだらう。其上

にこのイビ(或はチムビ)にも意味があるかも知れないが、例により私にはまるで判明しない。

塔の周圍に精舎があり、特殊な型式の平頭の上に謂はゆる「スリー・レイルド・ウーヅン・ゲート」があるが、これは何の意味か知らない。こればかりではない、塔頂上の長方形の平面をもつた、白色十一重の截頭方錐體は、その上に直立せる一本の棒——其棒は方柱で下に一つと上に二つの節があり、球形に終つてゐる——と共に何を現はしてゐるかは輕輕に判断のできぬ事は勿論であるが、四角な十一重の截頭方錐體は相輪の變形(ポドナートやチャバイル)の大塔に於けるが如き)であり、四角な棒は椽を現し、最上部の球形は寶珠でない迄も、少なくとも圖按の上からいつても、棒の遊離端の當然の歸結であらう。此場合平頭は消滅したのであらう。といふのは全く私の憶測である。まあこんな事をかいてみて、讀者諸君の参考に供する。とかくと少しばかり考へた様だが、ウーヅン・ゲートは依然として難物である。

書物の挿圖で見ると、西塔も頂上に此種の方錐體があり、棒もたつてゐるが、鳥居の様なものはない。反てそれは南塔にある。だからとにかく四方塔のうちでは、北塔が最も興味ある様に思ふ。而も精舎を附屬し、簡單ながら石燈もあり、よく古式を今日に残してゐるといへよう。

タンクの傍に在りて特殊の景觀を呈してゐる。此塔はベンダルの【ネバル及び北印旅行記】の圖版にでてゐるから、解説はないが随分以前から私の注意を惹いてゐたものである。この圖版には右端に三重



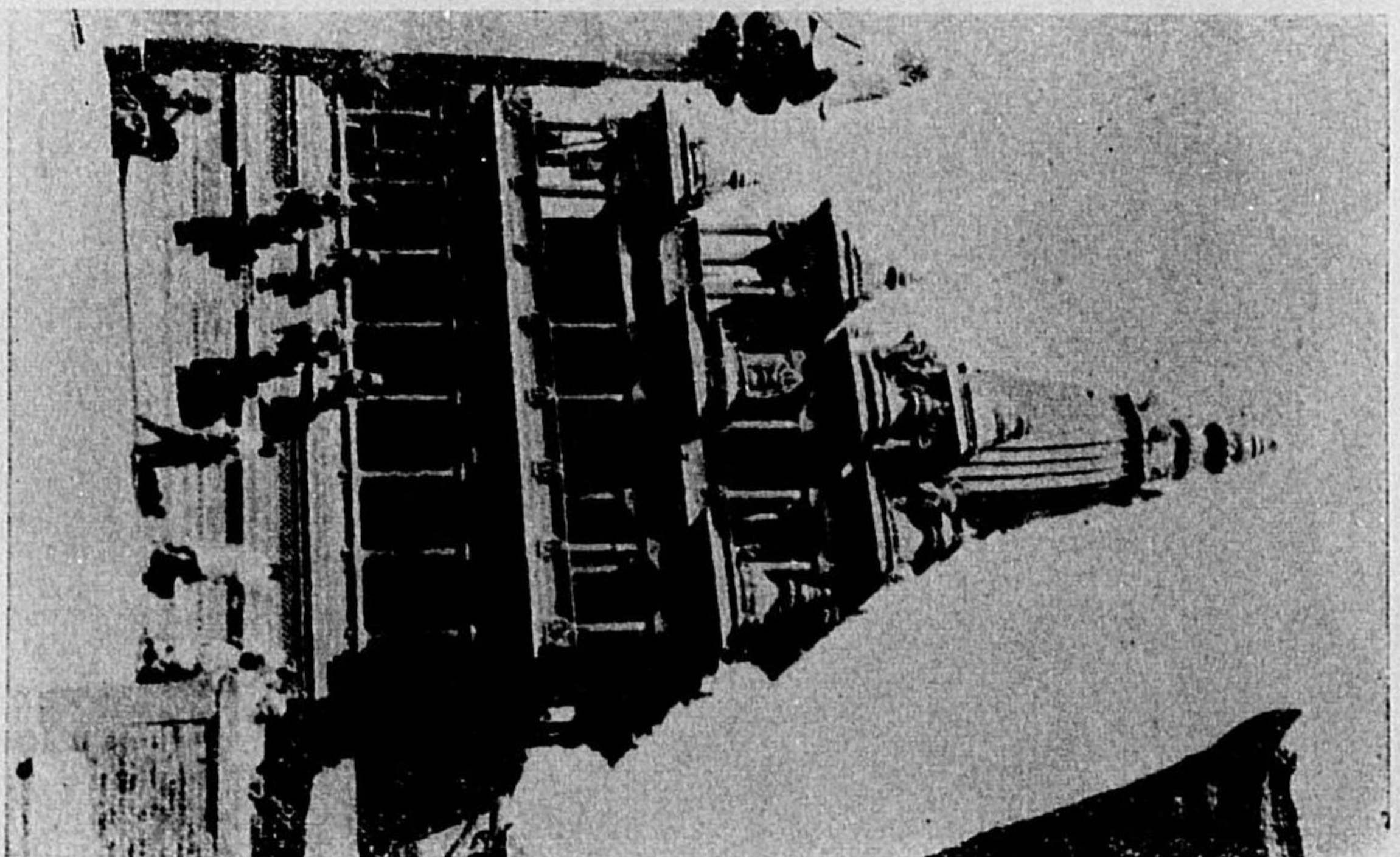
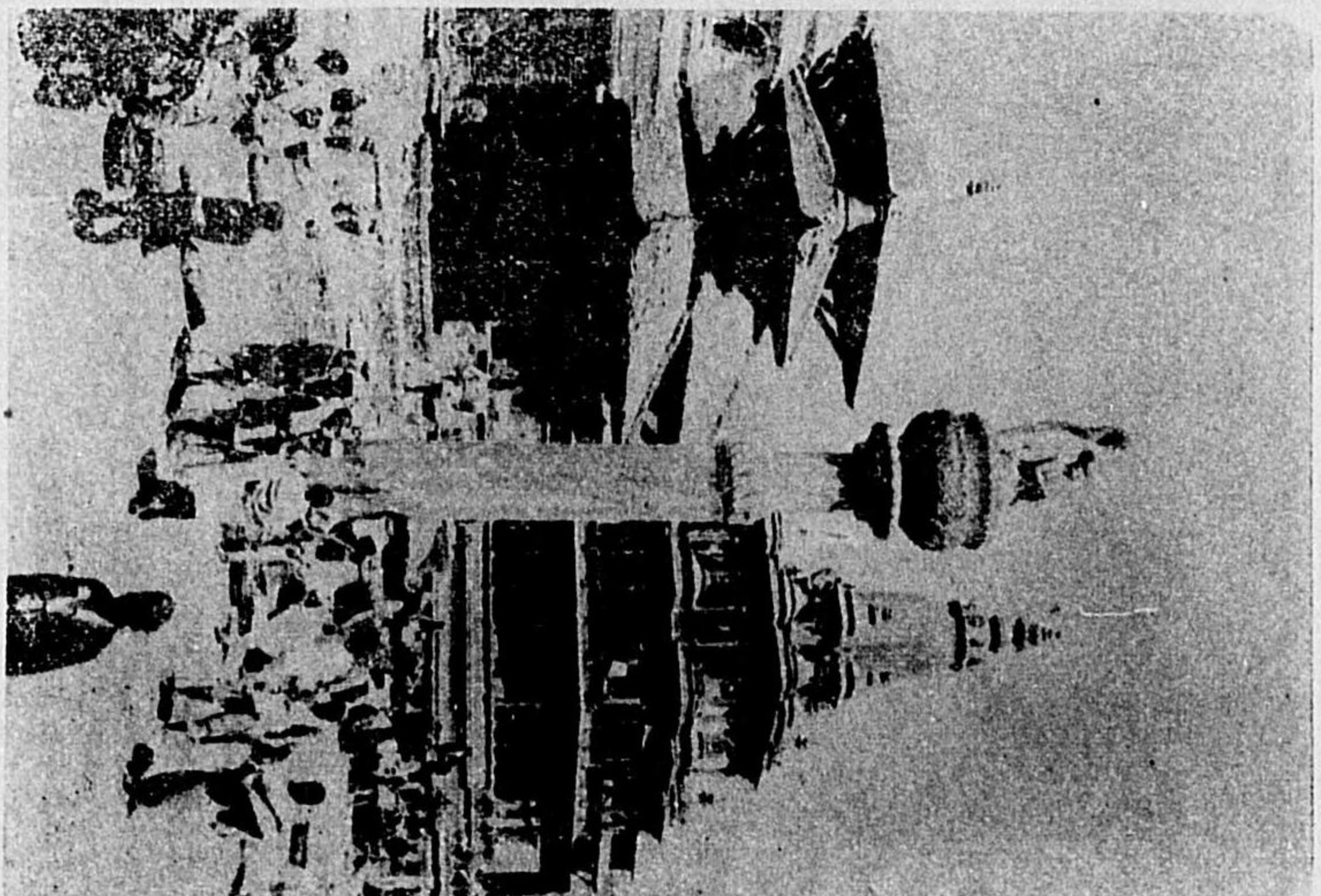
バータン市の中央塔（阿育塔）

(“NEPAL” Vol. I. p. 209挿圖複寫)

の印度教祠が寫つてゐるので、殊に面白い對照をなしてゐる。

此度私がみた所では、民家の有様等は少しばかり異なつてゐたが、佛塔と印度教祠の位置に變りはなかつた(二二七六)。此池はチャーヤ・バー・タンク (Chaya Vaha Tank) といふようである。水が少しにごつて鼠色をしてゐるのが缺點だが、景色は非常によろしい。但し塔の形式は、昔のは肩が張つて平たく、相輪ももう少し中央部が膨れてゐて胴張があること事圖版第48頁—第51頁の挿圖にだした多くの例の如くである。だから現在ののは全部替つて了つたものと思はれる。それにしても私はこの「タンクと佛塔」は、ネパール國でみた風景中の最もすきなものの一である。殊に二二七は親子塔が全部水に反射してゐて絶景である。興福寺五重塔が猿

右。バータン市グーバー・スクエアのクリエシナ堂 共一 (昭和十一年三月十八日)
 左。同 共二 (昭和十一年三月十八日)
 ネパール國に於ける印度教祠堂の様式。中央にビマナ即ちシカラ (Vimana) 即ち尖塔を有するもので、此種のは、一六七、一九八に見えてゐるものと同種のものである。カンエリ著「印度建築」(Ganga and Indian Art) には、此建築がバータン市にあるのに、カトマンズ市所在の如くかいてある。此書は甲谷他に於いて發見されてゐるのに、この様な誤りをしてゐる位に、此國の事は世間に知られてゐないのである。

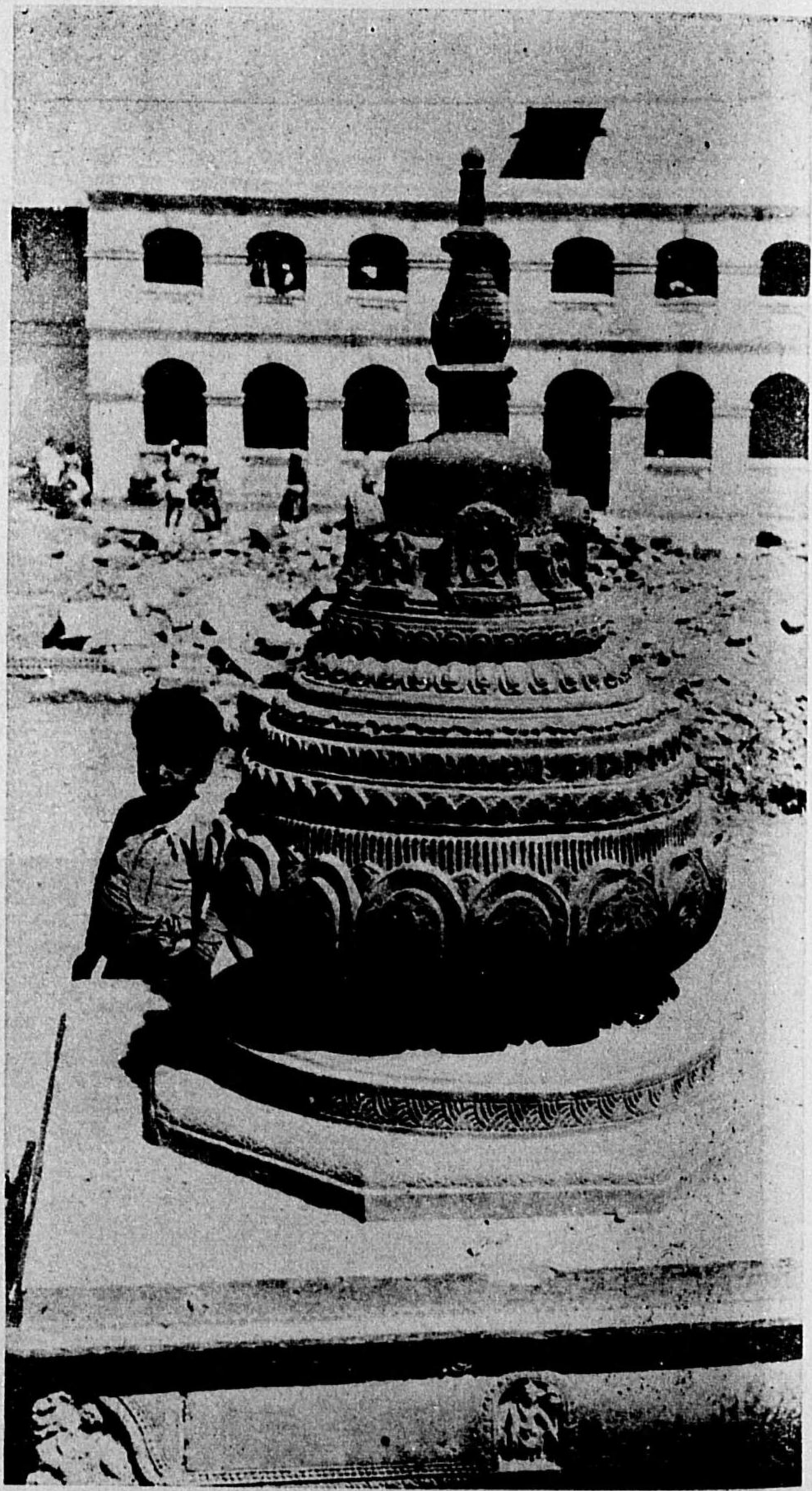
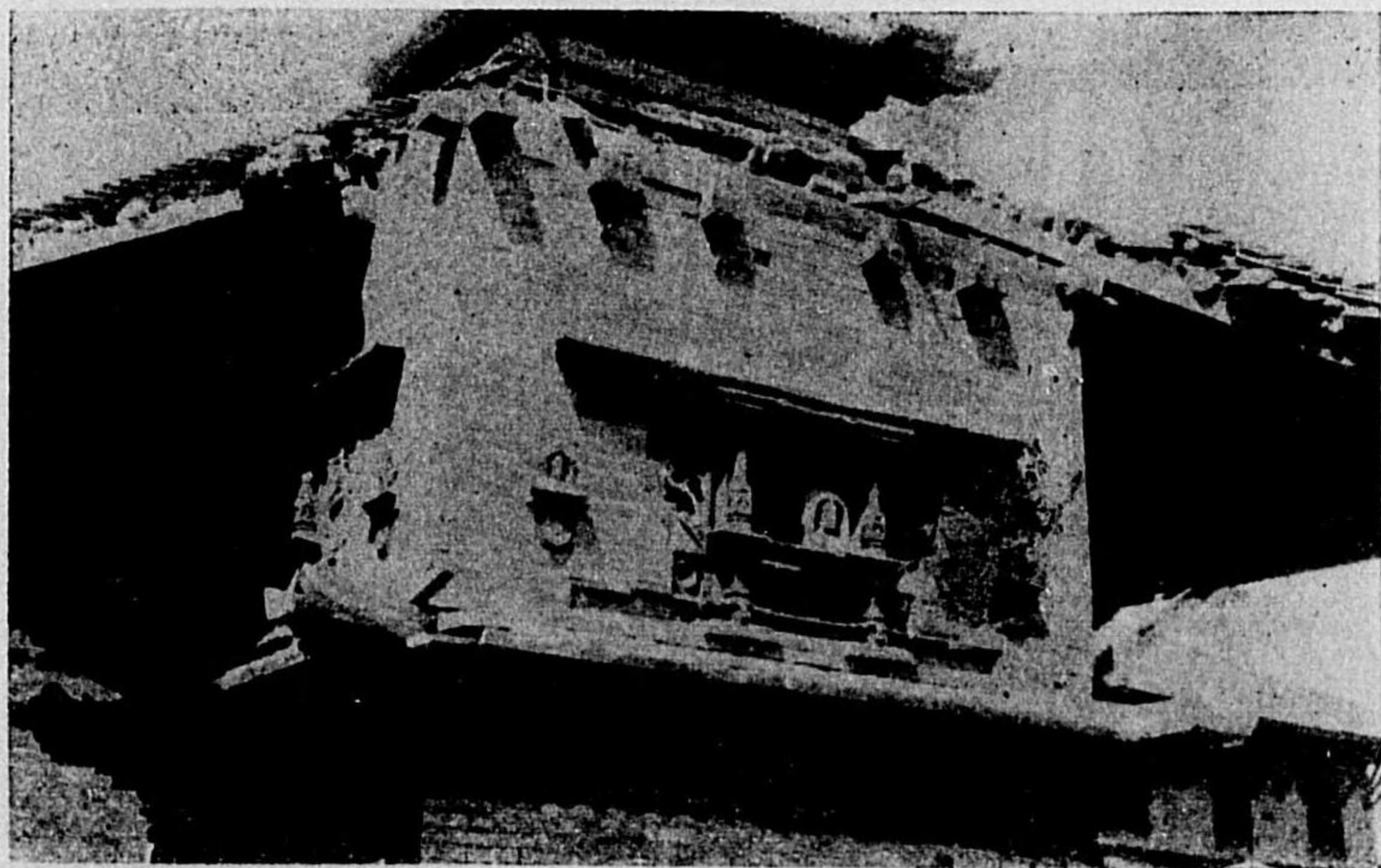
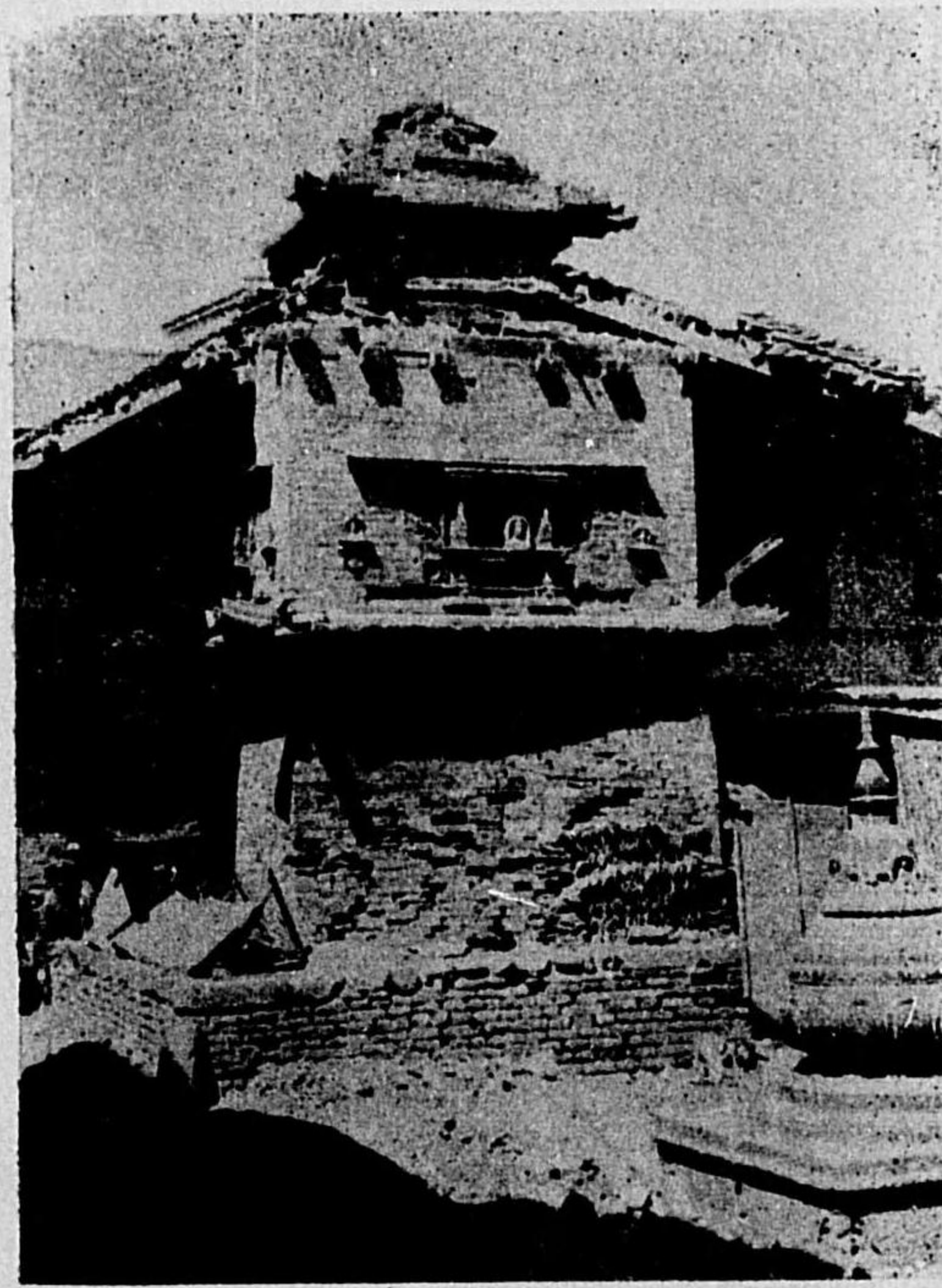


上。バータン市の破壊された一祠堂
下。同

部分

(昭和十一年三月十八日)
(昭和十一年三月十八日)

上圖右下の小塔婆は、次頁に大きく見せておいたが、其前の恐らく二重であつたと思はれる煉瓦造の祠堂が、例の震災で上の方が振ぎ取られ、初重の屋根も南側が墜落したため、さういつては洵に相すまないが、桁の廻し工合や、極のとりつけ工合が甚だよく判る。これでは方杖がなくてはもたないのは當然である。序に特殊型式の小窓も明らかに見える。

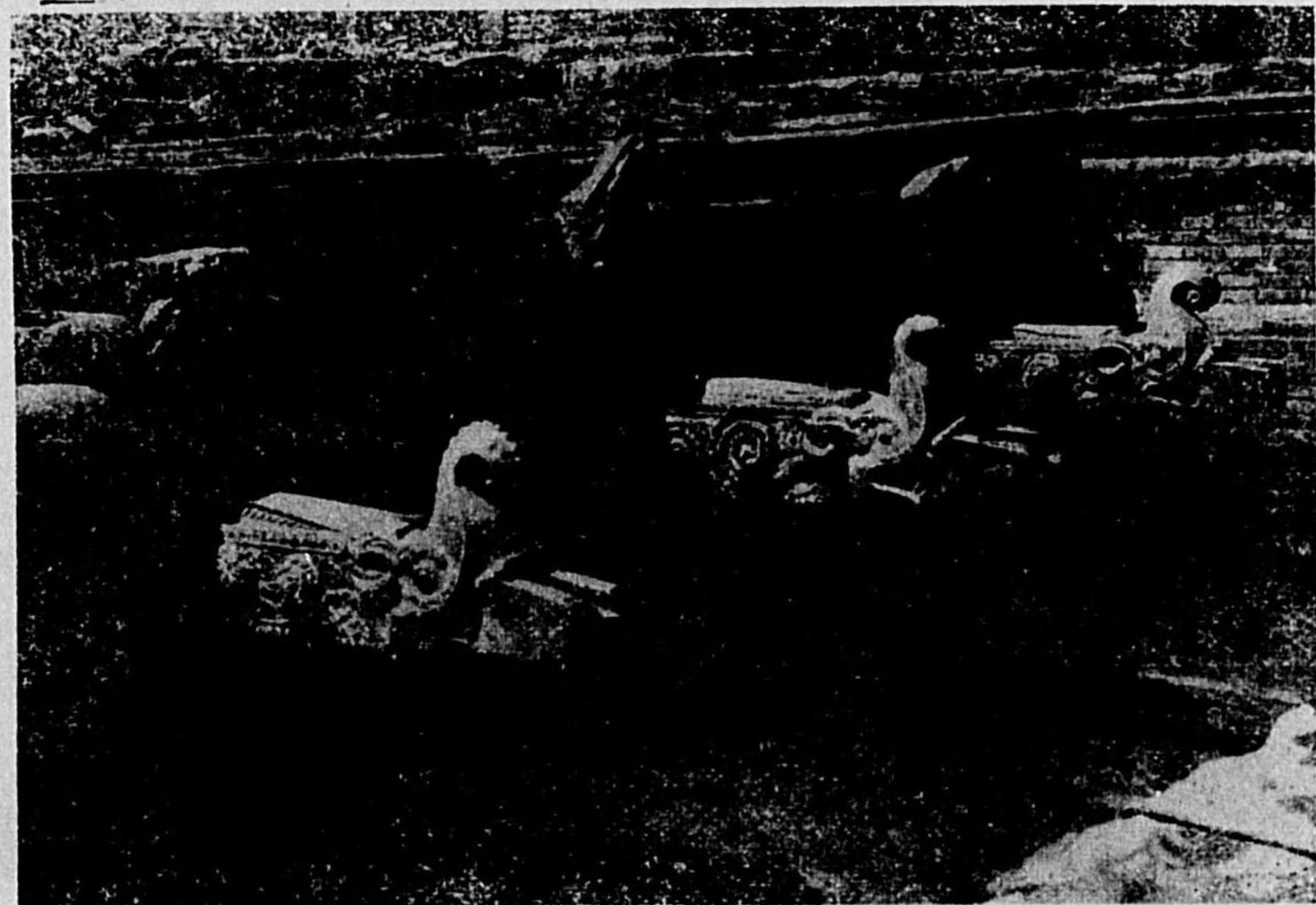
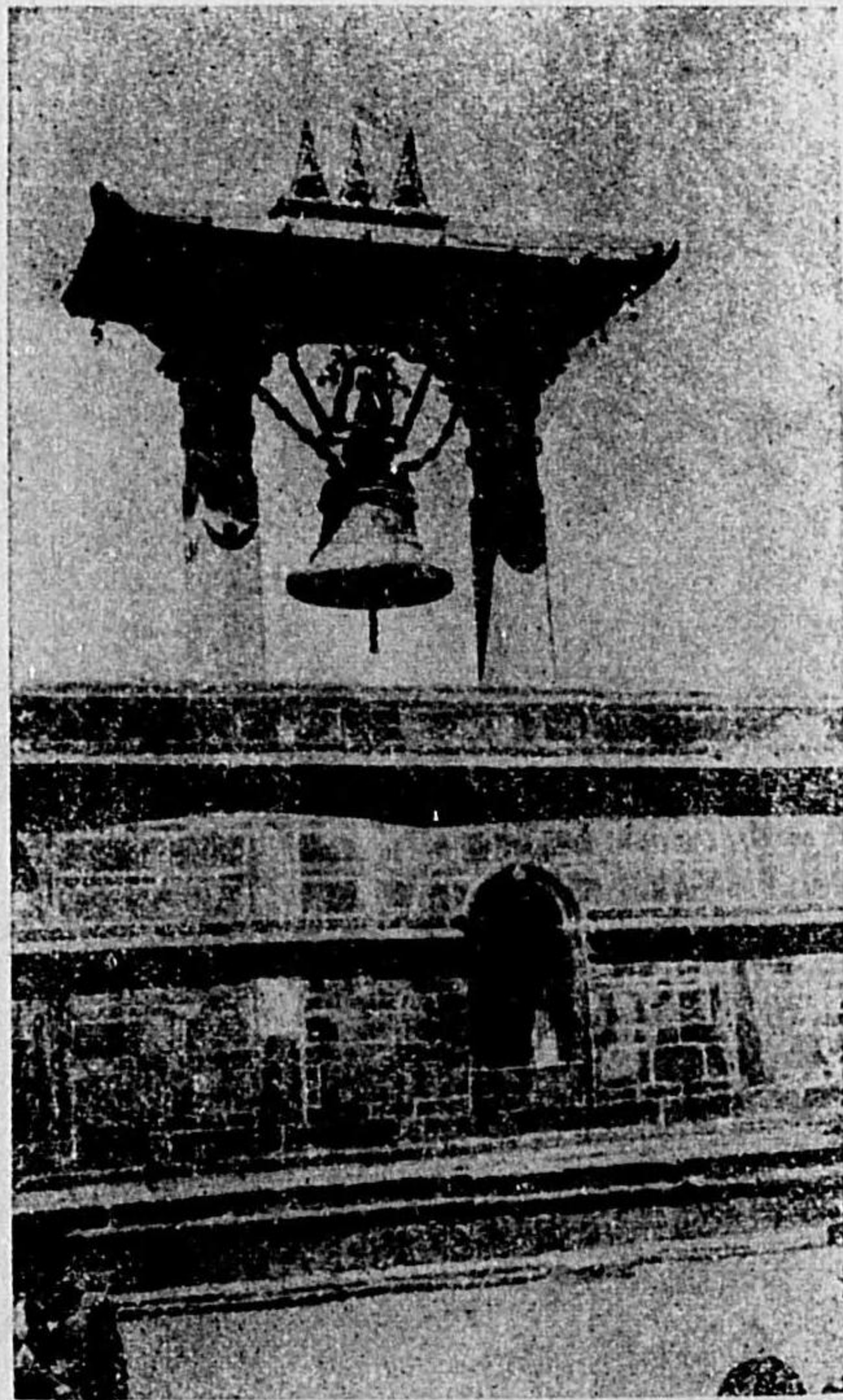


バータン市所在小塔婆の一
此塔婆は傍に立てゐる子供と比べてみると直に判るであらうが、割合に小さいし、時代もさう大して古いとは思はれず、寧ろ新しい方であらうが、基壇上八角の部分の直ぐ上の圓形の側面の文様を浪とみると、池の中から蓮花が咲き出て……といふ工合に考へられる。其大蓮瓣の上の文様は我國だと、少くとも平安位の價値がある。塔身基部に四方と其中間に佛像を現はせるは、胎藏界の中臺八葉院の様な氣がする。相輪が面白く、最上部が寶珠に終つてゐるところ等、頗る興味のあるものである。
(昭和十一年三月十八日)

上。パータン市所在の吊鐘
下。同

(昭和十一年三月十八日)
(昭和十一年三月十八日)

上圖は二二七左端に少し見えてゐる大吊鐘で、二脚四注造の鐘架の型式と共に、甚だ面白いものである。鐘の上にはいろいろの裝飾があるので、そこを避けて兩肩から兩方へ吊つてゐるところは、洵に巧な方法である。
下圖はパータン市内の小噴水の一。水は濁つて相當にきたならしく、あたりも大して感心ができかねるが、「マカラ」の口から水がでるところが気に入つた。バラージにあるのもこの種類だし、印度や錫蘭にもこの種の水出しはある。



澤池に逆に寫つたのとは、また別種の趣がある。この様な景はここ特有で、タンクの傍に此種の佛塔が、五基も揃つて建つてゐるのは、ネバル國內でも恐らく他では見られまい。

二二八は正面からみたところで、池中にある建物の一部からとつたもの。正面に一對の獅子がゐるのは、既にスワヤムブナート寺の大塔に於いてもみたが(二六四・二七四)、日本の神社の狛犬を寺へもつてきて塔の前に竝べた様な氣がする。夫から吊鐘が枠から下がつてゐる所は、支那の寺と同じ様で、日本でも禪寺等に見出されるが、ネバルと支那と、寺の鐘の吊り様が似てゐるからとて、どうのこうのといふのではないが、面白いのであつて、まるで無關係とはいへない様な氣がするのである。日本の禪寺のは支那のまねに過ぎぬのと言ふ迄もない。

さうして親子共純白色に塗られ、鍍金美しき親塔相輪の正面には金紐を垂れ、常に影を池水に寫してゐるあたり、形はさう大きくはないが、實に理想的の塔婆で、恐らく當國所在の Cholten 中、比類なき景觀といへるだらう。二一九も亦稀有の美景である。

併しながら此等の美塔も暫く前にはここに圖せる如き(第19頁)状態であつた。獅子も吊鐘の蓮臺も石柱もなく、白亜も剝けて頗るきたならしく、みたところは相當に憐れな有様であつた。此形は例のベンダルの著書の挿畫とも少し異なつてゐるのでみると、あの寫眞をとつた後一度塗り直されたのが、また剝げたのであらう。だから現在の美しいのも、何年か後には再びきたなくなるに違ひない。

九九、池畔の三重塔

二二〇・二二一は前掲の佛塔に向ひ、池に沿ひて右旋したところにある。塔の前面向つて左方に建つてゐる方形の小建築(二二二の獅子に並んでゐるもの)は、獅子と共に二二六の右端に辛ふじて寫つてゐるから、親子塔との位置の關係が自然明らかであらう。此初重は正面にだけ柱がたち、丁度歐洲に於ける古典建築の四柱式堂で、且つピュセンタンの様に長方形の平面を有する變つた建物である。小さいけれども形は中中よろしい。

一〇〇、ターバア・スクエアの諸堂

二二三から二二九はバータン市の廣場に建つてゐる諸堂のうちの一部である。震災前はもつともつと遙に數多くの殿堂櫛比してゐたが、今は首が振れたり胴中が破れて腹綿が出たり、洵に憐れ憊い状態に置かれてゐるが、夫れでも尙ほ堂堂たるものである。第82頁の上圖に示した、家並のそろつた町をとり抜けてしばらく行き、四つ辻を右に曲るとここに出る。その曲り角のとりつきの祠堂が二二三で、これは初重が周柱式になつてゐないために、どうも淋しい感があるし、基壇も何だか申譯のように一段あり、周圍に鐵柵を廻らしてゐるから、どうも少し面白くない上に、全體の形も意に滿たない。其一部

* Tetrastyle temple

を大きくして見せたのが二二三で少し朦朧だが初重の窓等が少しは判るだらう。次の二二四・二二五はマハ・デバ (Maha Deva) 即ちシバを祀つた堂で、これは方五間單列周柱重層塔。震災前後を比較するため、同じ様な位置からとつてみた。ここでは向つて右手の三間三面吹放の建物が崩壊して了つてゐる。此二重塔と隣りの特殊な型式のクリシュナ (Krishna) 堂とは幸に無事であつた(第19頁)。二二〇は此堂の初重中央出入口上の一つで、如何に込み入つた彫刻を以て飾つてあるかを示したのである。併しこれ等はどちらかといふと簡単な方で、ずっと細かく極端にいへば、蟲眼鏡で覗かなければ見えない様なものも珍らしくない。二二七は此堂の隣の三重塔で、これは三重の基壇の上に建ち、方五間單列周柱堂で形は可なりよろしい。

カトマンヅ市の堂は、三重でありながら五重だの十重だのの壇上に建つてゐたのに、ここのは多いので三重である。この様なことは隣り合つた町でも少し異なるのかも知れぬ。此堂に並んで大きな吊鐘がある(第19頁)。此吊鐘は耶蘇教會堂や汽船等のベル式のものだが、再三記した様に甚だ面白いもので、ぶら下げてある枠の型式にも亦注意すべきである。二二八はマハ・デバ堂の側面と、近く蓮座上に安座せるラジャ像。堂の三重屋根の金鈴の傍にシバを象徴せる三叉戟が明らかに見えてゐる。二二九は三重基壇上の三重塔を近くみたので、眞隅に近い拙いものになつたが、これは適當な位置がなく止むを得なかつたためである。併しこれでも形は相當によろしい。

(昭和十二年十二月一日稿了)

〔5〕バトガオン市所見



(昭和十一年三月十九日)

女労働者の一群を寫したものである。圓錐體の籠に荷物を入れ、幅廣き紐を以て前額より吊り、可なりの重量のものを運ぶ。何れも跣足。男労働者も同様の風俗である。

印度佛塔巡禮記

(第十六回)

101. バートガオン市建築の二三

バートガオン (Bhatgaon) 市はカトマンヅ市の東南方約9哩にある大きな都會で、ここから先はとうなつてゐるか知らぬが、此兩都市の間は、少し位の凹凸はあるけれども、樂に車を通るのである。此頃のことだから、他の國なら當然汽車もある筈だし、又バスも通つてゐるのだが、此國ではその様なものは望めないから、タキシを用意せねばならない。併しそれは其筋からよこしてくれるので、旅行者にとつては割合に始末はよろしい。

カトマンヅの方から行くと、第一に通過する町はチミ (Thimi, Them) といつて、可なり大きい繁華な部落である。私は第91頁最終行の一つ前から終にかけて、この町に壺を製造する家がある由を記し、第89頁にその店頭の有様を寫眞にしておいたが、書物に記すところによると、製壺の大工場があり、謂はゆるカトマンヅの溪谷 (Valley of Khatmandu = Nepal) 全體で使用する分は、全部こつてくるさうである。

バートガオンのダーバー・スクエアは、バータンの夫れと其美を競ふ程であつたが、ここも亦震災でひどくやられ、どうも眞に淋しくなつて了つた。この大吊鐘は直径が五尺もあつたといふ事だが、其鐘を吊つてある枠が壊れ(?)、鐘が落ちたのでどこかへ片附たと見え、私は見つけなかつた。併し王宮の建物の正面は幸にして立派に残つて居り、其隣りの尖塔を有する印度教祠も亦、五重の基壇上に其英

姿をよく留めてゐた。

何にしろここでは、何を措いても五重塔が最も眼を惹いた。私としては當然だと思つてゐる。小さい建物では祠堂又は民家(?)の四注造の屋根から、下が小さく上が大きい寶形造で四方吹放しの小建築が飛び出してゐるのが非常に目立つた。其實形造の露盤に當る所に、例の金鈴式の裝飾があるところを見ると、これ自身が一小祠だといふのは確かであらう(第205頁)。

建築は何れも堂堂たるものである。商店等は三階建が普通である。第206頁挿圖の一は古着屋の店頭で、随分汚らしい上に、煉瓦に罅がいたり抜けて落ちて穴があいてゐたり、相當に荒れてゐるが、二階正面の五連窓は獨特だし、うまく取扱つたら大したものになるだらう。同頁の他の圖は五階建で、正面は大に變化があつて頗る面白く、殊に第五層は矩手になつてゐるから、第四重の平屋根の一部がテレスになつて、甚だ具合がよろしい。但し下に立つてゐる人からみると、楣がいやに低いから、この分だと二階以上は、天井が大分低いのではないかと思はれなくもない。第207頁のは間口の廣い四階建の大商店で、こんなところにこんな大きな店があるのに少しばかり驚かされたのである。何れも汚らしいのが缺點で、そのため見劣りがするのは是非もない。

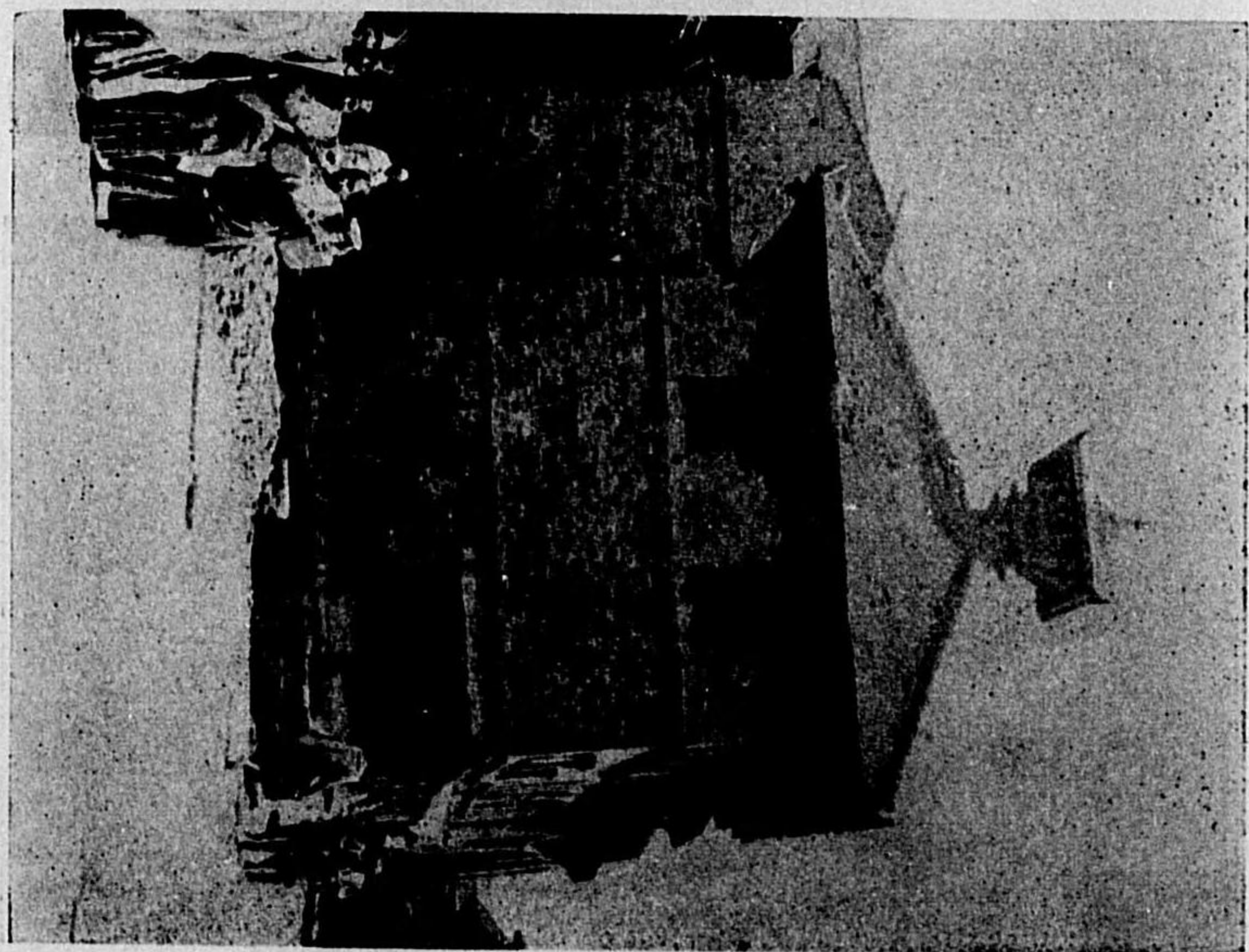
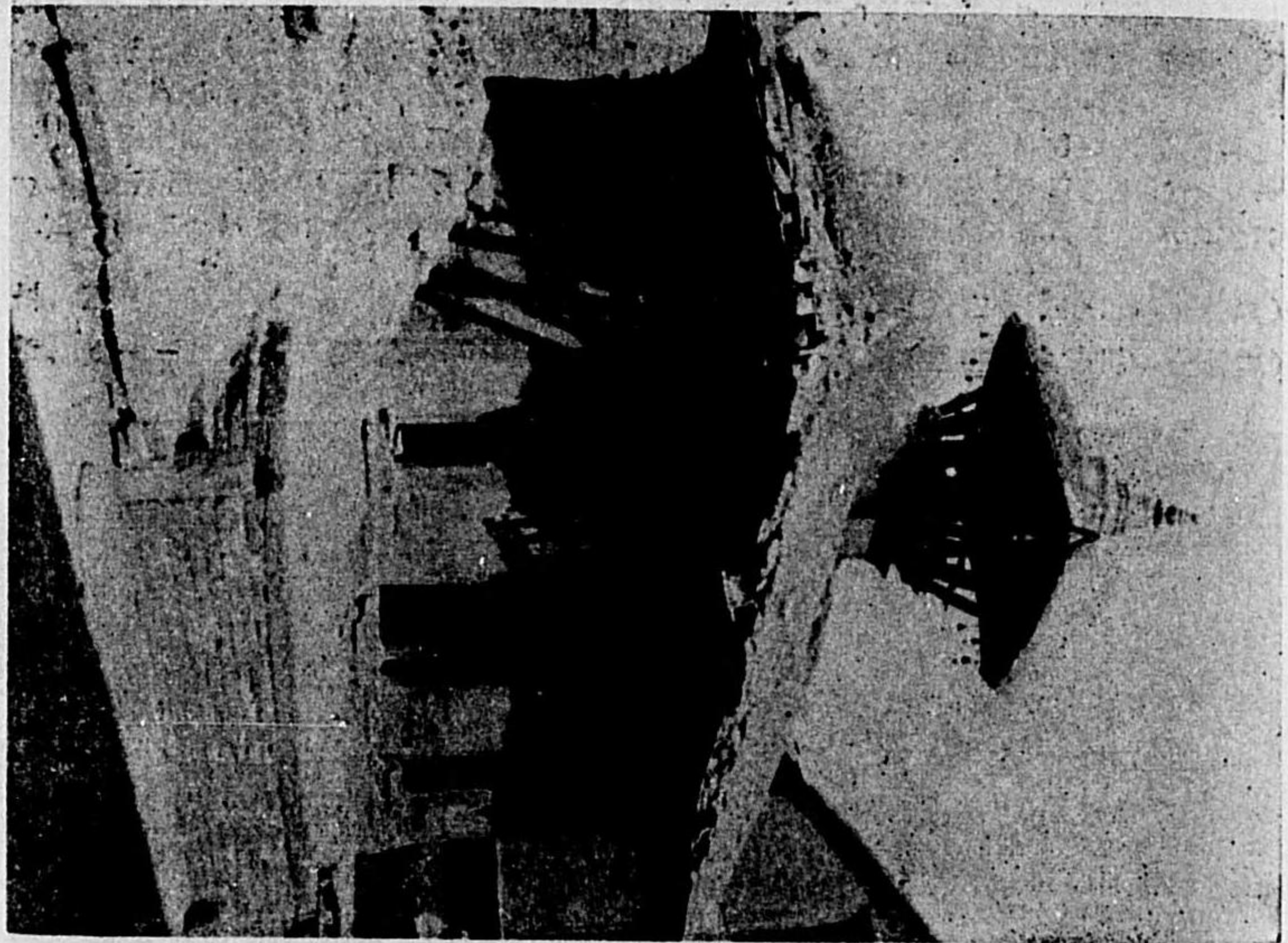
窓にもいろいろある。第209頁のはカトマンヅ市民家の夫れを出しておいたのだが、第209頁以降數頁は

此市の建物のである。私は此町に於いて初めて盲窓をみた。其狭間飾が菱格子にしてあるのは、窓が小さいので簡單にしておいたものと思ふ。さうして他の例の様に木の枠を造って嵌め込んだのではなく、全部煉瓦で恐らく漆喰を塗つたのであらう。それから孔雀窓の變つた意匠のものもある。とにかく圓窓の狭間飾に、孔雀の尾翼を擴げさせて應用したのは巧みな手法である。

圓窓の我國建築に用ひられてゐるのは、誰人も知つてゐるだらうが、餘り古いところには見ない。先づ鎌倉時代石燈の火袋についてゐるの等が、ことによつたら現存最古のものかも知れない。純粹で邪氣のない誠心誠意の圓窓だが、室町になると、二つあるときは一つの方を新月型として、日・月といった風にする。桃山以降になると星を添え、「三光」としたりしたのは、つまり墮落といへよう。建築物に用ひられたのでは、どうも江戸時代以前に見出されない様に思ふ。江戸でもまあ黄檗建築が最初らしい。京都なら宇治の萬福寺、大阪なら難波の瑞龍寺(鐵眼寺)へ行けば見られる。以降新しい建築には、宗教建築にも非宗教建築にもざらにある。此頃では民家には圓窓をつけなければならぬ様に考へてゐる向きもある様である。どこか町の喫茶店の正面二階に、黄檗建築から暗示を得たと思はれる様な窓をみたことがある。

西洋建築では、古い所で早期耶蘇教建築 (Early Christian Arch.) にどてくる。以降勿論ある。ゴシックではE・E・に見出され、正面の大圓窓やランセットを二つ並べた上の所へつけたの等がある。其尤なるものは、歐洲各國の耶蘇會堂の正面ので、絶対に他の追隨を許さない大規模のものである。

右は印度教祠、左は民家。屋上に黄檗造の特殊の小祠のあるのが特徴で、當市には珍らしくないが、他の町村にもあるか否かは知らない。



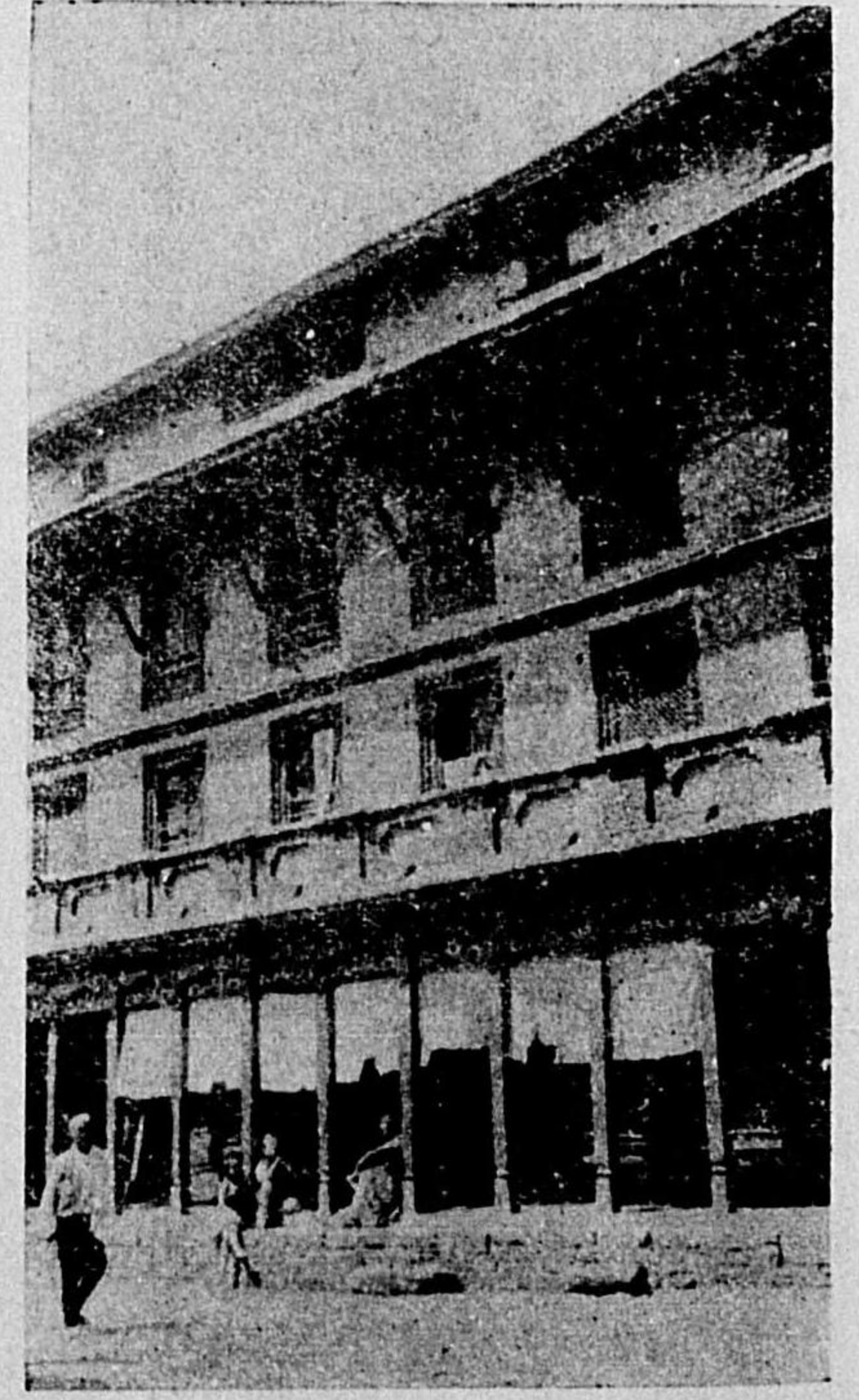
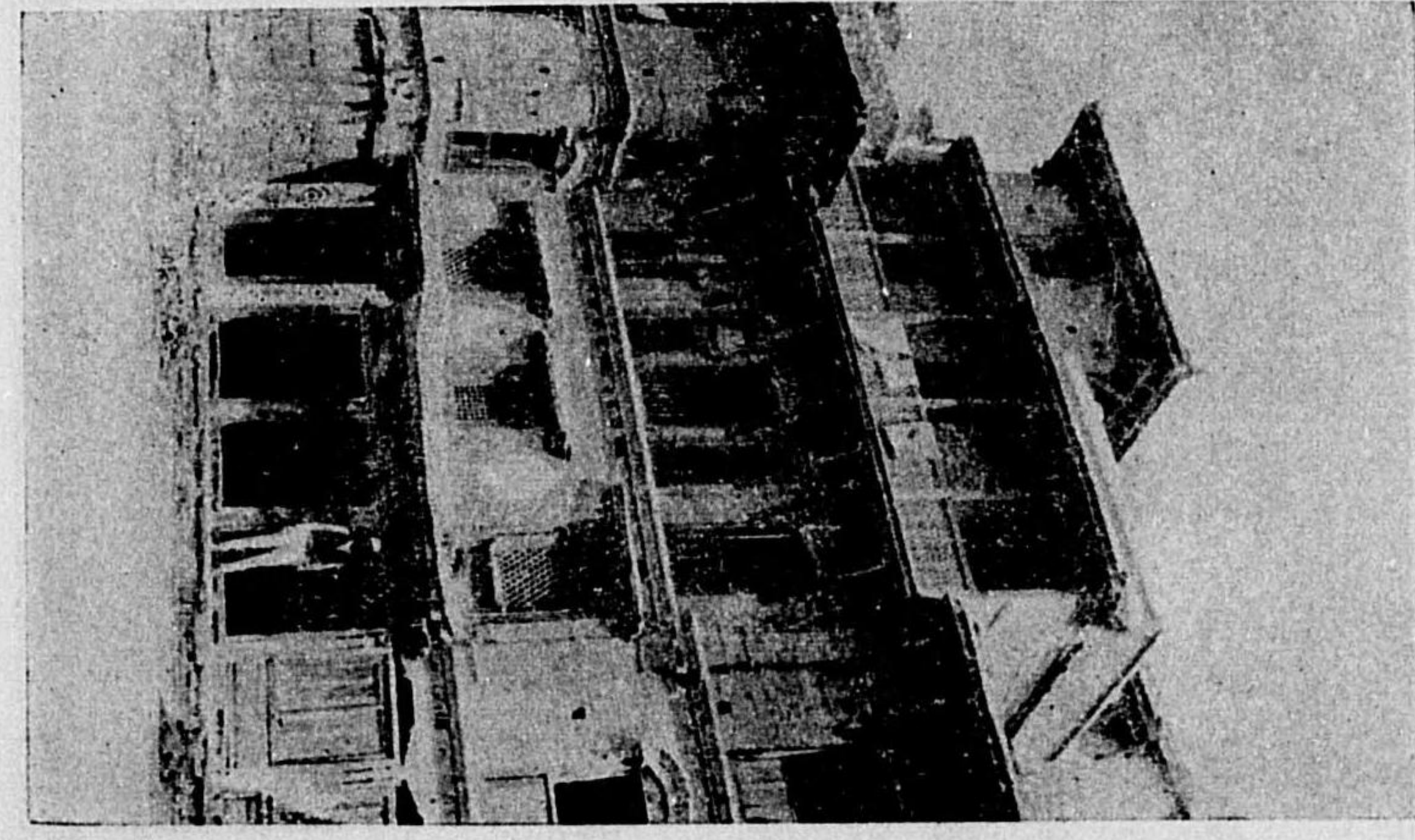
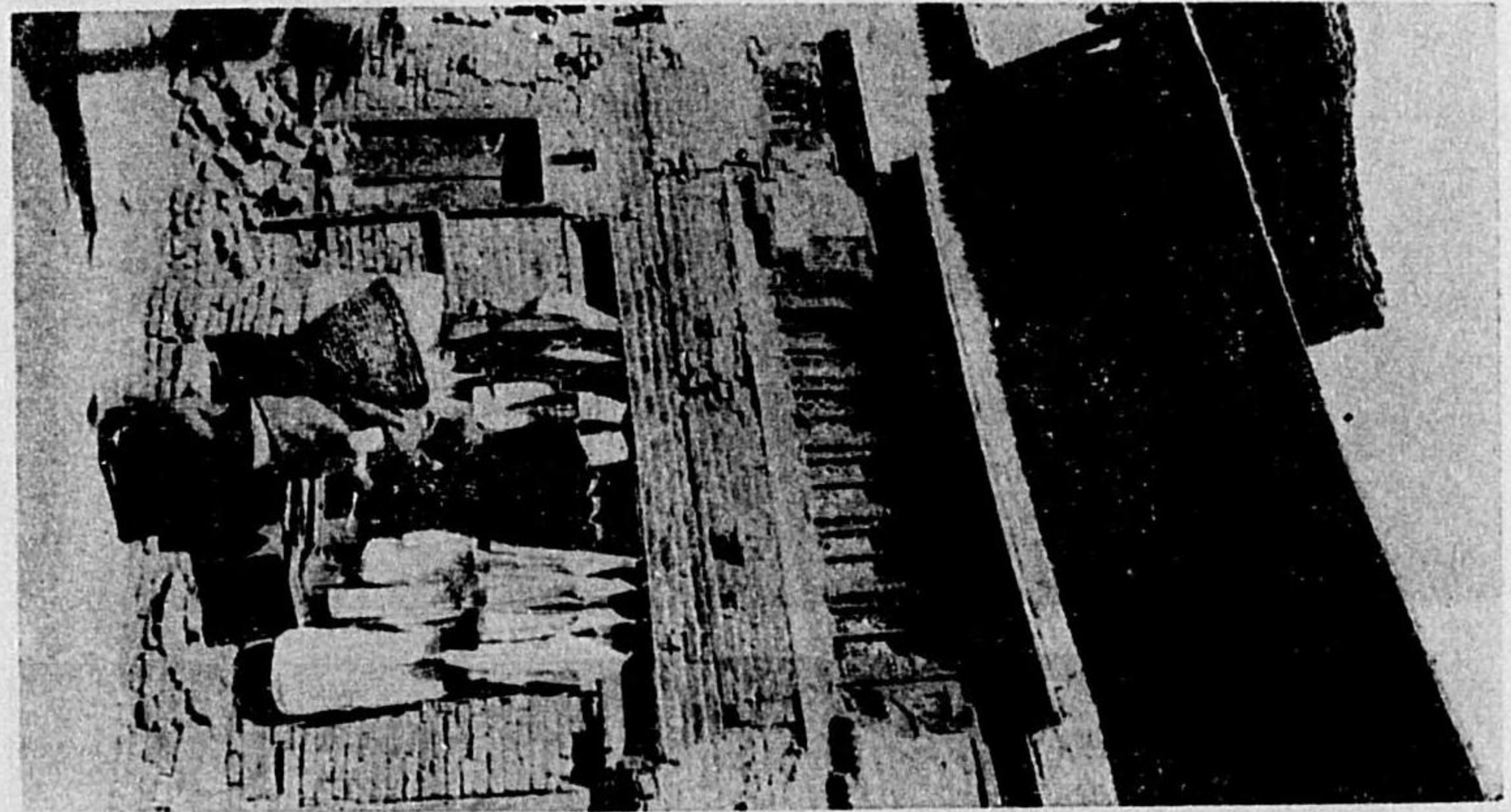
インドガナク祠所見

(昭和十一年三月十九日)

右。バートガオン市の民家 其二
 (昭和十一年三月十九日)

左。同 其三
 (昭和十一年三月十九日)

何れも古くて穢しくはあるが、右のは五階造りで、各重の正面は其趣きを異にし、變化に富んだ洵に面白い細部をもつてある。唯不思議に思ふのは、少なくとも第一階の正面の楣が、大變に低い位置にあること、其所に立つてゐる人の頭は、楣に届てゐる様だが、この分で見ると、各階其殊に第四、第五階等は、ことによると頭が天井へぶつかつかりはせぬかと思はる位である。左のは地震で危く崩れるのを助かつた古斎屋の店頭だが、店は随分氣のどくなほだけども、二階の五連窓は、この家には全く勿體ない。



上。バートガオン市のある商店 全景
 (昭和十一年三月十九日)

下。同 部分
 (昭和十一年三月十九日)

目貫の通りかどうか知らぬが、町幅も割合に廣く、殊にこのあたりの商店は間口も廣く、三階乃至五階建てで、洵に立派である。その上に形式が特殊だから、ネバル國大都市の商店建築として、宗教建築と共に、明らかに一様式をなし、他に其例を求め得ないのである。

此商店は雜貨商らしいが、或は此國の百貨店かも知れない。ただ手入が行届いてゐないせいか、そこいらが穢らしいのが缺點である。道路に舗装をし、この通りで改築したら大したもので、残念ながら歐米の模倣建築の遠く及ぶところでない。

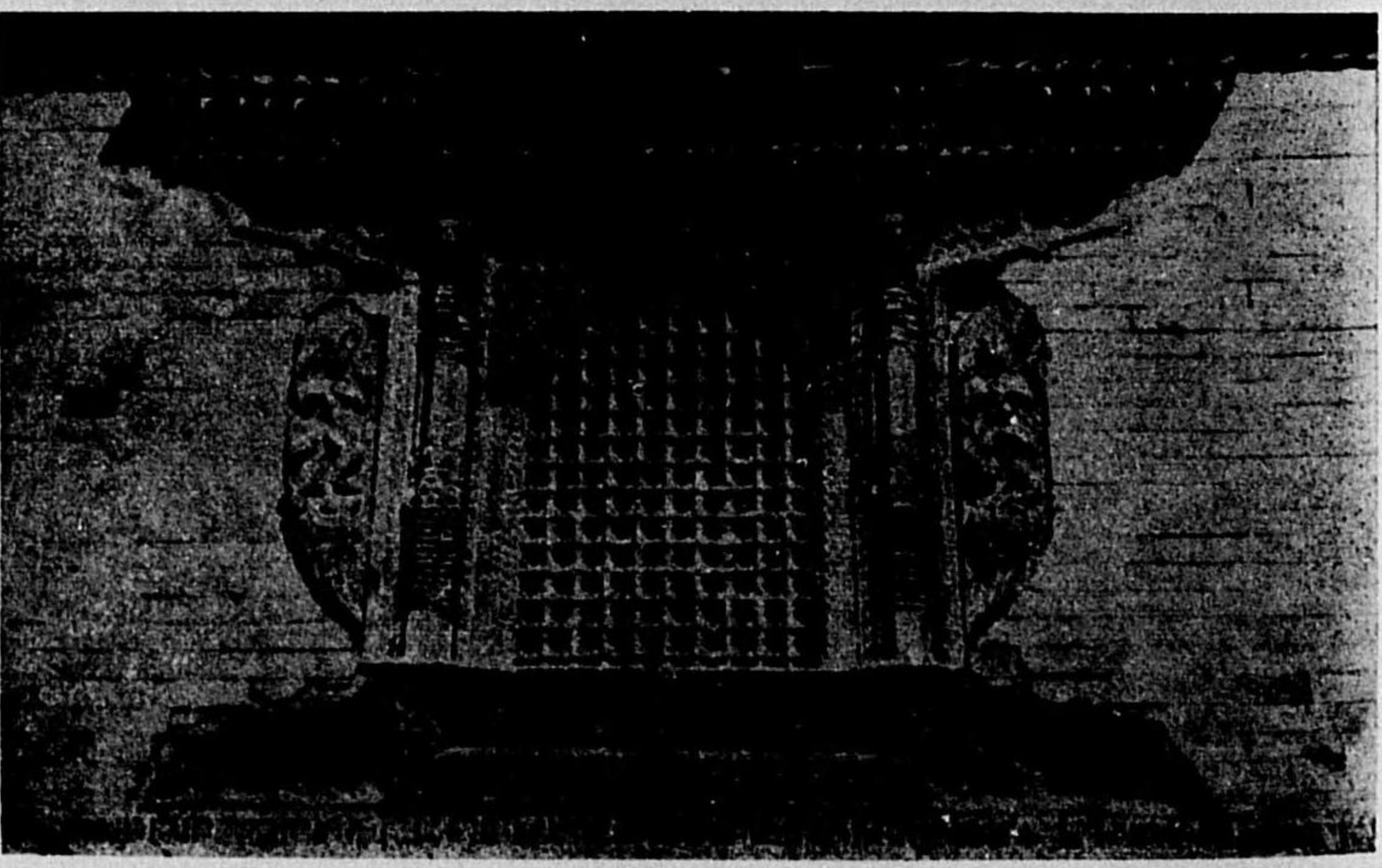
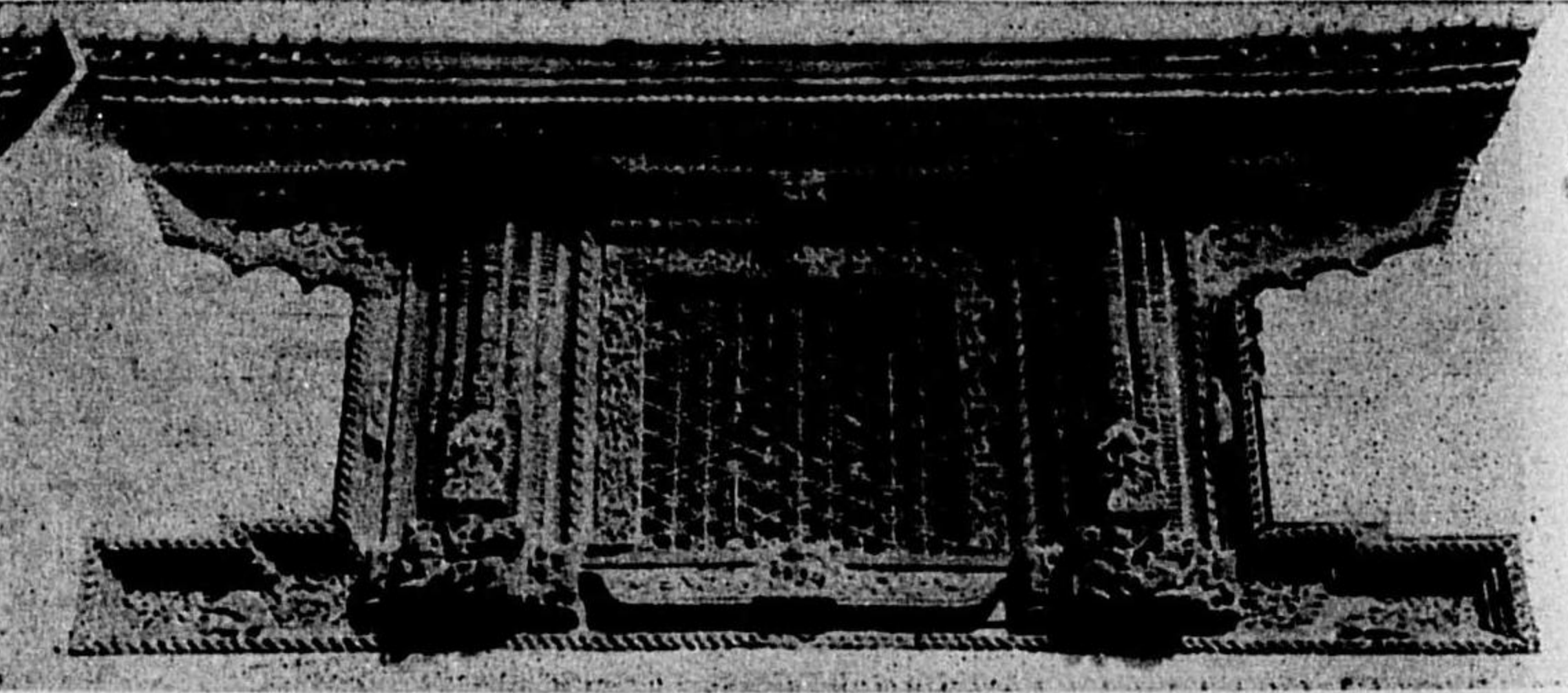
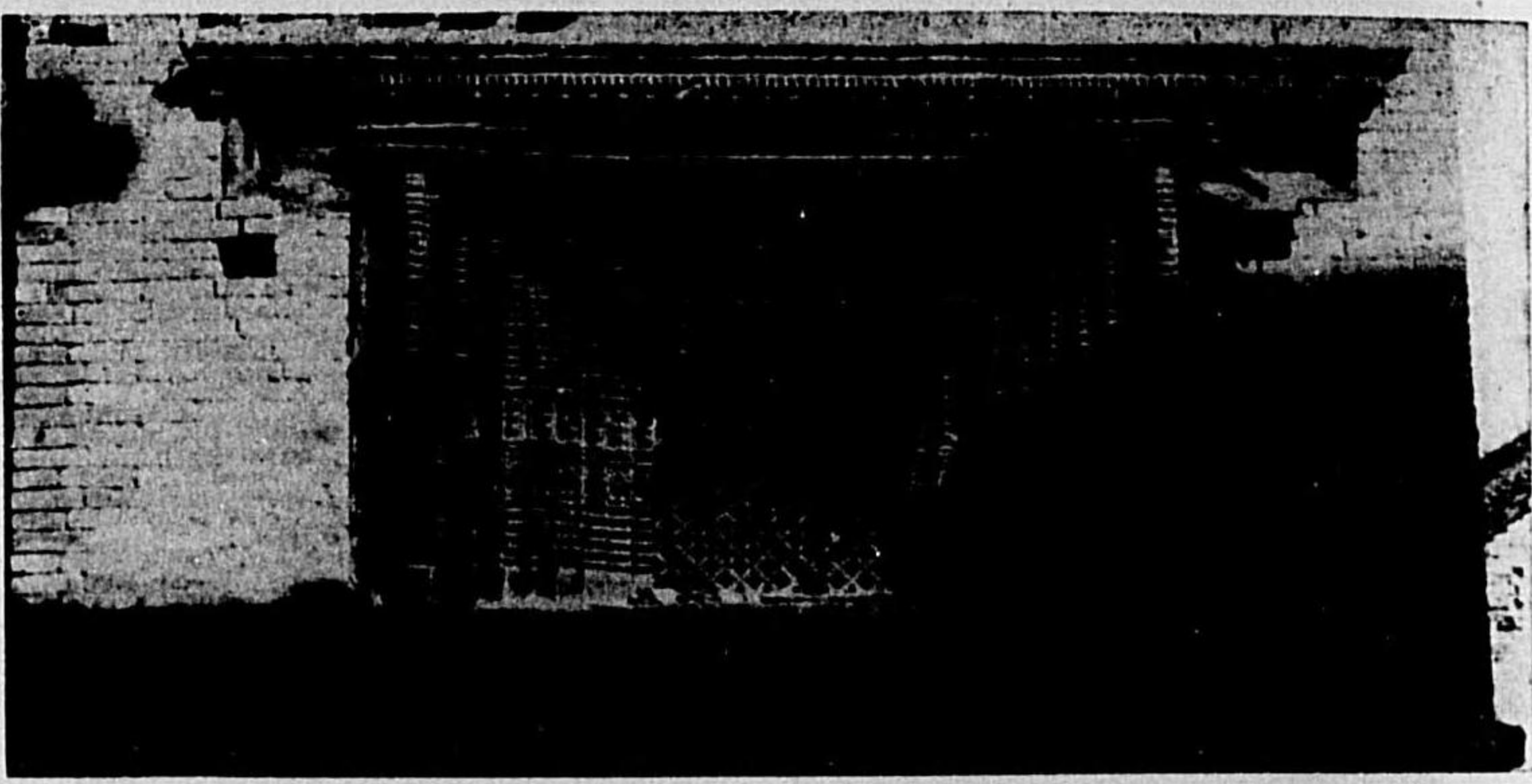
る。復興式では本場の伊太利にはいくらかもあるし、其他各國に珍らしくはないが、少しつぶれて墮圓形になったの等は、どうもさっぱり感心しかねる (St. Brides Ch., Fleet St., London)。

ゴシック建築に於ける様な堂堂たるものを姑く措くと、ネバル建築に見出される様な込み入った精巧な狭間飾を有するのは、先づ他にないといつてもよく、中でも孔雀のひろげた尾を應用したのは、洵に優秀な意匠といへる。此國の三大都市を初めとし、此種のものばかり探しても面白いだらう。私はいつであつたか書物の挿繪で、隣りのブータン國の建築につけてある「孔雀窓」をみたことがあると記憶してゐる。この記憶に誤りがなければ、ヒマラヤ山麓の建築に限られた手法かも知れない。

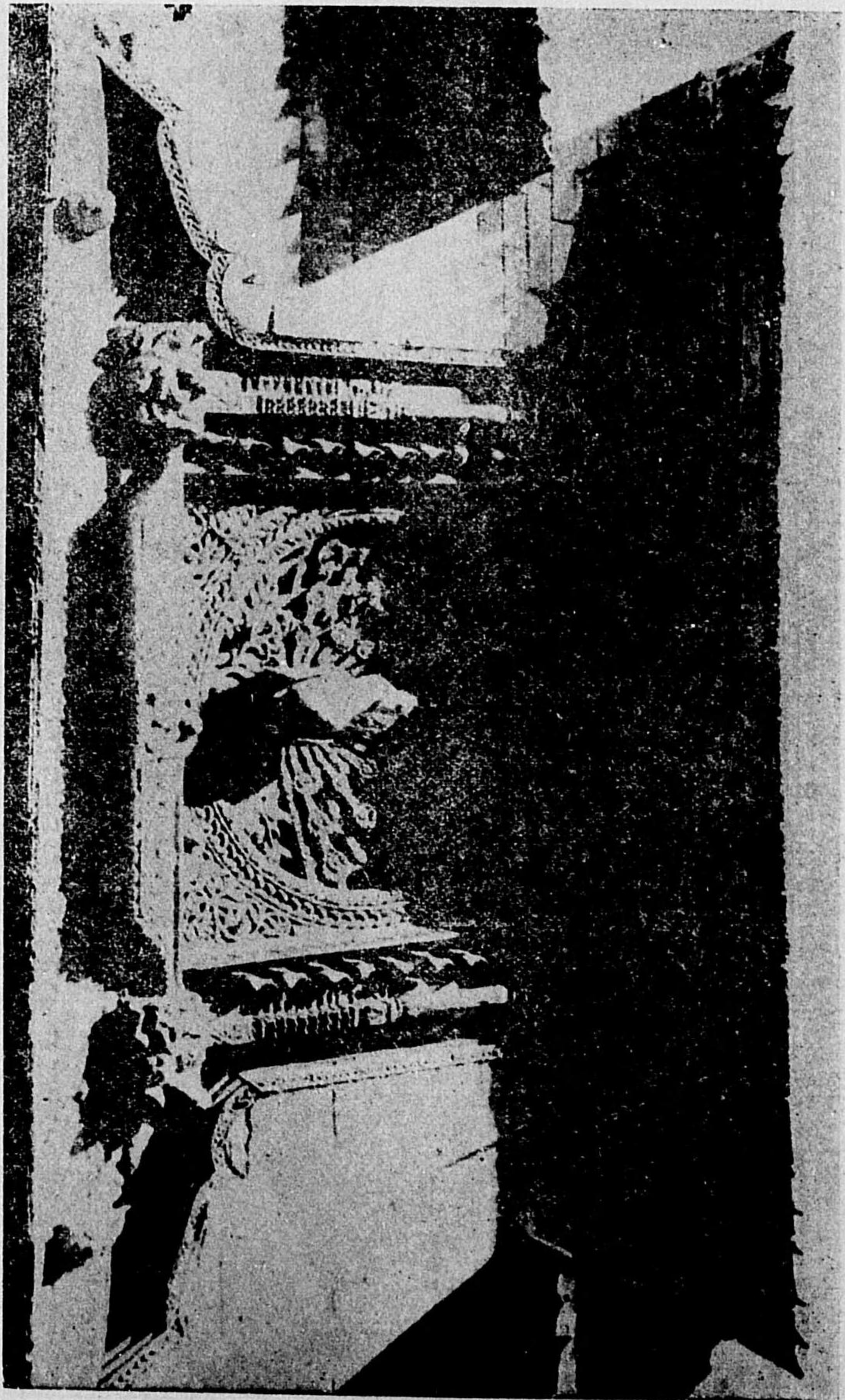
窓臺と楣とが長く兩方へ凸出し、其間に柱形を刻みだして、四方を限つてゐるのが窓の一般の性質だが、これは敢て窓に限つた事はなく、出入口も亦同様で、この場合には楣と蹴放とが左右に突出してゐるのである (第21頁)。窓は全面積が開放してゐるのは極めて少なく (第210頁)、殆んど常に格子か花狭間が入れてあつて、採光し得る面積は著しく縮少されてゐる。さうして時には楣の上に——窓に限らず出入口の場合でも——前方へ少しく傾斜し、兩脚が外方に向つて多少孤状を呈せる等脚三角形の平板で、其面に緻密にして精巧を極めたる彫刻を有せる裝飾板を有するものがある。夫れが特に目立つため、全體として特殊の景觀を呈してゐる。其一例はダーバー・スクエアに面せる宮殿の夫れで、第212・213頁に示せる通り、親が五人と子が六人、一つ隔きに並んで兩手をひろげてゐる様で面白い。

此宮殿は其全高に比例せる深く突出せる軒があり、胴蛇腹も充分の効果を收めてゐる。此正面はどこ

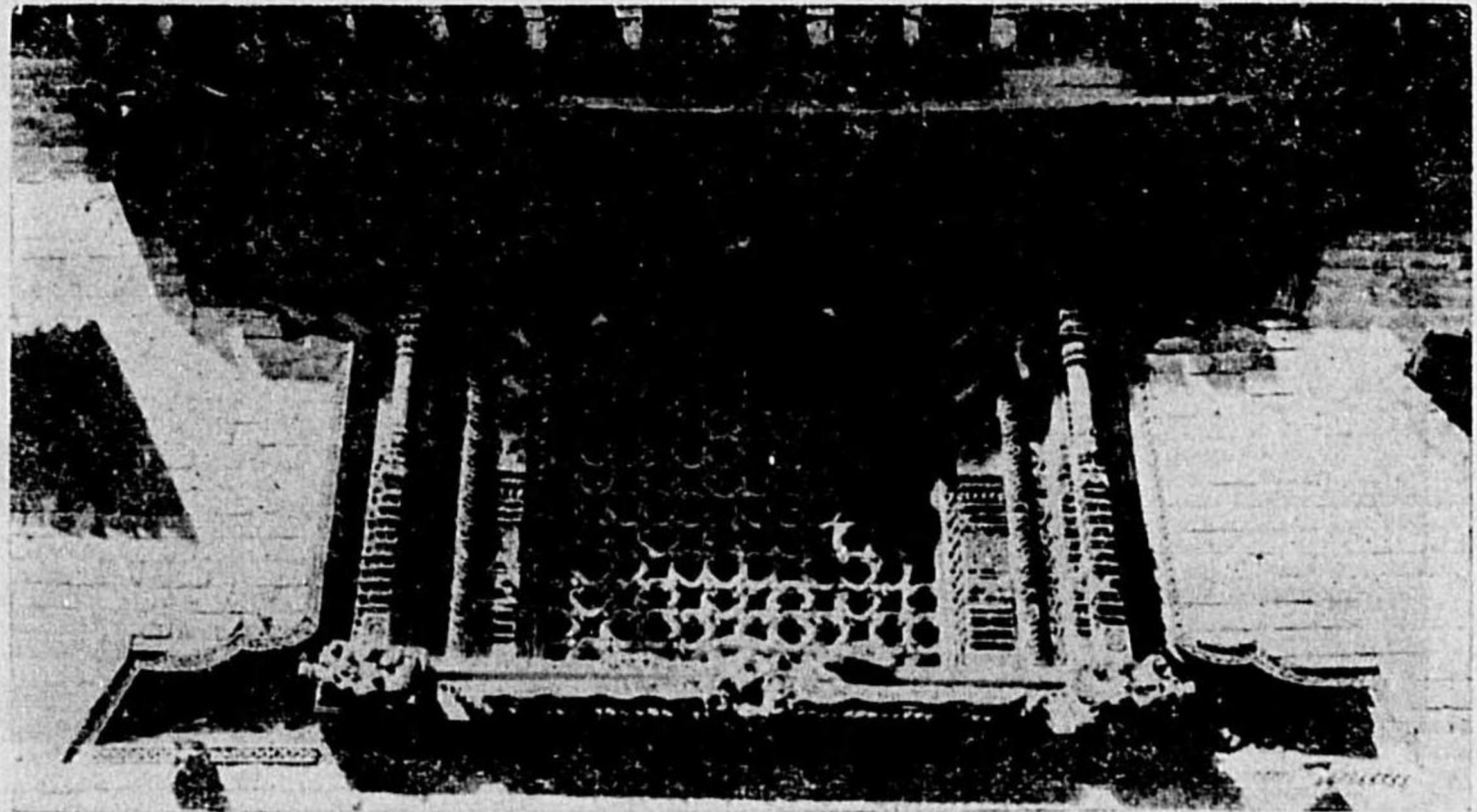
カトマンツ市民家の窓三種



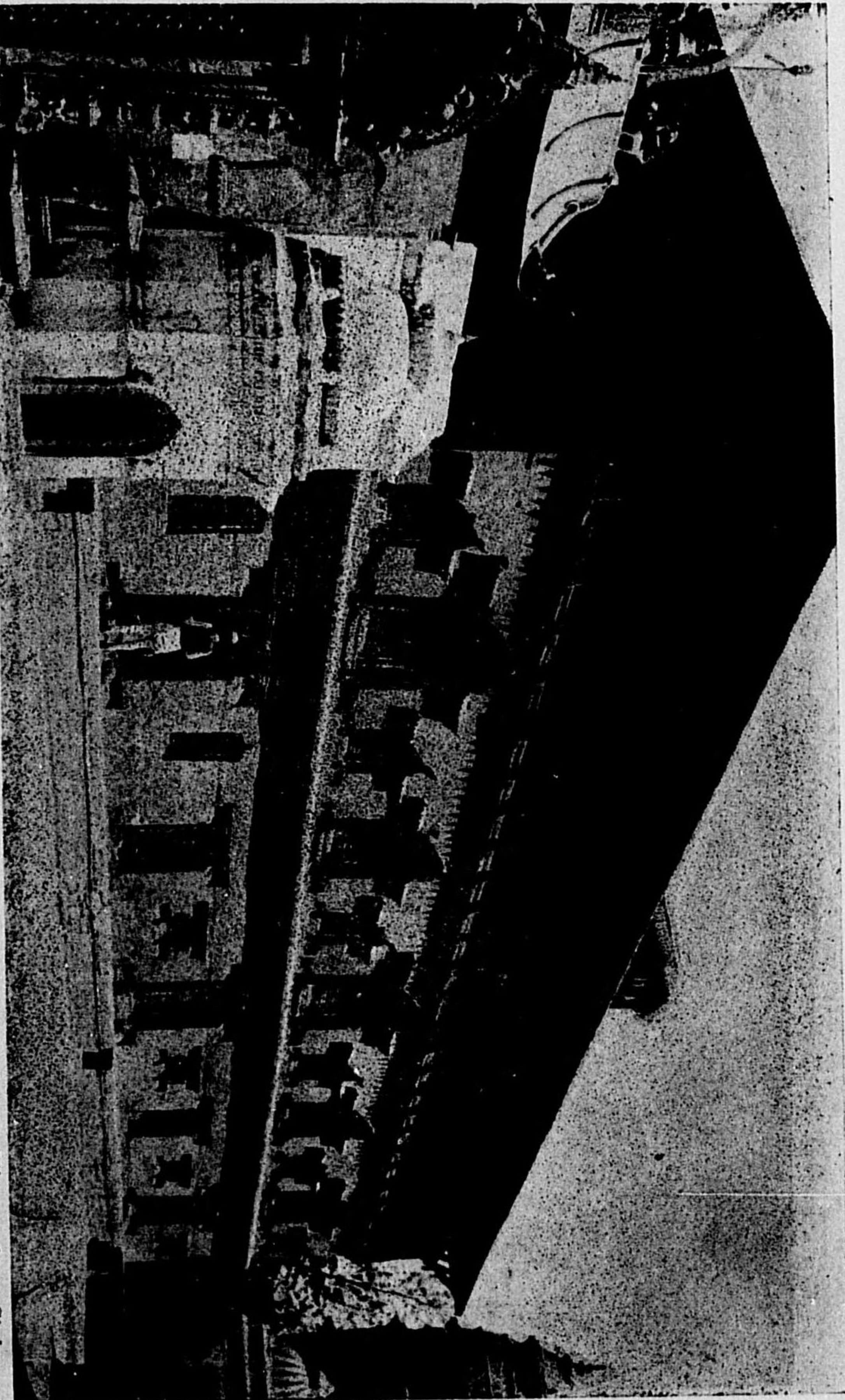
最上の窓は、普通の場合と多少形式を異にし、窓の有効面積は非常に小さいが、
 むて、謂はゆるスプレイド・ウインドウ (Splayed Window) の上乘なるもの。
 左右の方立が前方に廣がり、従つて楣もさうなつて



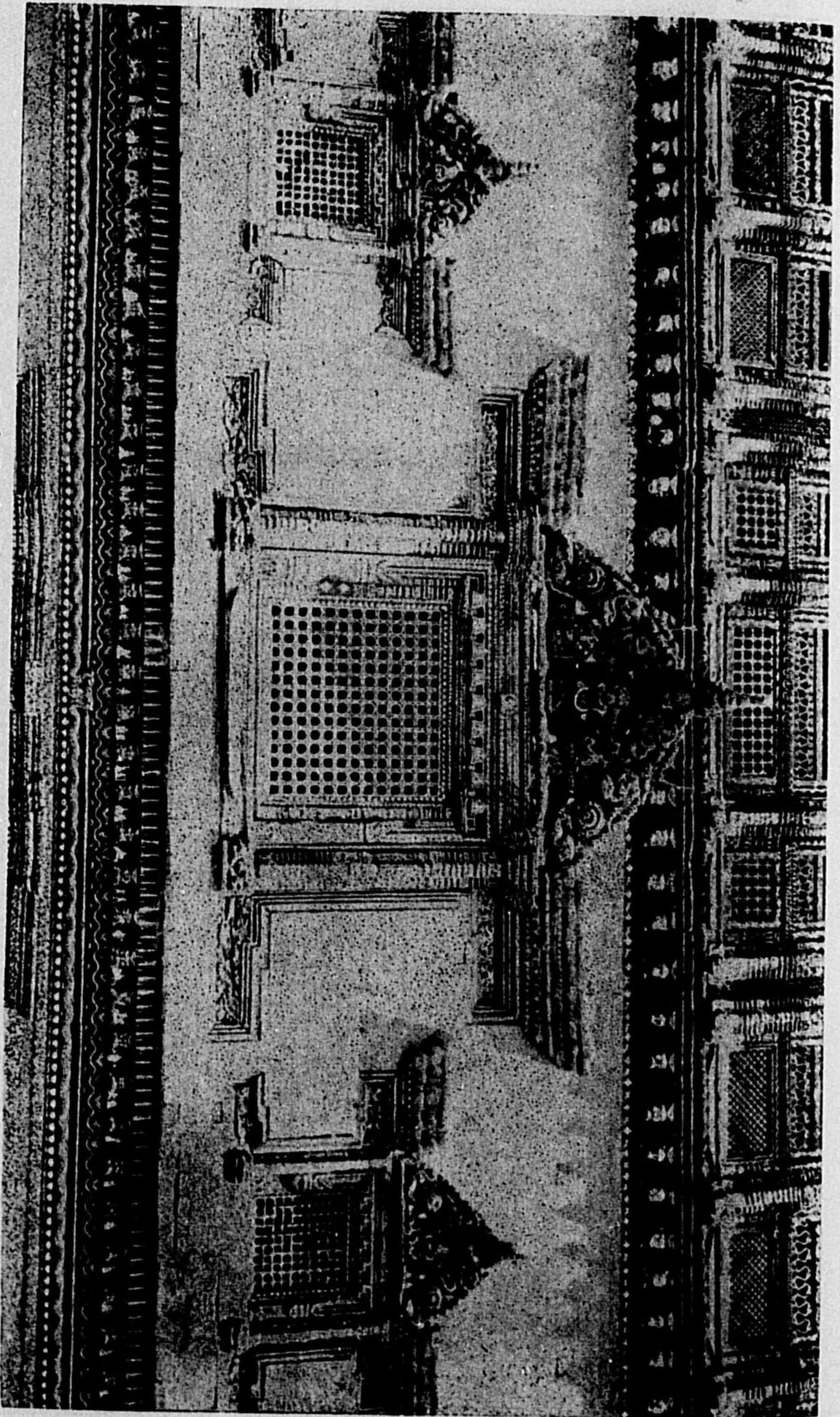
ポートガオン市の家の窓——孔雀窓の他の一例。第97頁参照（昭和十一年三月十九日）



ポートガオン市の窓三種
（昭和十一年三月十九日）
上の例は狭間飾の花狭間が甚だ面白い。
こんな面倒な彫刻をよくもしたものだ。中
の三連窓は両端が拱形にしてあるところに
注意すべく、下のは盲窓の一例である。

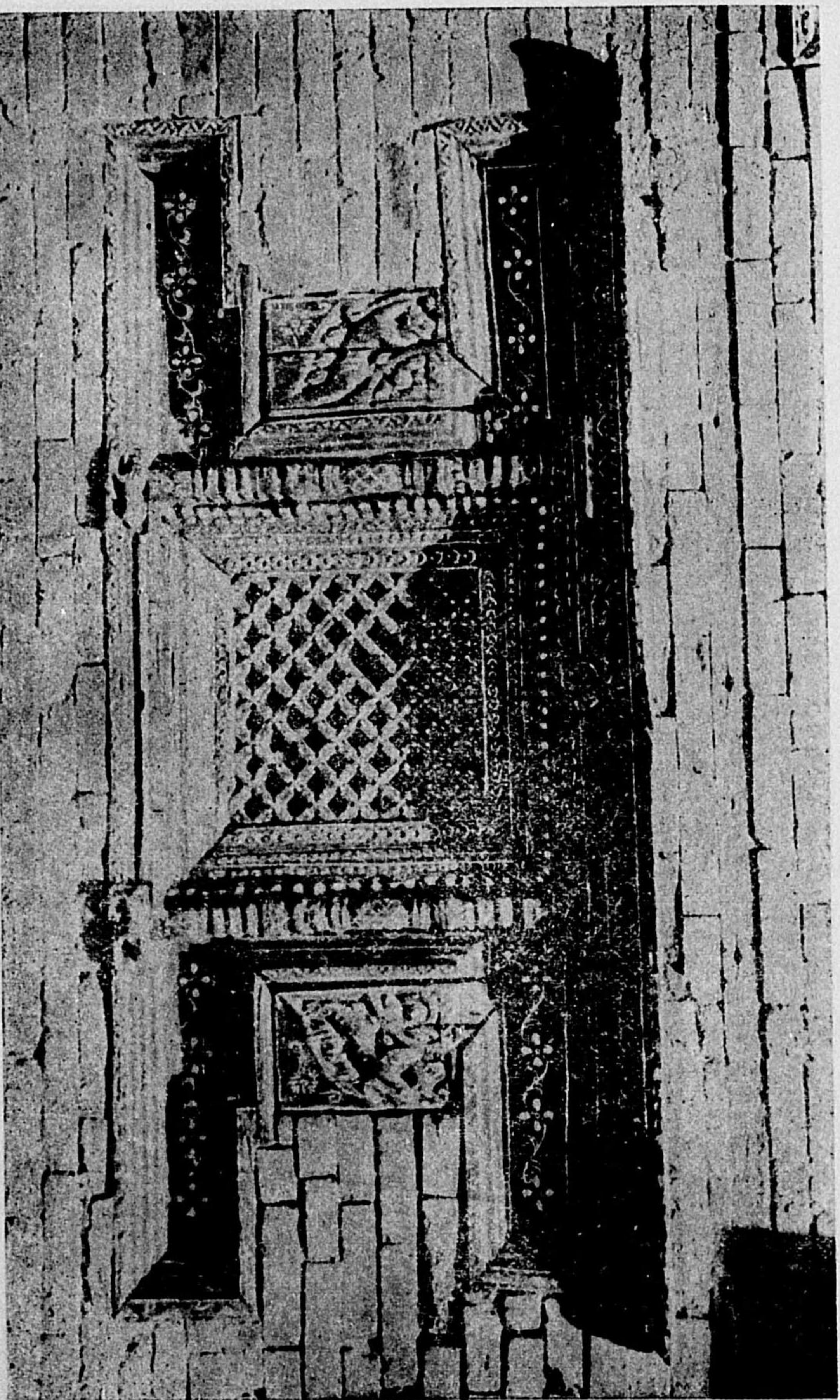


パトガオン市ダーバー・スクエアの王宮の正面。左方に半分見えてゐるのは有名な金門、右方のは Vimana 即ち Sikhara を有せる 殿堂(第 217 頁)。此三階建の大きな建物は パワソジャル (Bawanjhal) といふさうであるが、例により確實性に乏しいのは遺憾である。パワソジャルとは 52 密といふことだからで、密が澤山にあり、各階で其意匠を異にし、殊に第二階の窓は洵に面白い意匠である。ネパル國には惜しい建築の一である。(昭和十一年三月十九日)



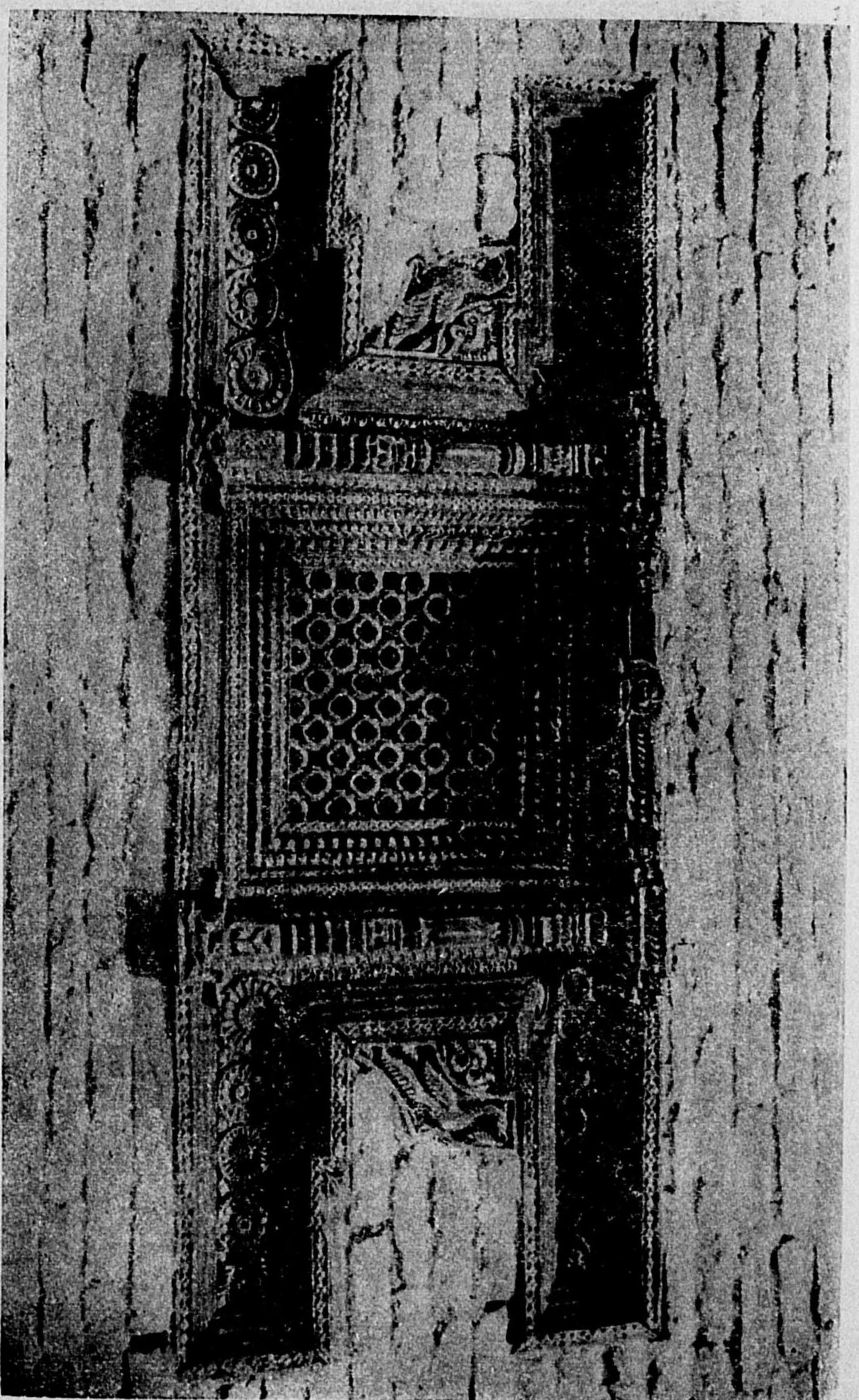
王宮 第二階の窓 詳細 (昭和十一年三月十九日)

此様な細かい精巧なる彫刻をした窓枠と其上部の飾を、年百年中風雨に曝しておくのは勿體ない気がする。前頁の圖でみる様に、大體に於いて フロレンスやローマあたりの伊太利復興式建築を思はせるものであるが、窓の種類が多くて變化に富んでゐるところは パラッツォ (Palazzo) 以上である。こんな立派な建築があるのに、誰人も何も言はないのは、^ネ 鎖國のため一般に知れ直つてゐないためであらう。



バーダガオツ市 王宮正面の小窓 其一 (物指は曲尺の二尺・昭和十一年三月十九日)

前前頁の圖に於いてみる様に、第一階の右の方に此種の小窓は四つ見えておるが、其内の一つがこれである。窓枠の外方の柱形の間隔と偶ま一致したため不鮮明になつたが、丁度曲尺の二尺が其間に入る位の大きさのものに、殆ど兩方へ大きな袖がでておるので、面積からいふと三倍をしめておる。次頁のは大さも意匠もこれと殆んど同じであるが、花狭間も前者より一層手が込んで (次頁へ)



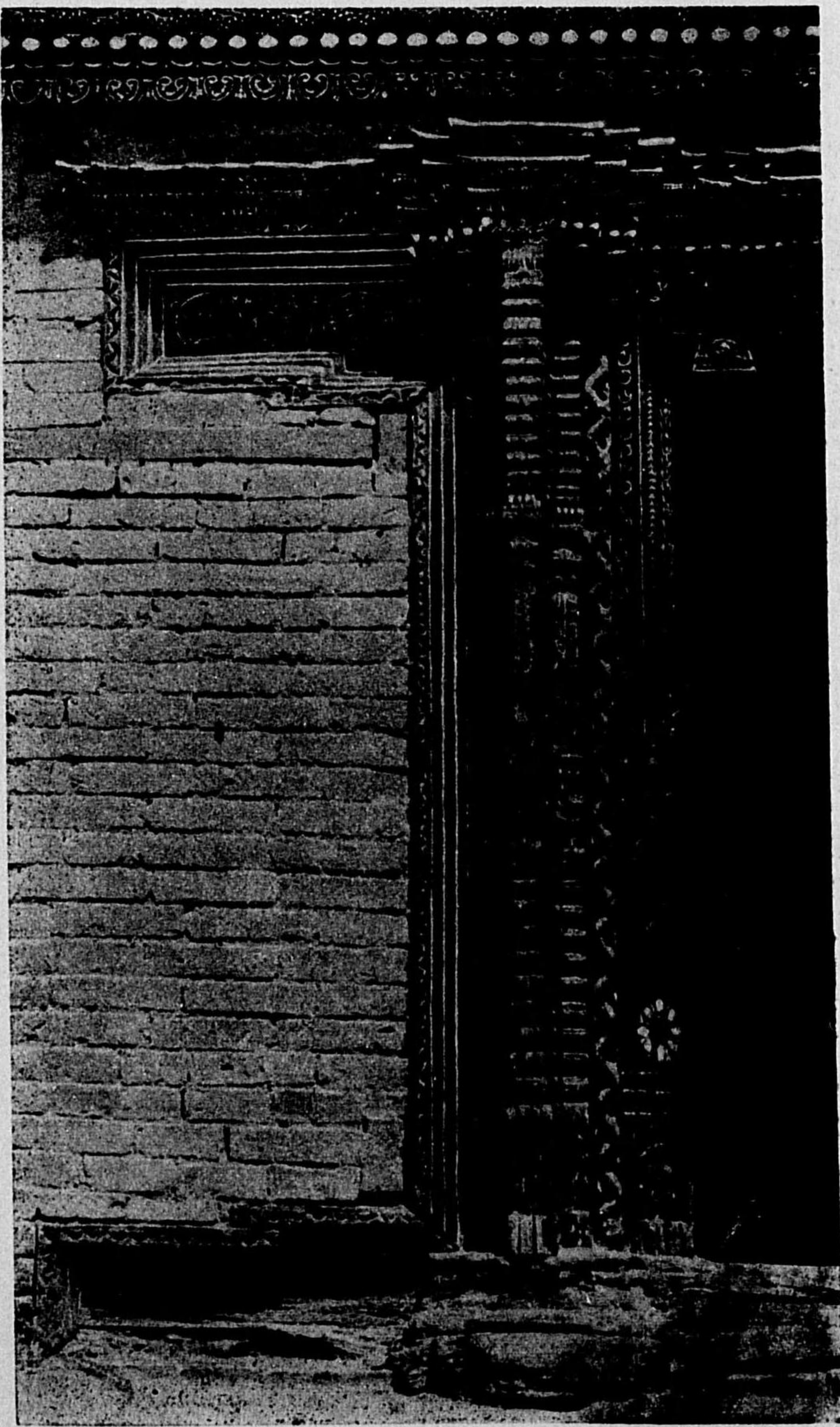
同 ダーバー・スクエアの家の窓 (昭和十一年三月十九日)

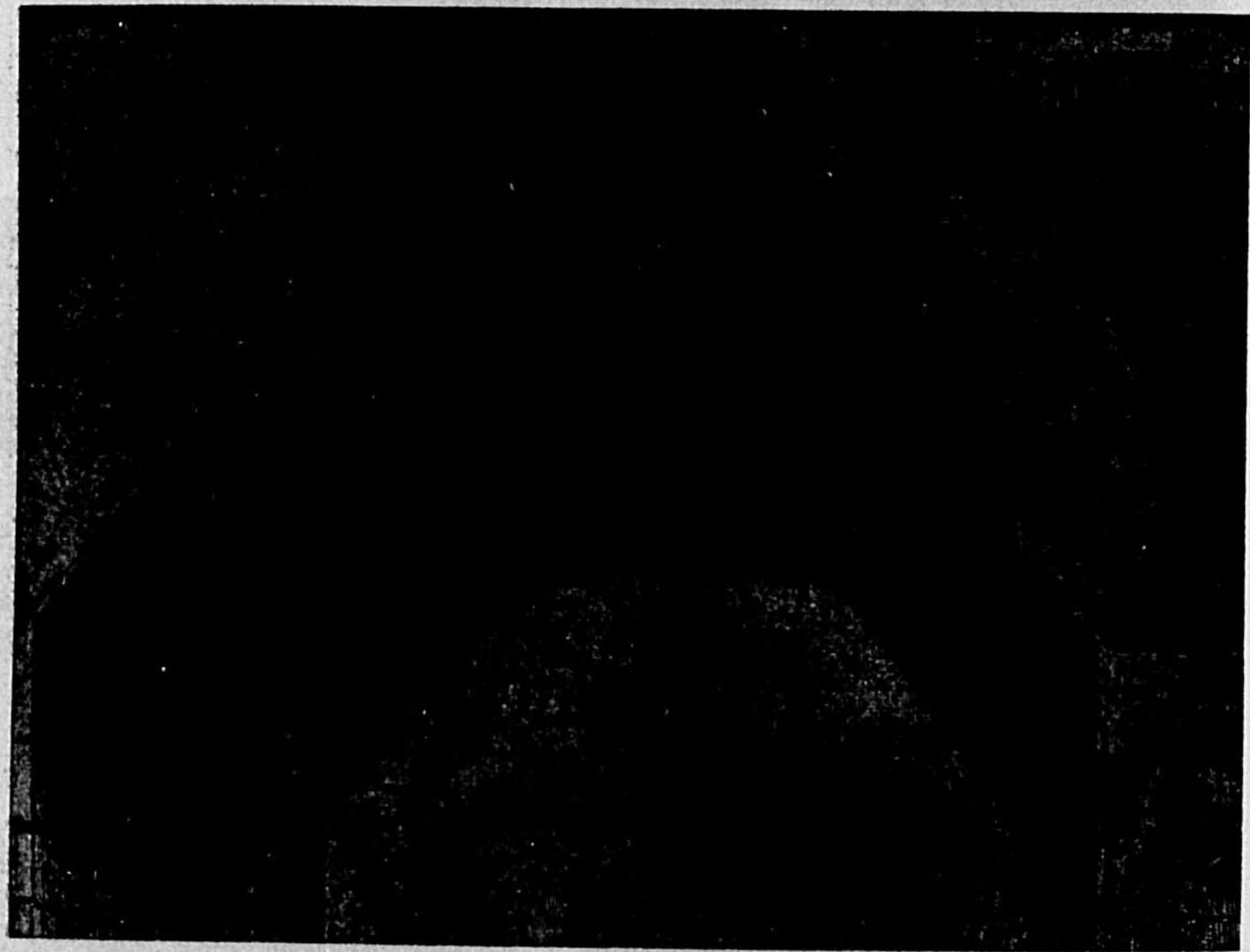
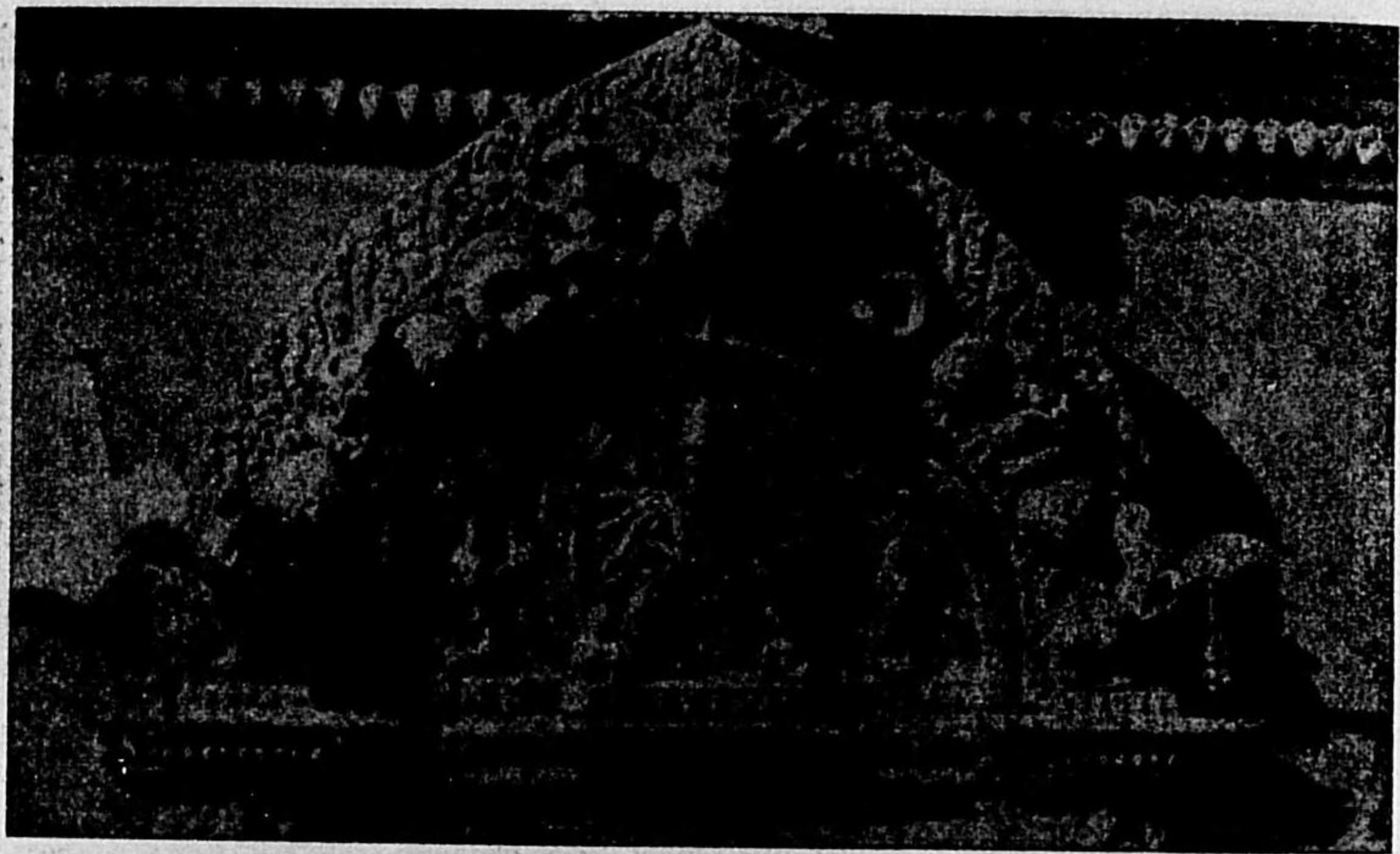
(前頁より) 居り、上下の左右に出た角の内の裝飾も繪ではなく彫刻にしてあり、上下の間には持送の様なものを入れておるが、そこに陽刻してある鳥が何か御へておることと、柱形の外側の引込んだ所に、犬牙飾(Dog tooth ornament)の様な七寶繋の様なものを入れておるのが興味を惹く。

バードガオン市ダーバー・スクエアの一印度教祠
 幸にして震災に顛倒を免れた尖塔式 (Vimana (Sikharā)) 印度教祠。而も五重の基壇上に建つ堂堂たるもの。第193頁に掲げ
 たクリシュナ堂と其様式は同じだが、あれより簡單である。けれども基壇があれより多いので、随分立派に見えてゐる。
 (昭和十一年三月十九日)



バートガオン市 王宮正面出入口方立一部。
 あらゆる種類の楣は、かうなつてくると何れも主義は一つで、ただ細部が少し變つてゐるだけといふことになる。これ等は随分手
 は込んでゐるが、やはり左右に柱形があり、上下に水平に角が出てゐること、窓と同じである。
 (昭和十一年三月十九日)



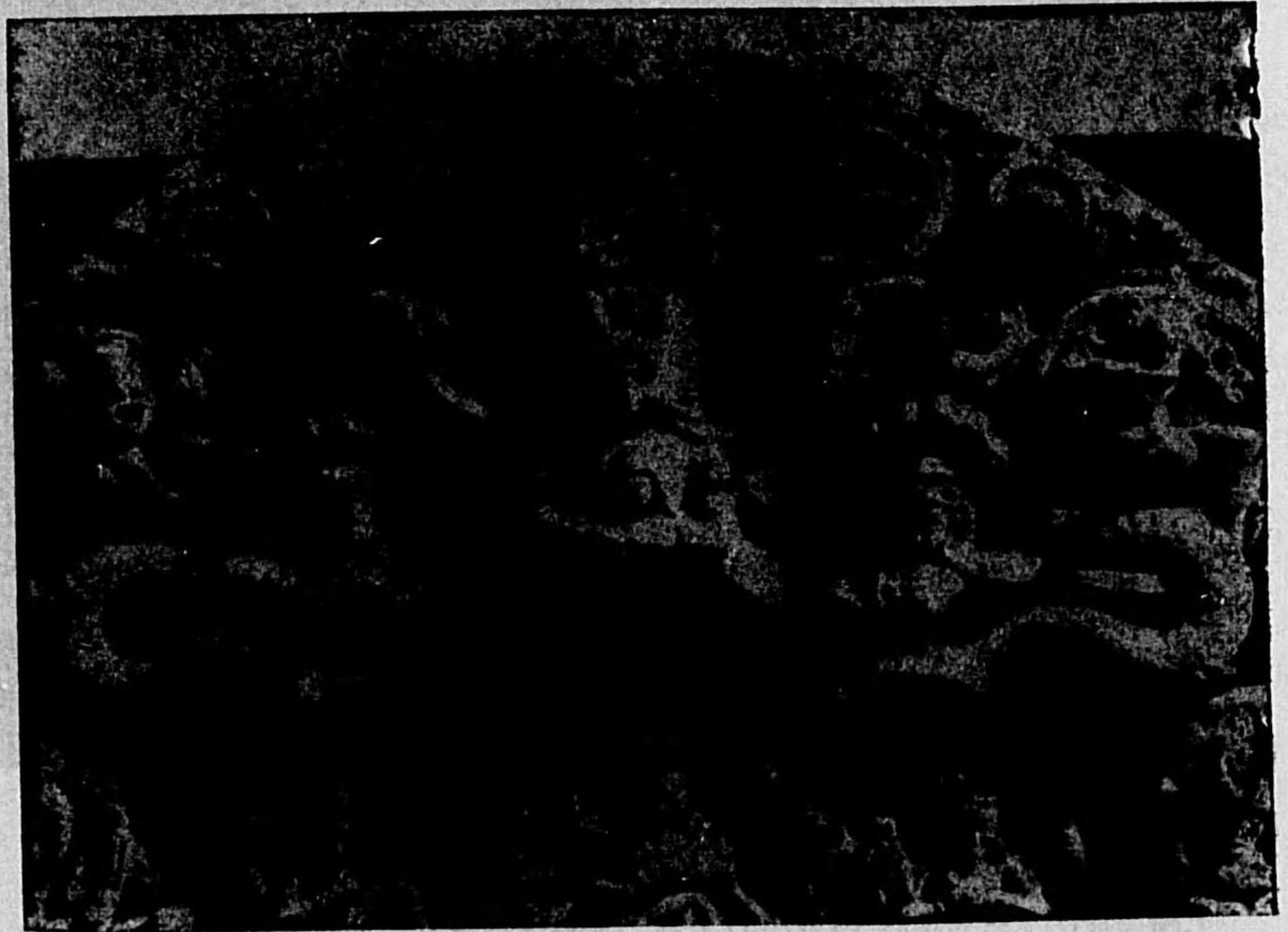
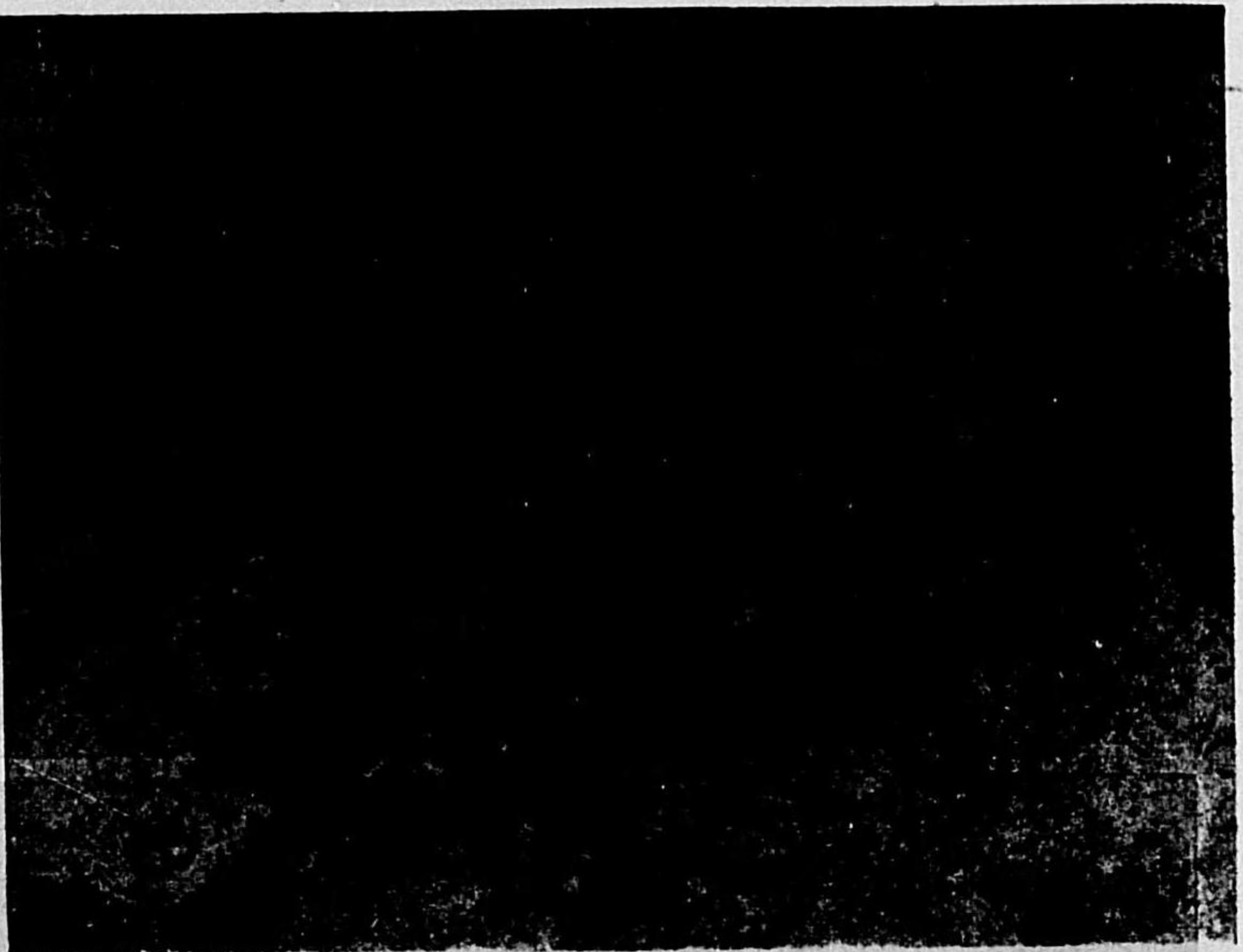


上。パートガオン王宮正面金門上部の裝飾
 下。元の至正五年の建築なる居庸關拱の陽刻文様
 (上。“PIOT RESQUE NEPAL”の、下。“H. of l. & E. A.”の挿圖複寫)
 上圖に於ける三葉線形 (Trefol) 外廓の文様と、下圖に於ける拱の迫石の夫れとを比較せよ。ファーガソンはそれを言っているのである。併しこの種の文様は、何もこのみに限った事はなく、いはば至る所の主要なる建築についてみるといってもいい位である。其三例を次頁に掲げておく。中央が迦樓羅で左右がナガカナギニの特殊な裝飾がある。

同 基壇上の佛像
 最上の一は10倍の増、正面階段の兩脇にゐる石像は普通の人の10倍の力があるさうで、其上は下のものの10倍……と、といった工合に進み、彫はニアトホラ・デパール(二三二—二三三—二三四)のと少し異つてゐるやうである。



(昭和十一年三月十九日)

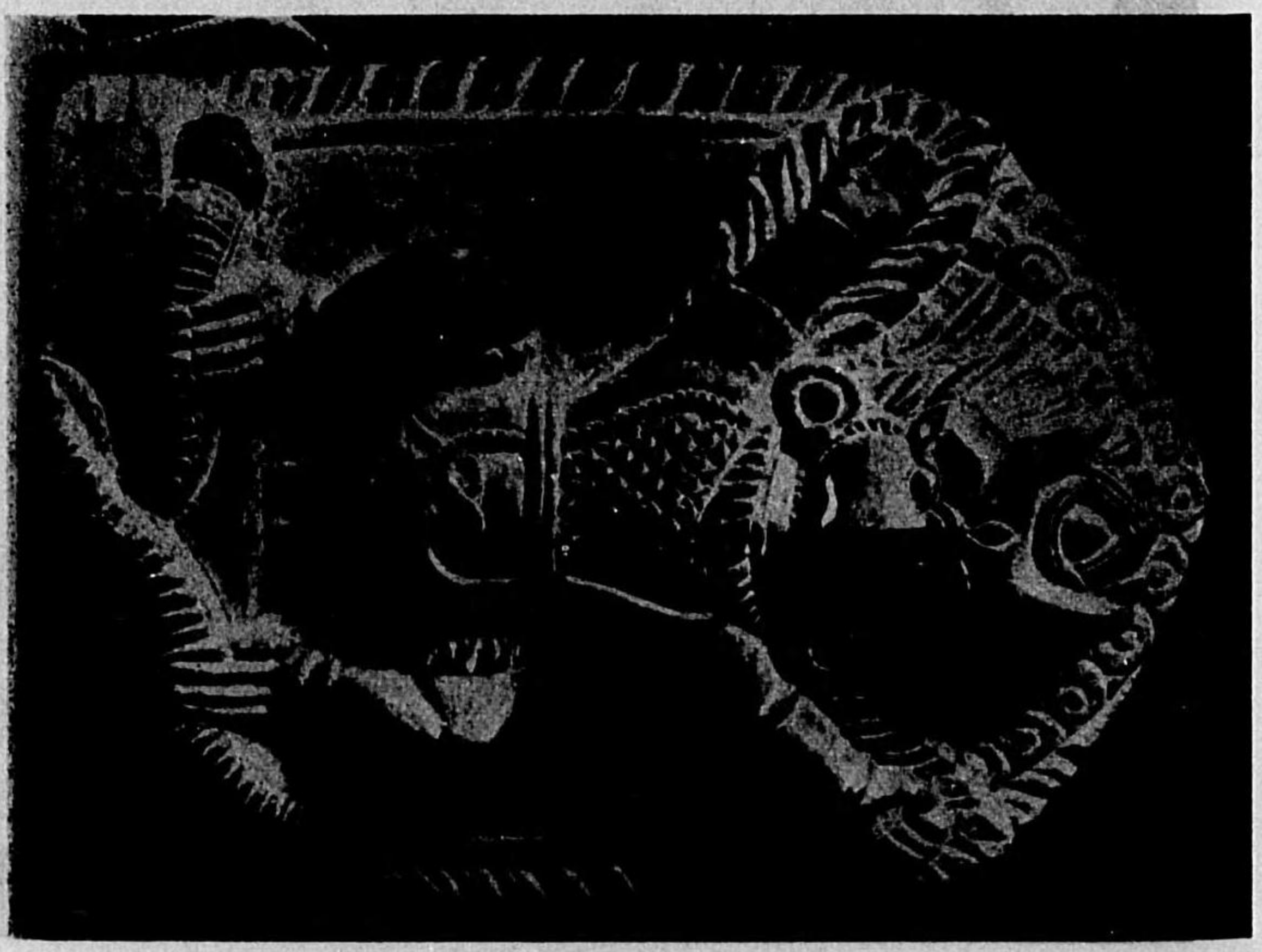


上。 スワヤンプナート寺大塔小龕上部の裝飾（“P.N” 挿圖複寫）
 下。 カトマンヅ市のある祠堂の出入口上部の裝飾（同上）
 前頁の圖よりこれ等の方が大きいから一層明らかである。上圖と一七八と比較する時は、此の裝飾のついてゐる所が明らかに判るであらう。

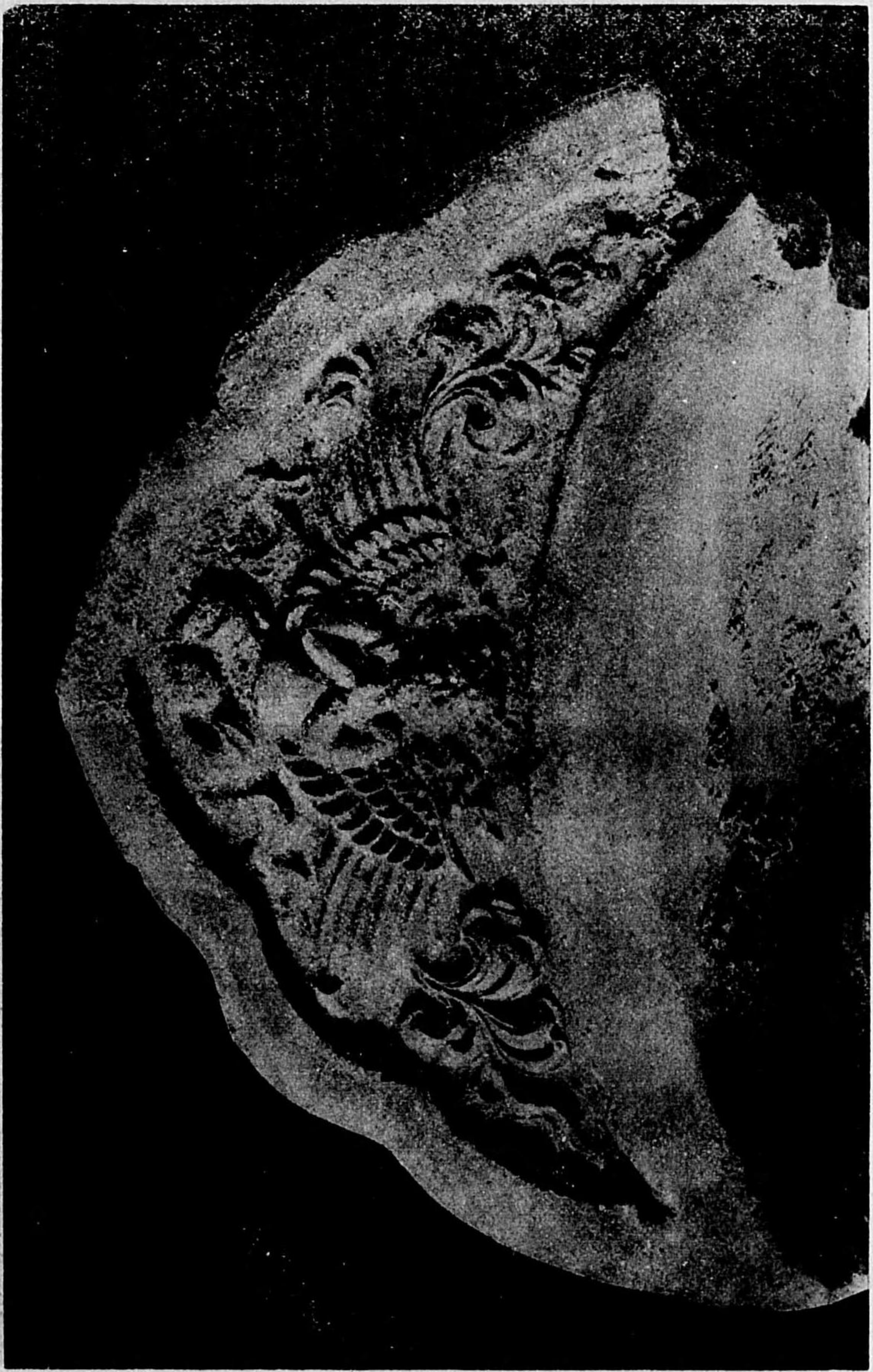
左。朝鮮京城李王職美術館出陳 伽樓羅銀飾金具
 第222・223頁所載の互文様の夫と比較せよ。



右。「HEILIGE STÄTTEN INDIENS」所載伽樓羅
 解説に「Stein Figur des Adlers Garuda, des heiligen Tieres des
 Vishnu」とあり。第219頁上圖及び220頁上下圖
 中央の伽樓羅と比較せよ。

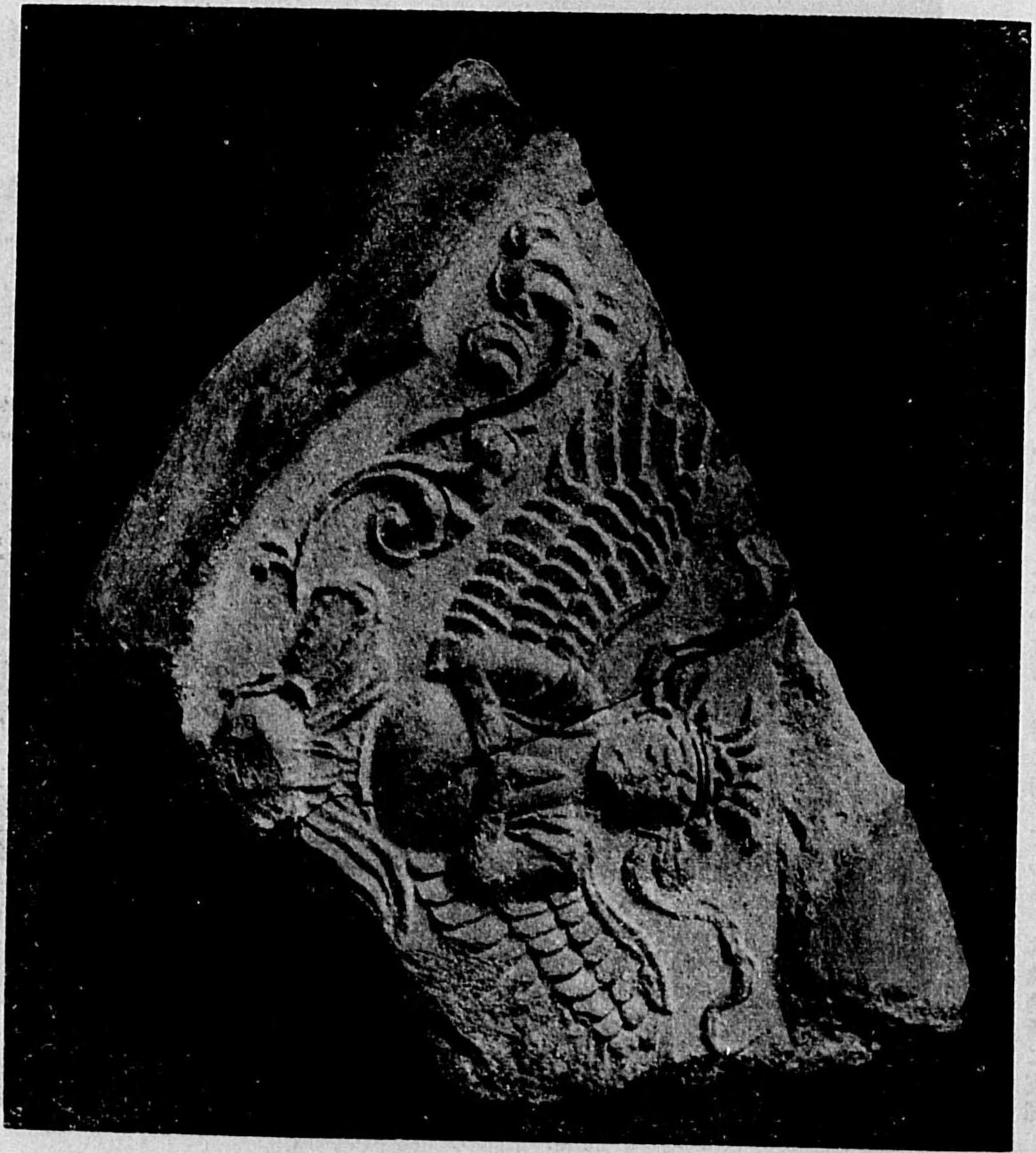


（約二倍大 家藏寫真複寫）



朝鮮江原道春川郡 清平寺棟樂殿瓦

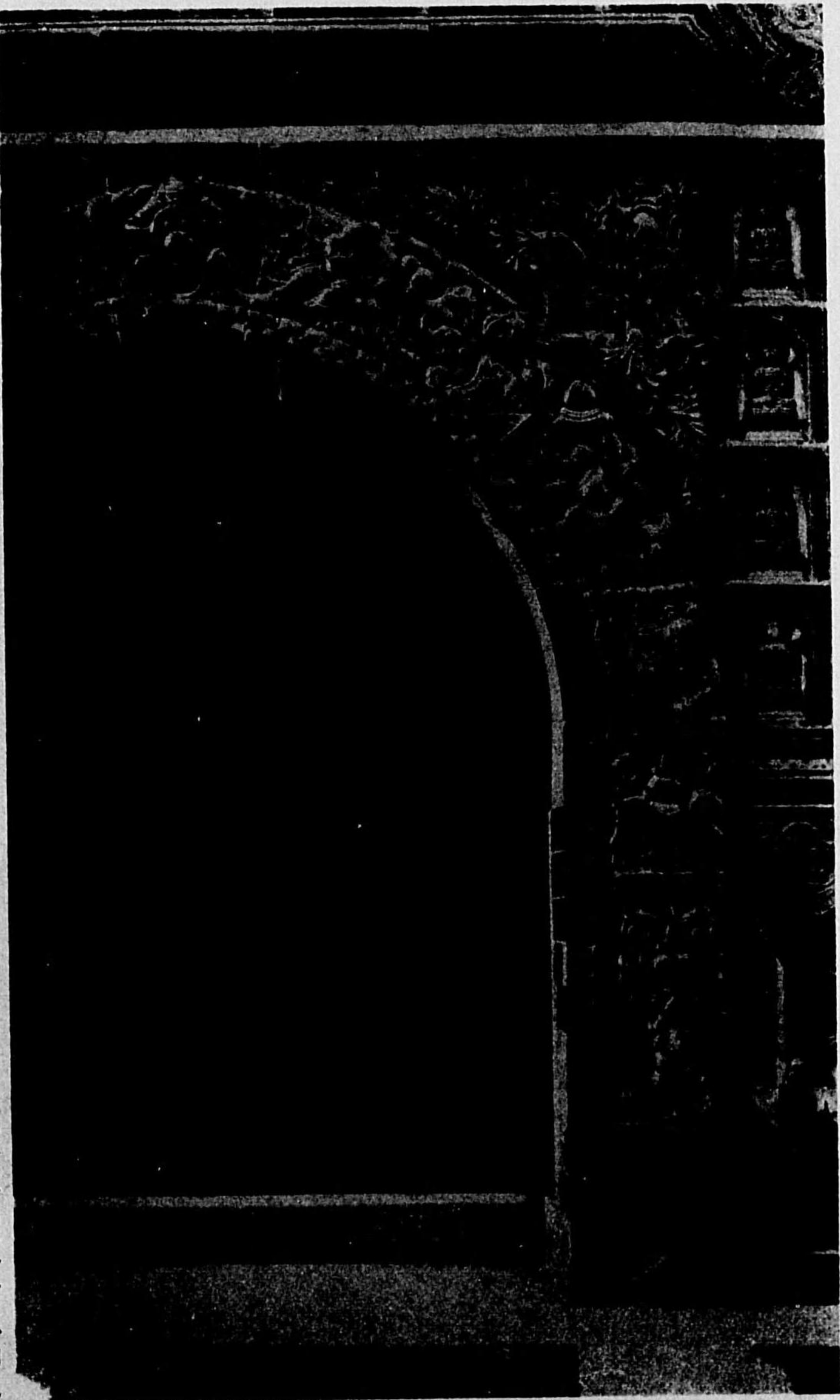
(家藏寫真複製)



(家藏寫真複製)

朝鮮江原道襄陽郡襄陽面 濟山寺出土瓦

前頁及び此頁に掲げた瓦は、共に李朝初期頃のものが、其中心の廻轉羅の様な正面向きの怪物が興味を中心である。兩方共合掌してゐるが、これで翼に沿ひて兩手を擴げてゐたとしたら、第219—220頁の出入口上の此種の裝飾と、どれだけ之差があるか。此兩側にナガカネニかがるゐるのは、何分瓦の形がこれだから、つけられないため省いたとも見られよう。或はまた今後いつかどこかで、ナガ附のものが發見されるかも知れない。此種の瓦は今所江原道以外に見出されてゐない。



北京、北海建築出入口拱の一部

中央楔石のは支那化した伽樓羅と見え、嘴は鳥だが、顔は人間、蛇を銜へて踊んでゐるが、膝關節は人類と同様で足指は三本で第221頁左圖と同じである。其兩方の那伽は第219・220頁の例と異り、頭部は人で、且つ反對に向いてゐる。其他隨所に支那化したところが見えて頗る興味のあるものである。

(大正十四年十一月十四日)

となく伊太利復興式のパラッツォ (Palazzo) を思はせるものである。これ等は差向き「パラッツォ・リッカルヂ」(Palazzo Riccardi) や「パラッツォ・ファルネーゼ」(Palazzo Farnese) といふところ。大雪山の南麓に位置し、雪隠詰めにされてゐる王國に、こんな愉快な建築があらうとは夢想だになつた。シルバン・レビの書物でもみたらからかいてあるかも知らぬが、私の手許にあるものうちには、これを紹介したのは一つもない。けしからん事である。

此に並んで有名な「金門」がある。多くの書物に必ず其正面の寫眞がでてゐる位に有名である。此門に就てフアガッソンは

“.....a doorway leading to the darbar at Bhatgaon, and is a singularly characteristic specimen of the style, but partaking much more of China than of India in the style of its ornaments. It is indeed so like an archway in the Nankau Pass, near Pekin.....” (“H. of I. & E. A.” Vol. 1, p. 283)

といつてゐるが、その「スタイル・オブ・イツ・オーナメント」といふのは、上部中央についてゐる、ガルダの様なものを中心に、左右に「ナガ」か「ナギニ」かが向ひ合つてゐるのを指したと思はれる(第219頁下圖)。其他類似の所は、下部の兩方にゐるマカラ式の怪物と、それから出てゐる唐草と

* 南口所在元至正五年(興國六年・貞和元年)の建築なる居麻蘭 (Chi-yung Ku-n, Nan-kou, Ching-shao, (A.D. 1345)) の拱の陽刻文様を指す。

であるが、著しいのは中央上部のだから、多分このことをいふのであらう。果してさうなら斯の如き裝飾はここばかりでなく、少なくともスワヤムブナート寺大塔周囲の小龕上部の裝飾に現はれてゐる(一七〇・一七)。尙ほ其他に、バートガオンの王宮の廣場に面せる二階の窓上の中心裝飾が全部この式である。(第21頁)。其他窓臺下の裝飾にも現はれてゐる(第164頁)。(第165頁)。

私の氣がついたのは此だけだが、Percy Brown の "PICTURESQUE NEPAL" の挿圖には他に三つも掲げてある。のみならずまだ他にいくらかもある。スワヤムブナート大塔のは、私の寫眞は小さくて判りにくいかも知れないから、共に大きく複寫をさせていただいておくが、まあこんな次第で珍らしくはない。それが偶ま支那の建築に現れてゐるからとて、あの權威者のいふ如く斷定はできまい。寧ろ支那と西藏やネバルとの關係を考案し、熱河の建築に西藏式の寫しがあり、彼此相似の點等を考慮する時は、この裝飾は實によく似てゐるといふよりは、全く同じといった方がよい位だが、遂に彼の説に賛成しかねるのみならず、反て其反對ではあるまいかと思はれるのである。那伽の原産地からだけ考へたつて、どうも共鳴はできかねる。

尙ほここに面白いのは、翼の生えた伽樓羅の様な、正面向きの怪物が朝鮮の小工藝品及び瓦の文様に見出される事で、私は其二例を第221—223の三頁に掲げておいた。瓦の一は兩翼をひらいてあげ、他は同じで少しさげてゐるが、兩方共兩手を合せて拜んでゐる姿勢である。何れも跌座してゐるものの如く、前者は脚の兩横から唐草が出で、後者は翼の先端から出てゐる。前者は缺損が甚だしく、全瓦當の文様

を知り難いが、雙方共伽樓羅の形は同じである。今此意匠をみるに、兩手を合せてゐる代りに、若し翼の下側に添ひてひろげたならば、殆んど219・220頁の圖上部中央正面向きの怪物と、全く同じといつてもいい位によく似るであらう。この似てゐるのは偶然かも知れぬが、偶然としては似過ぎてゐやしないだらうか。偶然でないとすると、此様式の伽樓羅は朝鮮に於いて考案された形ではなく、輸入のものともみることが出来るやうに思はれる。更に此種の伽樓羅と那伽とが支那へ歸化し、全く支那化したと思はれるのが北京に土着してしまつてゐる(第224頁)。かういふのを彼此比較してみると可なり面白い事になつてくる様である。

ネバル及び支那の例は、二手の分は何れも翼にそひて兩腕をひろげてゐる(土着の分は蛇を喰つてゐる)。四手の分は合掌してゐない。然るに朝鮮の瓦の例は、二手で合掌してゐる。伽樓羅には二手と四手のとあるから、これは何れでもいいとして、二手で合掌したのは、私の知つてゐる極めて狭い範圍では、ハリハリハリバーハナ (Hariharivahana) に現はれてゐるのに唯一つあるだけで、他は何れも手をひろげてゐる。夫れを合掌させただけが珍しいと見られよう。

併しながら、これには那伽が居ない。居ないのは何分瓦の形が特殊なので、つける場所がなかつたから、それでやめたとみられさうである。其代りに頗る形のよろしい美術的の唐草を以て、下方や左右の空間を充填したのである。そのため此所に斬新(?)な意匠の美事なき瓦が出来上つたのである。この相手の鏡瓦は、どの様な文様がつけてあるのか、私はまだ知らないから、その事は考へずにおいて、

今はこれだけに就いてみるに、とにかく二個所に見出されてゐる以上、或はもつとあつたのではあるまいか。尙ほ221頁左の例の様に、瓦以外のものにも相當に用ひられたのであらうことは想像ができる。けれどもそれ等は別段證據があるわけではないから、何ともいへない。だから總て除外するとしても、確かなものが少くとも三つはある。これだけは誰が何といつても確かである。

唯惜しい事は、前者は江原道襄陽郡の洛山寺で、朝鮮總督府の土木技手とかが拾つてもつてゐたものを、ある人が珍らしいといつて、ある寫眞師に寫させておいたのだといふ事しか判つてゐない。洛山寺は有名な寺だが、石塔一基のほか、何等みるべき建築は残つてゐない。又この瓦はいつ拾つたかも不明だし、甚だ以て物足りないが、これを追つて調べることにして、洵に面白い瓦である。後者は江原道春川郡北山内坪里の清平寺極樂殿の屋根に數枚あがつてゐるさうで、これは先年私は此寺へ行き、三日ばかり滞在したがついこの瓦には氣がつかなかつた。其後再度行つて此時は自分で確かに見て寫眞もつてきた。だからこの方は出所も明らかだし實物もあるし、貴重な標本である。

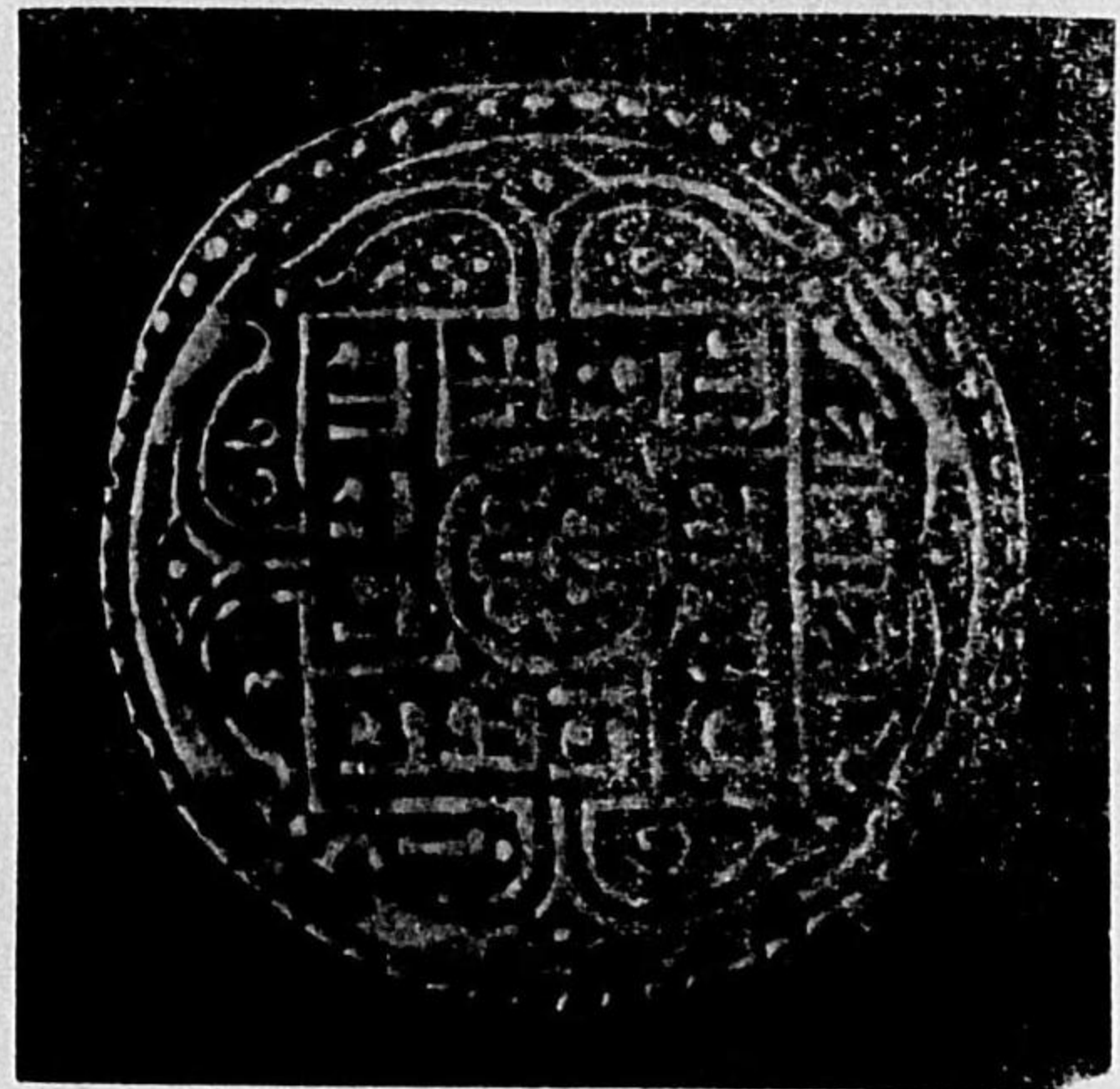
此二枚の瓦と李王家博物館出陳の銀製小工藝品とから、この種の意匠が朝鮮にあることが確かめられたとすると、ネバル・支那・朝鮮といふ工合に、何かそこに關係がなくもない様な氣がする。此等の瓦の存在は、實は昭和十三年三月渡鮮して京城府に滞在中、總督府にゐるOさんと清平寺の瓦の話をしてゐるうちに、寫眞を見せて貰つたので、前者はT寫眞師に焼附を頼み、後者と銀製飾金具とはSさんに依頼して寫眞を送つて貰ひ、製版して挿圖とし、また以上の解説をかいて本文中に挿入したのである。

此宮殿正面の左隣に一の印度教祠がある。バータン市のクリシュナ祠と同様、ビマナ即ち高塔を有するものであるが、此種の建築としては珍らしく五重の基壇上に建つてゐる。さうして正面中央の石階兩側に各壇共石彫が置いてあるが、上から二番目のが殊に面白い、といふ理由は人面獸身だからである。併し前肢は人の手の如くなつてゐるので、少しばかりつまらない。これで身體が牛で角でも生へ顔に寶珠でもあつたら申し分はないが、さう都合よくはいつてゐない(第21頁)。

まさか毎日往復することも出來ず、自分で雇つた車なら自由もきくが、さうは行かず、もつと町中をのり廻してゆっくり見物がしたかつたが、それも出來ず。さきに記したように、漸くの事で五重塔と異形三重塔とをみつめて随分喜んで、夫だけで満足して歸つてきたのであつた。市の南方の川(Hanuman)に沿ひて「ハンマン・ガータ」(Hanmanghat)があるが、その邊へ行つて見たら、さぞ面白からうと思はれるし、又此市の正北約三哩にある大祠なる「チャングナラン」(Changnarayan)へも行つて見たかつたが、これ等は總て割愛せざるべからざる事になつたのである。

(昭和十三年一月二十日稿了)

印度佛塔巡禮記



ネパール國 1 モハー (Mohar) 銀貨 (×2)

2 モハー = 1 ルーピー

1½ ネパール・ルーピー = 1 英印ルーピー
併し普通 As 8 ア通じてゐる

(第十七回)

1011、二重塔

バートガオン市のダーバー・スクエアに建てる無数の祠堂の内、これは割合に完全に残ったのである。基壇は一重だし、周柱堂でもないから、外觀は大分に淋しい。而も初重大きく、上重は小に失し、此種の建築としては形のいい方ではない。何故左程でもないものの圖を掲げたかといふと、此王宮廣場には恰好としては餘り感心できぬが、もつと遙に面白い二重塔があったので、それが震災で亡くなり、今残つてゐる三重塔は亞鉛板の假屋根がかけてある有様だから、比較的完全なのをここに圖示したのである(1111)。**【ネバル】**第一卷第216頁に、ダーバー・スクエアの一隅としてだしてある圖の中の二重塔はこれらしいが、はつきりしない。

1011、五重塔(ニアトボラ・デパール)

五重の基壇の上に建つてゐる五重塔。Nyatapola Devalと書いてあるが、「ニアトボラ」と發音するの
か「ニアトボラ」かよく知らない。フッガッソンには「デビ・バツワーニ・テムブル」(Devi Bhawâni
Temple)として掲げてある(230頁、1703(元祿十
六年))の創立といふ。首都に着以來毎日の様に探がしてゐて、
パータンでは番人頭と唯み合つてまで、尋ねて行つたクムベスワラ・テムブルは壊れて了つて影も形も
なかつたので、失望落膽して以來の獲物だから、嬉しくてたまらず。不取敢第86頁に遠景二枚を圖示し

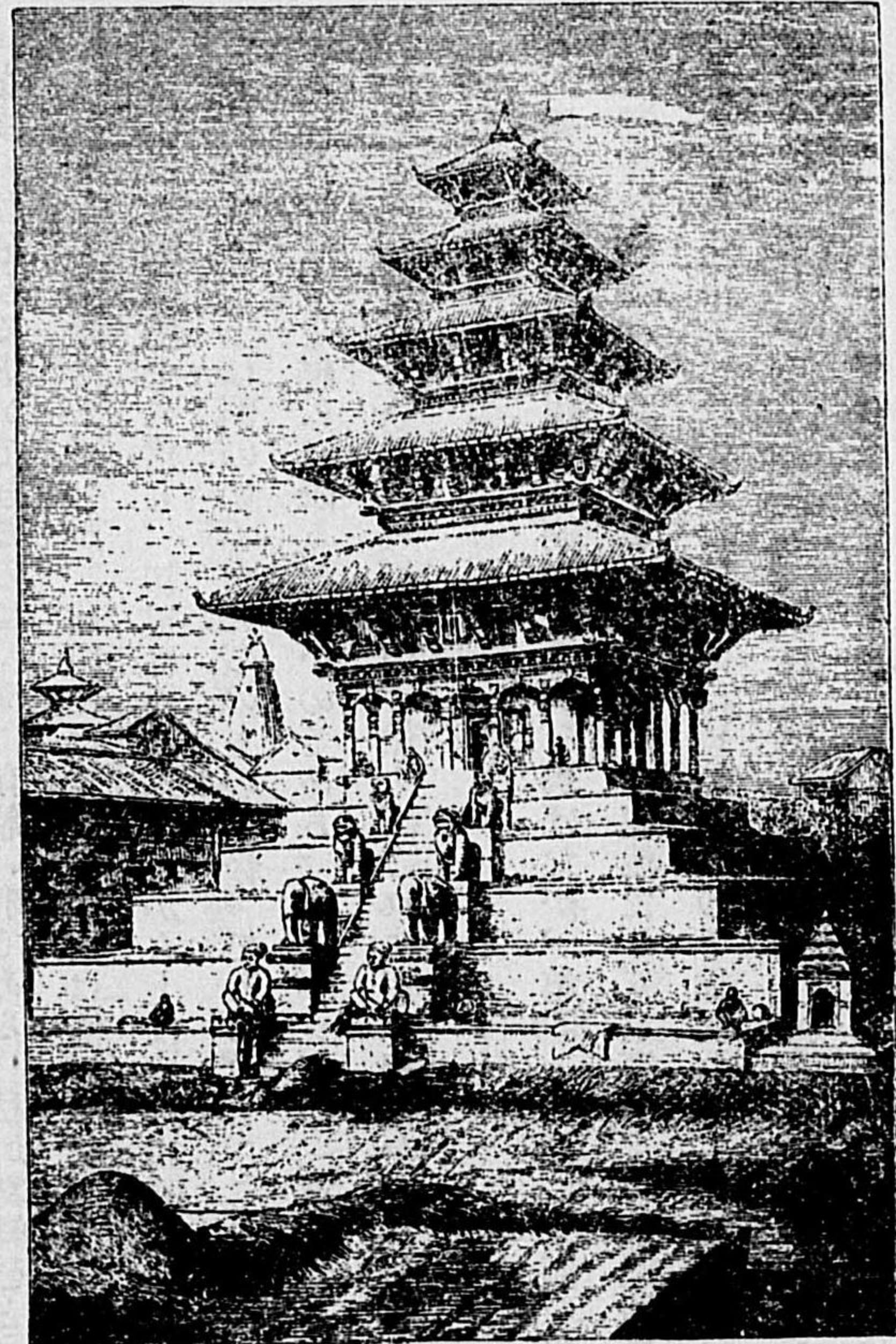
ておいたが、ここにも亦1111・1111に正面の二景を掲げておいた。震災では幸に助かつたが、其前
方の廣場にあつた建物が壊れたと見えて、それに用ひてあつた木材を基壇の上へ積んだものだから、寫
眞でみる通り甚だきたならしくなつて了つた。併し建物には殆んど損害がなかつたので、今日でも元の
ままの形をみる事ができるのは、洵に有難い事である。私が寫眞をとつたのは七年前だつたから、あた
りは少しぢぢむさかつたが、此頃では定めて境内は清掃され、美しくなつてゐるだらう。

塔は五重の壇上に建ち、初重は周柱式。夫から上は比較的遞減の急な構架が積み重ねてあり、正に立
派な五重塔。上は例の如く金鈴型のものに終つてゐる。若しこれが金鈴でなくて、例ひ短くても相輪で
あつたらば、と慾には限りがないのである。カトマンズの三重塔のときにも、相輪を希望した位であつ
たから、五重だと一層其感が深い。然らばこれに短い相輪をつけたとしたら、其結果はどの様になるだ
らうか。

曩に私は朝鮮法住寺の捌相殿の例を擧げたが、第235・236頁に其圖を掲げておく。捌相殿といふのは初
重内部に釋迦八相の圖があるからだが、純然たる五重塔で、各重遞減の割合も可なり多いから、安定上
からいふと申分はない。併し相輪は短か過るので我國古代よりの層塔に比べると、見馴れない眼には幾
分異様な感があるであらう。尙ほこのニアトボラ・デパールに比較しても、基壇の數従つて高さ、周柱
式と然らざると、軒反の有ると無いと、それから軒廻り等、多くの點に於いて相違はあるが、大體に於
いては同一意匠といへるのである。左に相違の點を一つ書きにしてみると

フナガツン著『印度及東洋建築史』所載バートガオン市五重塔之圖

(同書挿圖複寫)



157. Devi Bhawini Temple, Bhātgāon (From a Photograph.)

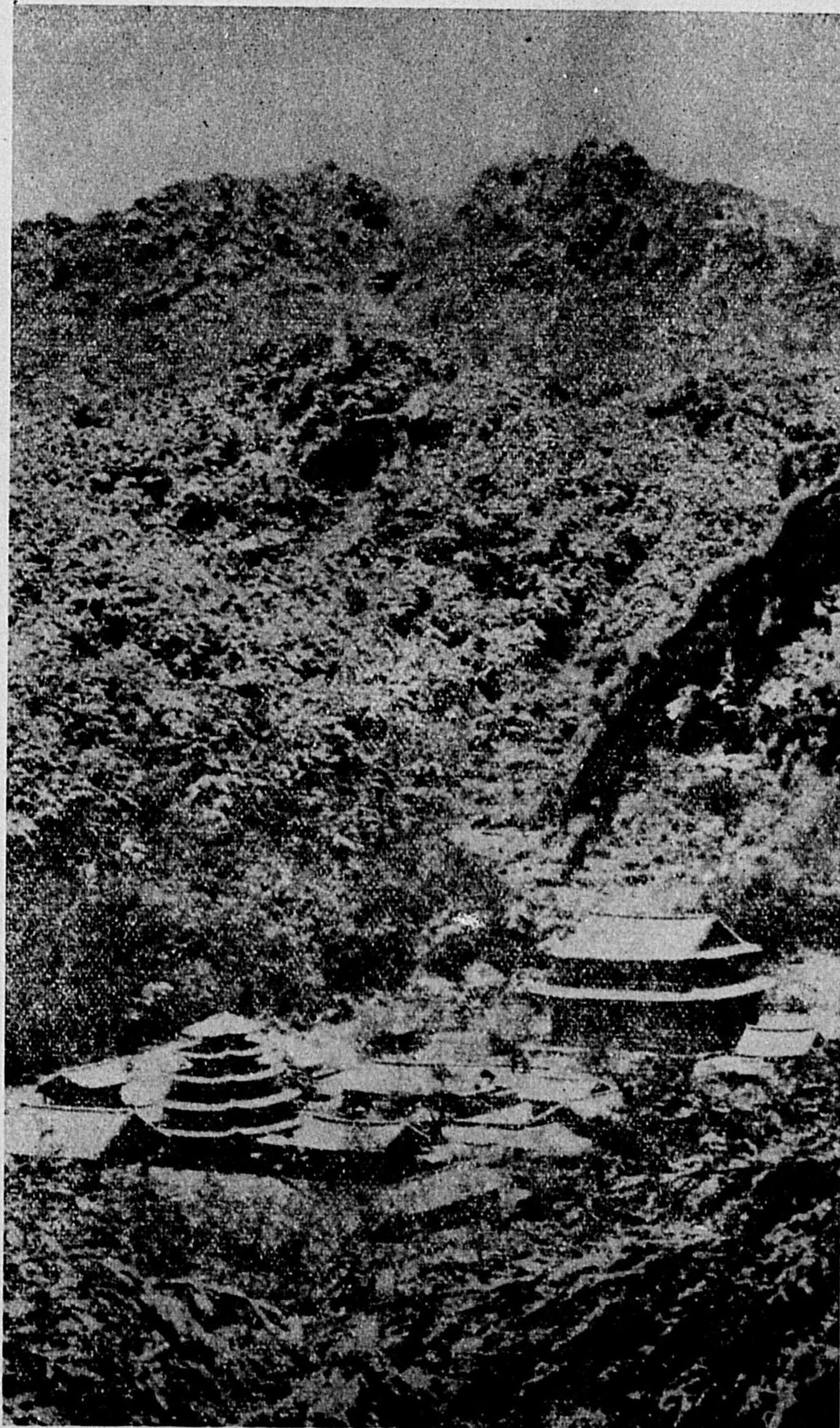
ネバル五重塔

- 一 五重壇上に建つ
 - 二 初重周柱式方五間
 - 三 軒反なし
 - 四 軒一重鼻隠板あり
 - 五 各重遞減大なり
 - 六 最上部に金鈴を置く
- 朝鮮五重塔
- 一 一重壇上に建つ
 - 二 初重方五間
 - 三 軒反あり
 - 四 軒一重鼻隠板なし
 - 五 同上
 - 六 最上部に相輪あり

といった風である。捌相殿が寛永元年の再建で、このデビ・バワニ祠が元禄十六年だから、そこに八十年の差はあるが、同じく江戸時代だから面白い。此他に朝鮮には木造を模したと思はれる百濟時代の石造五重又は七重の塔なら、立派な遺物がある(第238頁より242頁迄)。

朝鮮忠清北道報恩郡俗離面舍乃里

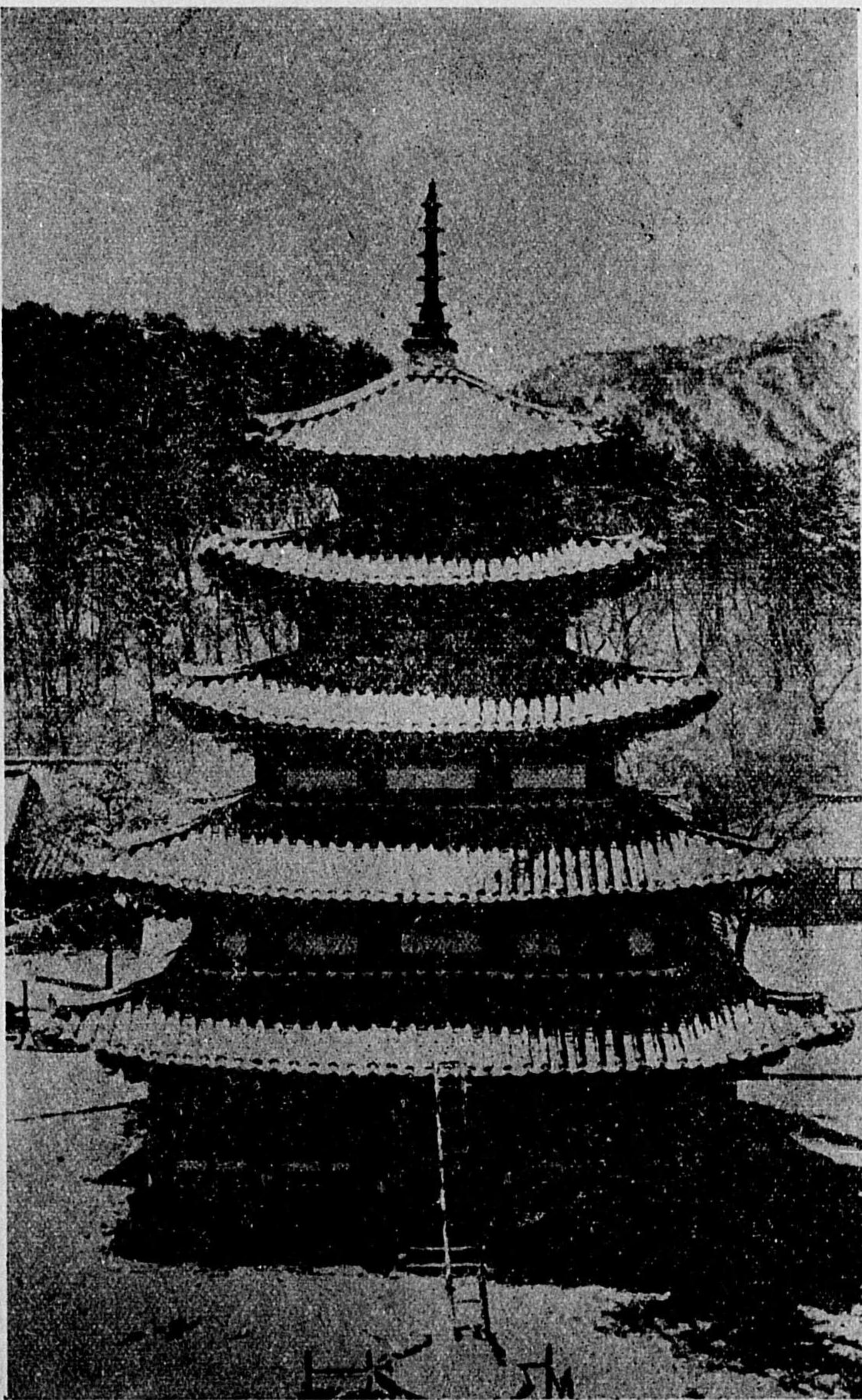
法住寺雪景



(昭和十四年十一月二十九日)

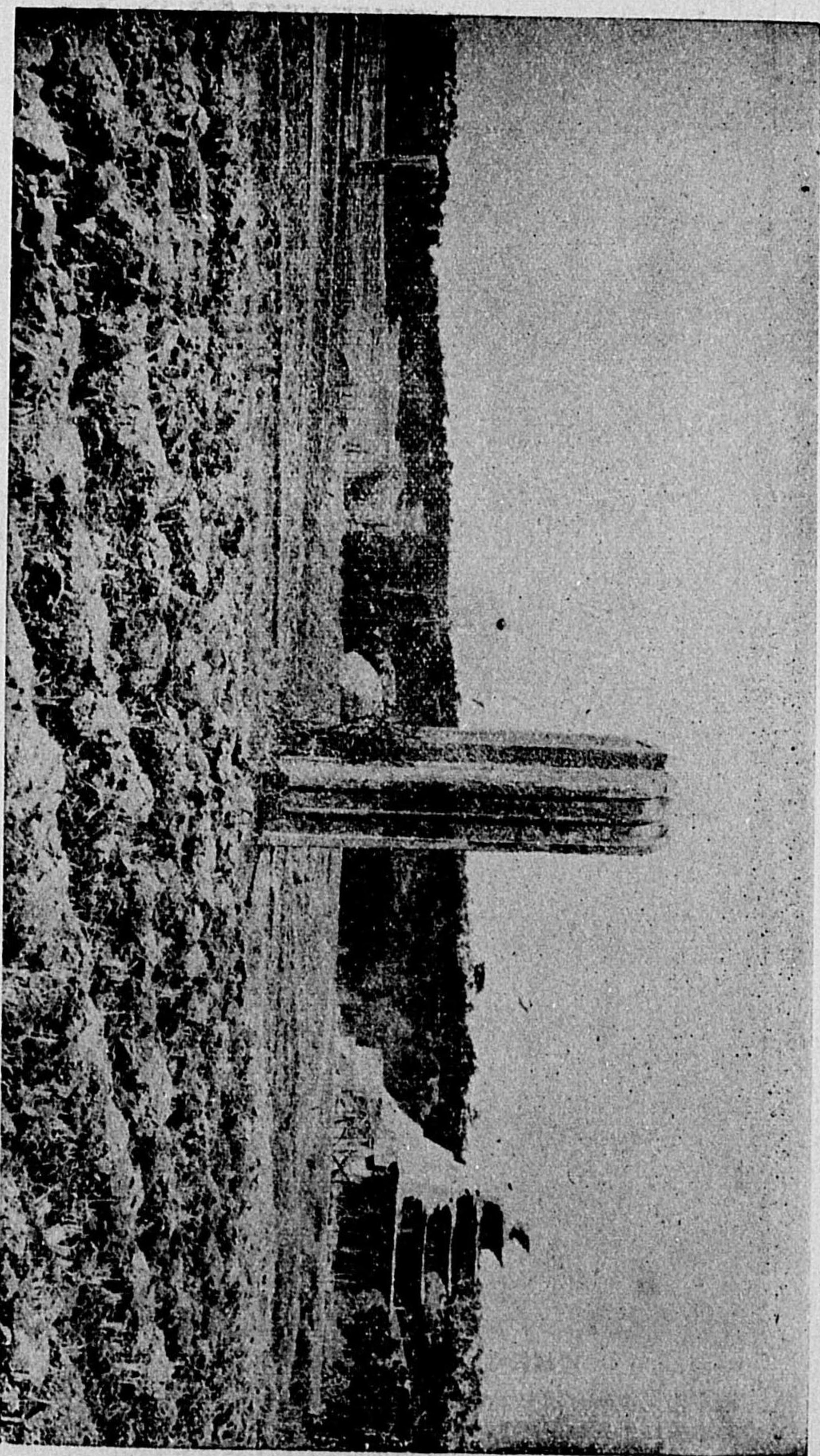
法住寺へ行ってゆっくり泊り込んでみると、偶然大雪が降り、一夜でつもって此始末。再び見られぬ景色だから、前回にも通辯をして貰った朱太淳師に案内を乞ひ、附近の小高いところへ登って全景を寫してみた。左端「天王門」、次「捌相殿」(五重塔)、右端「大雄殿」何れも南北の一直線に建つてゐるところがよく判るであらう。

法住寺柳相殿



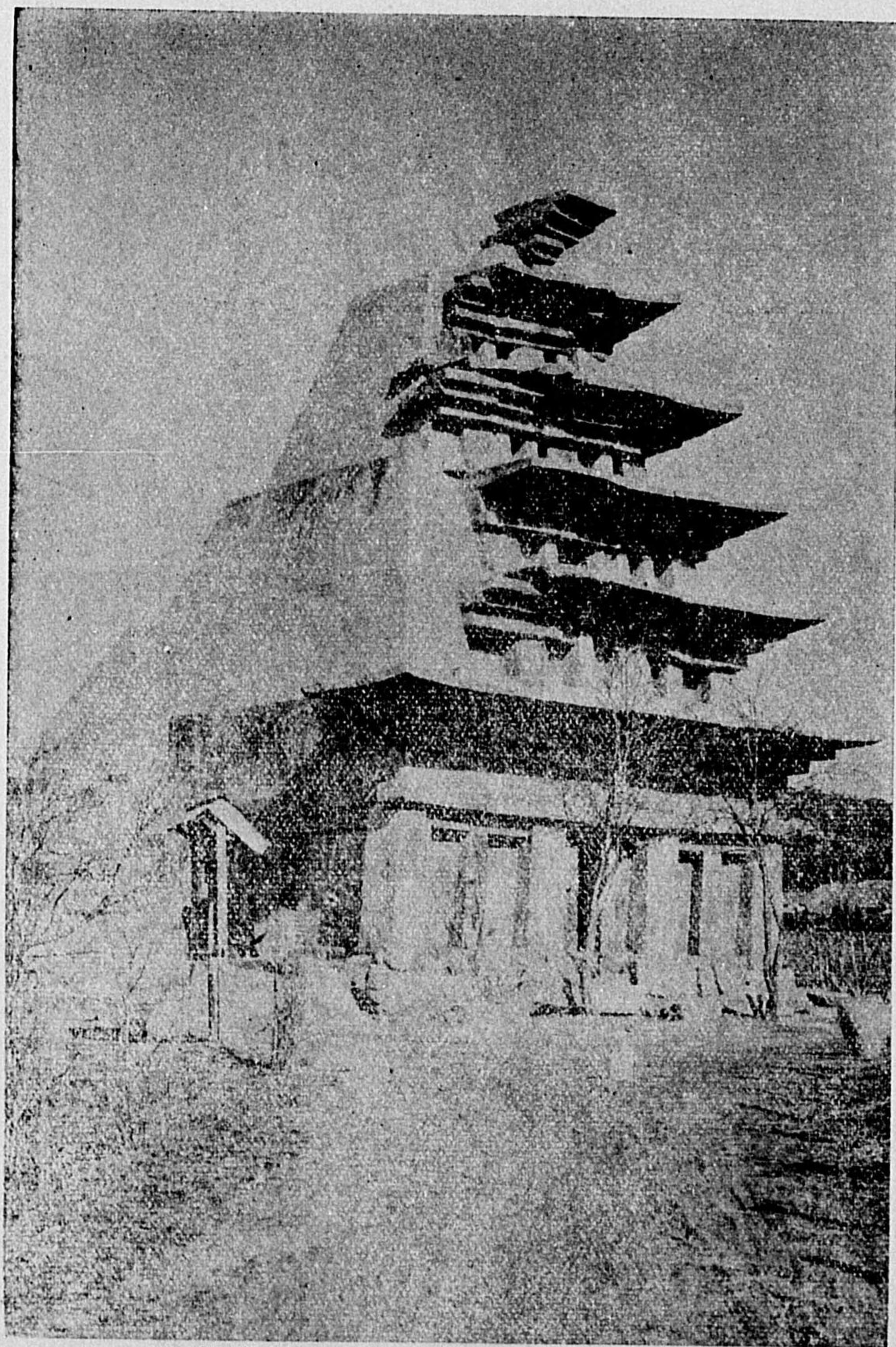
(昭和十四年十一月二十九日)

柳相殿の北側に、セメントを以て大佛像を造顯する目的で、高い足場ができてゐた。その足場の上へ登ると、平たく板が並べてあり、柳相殿の立面を寫すのに都合がよくできてゐた。相輪をそばで見ると、造つた足場を丁度取去つた翌日が此始末なので、早速撮つた寫眞が即ち此。一重の基壇上に建つてゐるのは少し物足りないが、心柱もあり、純然たる五重塔。相輪頂上から四隅に引いてある風鐸の下がつてゐる鎖(我が多寶塔に見る如き)に注意せよ。



朝鮮全羅北道益山郡金馬面其陽里 慶彌刹寺刹竿支柱及石塔 (昭和十三年三月二十日)

此圖は西南方からみたもので、當初はここに三ヶ寺あつたといふ。現在は二基の刹竿支柱が残つてゐること此圖の如く、一は中央に大きく近く、一は左方に小さく遠く見えてゐる。石塔は右端にあるが、これは位置からいふと、左方の刹竿支柱の寺に屬してゐるのである。随分ひどく破損してゐるし、且つ石造で七層あつたらしく見えるが、疑もなく木造の様式を多分に備へたもので、時代も古いから参考となすに充分である。



廢彌勒寺石塔 其二 (昭和十三年三月二十日)

前圖と反対の方即ち西南方から見た所で、セメントを以て其崩壊を防いだ結果、後ろの方は Step Pyramid そっくりになり、朝鮮におくよりは埃及國サッカラ沙漠の中に移した方が似合ひさうになって了った。



廢彌勒寺石塔 其一 (昭和十三年三月二十日)

漸く南側のみを稍やよく存してゐるのみで、随分衰れた状態にある。方五間。四方の中央に出入口があり、扉軸摺の穴があるが、復原は容易ではない。今六重を存す。大正四年の大修補を経てゐる。



上。廢彌勒寺石塔初重南面

(昭和十三年三月二十日)

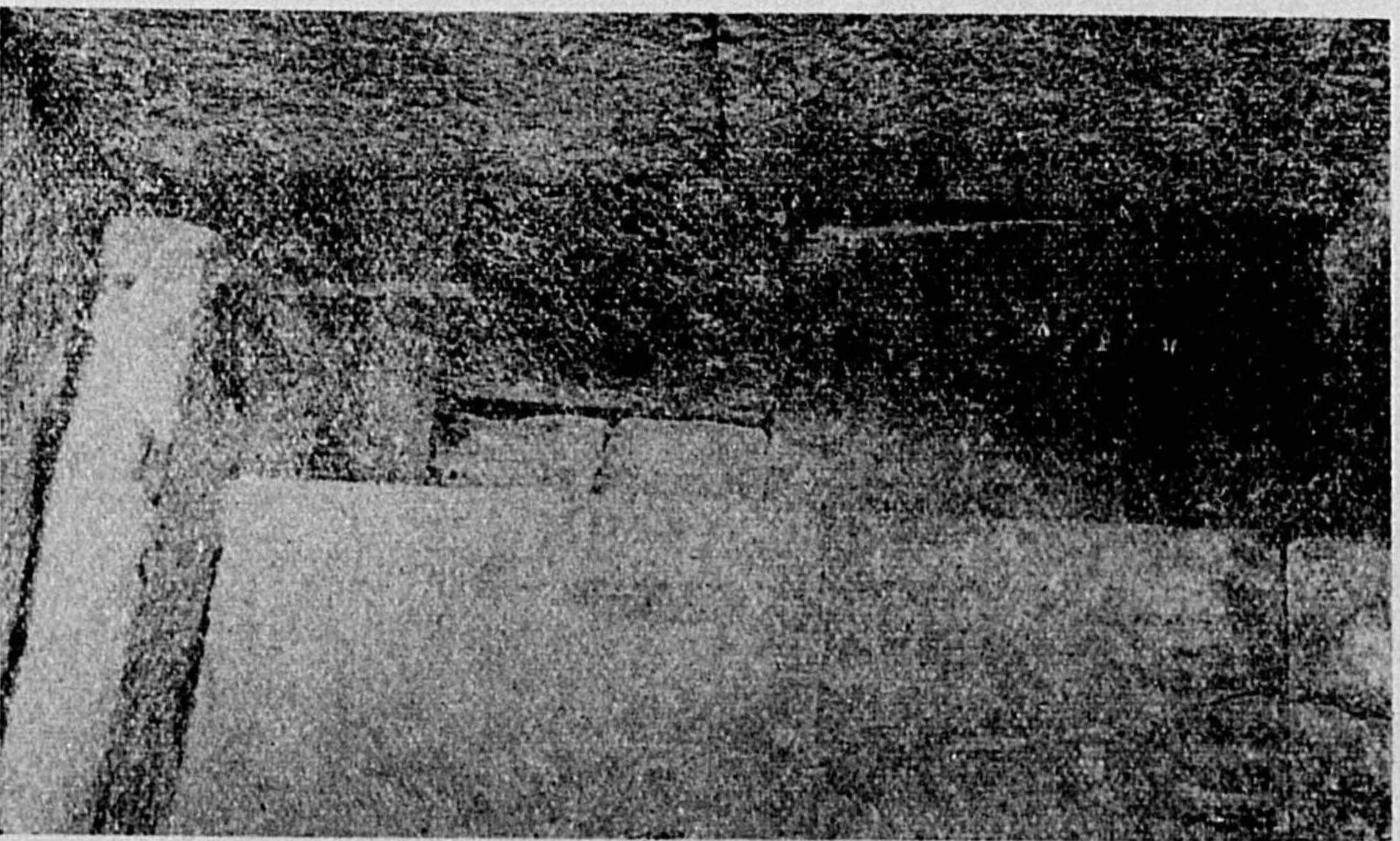
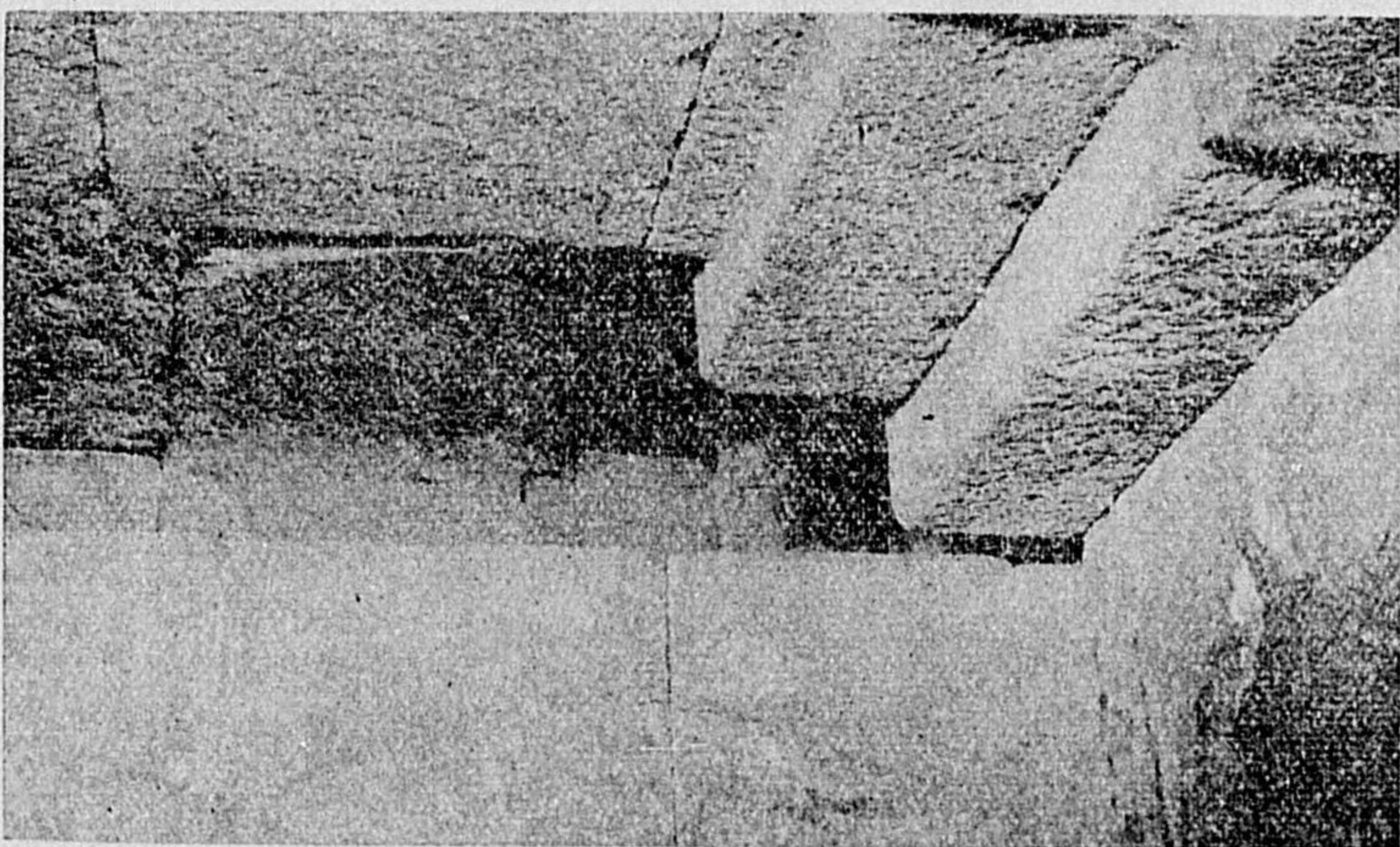
下。同

出入口

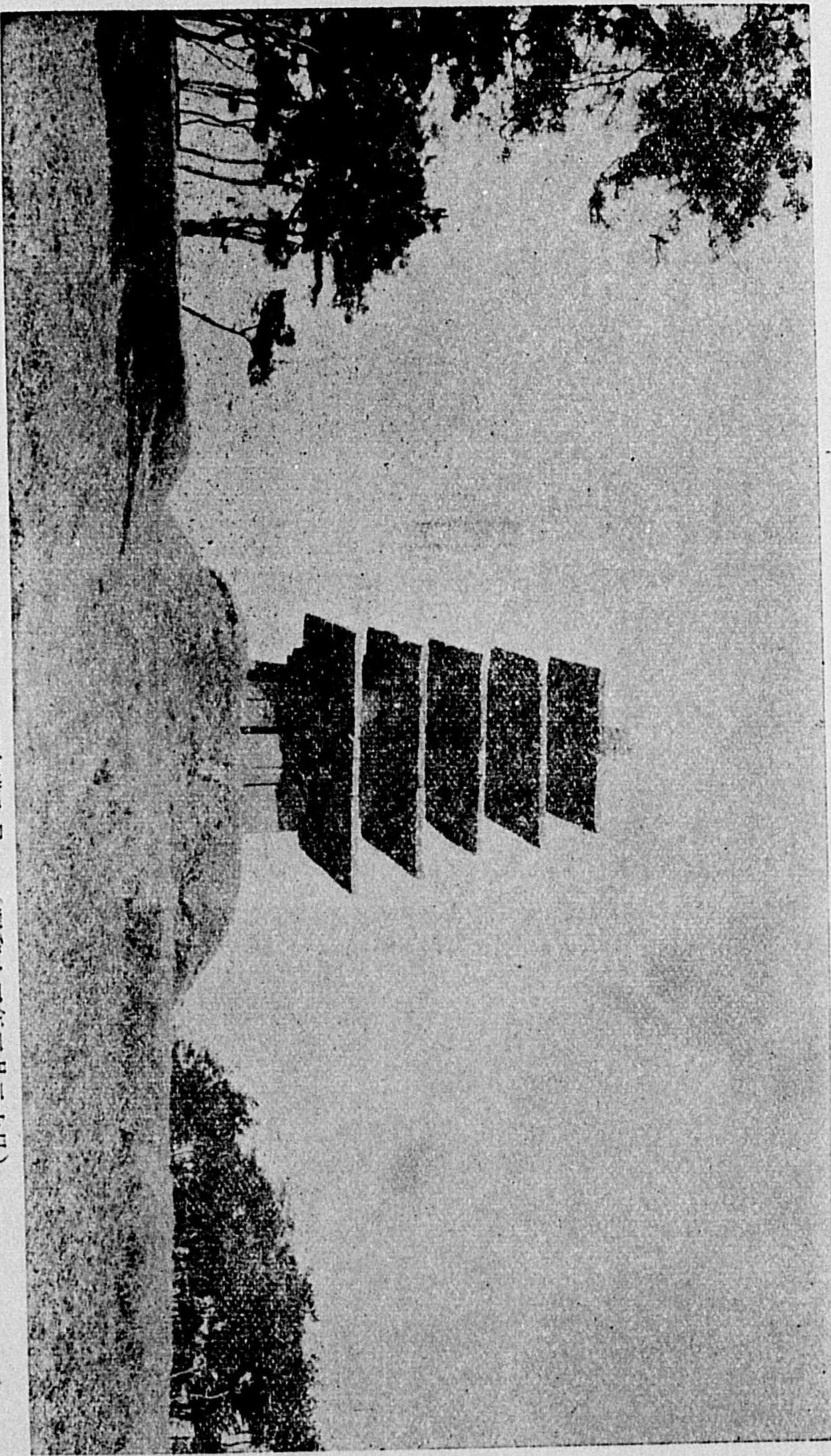
(物指は曲尺の一尺・昭和十三年三月二十日)

上圖中央の間出入口前に立てる人物、及下圖にある曲尺一尺の物指により、其大さの見當がつけられよう。塔は初重一邊外法27尺。出入口の幅は當初もつと廣かつたらしいが、後ろに方立の内側へ更に方立を入れたために、大變狭くなり、遂に現在の様になつて了つたと見られる。其他殆んど此面には後の變改の個所はない。柱には少しく膨みがある様である。時代は百濟。

右。廢彌勒寺石塔初重内部 其一(下部) 其二(上部) 共二(上部)
 左。同
 前頁圖に見えてゐる出入口を入つた所から、中心柱の一部にかけてとつた竪貫である。木造でないから、四天柱をたててうまく持ちさうもないためか、四方に石をつみ、十字形(其中央に中心柱がある)の通路ができてゐる。當初から内部には何もなかつたが、或は臺座の様なものでもおいて、四方に四佛のようなものでも安置したかも知れないが、その邊は今日では明らかでない。十字形通路の側壁の上部、天井に接続する所は、二段に持送りをつみだして、上部の荷重を樂に支へ得る様に考案してある。巧みに考へたものである。

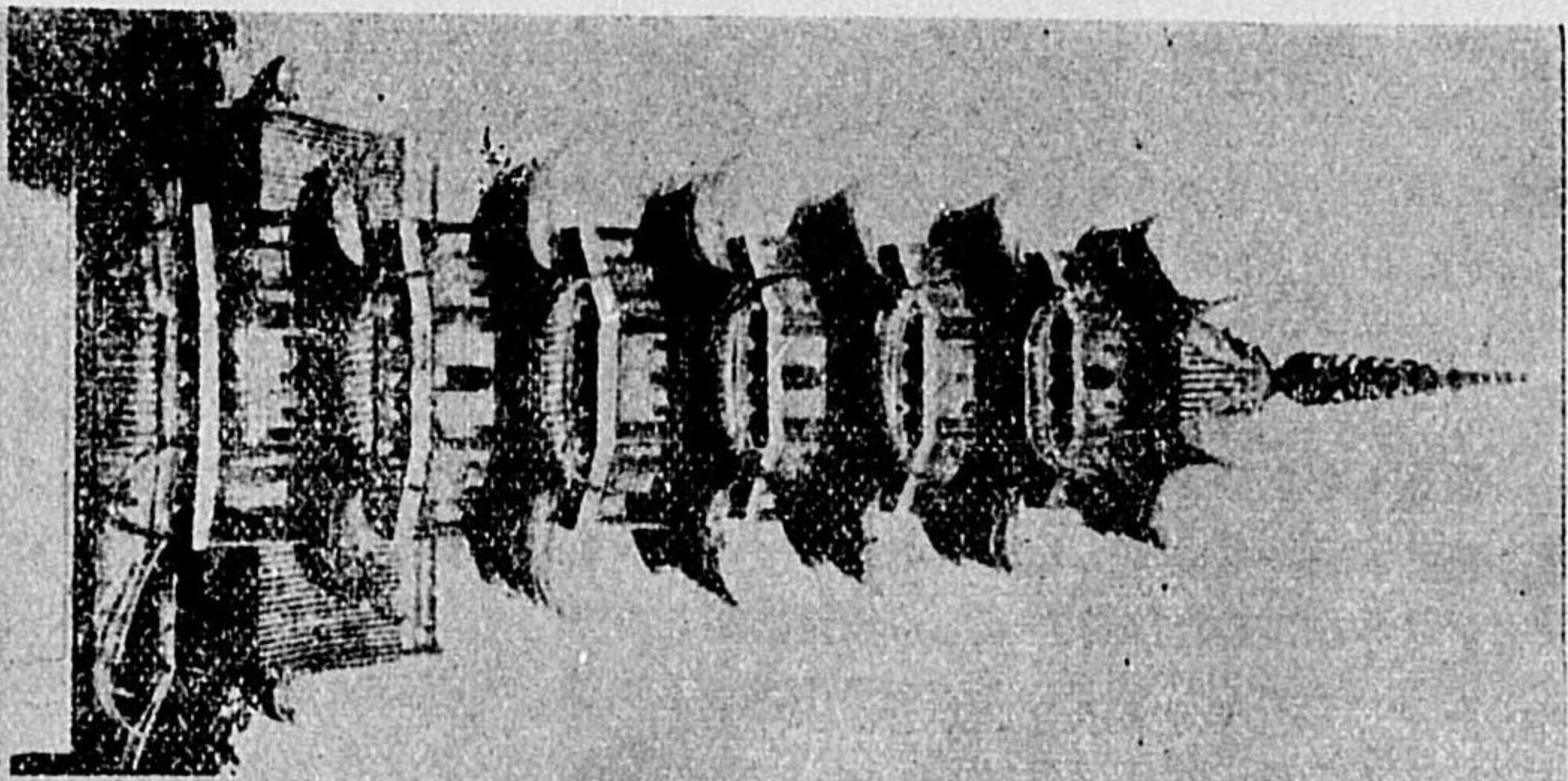


(右圖物指は曲尺の一尺)
 (昭和十三年三月二十日)

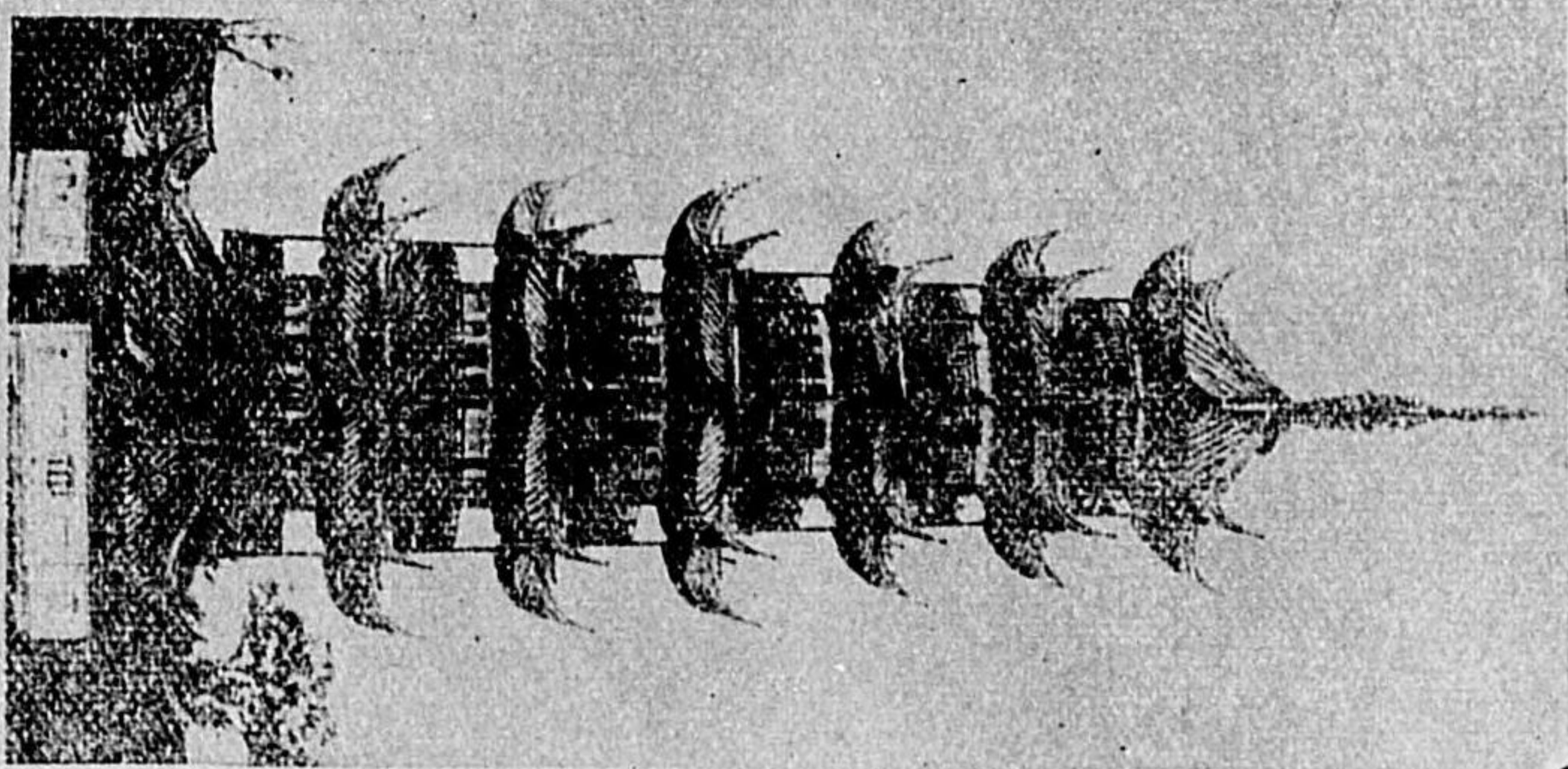


朝鮮忠清南道益山郡王宮面王宮里 王宮塔全景 (昭和十三年三月二十日)

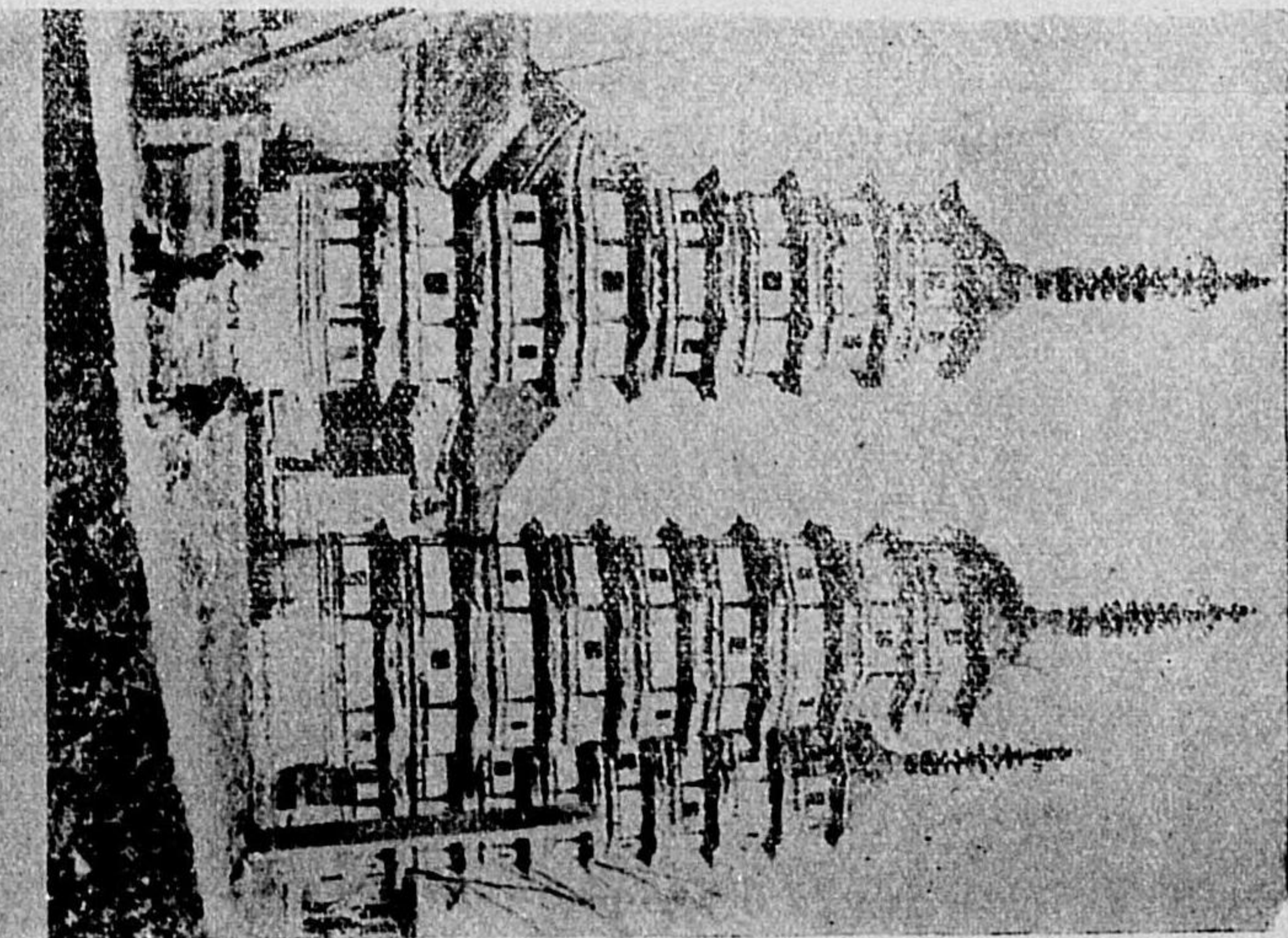
此塔も亦何もない廣場に淋しく建つてゐる。總ての建物が全部壊れて了ひ、此石塔一基が残つたのであらう。此は五重塔で、下方の基壇は全部亡くなり、相輪も大破し且つ當初のものでない様だが、洵に幸な事には塔身だけが略完全に残つてゐる。やはり木造塔を石で模したものと思はれる。此塔は新羅時代初期説が有力らしいが、又百濟時代説もある。私は後説の方が適當だと思つてゐる。



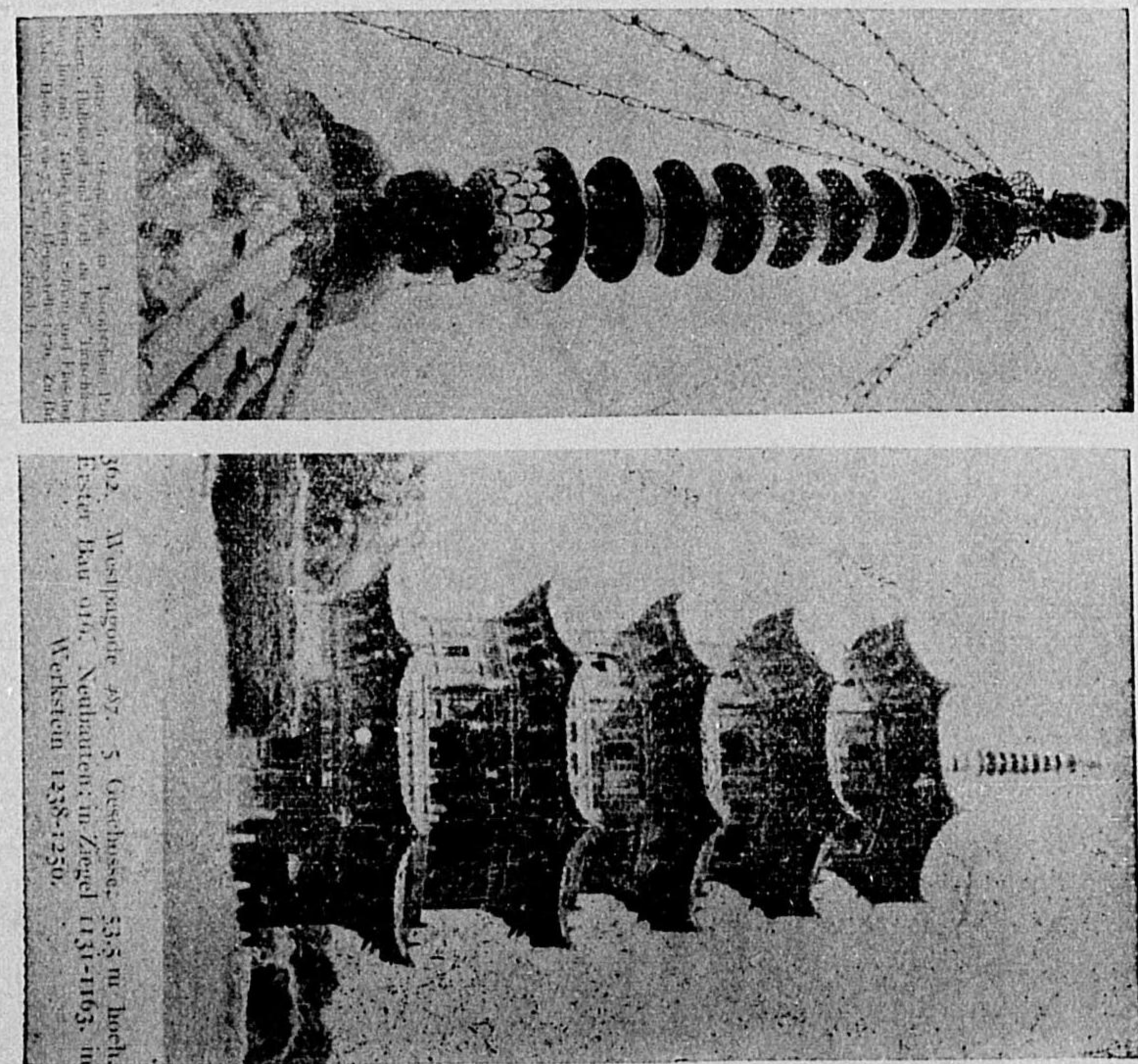
187. Sibirien, Provinz Amur, Provinz Harbin, in der Gegend von Kiamtse, 7. Geschosse, 45 m hoch. (Fotograf. Schöner, 1911, S. 100.)



188. Amur, Provinz Harbin, in der Gegend von Kiamtse, 7. Geschosse, 45 m hoch. (Fotograf. Schöner, 1911, S. 100.)



189. Das Pagoden bei Kiamtse, Provinz Harbin, am Amur. Mittele mit 9. seitliche mit 8. Geschossen. Höhe 44 m und 27 m. (Fotograf. Schöner, 1911, S. 100.)



前頁と此頁とに支那の塔婆六基と、相輪一本とを示しておいたが、これは Boeghmann 著 "Die Baukunst und Religiöse Kultur der Chinesen" のうち、Band III, Parabel の挿圖から複寫したものである。先年私が奉天の附近と、北京の近郊とで寫した塔は、最上部の相輪が思はしくないので複製をやめておいたのである。これ等の塔は、五・七・八・九重等で、上に相輪を上ぐ。此場合言ふ迄もなく相輪が塔の本體で、石架又は磚架の何重かの構架は相輪臺とみるべきである。相輪の全形は、さうでないものもあるが、中位の輪が最上で、下に伏鉢上に天蓋がある。我國現存のものでは、寧生寺五重塔がさうなつてゐるだけで、他の例では何れも天蓋の代りに水煙にしてゐる。高野山根本大塔も瓊祇塔も其相輪に天蓋があるのは、生寺の眞似だから問題にならぬ。支那に現存する層塔は多く八角多層だから、ネバルの宗教建築に少しも似てゐない。古代にあつた事は容易に想像もできるし、又彫刻等に殘つてゐるから確かである。だから支那が元といへるかも知れぬが、或はもう一つその元があつたかも知れない。この事はもう少し研究してみたいといけな。

朝鮮の寺の塔と、ネバル國の印度教祠との異同を述べたところで、何のたしにもなるまいが、外觀がよく似てゐるから、親類同志であらうが、赤の他人であらうが、似てゐるから比べた迄のことである。然るに支那の塔とまては、多くは八角多層で磚又は石を以て築き、最上部に相輪及び天蓋を頂けると、これまた挿圖の如くである。先年私の撮つたのは滿洲國や北京附近のばかりで、先づ北京の雙塔寺の塔の相輪が役に立ちさうであるが、不幸にしてその邊が少し朦朧なので、どうも思はしくないので、ここには夫れ等をやめにして、外國書物の挿圖を複寫して掲げておいた。とにかくこの様な型式だから、現在のものからいふと、間がぬけてゐることになる。先づ雲崗の石佛寺、北支事變で一般に知れ渡つた山西省大同府に近き石佛寺の石窟内に、薄肉に刻された三重塔——これがまた頗る面白いもので、書くと長くなるから略しておくが——なら、型式手法からみても木造で昔のものらしいから、これなら連鎖となし得るのぢやないか(114)。

"The shrines of Himalayas, chiefly of wood, offer interesting developments. But the most peculiar forms appear in the temples of Nepal. Variations of the Nagara type and of the Bengal types occur side by side with local models. Of the most characteristic are the storied wooden temples with sloping roofs, very near in design to the Chinese pagodas. The sloping

* FOERSCHMANN: "DIE BAUKUNST UND RELIGIÖSE KULTUR DER CHINESEN" BAND III.

roofs are supported at each stage by curved brackets, the four ends being furnished with "up-turned noses" which are a peculiar feature of the Far Eastern temple architecture." (INDIAN ARCH. pp. 24, 25)

とらふことが書物にかいてあるが、右の文中「ビリー・ニア・イン・デザイン・ツー・ザ・チャイニーム・パルマズ」——意匠に於いては支那の塔婆に酷似せり——といふのはどうかと思ふ。この書物を讀んで支那へ行ってみて、そこいら中にある塔がどれかこれも「クワート・チェン・イン・デザイン」であつたら、どつが似てゐるのかと驚かされるであらう。此書は O. C. Gangoly の著で甲谷他に於いて發行されたものなのに、既記の通りバータム所在のクリシュナ祠を、カトマンズ所在の如く書いてゐるので、少しばかり杜撰の様であるから、これも多分實物を見ないで書いたのであらう。序に少し横文字で迷惑だが、此塔に關する文献を左に並べておく。

"One of the most elegant of the sloping roofed class is the Bhawâni temple at Bhâtgaon, ... (第 234 頁參照). It was built in 1703 (元祿十六年) by Bhûpatîndra Malla to enshrine a secret Tantric goddess, which to this day is not allowed to be seen. It is five stories in height, but stands particularly well on a pyramid of five steps, which gives it a greater dignity than many of its congeners. The stair up these five stages is guarded by pairs of colossal figures; below are two athletes, above them two elephants, then two lions, two tigers, and at the top the

goddesses or demons—Singhini and Vyâghrini. The temple itself is mostly of wood. (H. of I. & E. A. Vol. I, p. 280)

".....while the most dignified and monumental is the Nyatpola Deval or "Temple of Five Stories." It is interesting to note that the latter (五重塔を指す) has its almost exact counterpart in the Pagoda of Horinje (法隆寺?) in Japan, constructed at least ten centuries earlier than the Bhatgaon building, but both edifices are obviously based on the same architectonic principles originally derived from China.

.....Sylvan Levi is inclined to believe that the pagoda design, ordinarily accepted as of Chinese invention, was a form common in India previous to the Mohammedan invasion, and concludes this theory with the pregnant sentence, "Le Nepal, ici encore, est l'image authentique d'une Inde disparue". On the other hand, Fergusson's researches indicate that the pagoda, whether of Burma, Nepal, or Siam, had undoubtedly a common origin, and that it is probably in China this must be looked for,.....

As developed by the Newar builders, the design of the pagoda is comparatively simple, and needs but little description. The plan is ordinarily square, and the ground floor is generally the only one put to any practical use, the upper floors which may be several in number, being

often "blind stories". The lower room, built on a stone plinth, is the chamber of the temple, or sanctuary of the diety, and contains little but the idol and a few religious accessories. Outside, however, this room is sometimes lavishly decorated by the artistic contributions of individuals desirous of showing their devotion in a practical manner. Above this careless profusion of ornament arises the red-tiled roof of the sanctuary chamber, and surmounting this are progressive stories, which go up to make the pagoda form. The roof of the highest of these is plated with copper-gilt, and whole is crowned with by a gilt finial and umbrella". ("PICTURESQUE NEPAL" pp. 146—150).

".....and the "five-roofed temple" are perhaps the most conspicuous.which, by the way, is dedicated to an unknown god.....is a fine example of the pagoda work of Nepal, and famous far beyond it as the best examples in the country of a terraced plinth of which the stairway is attended on either side by symbolic figures. In this case, there being four terraces and the lowest figures being set upon the ground, there are five pairs. These lowest figures are of two famous heroes who are locally believed to be Jaya Malla and Phatta, two champions of a Bhatta Raja, each of whom is said to have had the strength of ten men. Above them are two elephants which were estimated to be ten times as strong as Jaya Malla and Phatta. The

third pair are lions reputedly ten times as strong as the elephants. The fourth are sardals or dragons, ten times as strong as the lions. The last and mightiest pair of all are the two "Tiger" and "Lion" goddesses Baghini and Singhini, whose strength is supernatural". (NEPAL" Vol. I, pp. 218, 219).

以上は書物發行の順序に、其中の記事の抜き書きを並べておいたのであるが、第一と第三の文献は建築の事は餘りかかないで、壇基上の彫刻に就いて記してある。大していいものでも何でもないが、面白から少し大きく寫さうとして、いたづら小僧の一隊にじゃまをされたので、まるで子供の寫眞になつたが、それでも横向きだけ、折角の顔が隠れてしまつたけれどもともかくもそれを第87頁下圖に掲げておいたが、あれはジャヤ・マラ又はファッタの何れかで、各十人力があるさうである。其上の象からは三三〇に大きくだしておいたが、いちばん上の舟後光を背負つてゐるのは、普通の人の10倍の10倍の10倍の、もう一つ10倍位のところで「ヌーバーナチュラル」といふのであらう。その下で獅子の上にあるのは獅身鳥頭の如く、迦樓羅(Garuda)の地方的變種らしく思へる。果してさうなら其常食は龍で、迦樓羅は龍を捕へて食とすると物の本に書いてある。だから龍等の到底及ぶところではない。だから「ドラゴン」ではあるまい。「サーダルズ・オア・ドラゴンズ」とあるそのサーダルといふのは、私のもつてゐる辭書にないから、何だか判然しない。

五重塔其物に就いては第二の「ピクチャーレスク・ネバル」——美しきネバル國——の記事である程

度迄は想像ができる。即ち曩に引用した文の一部を抄譯してみると

平面は多くは方形で、初重内部だけが實用に供され、上重は二・三・五重等あつても、それは何れも單に裝飾としてあるだけである。初重内陣には本尊を安置し、外陣は信者の寄進によって美しく裝飾がしてある場合もある。其上は遞減せる構架があり、最上重の屋根は鍍金の銅板を以て葺き、露盤上には同じく鍍金した天蓋がある。

といふ様なことになる。これは我國の層塔によく似てゐるので、初重のみは佛像が安置され、第二重以上は單に裝飾で(傳ふるところによると、弘前市最勝院五重塔は望樓として用ひたといふ。この様)、最上部には相輪(室寺五重塔は水烟の代に天蓋が其位)をあげてある。

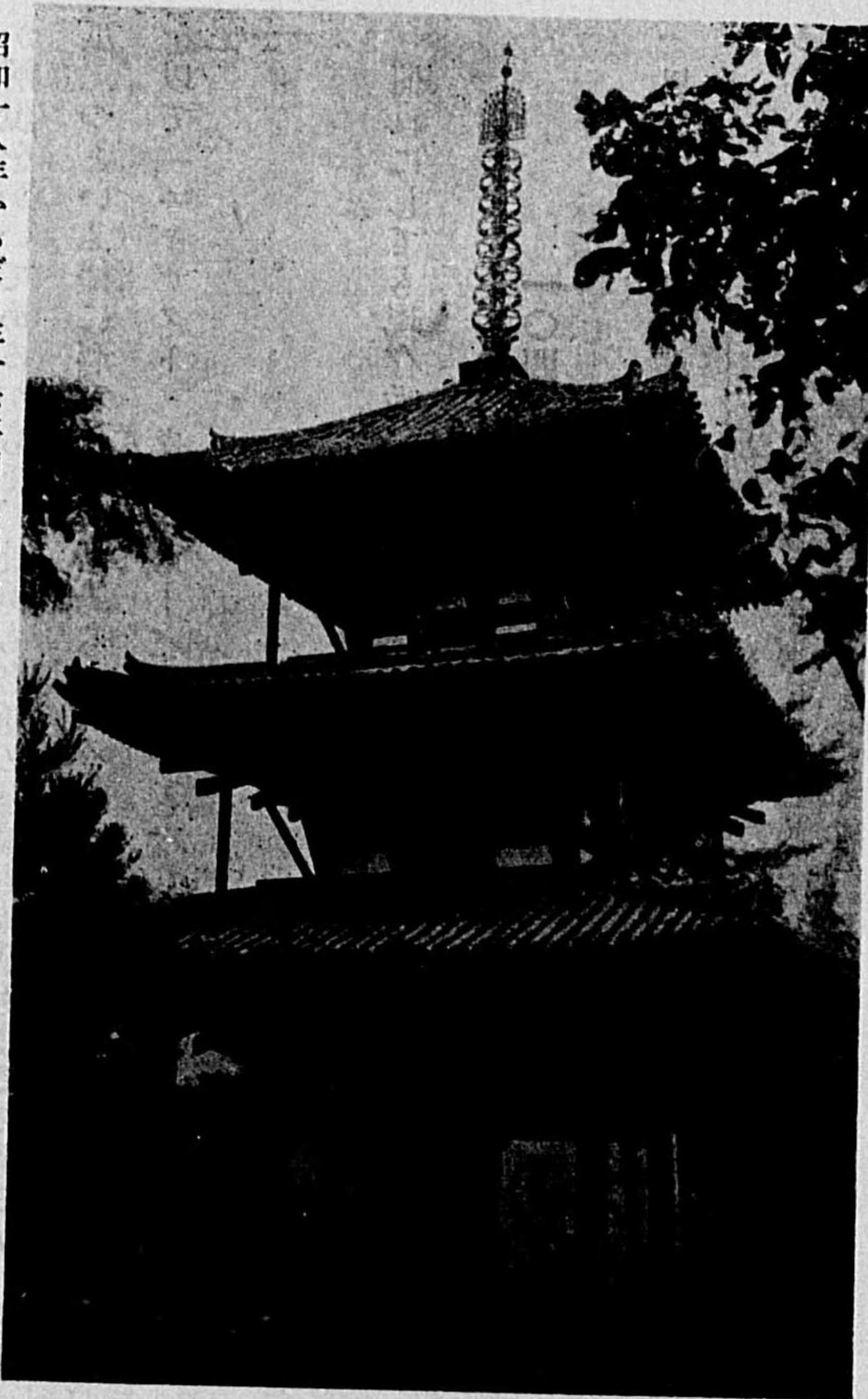
私はシルバン・レビの書物をみた事がないから、どういふ體裁のものか知らないが、曩に引いた「美しきネバル國」には

普通支那に於いて考按されたと考へられてゐる此種塔婆型建築は、回教徒の侵入以前、印度にはいくらでもあつたと考へられてゐる様で、其主張を「印度本國で既に絶滅した建築の一様式の眞の形を、ネバル國に於いて尙ほ今見る事ができる」といつてゐる。

とあるが、果して昔印度に塔婆型の建築が澤山あつたかどうか、私は少しも研究してゐないから、賛否何れとも決し難い。ところがファガツソンはシャム・ネバル・ビルマ等に於ける塔婆は、多分其元は支那であらうといつてゐる。と同書に書いてあるが、これにも私は賛成しかねる。更に又

此五重塔式建築は日本の「ホーリンジェ」——法隆寺であらう。Horinjeとかいてあるがユーが顛倒してエヌになり、アイとイーと誤つて「ホーリンジェ」となつたのであらう——と瓜二つといつていい位に似てゐる。尤も後者は前者に比べると約千年前に建立されたのだが、共に其原型は支那にあるといふべきである。

當麻寺西塔(修理前)



(明治四十年六月二十二日)

昭和十八年からだと三十七年前の寫眞である。尾極が三手先目の料枘をはね上る力がなくなり、其ままにしておけないので、第二・第三重は全部方杖を入れて補強し、各重共隅尾極の下へ支柱を入れて、漸くもたしてある有様である。手許にあるのはこれ一枚だけだが、修理前の古塔には此様にしたのが、決して珍らしくなかつた記憶がある。これでデビ・パワーニ詞とを比べると、西洋人の馴れない眼では實によく似てゐて、これこそ眞のエキザクト・カウンターパートだといつて喜んだであらう。

といつてゐる。これは何

も法隆寺の五重塔に限つた事はなく、我國の層塔ならみなこの様で、いかも書いた通り、大和に於ける修理前の木造層塔のように、軒の垂下を防ぐため土臺の上から尾極の下あたりへ突つかひ棒をした形の方が餘程よく似てゐる。外國人が認識不足で「エキザクト・カウンターパート」といふなら、寧ろこれ等の方をいふべきである。然るに何故に夫程にもない法隆

寺五重塔を、誤植までして引合にだしたかといふに、此書の著者(バーシー)は日本の塔婆建築をよく知らず、且つ其當時の参考書がフアガッソンの【印度及東洋建築史】であつたと推定するのである。理由は其第二卷の圖版LXに法隆寺の金堂・塔婆・中門を北方よりみた寫眞がのせてあり、同LXIIに塔婆の寫眞をだし、第498頁に伊東博士の【法隆寺建築論】圖版から複寫したと認められる断面圖をのせ、且其頁に何か解説をかいてあるからで、比例も各重の遞減も構造もまるで異なるが、まあ大體似てゐるところから、瓜二つといふ様に形容したのであらう。今日ならバーシー・ブラウンは確かに法住寺捌相殿(第235頁)を以て「エキザクト・カウンターパート」となしたであらう。

何れにしても現存唯一の五重塔なるニアトボラ・デバールは至寶である。

一〇四、ダットトラヤ祠

異形三重塔で外觀は可なり面白い建物である。二三六は真正面からみた所で、前に立てる有翼人の乗

* Section of the Hōryūji Pagoda. From *Balker*. とあるが、バルツェルといふ人の原書は未だ見た事がないけれども、たしかに【工科大学紀要】の附圖からとつたものを、更にフアガッソンがとつたものであらう。

つてゐる柱が二三五では眞直に建つてゐる様なのに、大分に曲つてゐるのは、震災の結果危く助かったからであるが、これは震災前から少し左へ曲つてゐたもので、其證據が書物の挿圖にある。建物の形は眞正面からでは前後重なり合つて了ひ、明瞭でないから、二三七に少し横からの寫眞を出しておいた。これは左前からの寫眞で、正面の方に飛び出してゐる部分が、どうなつてゐるかこれで判らう。つまり三重塔に二重塔がついた形。ダットトラヤ(Dattatraya)とは何のことか。祀つてある神の名か地名か、夫れとも建立者の名か、何か知らぬが、若しこれも亦本尊が隣伽なら、それに最も適してゐる様な建物と思ふが、併しこれは或は少し考へ過ぎかも知れない。

正面に反し背面は額る簡單で、何だか少し寸の延びた三重塔。首がいやに長く胴體が短かく恰好がとれてゐない(二三三)。先づ形容をすれば輻首の三重塔といった形で、どうも感心ができかねる。だから後ろへ廻つて見ぬ方がよろしいが、特に背面をみせたのは、あちこちから觀察せねば、何事によらず真相は判らぬものだといふ事を實地に示したので、悪口をいふ材料に用ふるだけの考へではなかつたのである。

序ながら初重の軒口を大きく見せておいた。軒に反りがなく、隅だけが急に反轉してゐるのは、隅の所へ特に大型特殊の瓦を用ひた結果である。隅降棟は單に平瓦を小羽立においただけで、鬼瓦をここには用ひてないから、可なり物足りないが、隅木下端から風鐸を下げてある所が氣に入つた(二三三)。そこを二四〇にはっきりと見せておいた。鼻隠板の隅に透彫の飾金具を打つてあるの等は、我國近代寺院建

築の軒隅なる茅負の交會點に金具を打つたのと同工同曲で面白い。ただこの下から化粧隅木の鼻が出てゐないのが淋しい。軒の隅は又二四一の如くをさめる場合もある。これだと降棟の末端の顔面をつけた瓦——鬼瓦に相當する様なもの——があり、又軒隅に當るところには、顔と兩手即ち上半身を有する彫刻をつけた瓦を用ひ、更に軒口には齒飾 (Dentil) の様なものがあり、メタトーム (Metatome) が狭いの等は、ギリシヤやローマの古典建築をつくりで、最下に並んでゐる裝飾は蓮瓣の展開と見られ、これも亦卵舌飾 (Egg and Tongue) から暗示を得た様で、純ネバル建築とは思へぬが、それにしても相當に面白いものである(二四)。

(昭和十三年二月十二日校了、昭和十八年七月四日増補)

バグマチ川橋の一部

(昭和十一年三月十八日)



カトマンツからバートガオンへ行く途中、バグマチ川に架せる橋の裝飾親柱の一。單に裝飾らしいが、全體としては不思議に埃及國開路市にある親柱の裝飾に似てゐる。此圓蓋の形をみると、多分に回教建築の影響がある様である。

印度佛塔巡禮記

(第十八回)

一〇五、カトマンツからシサガリへ

三月二十一日 土、好晴

前夜就寝してから、明朝車は都合出来ぬと断ってきたので、それでは車を雇へと命じてゐたが、其雇った車は朝の五・四五にきた。これで出かける事がたしかにできるので、天気は好晴だし、安心する事ができた。

番人頭が金を貰ひに来たので拂ったが、請求書(?)に記してある金額は既記の通り、往路と同じであるのに、何故かRs. 24を請求し、 $\frac{2}{3}$ 安かった(領收證は第106)。最後の朝食をすまして愈よ六・二五に出發といふ事になり、三階から下りて車にのり、荷物萬端積み込んでR・H・から走り出したのが六・三五。往路は夜で寒く暗く、頭から毛布を冠り眼だけ出してゐたため、まるで判らなかつたが、此朝見たのでは、道は登ったり降ったり、相當に礫のある凹凸道であつた。これでは到底馬車では行きかねる。馬がつづかないだらう。

先夜はタンコット村から首都迄8哩との事であつたが、此朝きいたのでは6哩ださうで、車で35分かつた。車代はRs. 10。何と驚くべき高價ではないか。而もそれは印度のルーピーだから、當時の相場で13圓となる。いくら片道にしたところで、1哩につき2圓16錢強。往路の様に其筋の車なら心附Rs. 3で總て解決するのだから、費用は $\frac{1}{2}$ 弱ですむ。バハツールが最後迄、ことによつたら其筋の車がくるかも



上。タンコット村外れ(昭和十一年三月二十一日)

下。同 景(昭和十一年三月二十一日)

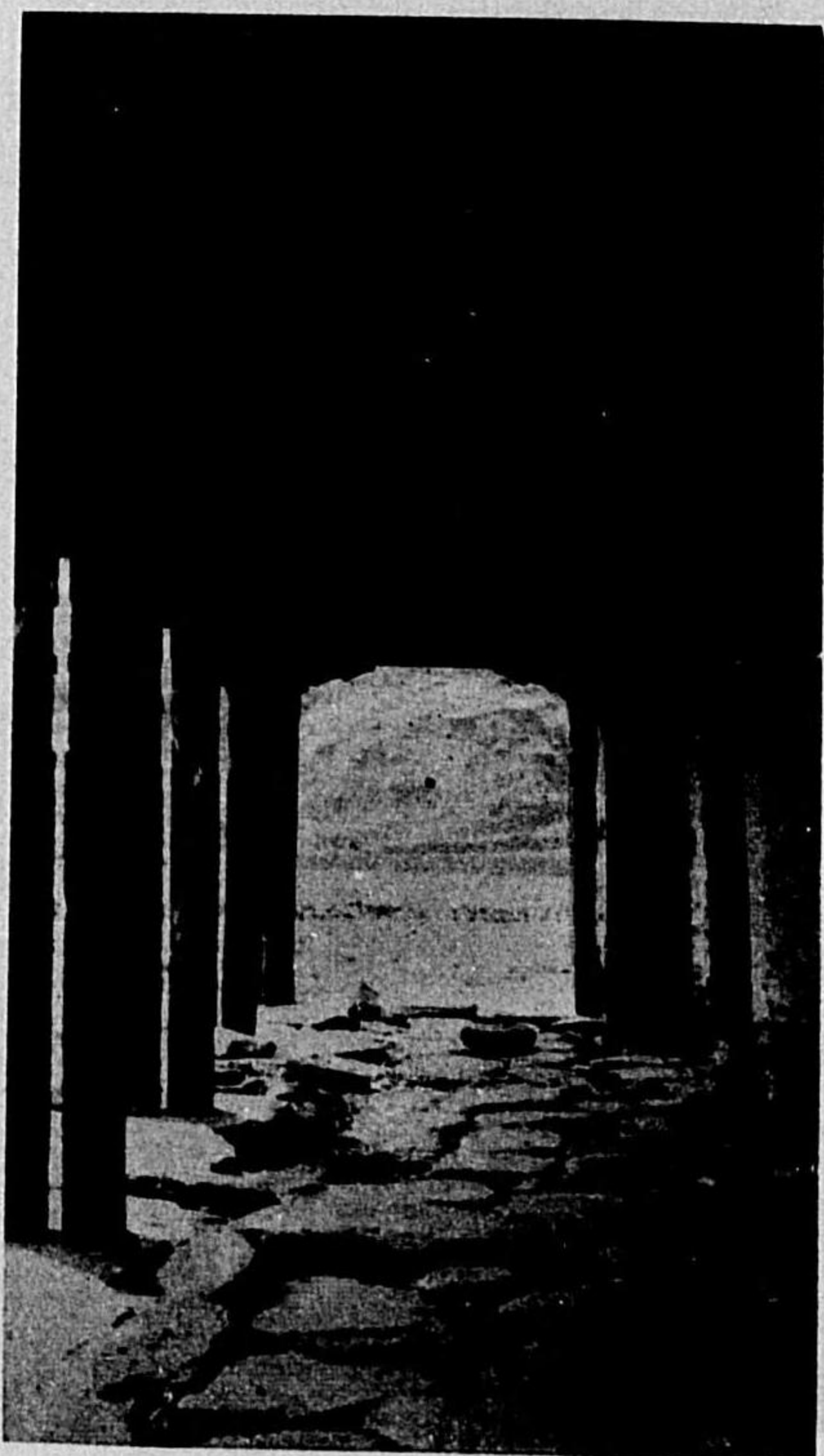
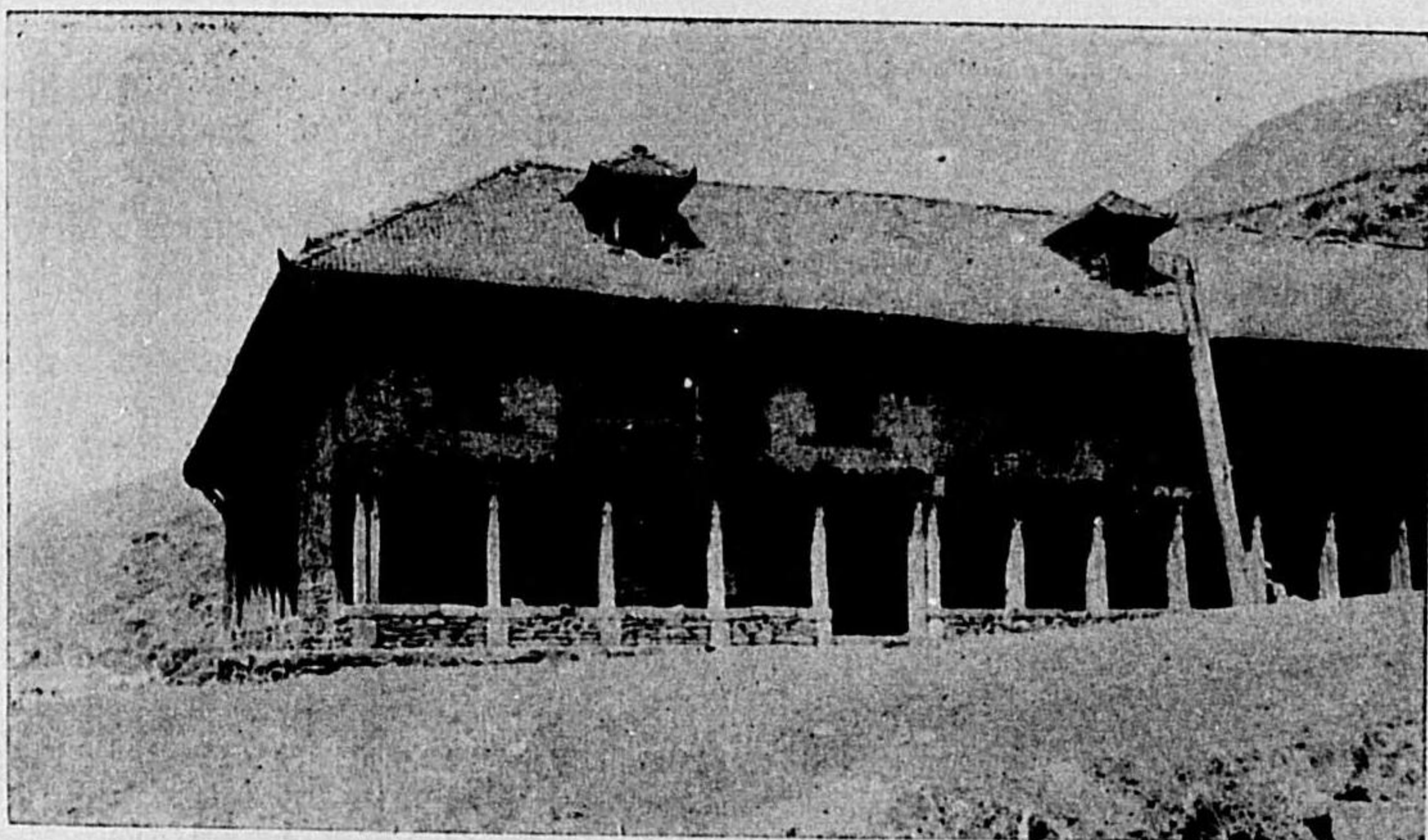
ネバル國退去の朝、雇った車でR・H.を出て、タンコット村外れまで飛ばした。一週間前の薄暮、ここで大分まごついた舊跡である。此朝はよく晴れてゐたので、後髪を引かれながらも、思ひ切って出ることができた。上圖左から二人目、襟巻をしてゐるのはR・H.の番人頭。クーリーが今車から荷物を下ろさうとしてゐるところ。此番人頭は先夜私が助手と間違へたので、最後まで監視の役目をしたのである。

下圖はタンコット村の中部の景



タノコット村路傍の小塔婆 (昭和十一年三月二十一日)

三月十四日夕、此村を通ったとき路傍で見つけ、野趣捨て難いが、時既に晚く如何ともし難かったので、歸りに是非寫眞にとらうと思つてゐて、漸く目的を達することができた。四佛の小籠が塔身の横についてゐるの等は、私の最も気に入つたところである。全體白塗で非常に美しい。



此頁上。 マルク川に沿へるボウー 正面の一部 (昭和十一年三月二十三日)

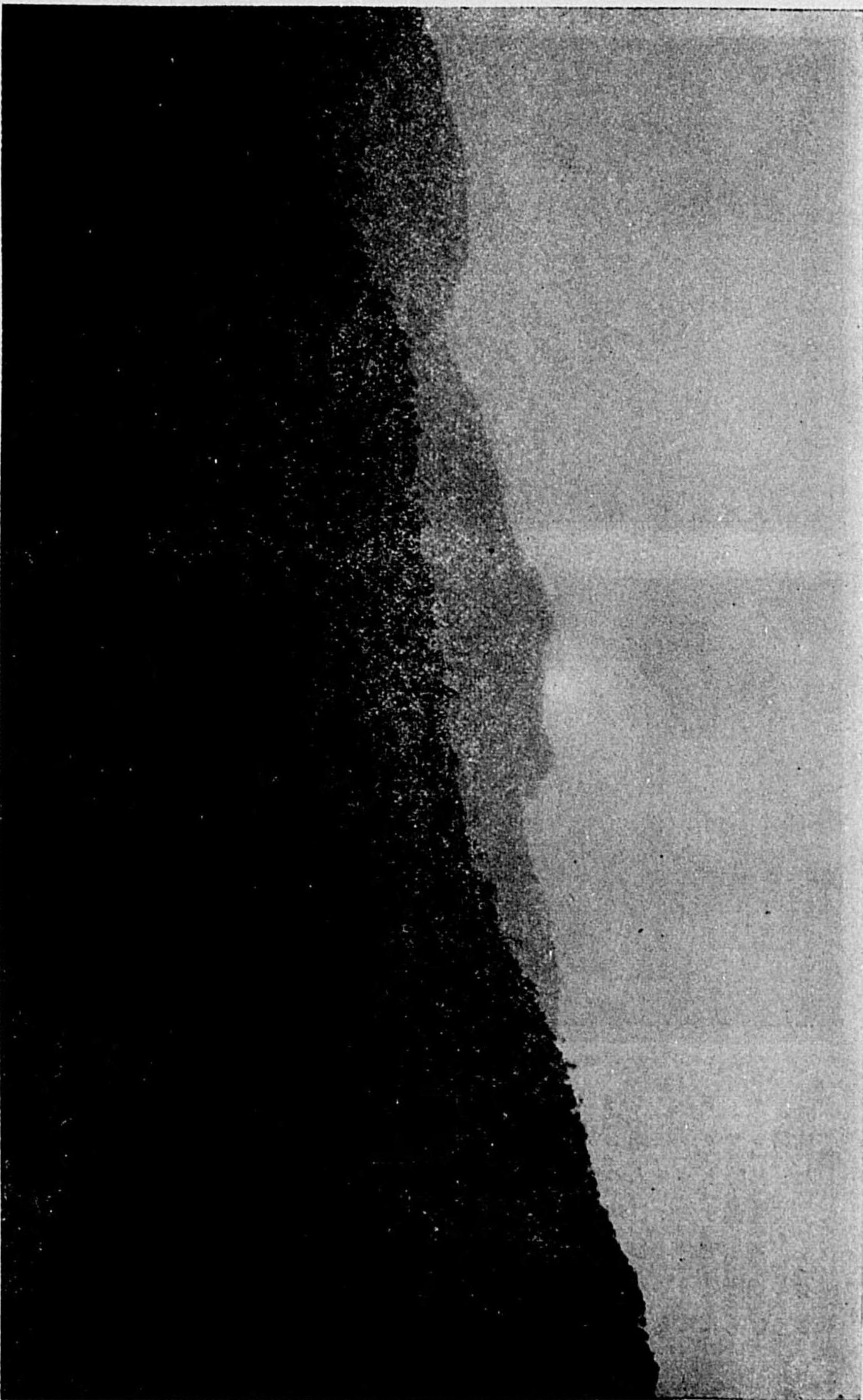
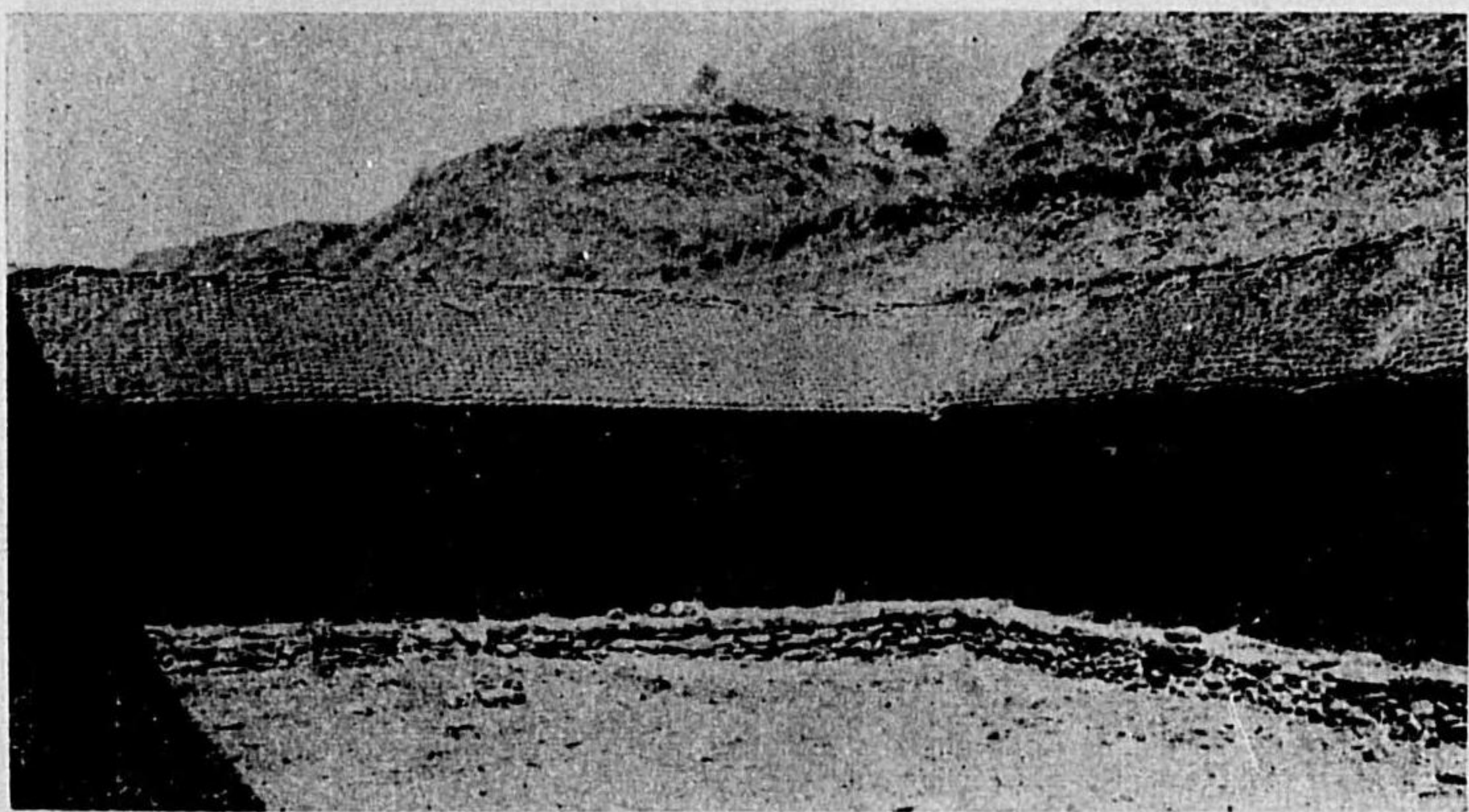
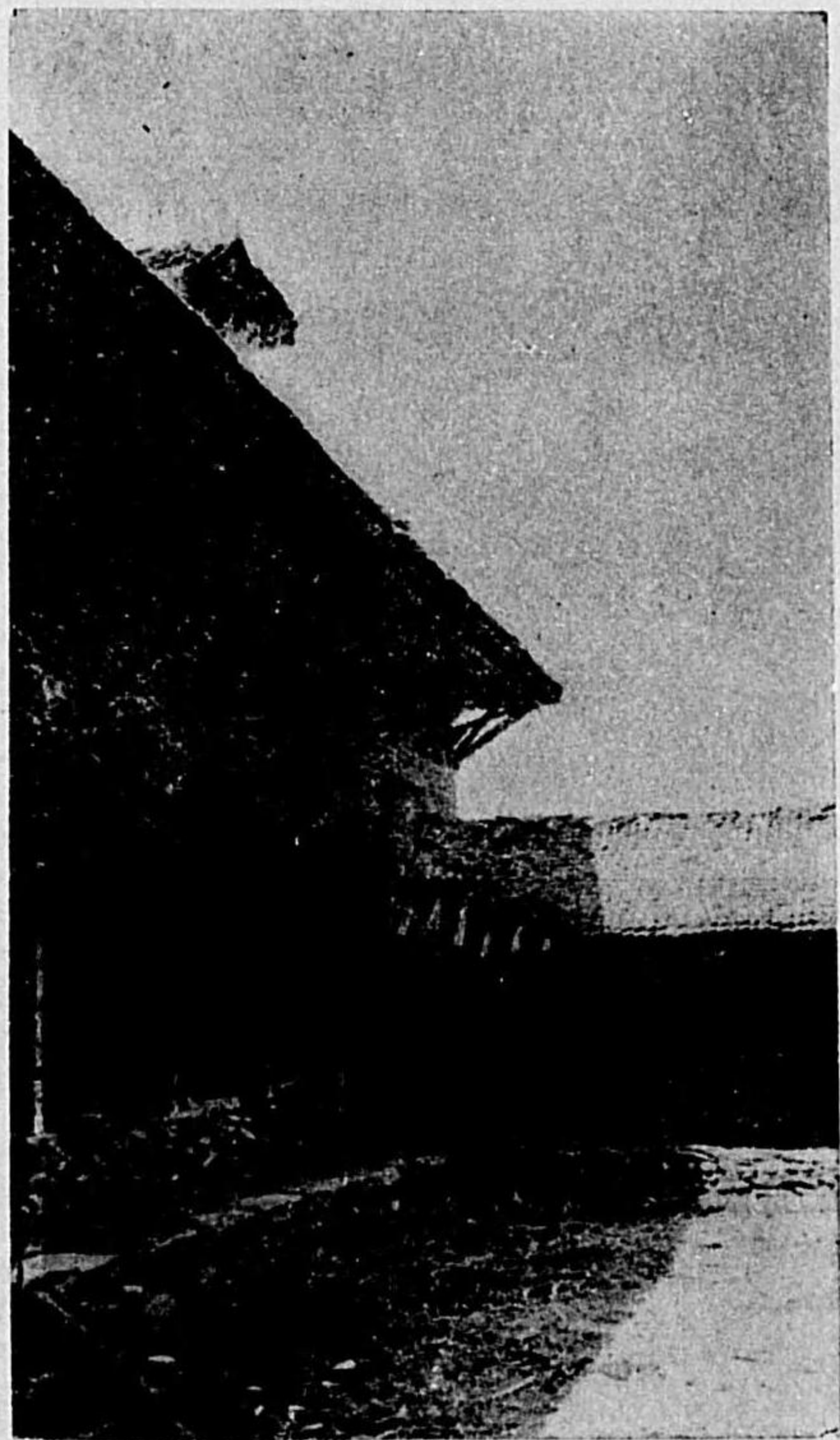
此頁下。 同 濡 椽 (昭和十一年三月二十三日)

次頁上。 同 中庭の一 (昭和十一年三月二十三日)

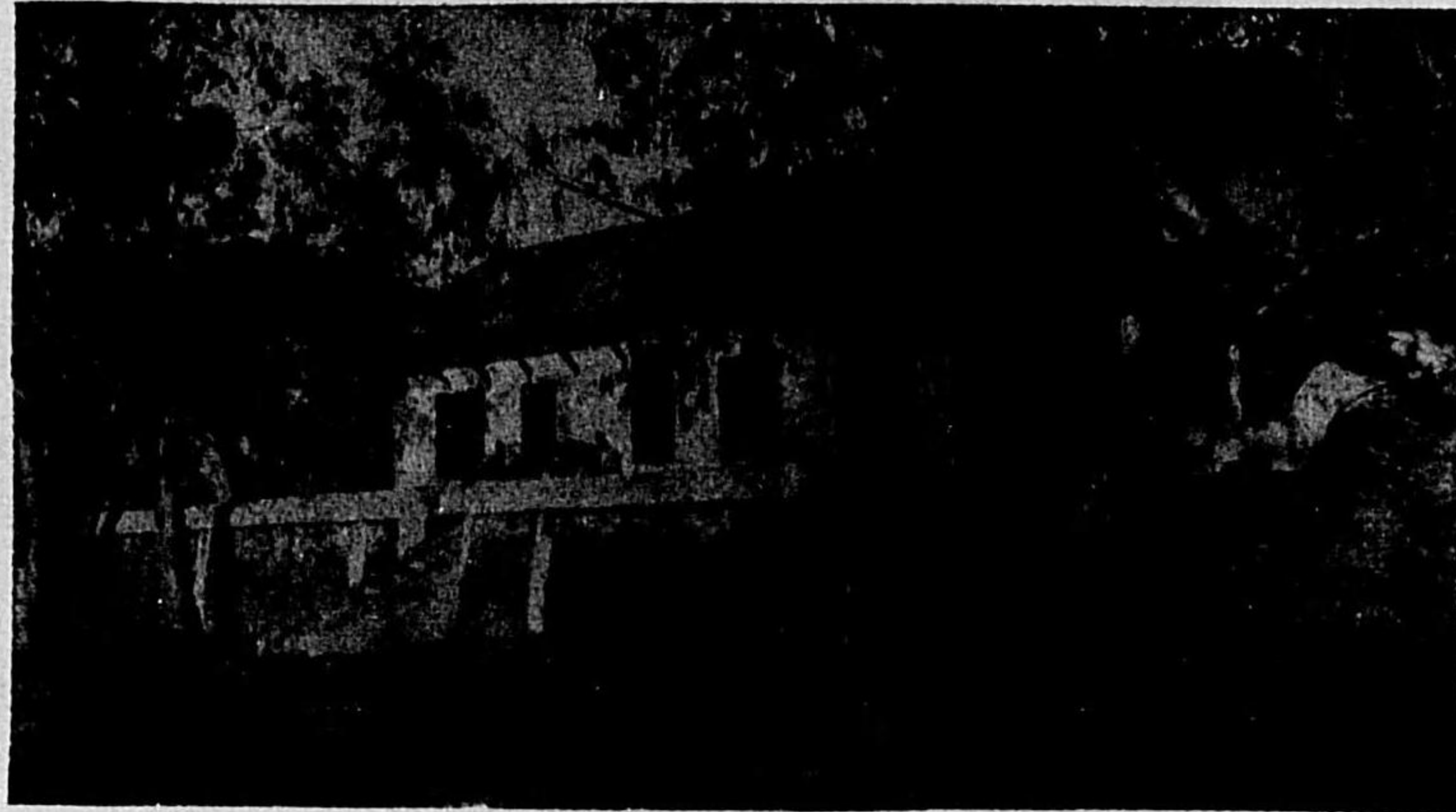
次頁下。 同 二 (昭和十一年三月二十三日)

マルク川に沿へる公立宿舎、つまり印度のダク・パンガローに相當するもので、規模壯大、川畔の風致と美觀とを大に増してゐる。その全景は既に第35頁に掲げたが、上圖はあの片袖の一部で、下圖は其濡椽の内から、川を隔てて(次頁へ)

(前頁より) 對岸の小山をみたところ。木の方柱を前後に二本たてて上を支へてゐるのは上が楣だから拱の感はないが、伊太利ロマネスク建築歩廊の柱を思はせるものである。内部中庭は方形で廣く、四方共厩か又は從者の休息所にあててあるらしい。私が入つてみたときは、此頁上圖の左方、廊下の様に見える所は、壁面に窓も出入口もなく、其一區劃に馬をつないであつた。どうもこの中庭の吹放しの室は、從者と厩とにあててあるらしく思はれた。



ツサガリ (Sagarin) の夕陽 (昭和十一年三月二十一日)
三月二十一日の早朝カトマンズの R. H. を出発、夕刻ツサガリ着、D. B. に入つたが、餘りに空が美しく暗れておたので、不圖後庭へ出てみたところ、丁度太陽が西山に没せんとしておるところであつたから、急いで鈴鹿橋を持ち出し、日に向つて試みたが、幸に遠山の頂界線に下が接してゐる太陽が驚つた。嘗て山に没する日は、Mt Abu の Sunset Point でも見たが、ネパール國のはこれが最初の最後であつた。



上。 シサガリのD.B. 其一 (昭和十一年三月二十二日)

下。 同 其二 (昭和十一年三月二十二日)

三月十三日の夜は、ここのD.B.は満員とあって、ビムフェチへ一泊したが、歸りには客がないので唯一人泊った。尤もここには貴賓館の様なものもあるようであるが、それはマハラジャの如き雲上人が泊るらしく、入口が閉めてあり、平民たる老書生はここに圖示した単層入母屋造亜鉛板葺の家屋に宿泊するの光榮を得た。一屋一人。一方の端にファイヤ・ブレスがあり、寢臺をおき食堂・居室を兼ね、次に便所及浴室があり、設備萬端申し分がない。九日目で行水をして、小枝のよく燃えてゐる暖爐で温まり、寢臺へ横になった時の心地は、例ふるにものがなかった。



上。 ダンヂイ (Dandi, Dandy) (昭和十一年三月十四日)

下。 シサガリの關所(右端) (昭和十一年三月二十二日)

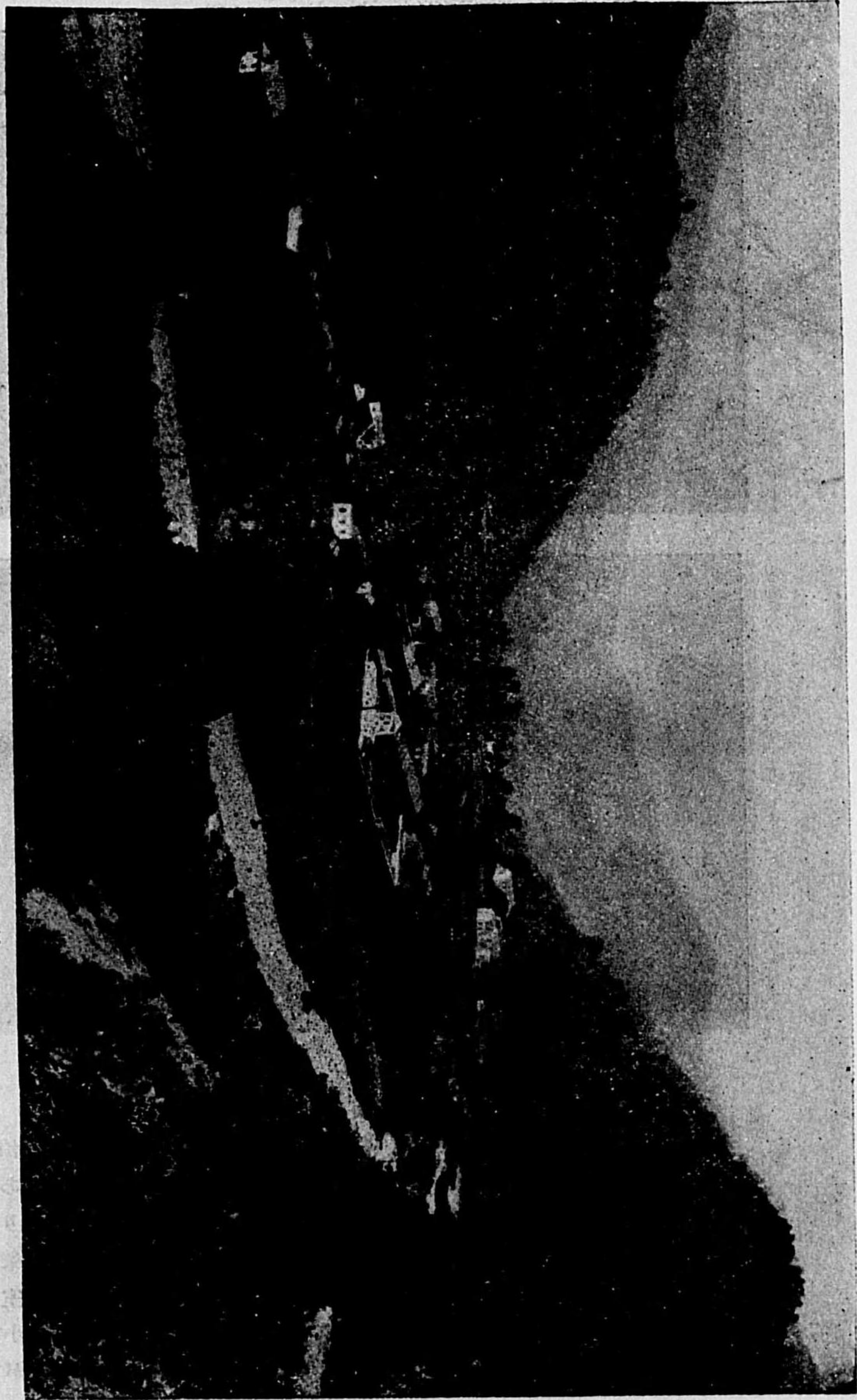
往路シサガリに達した時、此所に税關があつたので、検査を受くるため暫く休憩した。其時ネバル人の従者をのせて記念に寫したのが上圖である。登り途には斯様にして前進するが、降りになると擔夫が廻れ右をして肩をかへ、後ろ向きに下りて行く。脚も充分のびないし、下が板なので尻が痛く、18哩のるのは樂ではない。下圖右の切妻造りの小さい家はシサガリ峠の關所で、最後の旅券檢閲があり、其まま取り上げられてしまった所である。列へここまで何とかして辿りついても、正式の手續がしてないとこの突破は不可能である。



上。ピムフェヂ村の夕暮（昭和十一年三月十三日）

下。同 朝（昭和十三年三月二十二日）

三月十三日夕、ピムフェヂ村の宿舎に着いて、指定の室に落つき、先づ窓から外をみた時、第一に眼前に展開した景が上圖。右の方の切妻の倉庫の様なのと、其左の三窓ある平家根の建物は、前頁の圖によく見えてゐる。折柄暮色蒼然として、萬感交も胸中を往來したので、二階の窓をあけてとった寫眞がこれである。下圖はアメリカン行ローリーへ私の荷物をつむところ。上が最初、下が最後の此村の寫眞である。



ピムフェヂ村俯瞰（昭和十一年三月二十二日）

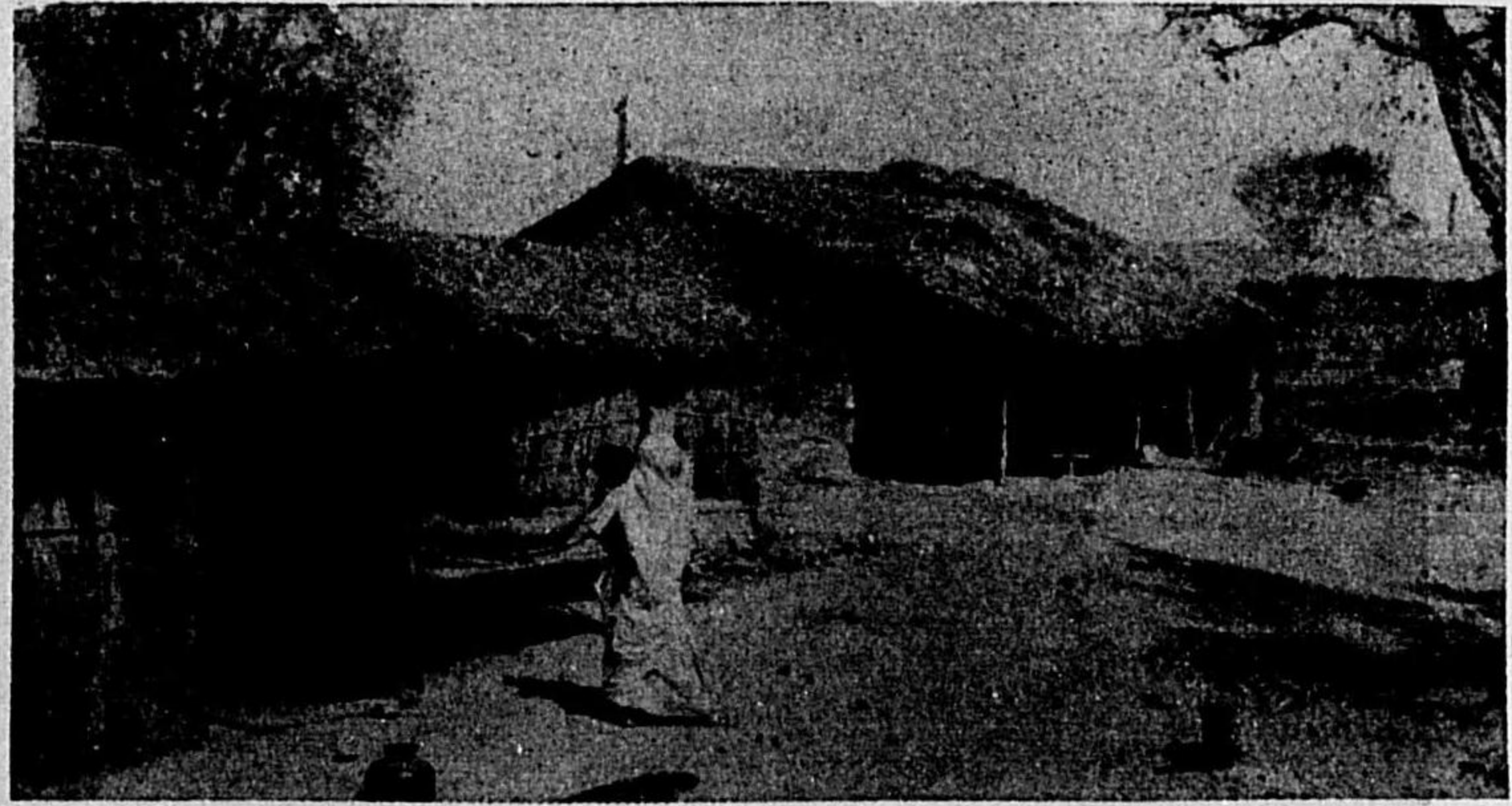
シサガリの D. B. に泊り、久し振りで行水をしてストローにあたって、いい気持ちでゆっくりねて、翌日起きたら復た好晴。愈よピムフェヂ村に近くなつてから、此村を俯瞰した時は、つまりぬ寒村かも知れぬが私には絶景に見えた。左下から右の中程に向つて白い帯の様なのはララチ川 (Rapti)。右の中央と下端藁屋の右に白いのは街道の一部、圖の中央切妻造二階建の長い家は十三日の夜一泊した家で、最も近い二階の妻に一窓のあるのが記念の室である。昭和十一年夏雑誌【ケルン】へネバル紀行をかいたが、其口繪の遠景の山と此と少し異つてゐるのは、あれは少し修正を認めてゐるので、この方が控附けた其ままだから正しいのである。

知れぬといって、外をみてゐたのは、確かに忠義らしく見えた。若し来たらどうするときに、Rs. 2 やって雇ひ車を破約するといつてゐたのは成る程と領かれる。Rs. 2 ただやっても、結局 Rs. 5 もうかるからである。

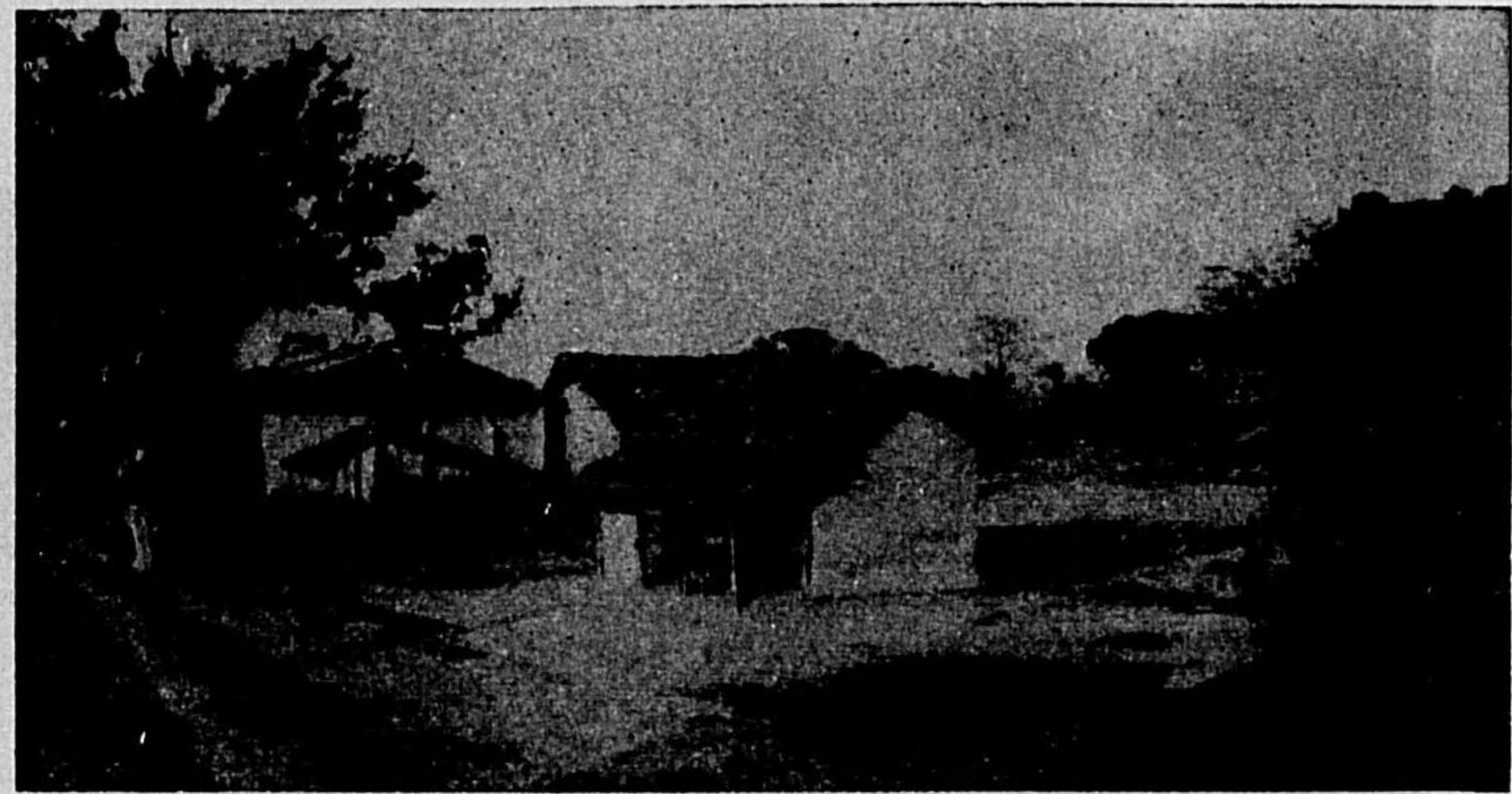
タンコット村の、首都の方から行けば入口、先夜寒くてダンヂイの中へとぐるを巻いて車を待つてゐた直ぐ上の廣場の一隅に車がとまった。ダンヂイも荷運夫も皆待つてゐた。R・H・の番人頭は監視のためであらうが、ここ迄一緒に車へのおつてきた。第257頁の上圖は車がタンコット村について、荷物を下ろしてゐるところである。

村はチャンドラギリ峠から一瀉千里で、轉越の逆落し式に降り降つて、さてこれからが愈よ「バレー」・オブ・カトマンヅ」(「ネバル」)にかからうとする所にあるので、勿論家屋は決して美しくはないが、如何にも田舎らしい氣持のする村である。此村の中頃の西側の、人家のきれ目のところに一基の小佛塔がある。伏鉢の圓形は一種拋物線の如き形をなし、大體に於いて埃及あたりの田舎に見られる謂はゆる「シェクス・トゥム」(Shelk's Tomb)の圓屋根の如く、四方に四佛の小龕があり、全體として粗なる二重壇上に建ち、如何にも鄙びたもので、雅味があつて捨て難い趣をもつてゐた。スフヤムブナートやポドナート大塔は、洵に立派で結構だが、これはこれで又何とも言へない好いところである(第25頁)。

荷物を按配してクーリーにかつがせ、私はこの佛塔の寫眞をとらうと思つて歩いて出發したのが七・二〇。漸く目的を達したのでダンヂイへのり、山にかかった。往路の擔夫は驚く程休憩しなかつたが、



上。ネバル輕鐵沿線の家 (昭和十一年三月十三日)



下。同 (昭和十一年三月二十二日)

往路は午前であつたので線路の西側にあつた東向きの家、歸路は午後故其反對側の家を、何れも汽車の窓から寫してみたのである。何れも泥壁で藁葺きの、可なり憐れな小屋であること、ラクサウルの農家と殆んど同様である。汽車中よりの觀察では構造もよく似てゐる様である。さうして既記の通り、時には原始的色彩を以て壁面に原始的の畫を描いてあること、ラクサウル村に於けるが如くである。

歸りのは實によく休んだ。其休んだ時間を合計してみたら、正に2時間と45分。シサガリのD・B・に着いたのが正に四・一〇であったから、差引勘定をすると正味6時間5分で18哩きたわけである。だから1時間約3哩||約44町。

シサガリのD・B・は高見の廣い場所を占めてゐる。往路に税關のあつた所、即ち私が荷物の検査を受けたカスタム・ストーンは、此高地の直ぐ下である。あの時検査がすんで斜面を登り、右手の切妻造の小さな關所で、役人に旅券を取上げられて了つたが、その關所は即ち第262頁下圖の右方に見えてゐる。つまりその關所のところから斜面を下れば元來た道に出るが、右にとって平地を進むと、D・B・の前に出るのである。歸りには此關所の役人は私の方を一瞥しただけで、何も言はないので無事通過して了つた。ここの一郭には建物は幾棟もあり、その中には二階建の、外觀は殺風景だが貴賓館らしいのもあつた。こんなのは何年に一回といふ位の割合で、マハ・ラジャの旅館になるのであらうが、私の借りたといふよりは、寧ろ貸してくれたのは平屋建の三室を有するもので、大室一と小室二とあり、其大室は長方形で一方に窓二つと出入口一つ、其出入口と反對側にもう一つ出入口があり、一方の突きあたり「ファイヤ・ブレース」があつて、燃料としての小枝がたばおいてあつた。其傍に寢臺一脚と机と椅子一脚づつ。家具といつたらこれだけ。ファイヤ・ブレースの反對側には、次室(所便)へ行くための屏があり、そこから更に次室(ペンガロー式の浴室)へ行ける様になつてゐた。つまり第263頁上下圖に示した様な建物で、一軒を一人で占領できたのであつた。而も全體の建物が高い基壇の上に建つてゐるのだから、其

心地のよさとあたりの静かさは、ホテルの上等な室よりどの位よかつたか、ほんたうに申し分はなかつた。實はもう一晚泊りたかつた位であつた。

餘りおとなし過ぎて少しばかり氣がきかないマンガに、さすがに命じかねて遠慮してゐたとき、どうした風の吹き廻しか紅茶をもつてきた。今度は久し振りだから、入浴は何とかできぬものかと思つてゐたら、尋ねにきたので、充分熱いのを澤山ほしい。ぬるくては駄目だと念を押したら、呑み込んで引退がつて行つた。此日はどういふものかいやに氣がきいてゐた。

未だ日があつてゐたから、何心なく裏庭へ出てみた。丁度日輪將に西山に没せんとする所であつたから、急いで寫眞機を持って出で、下側が山頂の線に接した時に早撮寫眞を試みたら、第261頁に掲げたような上等のができた。この年二月十五日の夕、マウント・アブウのラジブータナ・ホテルに着いて一休の後、直ちに徒歩でサンセット・ポイントへ日没を見に行った時、間髪を入れぬ程度で漸くの事で目的を達した事があつたのだから、これで二度目ではあるが、此時のはネバルの太陽がネバルの山に入るのをネバルでみる最後なので、試みた素人寫眞がうまくいったのだから頗る満足したのである。原板には太陽が圓形にはっきり出てゐたが、版にしたら少しぼけて了つた。併しこの位の出來榮えなら、飛鳥市奈良園の大川曇陽君あたりも、少しは感心してくれるだらう。

私が四季を通じての唯一の楽しみな入浴を、此夕は食後にゆつくり試みる事にした。バンガローの西端が浴室になつてゐたが、バス・タブのある所は一坪位で、周圍は三尺位の高さで煉瓦半枚位の壁にな

つてゐて、二段程の段が設けてあつた。此段によりて圍ひの壁の内に入ると、そこが流しになつてゐるのである。だから先づ流しに下りて、それからタブの湯をつかふのである。タブも思ったより随分大きく、註文通り湯は随分あつく澤山にあつたし、水も壺に一ぱいこぼれる程汲んであつた。三月十二日夕、ラクサウルのI・B・で、ひなた水位のに入つて危く風を引そこなつてからこの方、正味九日目で此夜ほどの位氣持がよくなる事か。例ひそれが行水に毛の生へた程度のものにせよ、場合が場合であり場所が場所なので、うれしくてたまらなかつた。

夜に入つては何となしに薄ら寒かつたので、湯ざめがするといけないから、入浴の前にファイヤ・ブレースで粗朶を燃しつけておく様マンガに命じてから風呂場へ行つた。大きなタブの内に上半身と下半身とを交互に曲げて、充分腹の底から温り、上つてみたら粗朶はバチバチと音をたてて勢よく燃えてゐたから、直ぐ其前に椅子を引張つて行つて全身を炙つた。山のパンガローに電燈の様な贅澤なもののある筈はなく、小さいケロシン・ランプがともつてゐるだけ、だから粗朶の燃える光りで、大きな室内は或は明るく或は暗く、洵にあたりの風物とよく調和してゐた。粗朶が燃え切つて、餘爐が眞紅になつて下にたまつた時分には、四肢の末端に到るまで同温になり、十二分の満足を以て寢臺にねころんだ。安心をしたので睡魔連りに襲ひ、如何ともし難いので二一・〇〇消燈をしたが、殆んど夫と同時に深い睡りに落ちたのは、翌朝眼をさまして初めて判つたのであつた。

D・B・に着する少し前に蟬の鳴き聲を聞いた。勿論姿は見なかつたが、其鳴き聲から蟬と推定して誤りは無いと思はれた。鳴き方はヒグラシの様でもっと簡單であり、何度も繰返して鳴いた。此が一種で尙他に別のをきいた。何しろ三月末だから、我國ならハルゼミも未だ出現しないが、雪山の麓ではもう早いのは出るものと見える。小型で透明な翅を有するものといふ見當をつけたがどうか知らん。ならば一疋でいいから捕へたかつたが、望みがないのであきらめて了つた。前回印度から歸りに船が馬來半島の沖を通過した時、ある夜(大正十三年二月十三日の夜)室内へ蟬が飛び込んだのを、漸くの事で捕へたらハゴロモゼミの雌であつたので、思はぬもうけものをしたが、ネバル國の蟬は惜しいことに標本を獲られなかつた。

一〇六、シサガリからラクサウルへ

三月二十二日 日、好晴

前夜は用心をしてよくあたたまつて寢たせいか、左程寒くなく、殊に首都のR・H・の様に、夜西藏人のために妨げられる事もなく、大變に落ついてよくねる事ができた。ほんたうに熟睡をして五・一〇に眼がさめた。前日に負けない様な好晴であつた。昨夜バハツールは此朝は五・〇〇に先發をしてビムフェチへ行き、ローリーの座席を豫約せねばならぬといつてゐたのに、昨夜おそくなつてから、座席を

得る事が確實になったので、早く出かけるのをやめたといったが、これも亦例により、眞偽の程は明らかでない。

八・〇〇出發の豫定が、手廻しよく用意ができたので七・一五に出かけられた。此朝寒暖計は58であったが、例へ僅かでも南進して平地に降るので、後であつくならうと思つて、外套は靴の中へしまつた。八・三〇ビムフェヂ着。ローリーはネバル時間の八・三〇(即ちスタンダード・タイムの正九・〇〇)にでるといふ。まあ三〇分もあれば充分だから、第一にゆきかけから目をつけてゐた路傍の小祠の寫眞をとつた。これは既にシサガリの小祠と並べて第25頁に圖示しておいた。まだ時があるので、家と家との間にある細い露路の様などころへ入つてみたら、そこは丁度二三の民家の裏庭とか中庭とかいふ様などころになつてゐたが、羊三正と象二正と鶏四羽とが、まるで眞つ黒いどぶどろの様な一種の臭氣のする方五間位の一區劃内に、おとなしく共同生活を營んでゐるのをみた。その中庭を共同にもつ家の人人も、同様に非衛生極まる状態にあつて、別に病氣にもかからず平氣でゐるのだから、呼吸器や胃腸さへ丈夫なら、眞に天下に恐ろしいものはないと、今更の様に感心した。食事の時家蠅が一疋飛んでゐるといつて、眼の色をかねて騒ぎたてる連中に、一目でいいから見せてやりたいと思つた。事程左様にお話にならない有様で、秋の朝鮮の田舎の寺も三舎を避けるといふ状態であつた。

そのうちに時間が來たのに車は出ない。とうとう一〇・〇〇にでた。歸りは下りのせいもあらうが、一一・四〇にアムレクガンジ驛前へ着した。此部落は殆んど藁屋根の家ばかりで、それが並んでゐると

ころは面白いから、寫眞をとらうと思つたが、何も急ぐことはないから、歸りにするつもりでやめておいたのに、さて歸りとなつたらば、建ち並んでゐた家は一軒もなく、所所に稀れに眞つ黒焦になつた柱がたつてゐただけで、一面の焼野原になつてゐた。僅か一週間のうちに火事で綺麗に焼き拂つて了つたものとみえる。やはり思ひたつた時におくものだ、明日ありと思つたのがいけなかつたのだ。今度全く私が悪いので、スバの責任ではない。

*

*

*

*

*

驛の二階が一二等待合室で、向つて右の端の扉をあけると階段があり、二階へ昇れる様になつてゐる。三等客が入られないやうに平素は錠がかけてある(第9頁下圖及び解説)。汽車は一五・三〇にでるのだから、あと三時間と五〇分待たねばならない。先づ扉の錠を外して貫つて二階に上つたら、そこには室の中央に机一脚・椅子三脚とあり、濡椽には例の「クワガタムシ」の異常に發達せる大腮から暗示を得て發明した様な、腕木が二本前方に長く突出した寝椅子が一脚おいてあつたのはいいが、永年(?)人跡絶えてゐたと見え、何れも塵埃堆く積つてゐたので、先づ以て清拭して茹玉子とスバの賜物なるビスケットの残りとして晝食の代用としておいた。

アムレクガンジの町の觀光をするのも最早懶く、此邊はあつさもかなり酷しいので、寝椅子の上につきり返り、うとうととしてゐたら急に汽笛の音に驚かされた。當時の時間表によると前一・四〇につ

く筈の汽車がついたので、私のきた時の様に此日は立往生をしなかったものと見える。不圖あたりをみたら、何といふ名か知らぬが、葉はいつもまだ出てゐないのに、一面にきんちゃ色の大型の花をつけた番木が澤山あり、其木に鳥が多数に集つてきて、花の内に嘴を入れて何かを食べてゐるものの如く、花から花に飛び移つてゐる有様は、恰も蜜を吸ふ目的で花に飛來する或る種の瓢翅目の昆虫(マルハナバチ)の如くであつた。恐らくこれも亦蜜をなめるため花に集つてきた蟲を食ふためであらうと思はれたので、仔細に観察すべく雙眼鏡でよくみたが、どうもはつきりしなかつた。けれどもこの想像は的中してゐると思つてゐる。生物のある所、必ずそこには生存競争があり、各個體は先づ第一に自己保存、第二に種族保存のために最善の努力をするので、弱肉強食は自然を支配してゐる鐵則であり、永久不變の眞理であるのである。

時間が餘つて仕方がないので、線路を越して向ふ側の野原へ行つたり、驛前の民家の視察をしたりした。終點の驛前は藁葺の矮屋落落として、春先きだのに满目荒涼、記念のため二三の寫眞をとつて又休憩をして發車の時刻をまつてゐた。此日の客車は二・三等列車で一等はなかつた。運賃は2/5/5で一等(4/11/0)の正に半額。客車の構造は知らぬが、裝飾設備に到つては一等も二等も何等の區別が認められなかつた。國有にしておくより會社にやられた方がもつと綺麗になるかも知れぬと考へたので、當時の日記にさうかいておいたが、さうしたつて專賣になるから尙いけないかも知れぬ。

客車はきたなくて運賃は高いが、夫でも一五・三〇に精確にでた。此日も往路と同じゴラクナート號

が引張つて行つたが、列車も下りなら土地も降りなので、停年退職の目前に迫れる唯一人の二等客を乗せた、同じく停年退職の目前に迫れるヨポヨポの汽罐車でも、得意になつて勢よく走りつづけた。歸りがけにも注意は怠らなかつたが、やはり國境は見附からなかつた。

ラクサウルに着いて、今度は直ぐ近くのR・H・へ行つた。温度は後六・三〇に80であつた。遂にネバル國から退去して了つた。十三日入國二十二日退去、正味十日であつた。不充分ながら相當に勉強もできたし、洵に有難いことであつた。

R・H・は泊り客がなく私一人で、室は廣く天井は高く、十二日夜一泊したI・B・とは月齧の差はあるが、大變に蚊があるので少なからず恐れをなした。ネバル國のテライは世界で一二を争ふマラリヤ流行地方ださうだから、テライ續きのラクサウル亦或は然らん。果して然らば螻蛄だが最後、飛んだ事にならぬとも限るまい。尤もアノフェレスにもいろいろ種類があるさうで、或る種はマラリヤを傳播し、或る種は單に傳播の可能性を有すと報告され、又他の種はマラリヤの傳播に不適の兩實驗があつたりする様だが、何れも共通した夜間吸血性を有するので、それがおそろしかつたのである。住民は不死身の免疫だから問題外だが、我等はさうはいかない。この邊にゐる奴ほどの様な種類が知らぬが、用心して失敗することはあるまい。何分このあたりは一面に巢窟らしく思はれるので、神経は極端に尖

り、とうとう一つも螫されずにすまず事ができた。

もう一つ困ったのは水が大變に不良な事で、まるで黄色を呈して居り、表面には一ぱいにきらが浮いてゐた。行水をしたら手拭がちや色に染った。翌朝の洗面には、なんぼなんでも此水で含嗽する氣にはなれなかつたので、持參の藥罐に水を汲み、同じく持參の混爐で夫れをよく沸騰させ、充分に殺菌した（つもの）ものを用ふる事にした。腸窒扶斯がおそろしかつたためである。印度で一度この病氣にかつたら、先づ極樂（？）往生疑ひなしである。讀者諸君笑ひ給ふ勿れ。諸君でもこの邊へ行つて見給へ、いのちが惜しくなつて岐度私にしたやうにせられるであらう。

*

*

*

*

*

ネバル國に於いての見聞、一かためにして次にかいておく。但し眞偽不明なものもある。

一、最高温66°。二、最低温57°。三、首都のR・H・は部屋代なし、三ヶ月間は滞在差支なし。四、入浴不能。五、郵便箱見當らず。六、新聞紙なし。七、市内の道路で舗装したものの見當らず。八、兵隊は跣足、靴をはいたのもあるが總て私物だといふ。九、何を尋ねたくもきく人なし。一〇、何所へ行くにも監視付なり。一一、夜は十時すぎに往來を歩く事は禁止だといふ（私は夜外出したことがないから知らない）。一二、馬車自動車は其筋からよこしてくれるので無賃。ただ心附だけをやればよろしい。

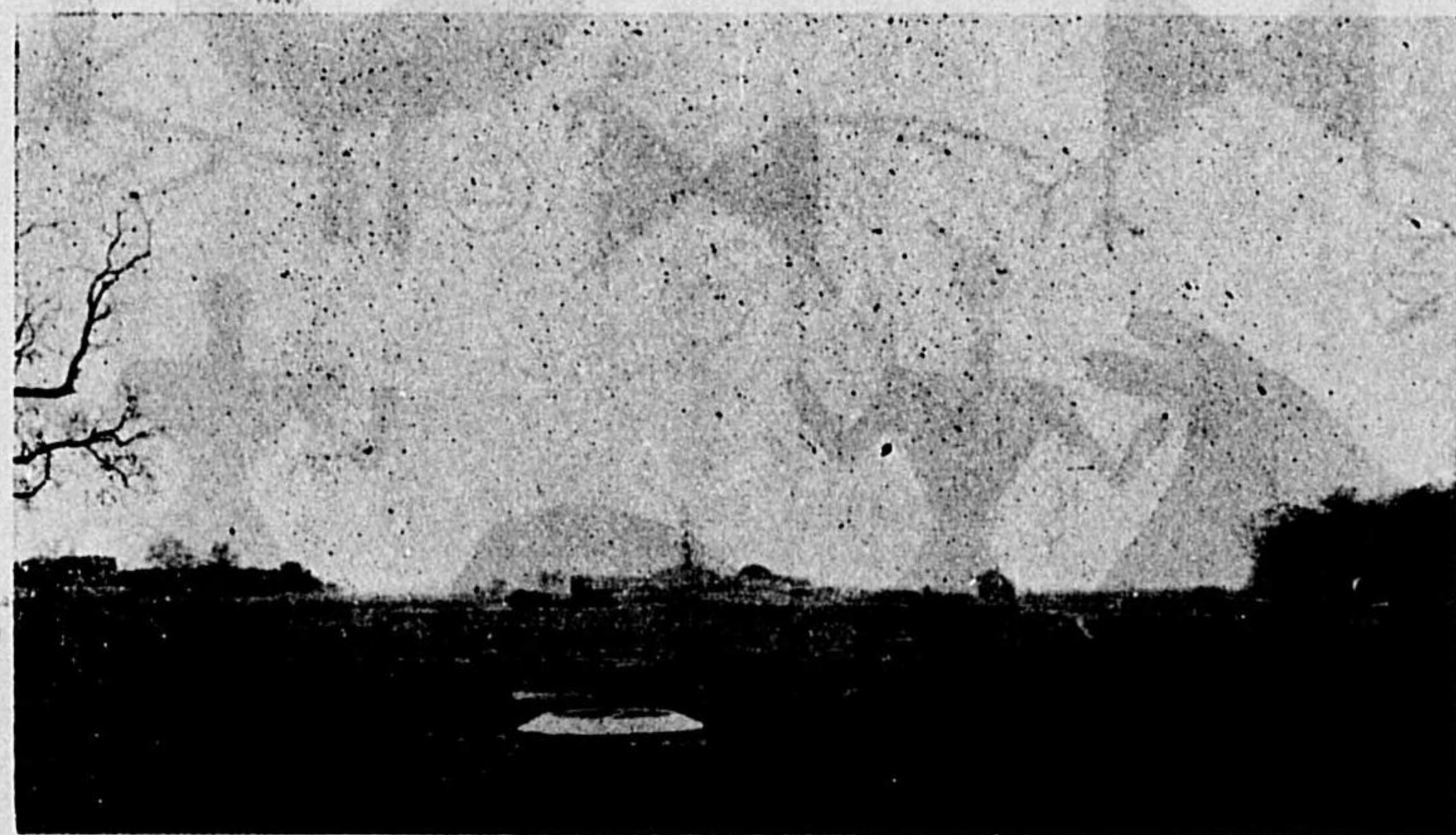
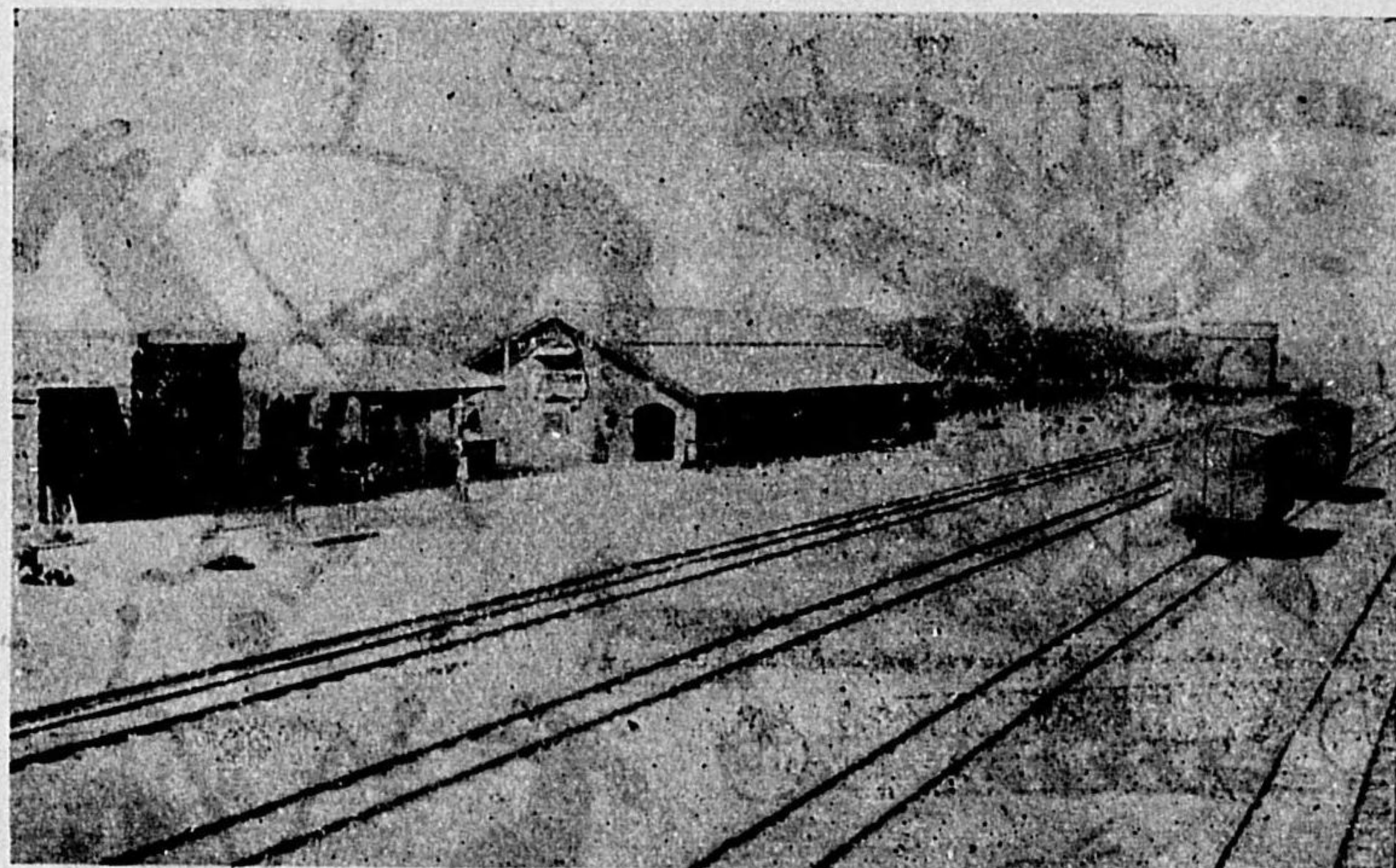
一〇七、ラクサウルのレスト・ハウス

ラクサウル驛に着いてR・H・に入つたのは一八・三〇。気温80°だったから劇變である。向つて左の階下の室で、清潔だったが蚊は随分ゐた。つい十日前にI・B・に泊つた夜は、蚊等は一つもゐなかつたのに、一時に羽化出現したものと見える。バハヅールは二三日前から胃が悪いとかで絶食してゐたらしく、此日は衰弱がありありと見えた。だからことによつたら解雇せねばなるまいかと考へてゐたら、餘程苦しかったと見え、R・H・に入つてから間もなく、ネバル行がすんだから、もう歸らしてくれと申し出た。するくて狡猾なだけ役にたつたのだから、せめてロンビニ閑行をすましてからと思つたけれども、さう行かないから、あとは又マンガ一人を相手にするつもりで解雇することにきめた。

三月二十三日の朝は五・二〇に起きた。六・三〇に78°だったから、カトマンヅよりざつと10°高い。水は餘程不良と見えて、ひるま見ると紅茶の色がおそろしく濃いものと、牛乳を入れると同時に暗紫色となり、如何にも毒毒しい。夫れでも飯むには飲んだが、あとで腹痛でも起しはせぬかと、した心配が全く杞憂に終つたのは幸であつた。

バハヅールを解雇するにしても、彼が汽車に乗らぬうち、といふよりも寧ろ彼の乗つた汽車がラクサウル驛をでぬうち、何か事があるといけなから、當時八・〇五發の汽車で歸るのを見送らせ（此汽車はでのかへセマリア・ガートからガングジを渡り、更にモカメ）、序に留置の手紙があるかも知れぬから、驛長にき

一・ガートから汽車で翌日の前六・〇六にホウラー驛へ着する



上。 B. & N. W. R. のラクサウル驛 (昭和十一年三月二十四日)

下。 ラクサウル所在ネバル國の R. H. より西方をみる (同上)

上圖は跨線橋から見た景。つまらないものではあるが、どうも私は二度と行けそうもないので、記念のためにとっておいたのである。將來此土地が重要性を帯び堂々たる大停車場でもできた時、必ずや思ひ出の種となるであらう。下圖は R. H. から暮方に西方をみたもの。原圖には太陽が直徑五厘位に明らかに寫つてゐるが、製版したら消えて了つた。近景の白い圓形のは井戸で、此井戸以外に飲料水も雑巾がけの水も得られない。而も無類の不良水の上に、此井戸ばたで立ちながら R. H. の使用人が水をあびるので、とばしるは全部井戸の中へ入るのでから申分はない。

いてくる様にマンガにいひつけてやったら、歸つてきて甲谷他總領事館からの至急の手紙が来てゐたといつて出した。尙ほバザールは確かに汽車へのつて行つたといふ報告をきいて安心をした。これでもう何も文句はない筈である。悪くとり過ぎてゐるかも知れないが、この位警戒しておかないと、少しばかり危いと思つたのである。

手紙を開封してみたら、ゴラクブール市 I・B・宿泊の承認證と、バルラムブール市 G・H・からの返事とを同封し、それに當時の野々村副領事の手紙が添えてあつた。それによると驛着の時刻が判れば知らせよ、誰か出迎へるといふことが G・H・からの返事にあつたのに對し、出来るだけ速に着の時刻を先方へ電報したらよからうといふ意味のことを、態態書き添えてくださったのであつた。私は心のうちで幾度か感謝したが、唯困つたのはゴラクブールの方は二泊と頼んでおいたのに、取扱者が間違へたと見え、三月二十四日の夜、即一夜だけ宿泊の承認證に認めてあつた。これには困つたが何とも仕方がなかつたので、まあ行つてから何とかするより他に、いい考へはでなかつた(但しこれは着後直に談判をして二泊する承認を得たので安心するこゝとがで)。とにかくこれで、先づクシナガラ行もルンビニ園行も祇園精舎の見學も、できるのが確實になつたので、ゆつくりする事ができた。

午前一回と午後二回、ラクサウル村と隣接せるパレワ村とを歩いてみた。ところが案外面白いものが見つかつた。つまり民家の壁面に描いた幼稚な原始的な繪に捨て難い味があつたのである。ひる前には B & N・W・R. のラクサウル驛へ行き、當時の時間表にはナルカチアガンジ行の汽車は、朝五・二七

にでる様にかいてあるが、果して其通り間違はないかどうか、といふ事をマンガをして驛長にきかした。これは念が入り過ぎてゐる様だが、一つ間違つたら最後、此日には何としてもゴラクブルへ行く方法がなかつたのである。

幸にして時間表に誤りはなかつたから、安心をして驛前を出たところ、これは又頗る徹底した野中の一軒家、あたり近所に家といつたら一軒もない。我國等ではどんな田舎でも、驛前といへば運送店の一軒位は義理にもあるものなのに、ここにはないといつたら何も無い。見渡す限りひろびろとした野原で、遙か左手に矮屋が雑木の間に隠見してゐるだけであつた。尤もただ驛前に何も家がないのは、印度では珍らしくはないが、この様に前が開いてゐるのはめつたにない。こんな驛へ下りる人はドーセ土地の人か、又はネバル國人位だから、乗物等はない方が當然過ぎる位當然なのである。

私は驛前から左手に向つた。さうして矮屋の部落に入つて行つた。この家屋については、既に上巻第394頁―第399頁に記した通り、随分面白い繪が壁に描いてあつた。此がまた何たる因果か、私としては實に愉快でたまらなかつた。だから寫眞にとつただけでは満足が出来なかつたので、更に手帳を持って出かけ、そのうちの若干を寫生してみた。簡單に見えてゐたが、案外手が込んでゐて、いふ迄もなく元來繪が拙いのみならず、輪郭をとるだけでも、短い時間では容易でなかつた。だからむづかしいのはやめにして、極くやさしいのばかり十二三寫してきた。寫眞は前に掲げたから(上巻第394頁、今回は寫生したのを一枚にまとめて、かき直してだしておいた(前頁参照))。



昭和十三年三月二十三日學生 昭和十三年二月二十三日の直す

ラクサウル村民家の壁畫の寫生。

一、樹木。二・三、人と鶴(?)。四、犬(?)。五・六・七、これも亦犬(?)。八・九、人。十、馬に乗れる人。

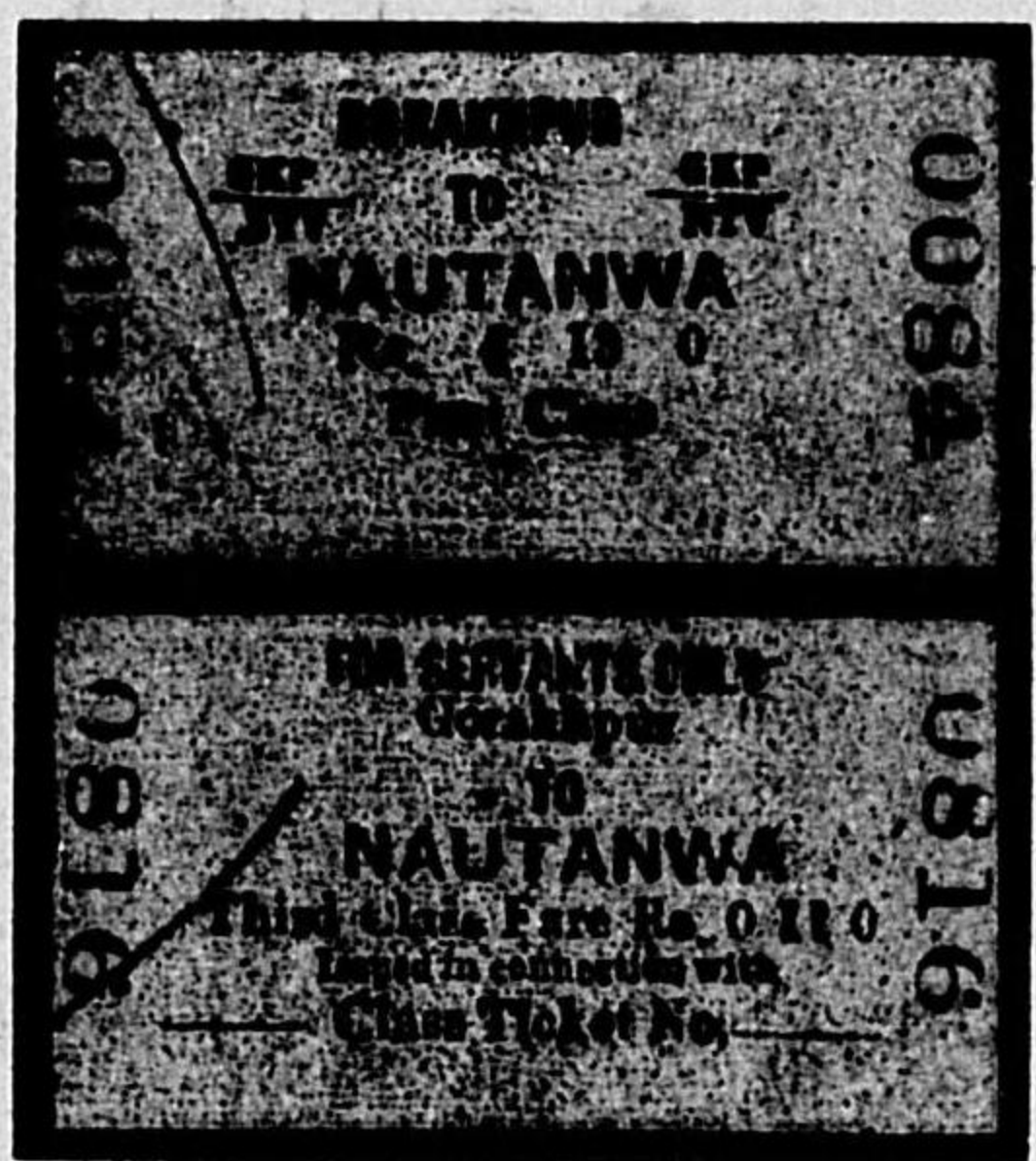
こんな事をしてゐて二十三日は暮れてしまった。ところが困った事には、孟買を出る時充分過ぎる位袋に入れて持って来た白米は、此日の夕食に正に終りを告げたのである。だから午後寫生に行く時は私一人で出かけ、マンガは印度米を買入るべくバザーへやった。其上に折あしく孟買の江商支店から借りてきた焜燼も此夕炊事の後に壊れて使用できぬ様になったさうで、すべてがあと二三日といふ所で駄目になつて了つた。

* * * * *

此日は後四・〇〇に88、五・三〇に85、夜は蟋蟀がよく鳴いてゐたが、どうも我國の程のいい聲でなかつた。水が餘り汚いので行水をやめにした。夜になつても84よりは下らなかつた。

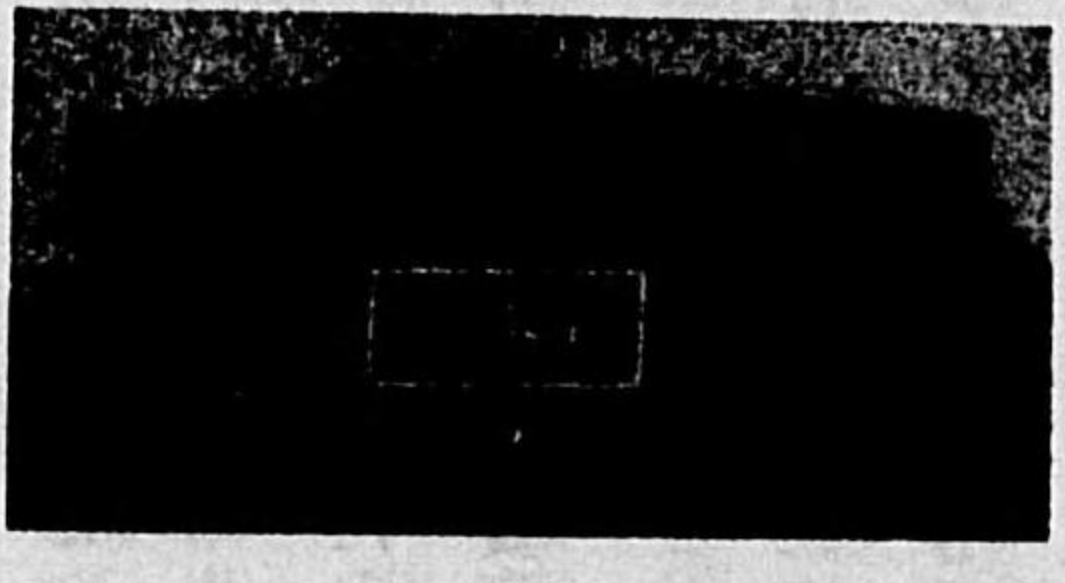
(昭和十三年四月三日稿了)

ゴラクプール・ノータンワ間汽車切符二種



上は一等切符(白色)、下は従者車用切符(黄色)、下の最下行の左の欄の所には「111111」といふ字を、右には「99」を入れるべきを、何れも略してある。昭和十一年三月十七日ゴラクプール驛發行。

ノータンワ驛の一部



驛名は建物の上部に書きつけてあるだけで、別に立札はない。

印度佛塔巡禮記

(第十九回)

一〇八、ラクサウルからゴラクブルへ

三月二十四日は朝四・〇〇に起き、最後の白米の冷飯——昨夜炊いた残り——を茶漬にしてかき込んだ。カトマンヅ以来、朝食は鹽茶漬二杯ときめ、其通り實行してゐたのであった。五・〇〇にR・Hを出たが、まだまっ暗であつたから、懐中電燈で照らしながら淋しい氣持で歩いた。多年の希望が達せられ、懸案が解決されたのは嬉しかったが、これが一生の見納めだと思ふと。甚だ重苦しい感が胸中に往來し、星月夜にまっ黒な四角な輪廓をもつたR・Hを振り返り振り返り、驛に向つて足を運んだ。汽車は出るだけは時間表通り五・二七に出たが、次驛に30分以上も停車し、又次でも長く降り、結局ナルカチャガンジ驛に着いた時は、40分ばかり後れてゐた。併しここでは充分時間もあり、驛に食堂もあつたので、少し念入のチョコレートを食べた。朝の茶漬等は餘り早かつたせいか、とうの昔に消化して腸へ行つて了ひ、胃の腑の内は空っぽになつてゐたのである。實は三月十二日の夜、ラクサウルのI・B・夕食以来、滿十一日間同じものばかりで、實際可なり弱つてゐたのだから、麵麩は殊のほか美味であつた。

汽車がナルカチャガンジ驛を出るのは九・〇〇の筈なのに、初めから一〇分後れて出た。これからは一層遅れ方が甚だしく一〇・四〇にバカハ驛につくべきのが、一一・二〇になつてしまつた。ここに大河がある。ガンダク(Gandak)河で、何故橋を架けて汽車を通さないのだらうと思つた。時間表でみる

と、對岸の驛名はチヒタウニ・ガート(Chitauri Ghat)とあるのに、バカハにはガートがついてゐないから、河岸迄相當にあるのかも知れぬが、大した事はないだらう。またいくら不便でも、トンガ位はあるだらうと思つてゐたのに、事實は大違ひで、何ともお話にならぬ漠漠の途を長距離の間、どんよりした蒸し暑いねぼけた太陽に照らされながら歩かざるを得なかつた。實にこの途たるや、後になつてから此の邊は、どこでもこんなであることが判つたが、この時は初めて出會つたので、全く驚かされて了つた。途中前方へ荷馬車が二臺行くのを追ひ越したが、其後方に長く粉末泥土の幕を引いてゐたので、そこを通り抜けるのが並大抵の努力ではなかつた。

随分歩いたらやつとの事で遙かに鐵道橋が見えた。書つけておかなかつたから、今でははつきり記憶しないが、何でも橋臺の間に架けたトラスが三つばかりなかつたと思ふ。いつから落ちたままに放置してあつたのかと思つて、試みに尋ねたのでは何でも十年以前からだとかいふ事であつた。嘘かほんとか知らぬが、とにかく橋の落ちてゐるのが、即ち苦力共の飯の種となつてゐるのでみると、鐵道會社では旅客の便利といふことよりも、橋の架替に金のかかるのを恐れてゐるらしい。何れにしても此橋は、設計が悪くて洪水の時に流されて了つたものと推定をした。これを事實と假定をして、さうして更に再架しても調査不十分でH・W・Lがどの位の高さかはつきりと判らなければ、再びやられるかも知れない。架けずにおけば、會社は金がいらす、苦力は飯が食へるのだから、これこそほんたうの一石二鳥の妙案である。この邊をあるく旅客なんかどうせ印度人でも下層の者が多いのだらうから、漠漠の途を歩

くのなんか何とも思つて居やまいし、會社の方では牛か豚か犬位にしか思つてゐないのだから、勿論まるで問題にしてゐない。だから現状維持の限り「橋は苦力の飯の種」となつてゐるので、嘗て友人故照阿彌陀佛が、ある寺で即吟した警句「勿體なや彌陀は……の飯の種」を思ひ出し、非常に愉快になり、おまつりしてある等身位の阿彌陀如來を大勢でかつぎだして寫真にとつたりしては勿體ないかも知れぬが、橋ならどちらにも都合がいいのだから、どうもうまく考へたものだ、疲れを忘れて感心をしたが、バガハ驛から河岸迄二哩半の一里には可なりうんざりして了つた。

河岸へついでみたら、そこには小屋があつて船頭共が粗末な小屋に入つてゐた。船は三艘ばかり舫つてあり、客は皆乗り込んで思ひ思ひに座席を占めてゐた。そこへ苦力は私の荷物を皆積み込んで了つた。ところがマンガは何處へ行つて了つたのか混雑中にはぐれたらしく、いつ迄たつても出て来ない。やつとの事で笑ひ乍ら出てきて、得意になつて別に船を一艘雇つたといつた。其船といふのは初めから氣がついてゐたが、小型で割合に美しいのである。これは大出来であつた。彼がいくら得意になつても差支へない位に氣がきいてゐた。

クローリーは早速荷物の積みかへをした。そこで直に乗り込んだ。私とマンガと船頭三人。大ガンダク河に舟を浮べて溯航するなんかは、まるで思ひがけぬ事で、此時暫くは落橋禮讃をした。ところがマンガとクローリーと何か大聲をだして言ひ争つてゐる。多分賃錢の事だらうと思はれ、體裁が悪いからきいてみたら、充分やつたのにまだくれといふので、いくらやつても限りがないといつて、船頭に船をださ

せた。結局水上と陸上とで致し方がなくなつたので彼等は退散したが、あとでいくら拂つたのかと試みにたづねてみたら、一人に8アンナ(六十錢)だから、充分過ぎる位だといつてゐた。4アンナもあれば、一日一人は樂に暮せるのださうだから、充分かも知れぬが、可なりみちのりもあつたのだから、私は心中もう少しやればいいのと思つた。

私の舟は最後に岸を離れたので、直に帆をあげて全速力で走ると思つたのは大間違。一つ所を回轉してゐて埒があかないのみならず、帆がうまくあがらない。漸く中流迄出た時は最後の船に後れた事約一町で、而も時時刻刻彼我の距離が増して行く。夫れでもしまひにはどうか帆走ができる様になり、後れ馳せながら後を追ひだしたが、いやに迂路をとる。水流の関係もあらうが三角形の二邊を行く。何しろ河幅は廣いので、従て三角形の一邊も可なり長いのだから、どうも時間がかかつて仕方がない。時計をみたら汽車が對岸の驛をでる迄に、餘す所僅に50分であつた。

此夜はゴラクブールのI・B・に宿泊の承認を得てゐたのだから、是非行かねばならぬ。そのためには一三・二六にチヒタウニ・ガート驛をでる汽車へのらねばならぬ。この驛からは一晝夜に二回、即ち夜中の一・二〇とひるの一・二六と、一度づつ汽車がでるばかりだから、一つ後れたら十二時間待たねばならない。その上I・B・の方は違約せねばならぬ。違約したら承認を取消されても仕方がない。其上にルンビニ園行や祇園精舎址の見學に大影響がある。だから何としても一三・二六の汽車へのらねばならぬ。ユーなつてくると、どうも舟の上でゆくりをこいらを眺め、涼しい風に吹かれて落つてゐる

わけに行かないので、上陸してから驛迄の遠近を尋ねたら、1½哩あるといふ答を得た。

いくら歩いて、私のその頃の足力では一里に40分はかかった。だから1½哩は24分の理屈である。それでは未だ上陸地点も見えないし、到底汽車に間に合はないではないかといったら、マンガは「左様で」といふ返事をして、ニヤニヤ笑つてゐた。これではまるで暖簾と腕押で、張合のない事夥しい。併し終に彼のいった1½哩といふのは、航行距離といふことが判つた。そこで改めて上陸地点から驛迄どの位あるかときいたら、今度は1哩だといった。此時彼は驛が行手遙に見えるといったので、雙眼鏡でのぞいたら、河岸に藁葺の家があるばかり、どうみても百姓屋としか見えなかつた。時計をみたらあと30しかない。間に合ふか、然り。あと20分だがいいか、大丈夫。といった調子でまるで要領を得ない。遂に一三・二〇になつた時、驛の建物も汽車も皆見えた。1哩等はまるでうそで、驛名の示す通りほんとうの河岸で、藁葺であつた。舟の中からみて百姓家だと思つたのは、やはり停車場であつたのである。

元來こちらは英語の會話は改めて述べる迄もなく甚だ以て不得手だし、上手になれず、ならうともせず、困れば名詞を並べて用事をすませます。そこでマンガと来ては私以上なのだから、どうも時に飛でもない間違が起る。江南專屬のトラベリング・サーバントなるワッサンだと、極めて速辯だが相當なもので、めつたに行違は起らないが、マンガではさういかないから、舟中の問答はやはり言葉の了解が不充分なのと、意思の發表がうまく行かなかつたのと、二つの原因からあんなトンチンカンの問答になつたと解すべきで、別段悪意があつての事でないのは明らかであるが、とにかく楽しかるべき大河の溯航

は、汽車にのり後れやしないかといふ心配で、やきもきしたのでメチャクチャになつてしまつた。

上陸したのは時間表に於いてある發車時刻の正に1分前、即ち一三・二五であつた。何をおいても先づ乗込まねばならぬ。それでも大急ぎで舟つき場の寫眞二枚をとり、汽車中に入って座席を占め、荷物を按配した時はほんたうに安心をした。發車時刻に後れたこと31分、即ち后一・五七に河岸を離れた。ゴラクプール着迄に一分取返し、一七・三八につくべきが一八・〇八に安着をした。今になつてゆつくり考へてみれば、時分どきなだから、驛食堂で食事をすましてから行けばよかつたのに、當時はその様な氣はつかず、何でも一刻も早く宿へ落つき度いが、白米はきらしたし、宿舎にカンサマは居ず、従つて食事はできず、仕方がないので驛食堂で麵麩を買はせ直にインスペクション・ハウスへ行くべくトンガを雇つた。

暫く市中を走つて、扱て着いてみたがどうも落つかぬ所に建つてゐた。何だかいやな家だといふ豫感があつた。マンガが來意を告げたと見え、チョコキダールが出てきて宿泊承認證を三枚ばかり出したが、私の分はなかつた。番人は私を見せてくれといったので、出して示したら、これは第一號館の方だから、ここから更に1哩距つてゐるが、その方へ行つてくれとの事で直にそこへ向つた。

マレーの案内記によると、ゴラクプールにはI・B・とD・B・とあり、何れも前以てそれぞれ宿泊

* Chaukidar, Chokidar. In India, a gatekeeper, watchman, or policeman. ("I SEE ALL" Vol. 1, p. 556)



此頁上。ガンダク河渡船場風景

其一

(昭和十一年三月二十四日)

次頁下。同

其二

(昭和十一年三月二十四日)

此頁下。同

着船場風景

其一

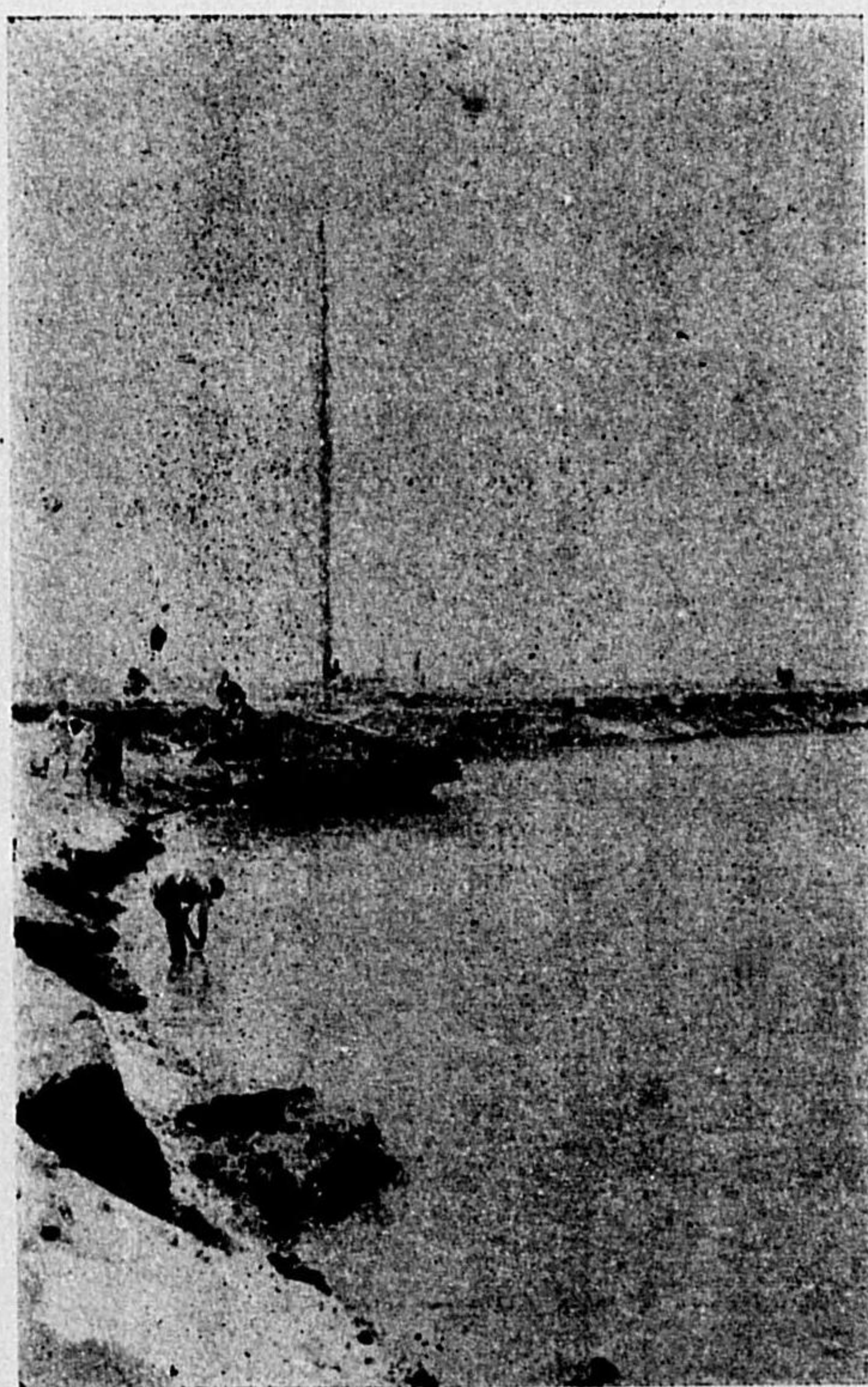
(昭和十一年三月二十四日)

次頁上。同

其二

(昭和十一年三月二十四日)

上圖の左端はガンダク河の乗合船で、他の客全部と私の荷物が乗せてあり、まきに出帆しようとして、私とマンガの乗るのを待っているところ。然るに現れたマンガは特別に舟を雇ったといつて、大得意であちらの船へ荷物を積みかへると、右手で指示してゐるところ。左手に下げているのは、去る大正十三年から愛(次頁へ)



(前頁より)用してゐる馬革でつくった金十二圓の鞆。次頁下圖は其雇った船へ私の荷物を積み込んでゐるところ。
前頁下圖は漸く目的の岸に着いたので、私は第一に上陸し、マンガが私の馬革の鞆をもって上陸せんとしてゐるところ。此頁上圖は偶まこの岸についてゐた他の船を寫したものである。
渡船の發着點は、此等寫眞でみる様に洵に殺風景極まるが、何しろ河は恒河の支流であるし、其源を西藏に發し、パトナに近く恒河に合する大河だから、それを渡るのには洵に興味のつきぬものがある。



上。ゴラクプールの I. H. 第一號 其一 (昭和十一年三月二十五日)



下。同 其二 (昭和十一年三月二十五日)

上圖は廣い庭からみた全景で、下圖は正面濡縁の一部である。此官立宿舍は二室 (Suite) あり、私は向って左の方を占領した。建物は煉瓦造で白壁塗。二夜共泊り客くな一人であった。居間は總て床に敷物を敷詰め、明るい大きな電燈がつき、扇風機は天井と卓上の分と二つあり、其他更衣室、風呂場、便所とで一組をなしてゐた。餘り居心地がいいので費用も相當にかかると思つてゐたのに、一晝夜につき部屋代 (電燈も含む) 僅か Re. 1 であつた。

の承認を受けねば、だしぬけでは宿泊はできない。それでは前以て手續ができなかつたとき、突然行へたのでは野宿をせねばならぬかといふと、そんな事はない。驛の樓上に待合室があり、寢臺も (當時) 二脚備附であつたから、寝る所はあるにはある。而も階下は食堂だから、つまり寝るにも食ふにも心配もなければ手數もかからぬのである。併し私はタキシラで二回共二夜づつ、モカメー・ガートでは特別に随分惱まされた様に、追ひ込みだから安眠はできぬと覺悟せねばならぬ。マヅラ (南印のマヅラ驛) 驛樓上の様な設備の完全な宿舍ができぬ以上、實に困る。多分數年後には、主要驛は皆あの様になるだらう。ああなればうそだ。つい餘談になつたが、普通 I・B は洵に宿泊がやつかいだから、私は最後だからこれにしようと思つて、ただそれだけの理由で I・B にきめ、甲谷他の總領事館からファイツァバード (Fyzabad) の收税吏 (Collector) へ手紙を出して頂き、其結果宿泊差支なしとの承認を得たのである。

扱て第一號館へ来てみたところ、第一に其構えが氣に入つた。館の前で下車したら薩張した服装をした老年のチョコキダールが出てきてサラームをして何か言つた。これは歓迎をしたのださうな。内部は居間・更衣兼化粧室・浴室及便所といった工合で、床には總て敷物を敷詰め、扇風機は天井に一つと卓上のとあり、居間には百燭の電燈が二つ、其他の室にも何れも明るい電燈がつく。こんなバンガローは見

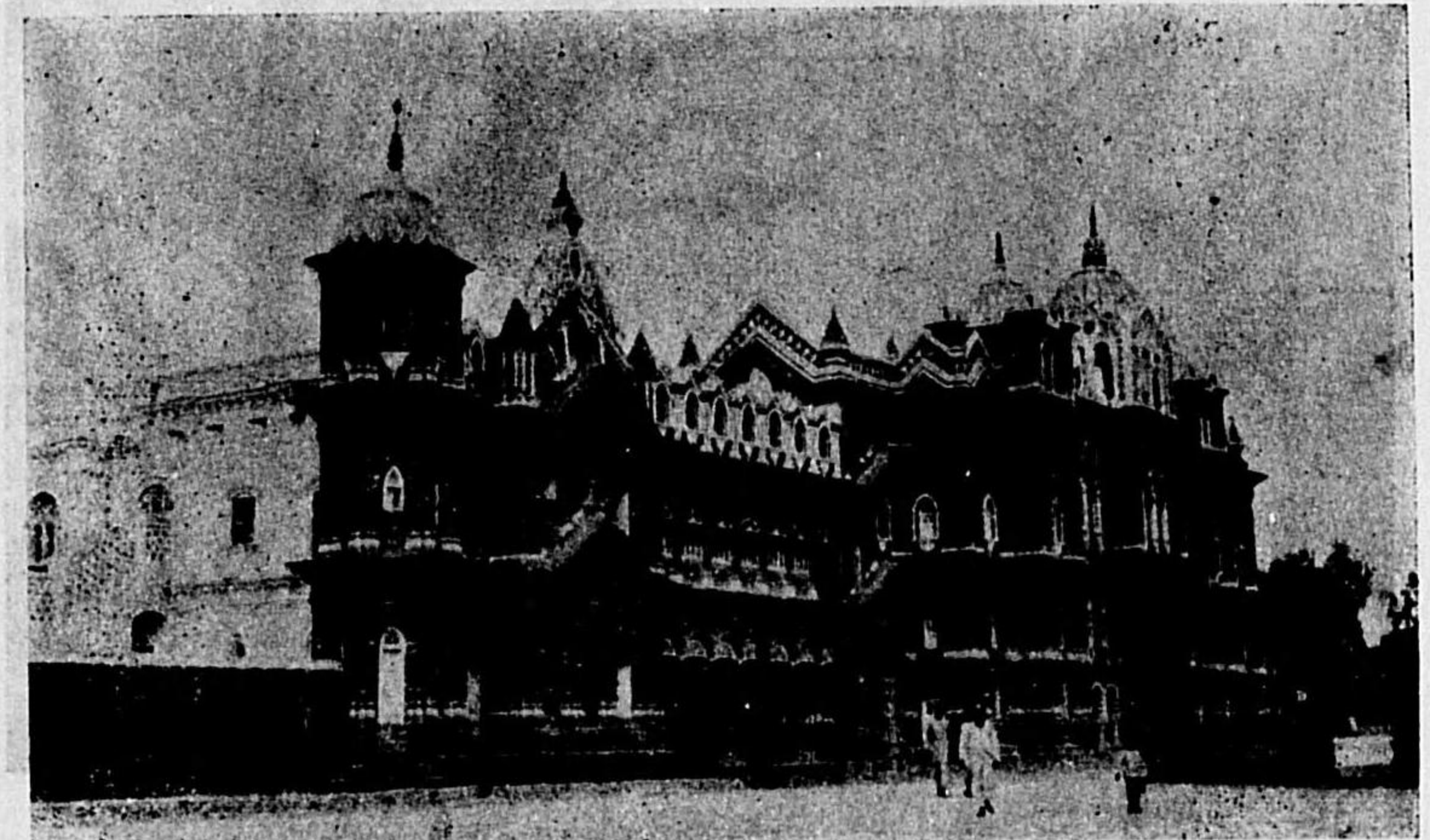
* 私は甲谷他の領事館へ出頭した時、三月二十四・二十五日の二夜宿泊の承認を得たく、其由申出しておいた所、どう間違つたのか、二十四日夜だけの許可になつてゐたので、着くなり役員の関係者に談判して二泊の承認を得、其通りにして無事目的を達し、三月三十日孟買に歸着した。



上。バルラムブール客館正面の遠望（昭和十一年三月二十八日）

下。同より前庭の眺（昭和十一年三月二十七日）

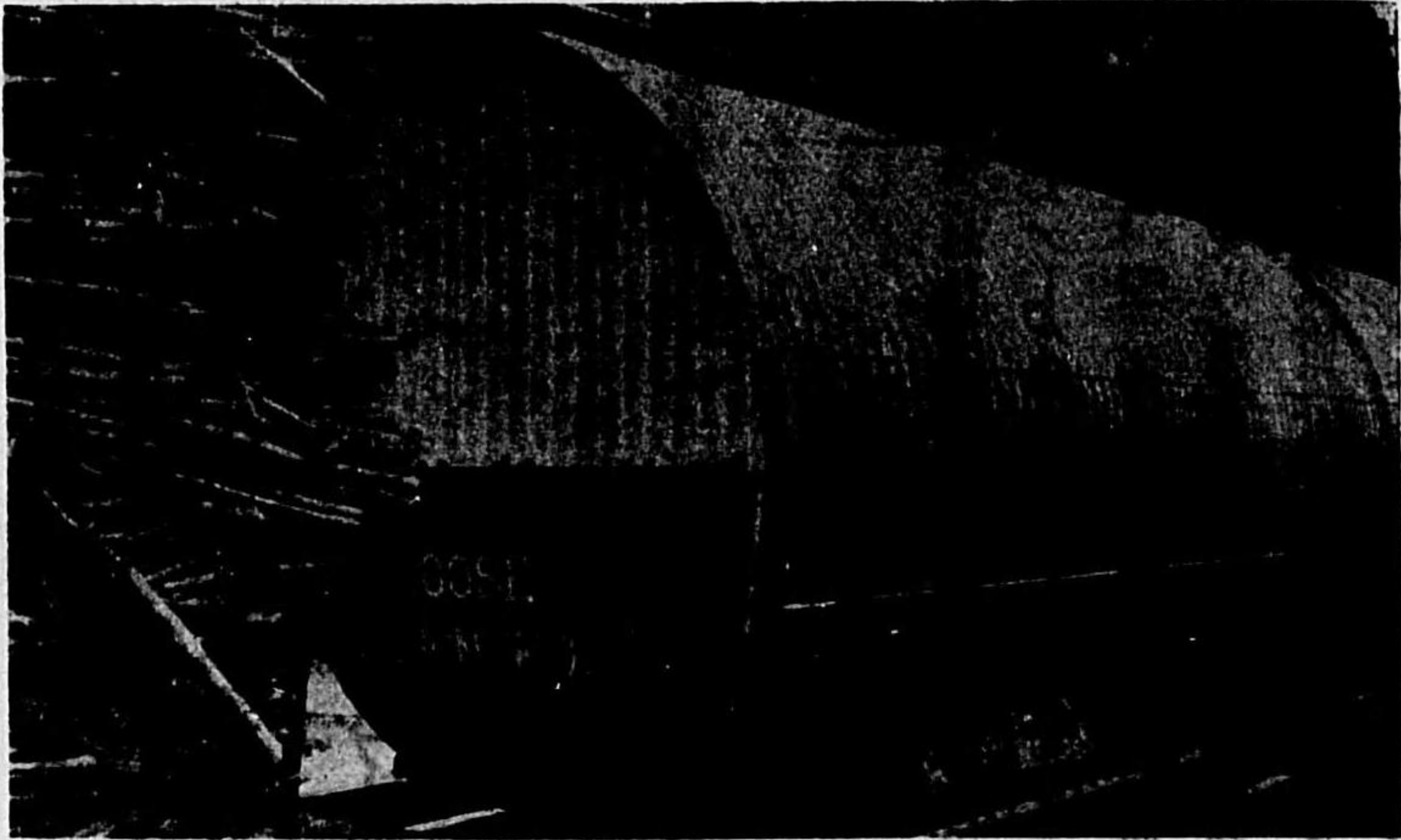
此町にはホテルも D. B. ないので、祇園精舎見学の旅行者が宿泊するのに困る。ところが幸に此小州のマハ・ラジャが立派な客館を建てておいて、前以て支配人（客館の）に依頼すると、宿泊及び食事共無料の上、車馬迄提供してくれる。聞く所によると European G. H., Hindu G. H., Mahomedan G. H. とあって、それぞれ適当な館へ案内してくれるさうである。上圖は E. G. H. で私が三月二十七日・二十八日の二夜とめて貰ったのは中央より右手に當った正面に向った室で、待遇も申分はなかった。下圖中央の馬車廻しには、丁度きんちゃ色の忍冬の花盛りで非常に美しかった。



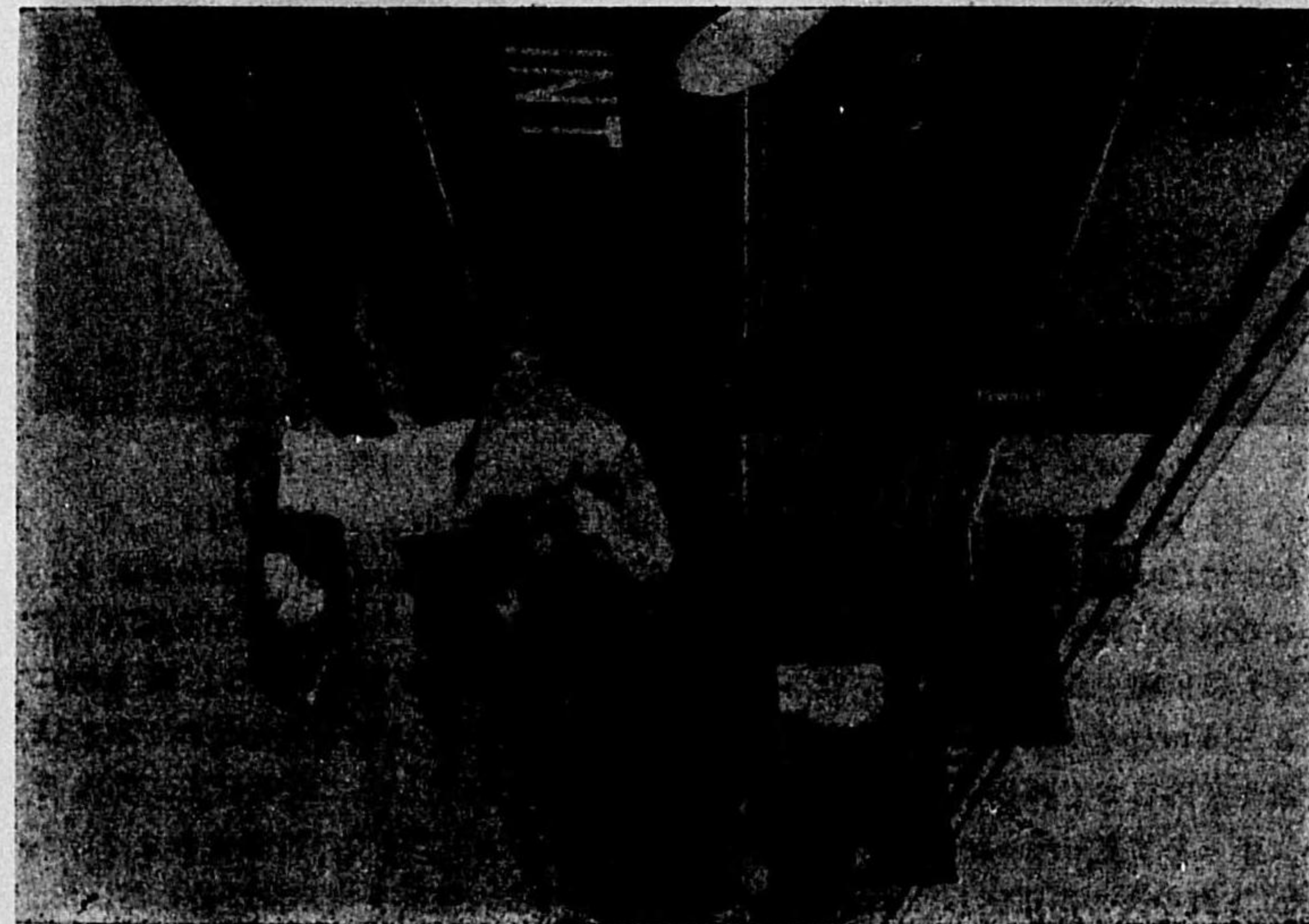
上。バルラムブール州・マハラジャ宮 其一（昭和十一年三月二十八日）

下。同 其二（昭和十一年三月二十八日）

祇園精舎址の見学を終ってから、未だ相當に時間があったので、大曇りではあったが、市内の見物に出かけた。此時は私と運轉手と二人きりであった。この運轉手は英語が話せず、私はヒンドスタニを知らないもので、隨所不便を感じたが、ただ王宮の傍を通った時だけは、運轉手が振り返って、笑を含んで「マハ・ラジャス・パレイス」といったので下りて寫したのがこれ。上圖右手の三回屋根の部を大きくしたのが下圖。外観が鶴建築なのは惜しい。肩雪の老僧ならぬ跣足の使丁が、唯一人點景人物として役立っている。



上。ゴラクプール・バルラムプール間沿線所見（昭和十一年三月二十七日）
 下。ゴ ン ダ・ラ ク ノ ー 間沿線所見（昭和十一年三月二十九日）
 共に石油か揮発油の様な液体運搬車で、上圖は「NOT TO BE LOOSE SHUNT
 ED」、下圖は「DO NOT FLY SHUNT」と注意書がしてある。日本の鐵道では
 「突放嚴禁」といふ様である。急用の際タシキを奮發して鐵道線路を横切らんとする
 時、踏切番が悠悠と遮斷機を下ろし、澤山の貨車を引張った汽罐車が長い時間フ
 ァイ・シャントをしてゐる位癡にさわるものはない。恐らくこれは讀者諸君も同感で
 あらう。とにかくこの様書きつけてある例は、私は餘りみた事がない。



右。ゴ ン ダ (Gonda) 驛所見 其一
 左。同 其二
 (昭和十一年三月二十九日)
 右は紅茶賣、左は水賣。客車の横に「L」があるは、二等と三等との中間級で、
 特別三等。インダマチエリート・クラスといふ。

た事も泊った事もない。これは實際大當りであった。これで食事さへできれば満点である。隣りにもこれと同じ一組の室があったが、泊り客がなかったので、一日二夜私一人で占領ができた。これで一夜の宿泊料一ルーピーは何といつても安過ぎる。

一〇九、ゴラクプールからバルラムプール經由孟買へ

二十五日はクシナガラ行、二十六日早朝 I・H・發、驛食堂で朝食をすましてノータンワ迄汽車へのり、ルンビニ園往復、二十七日朝ゴラクプール驛歸着、即日バルラムプール行、同所マハ・ラジャの客館泊、二十八日祇園精舎址の見學をしたことは既に記した通りである。

* * *

遂に無料宿泊・無錢飲食兼薩摩守の豪華版なるバルラムプールの G・H・を最後とし、二十九日朝バルラムプール驛着、ゴンダ (Gonda) 驛乗換ラクノー (Lucknow) 驛着、博物館だけ一見し、其夜ラクノー發、翌三十日孟買 (V・T・) 歸着。第二回目の印度旅行はめでたく終了したのであった。それから東綿支店宿舍の高級居候を勤務したこと十二日間であったが、其間に甲谷他總領事館から、孟買の東綿出張所氣附で私宛に轉送して下さった手紙を受取る事ができた。其一是ファイツアバードのエキセキニチーブ・エンジニアからのので、文意は

斃鼠がゴラクプールの I・H・第一號館の廊下で發見されたので、ブラーグの虞があるから、できたら来るのを暫く延期してはどうか。

といふのであった。ここにブラーグといふのは黒死病を意味するので、印度では黒死病・腸窪扶斯・虎列刺等は四時流行してゐるとは豫てきかされてゐたから、去る大正十一年に初めて行った時は、多少心配もしてゐたが、扱て上陸してみたら、天下泰平でそんなおそろしい病氣等は、どこに流行してゐるのかまるで判らない位であったから、其後は暫く忘れてしまつたのに、此手紙でまた思ひだした。若しこの手紙を途中で受取つたのだと、多少神経も尖つたらうが、それこそほんたうに知らぬが佛で、いい氣になつて泊り込んできたのであった。勿論あの I・H・に滞在中、クシナガラ往復やルンビニ園行のため、印度の役人等が來訪したが、そんな事に就いては一言もしなかつたので、これが反つて幸であつた。勿論此等の人人は知識階級だから、斃鼠の危険は知つてゐる筈だが、私が既に來て了つた以上、最早いつてみても仕方がない、私が三月七日に甲谷他をでてしまつた事を知つたからには、手紙は入れ違ひになつたのだから、反つてそんな事は言はない方がよからうとて、黙つてゐたものと解釋をしておいた。とにかく斃鼠一疋發見のため、態態その由を記して延期を忠告してくれたのは、當然といへば當然だが實に親切なものだと大に感心したのであった。

其二は例のカトマンヅで面會してスバから副領事へあてたものの寫しで、これは私が去る十五日のひる頃、首都滞在中世話になると思つたので——それはバスが觀光や見學には總て自身案内するといつた

から——總領事館へあてて、スバ宛に禮狀兼依頼狀を出して頂き度いと申し出たので、早速其通り取計らうてくださったのに對して、スバからの返事であった。それによると

自分が案内も世話もするつもりであったが、ドクトル・アマヌマとは最初に面會しただけで、翌日から病氣にかかり、ずっと臥床してゐたため、まるで其後は出遇はなかつた、従つて何にも世話する事ができなかった。

といふ様な事が書いてあつた。三月十四日の午後九時に漸くの事で首都に着した時も、其翌十五日の朝に來訪した時も、随分元氣に見え、ものの言ひ方から態度まで上品で大變親切に見えたのが、其日の午後から急に病氣になつたといふのは少し變だとか、それがほんたうの病氣か假病か等と、そんな事を考へ度くはない。さういふ事であつたのなら、何故に一言でいいから病氣のため約束の案内はできない故、勝手に見學なり觀光なりしてくれといつてくれなかつたのであらうか。こちらにも亦本人が病氣だと知つたなら、あんな不平も言はなかつたのに、さうして時間も無駄にならなかつたのに、どうも拙いことになつて了つた。だから本文中にかいたスバに對する不平は全部取消すことにしておく。

一一〇、孟買解纜・歸朝

昭年十一年四月十一日愈よ印度國に別れを告げ、郵船「安洋丸」で歸朝の途につき、同五月四日神戸港に上陸したのであつた。前年の九月五日に神戸港を解纜し、翌年の五月四日に歸朝したのだから、滿八ヶ月が一日缺けたが、昭和十一年は閏年だから二月が一日多かつた。だから平年だと當然滿八ヶ月と

いふ事になり、妙にきりのいい數字がでてくる。實はもう一月位のばして、豫ての計畫通りシンガポールへ上陸し汽車で盤谷に出で、アンコール・ワットを経て西貢へ出たかつたが、これは駄目になつた。

大正十一年第一回の時は、伊客船アクイレア (Aquila) で坡西土港から孟買に直航し、十一月二十日に上陸、翌十二年二月十日同じく孟買港から大阪商船の貨物船ヒマラヤ丸で歸途に就いた。今回は同じ坡西土港から獨貨物船ローテンフェルス (Rotenfels) で印度に向つたが、これが最新式の M・S・であつたので、給油のため紅海の入口に近いペリム (Perim) といふ猫額大の英領嶋へよつたり、それから孟買へ向はず遙か南のマムビ (Mandi) だの、マモガオ (Mormugao) だのへ寄つたりして——といつてもペトリールを積んでゐたので港内へ入れず、港外に投錨して終日終夜波のまにまに浮いてゐたので、これは甚だつまらなかつたが遂に——十二月九日孟買港着上陸、既記の通り翌年四月十一日やはり同じところから歸途についたのであつた。だから前後合計二〇八日ゐた事になる (昭年十一年の二月、一月を三十日とすると丁度六ヶ月と二十八日となり大體七月といふ勘定になる。而も氣候のいい時を撰んだのだし、在留日本人各位の厚き同情の下に旅行をしたのだから、大に能率はあがつた筈である。お蔭で見學も相當にできたのだから、もうこの位で満足しなければなるまいが、慾には限りがないのが普通で、まだ見残しが随分ある。もう三月あれば一通りは片づくと思ふが、今から金をためて債券を五枚買ひ、一舉大當りで一萬五千圓入手の期を待つてからの事だから、三度目は疑もなく、旅券の下附を闇魔應へ願ひ出る様なことになると覺悟をしてゐる。

一一一、感謝

坡西土から孟買迄の乗船に就いては、二度共當時同地に在住して居られた南部憲一さん(今歸朝)に非常に御迷惑をかけた。殊に二度目の時は、一月も早く英船へ申し込んだのに、満員とかで船室が得られぬ事が解纜の二日前とかに判ったので、南部さんは坡西土にある船會社の支店や代理店に、人をやったり電話をかけたたり、漸くの事で豫て退去に定めておいた日、即ち英船と同日に同港を出る獨船の一室を得ておいてくださった。此船は一等も二等もなく、貨物船で客は總てケビン・クラスださうで四民平等船であつた。そんな事は知らないから歐洲の一角から小亞細亞の旅を終り、頗るいい氣持になつて昭和十年十一月十八日、二〇・〇〇頃に坡西土へ歸つてきて、初めて右の事實を知り、衷心感謝の意を表したのであつた。

印度へ上陸してからは、これも亦二回共甲谷他總領事館及び孟買領事館員、東綿・日綿・江商等の當時の各支店の支店長及び社員出張所員各位に大變に御迷惑をかけた。そのため日に無駄がなく、至極安全に旅行をすることができた。ネバル入國の許可を得たのは、當時甲谷他在勤の副領事野々村雅二さんと、館員の柳悦之さんの御盡力の資であつた。最初の申し込に對し、先方が體裁よく婉曲に一蹴したのを、更に照會をして頂いたし、漸く許可になつてからも、いろいろ勝手な事を申し出たにも拘らず、心よく皆其通り取計らつてくださった。何れも有難いことである。

印度のほか、タイ・ビルマ・印度支那・ジャワ等へも行つてみるつもりで要意はしてゐたが、餘り印度でゆつくりすぎて日がなくなり、遂にどこへも行けなかつたのは洵に遺憾であつた。當時東洋紡の社長であつた故阿部房次郎さん、江商の社長であつた北川與平さんから、前記及その他各地の支店長あての紹介状を頂き、尙ほそれぞれ通知をだしておいてくださったので、それ迄一面の識もなかつた當時の孟買在勤東綿支店長齋藤六郎さん(今歸朝)・日綿支店長鈴木富二郎さん(昭和十九年にはビルマ在勤ときいた)・江商支店長丹治顯一さん(今歸朝)及びマドラスの岩見さんに、異常なる款待に預つたのみならず、印度内地旅行についても、でき得る限り便宜を與へられた。尙ほ丹治令夫人は、私が旅行にでる前には、救急藥から針と糸とに至る迄、知らないうちに鞆のなかに入れておいてくださった位であつた。以上の皆様に對しては、感謝に辭なき次第である。

* * * * *

今回の外國旅行は、歌亞各國へ出張といふ事になつてゐたが、歐羅巴の分はギリシヤでアテネ、土耳其古ではイスタンブールだけで、それから南下してバルベック・ダマス・エルサレムをほんの一通りかけ廻り、埃及をアスアン迄往復して前回の復習をしただけで、全力を印度めぐりに費した。印度でも大都會だけなら何でも無いが、今でも田舎へ入れば泊る家がなかつたり、あつても食ふものがなかつたり、黒死病・天然痘・虎列刺・奎扶斯乃至マラリヤの類が年百年中流行してゐる様な沮洳不毛の地を、

無事に歩いて歸ってくる事ができる様にと、いろいろ心配して下さった方々、別して當時の「天王會」會員各位に厚く御禮を申上げる。

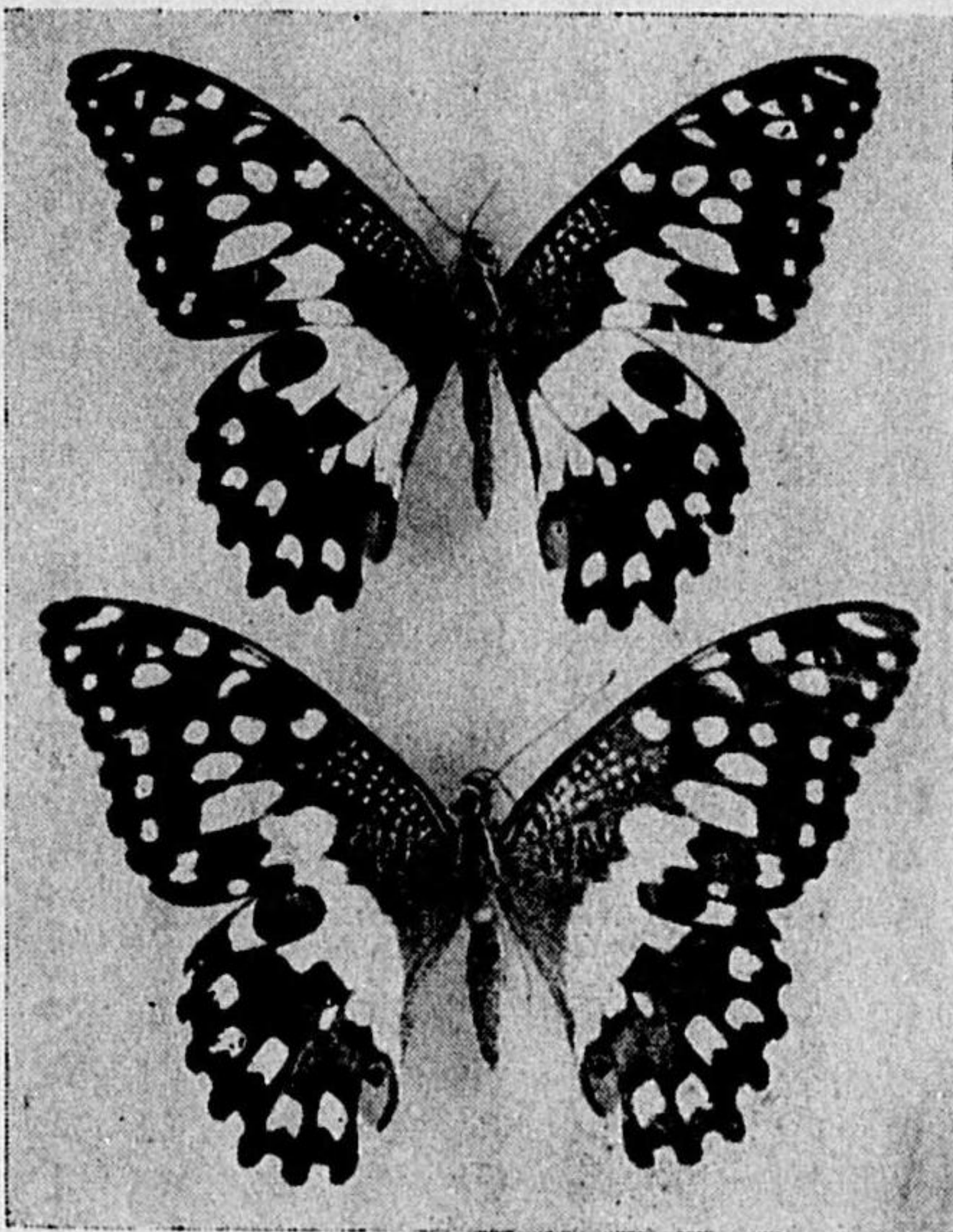
昭和十年九月四日、即旅行出發の前日の午後、突然某高僧が來訪せられ、蓮瓣型合子の内に薄肉に彫刻した、袋入でお守として首に懸ける様にしてあるお太子様の御像を猊下手づから賜った。洵に芳香馥郁として尊い御像であった。勿體ないことである。私は私の健康について心配してゐて下さったさる方から拜受した觀音經の極く小型に縮刷した一卷、またさる方から頂戴した靈驗いやちこな不動明王のお守札と共に、旅行中は肌身離さず捧持してゐたが、今でも旅行の時は必ず捧持することにしてゐる。

(昭和十三年五月四日歸朝記念日稿了)

以上で「印度佛塔巡禮記」の本文を終る。

次回は印度に於ける佛塔と我國の夫れとを比較し、我國の塔婆の何れの部分に印度の夫れの佛を存せるかを示し、簡単な解説を附して大尾とするつもりである。

オナシアゲハ(上、雄。下、雌)



(ボロンナルワ産)

昭和十一年一月三日、ボロンナルワにて採集したもの。此種は臺灣・南支那・馬來・印度等に分布してゐる。故に日本・支那・印度等に分布せる佛塔に因みて、この蝶の標本を掲げておく事にした。

印度佛塔巡禮記

(第二十回)

一一二、印度と日本とに於ける佛塔の比較

以上圖を添えて記した印度佛塔の形式に就いては、讀者諸君も略ぼ了解された事と思ふが、もう一度改めて述べると、つまり平たい臺の上に大伏鉢がのり、其上に小さい立方體(もないの)がのり、其中央から柱が立ち、此柱に數個の輪(天蓋)がついたものがそれである。佛教が支那を通り、更に朝鮮を経て日本に傳はつた間に、其國の氣候・建築材料・國民性其他の原因により、建築物の様式に變化があつたのはいふ迄もないので、佛塔も亦さうであつたのである。

支那に於ける古塔は、どの様な形をしてゐたか私はよく知らないが、二四二に示した様な彫刻が、支那山西省大同府に近き雲崗の石佛寺石窟の一にある。これ等は或は昔の塔婆の型式をよく現はしたものであるまいかと思ふ。此塔は下に高き基壇があり、初重は方二間らしく、柱上には臺輪があり、料栱三料、料栱間は割束、軒は一軒と思はれ、屋根の兩端に鴟尾の様なものがある。第二・第三重は各方一間と見られるが、軒の料栱及び屋根は初重と同斷である。最上部には伏鉢及び相輪があげてある。

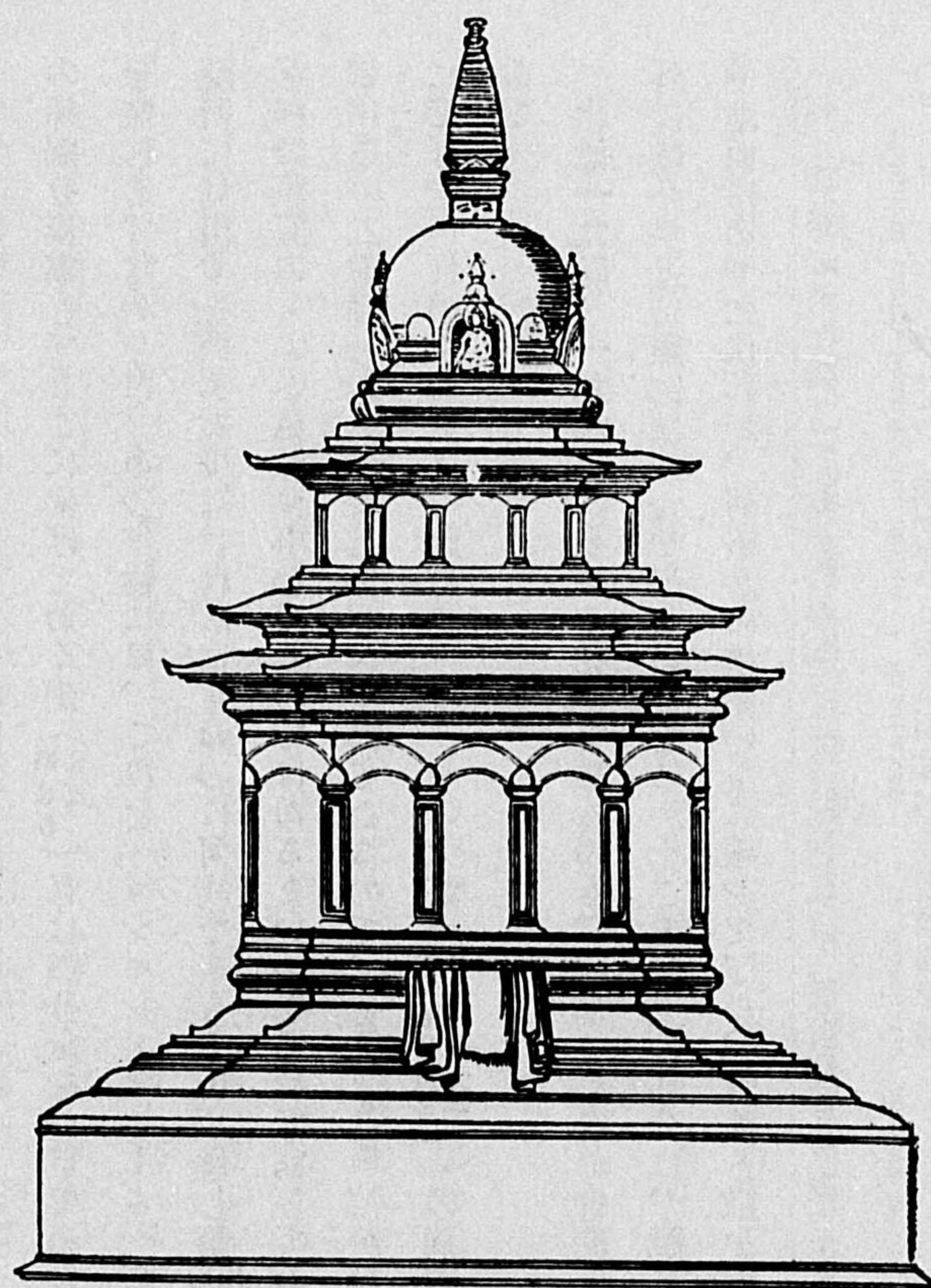
これは勿論薄肉彫刻だから、繪空事も多く入つてゐる様で、初重の方二間も少し變だし、其上の二層も方一間で料栱が詰組なもの、玉蟲廚子宮殿の例からいへばないとはいへぬが、三料だからこれはどうかと思ふ。又屋根の鴟尾と見られるものも、果して實際こういふ處に用ひられたものかどうか、これも疑問であると同時に、少なくとも第二・第三重には椽勾欄がありさうなものである。だからこれ等の點

が實物と少し距離があるらしく考へられるのである。

そこで最上部に移っていくが、ファガツソンの【印度及東洋建築史】によると、立面の見取圖ではつきり判らぬが、ネバル國には數重の構架上に佛塔をのせた「*コスタカア」といふものがあるとある。その挿圖を複寫してここに掲げておくが(第30頁)私は随分氣をつけてゐたけれども、ついこれに似たものを探しあてなかつた。あの書物には、これを「コンモン・フォーム」だといふのだから、多くの類例を隨所に見出すといふ風でなければならぬのに何故であらうか。併し第309頁に掲げた寫眞の小塔は、先づそれに類似のものと見做す事を得るのではあるまいかと思つて寫しておいたので、紹介をした次第である。この二重目から上が少し片方へずれてゐるので、どうも何だか變な形だが、これも多分震災の時にでもずつたのであらう。此はチャバイルの大塔(第143頁及九二・一九三)の周圍にある奉獻小塔婆の内の一基である。

此他一九四・一九六等に小さく見えてゐるもの、或はこれ等の仲間といへるかも知れない。これ等以外には今手近に類例は持合せがない。とにかくこの最上の部分は、誰に言はしても確かに佛塔で、つまり地面にあつた伏鉢が、何重かの構架の上に乗つて了ひ、寶蓋も數を増して、遂に我國の佛塔に於いて

* From a low, flat mound, one-tenth of its diameter in height, they rise to such a tall building as this, which is a common form, bearing the name of Koshtakar……, in which the chaitya is only the crowning ornament, and between these there is every conceivable variety of shape and detail. (H. of I. & E. A., Vol. I, p. 279)



156. Nepalese Kosthakar. No scale.

ファガッソン著【印度及東洋建築史】所載「コスタカア」

(同書挿圖複寫)

みる様な相輪に進化したと考へられよう。さうすると雲崗石窟寺の薄肉彫の三重塔は、支那に於ける古塔の型式をよく現はしてゐるとしてよろしい。此ならネパールの三重塔に幾分似てゐるといへる。大して「エキザクト」ではないが、「イクイポー

カル・カウンターバート」といつて言へなくもあるまい。併しまたこれでは伏鉢即ち塔身の下には、水平の線が多くあり、上下廣く中頃が狭くなつてゐる。これは伏鉢(即ち)臺として幾分裝飾をしたのであ

らう。これなら「ベリー・ニア・イン・デザイン」といつても、「ベリー」が少しいけないが、稍や我慢ができるだらう。

下の方はこの位のものとして、上の伏鉢の邊がもう少し少さくなつたのが實相寺三重石塔である(二四六二四)。一見四重塔の様であるが、さうではなくて最下初重の如きは基壇だから、正に三重である。

チャパイル大塔附屬奉獻小塔婆の一

(昭和十一年三月十七日)



これだと塔身も先づ石佛寺薄肉三重塔と同じ様であり、第三層の屋根に露盤ができたが、伏鉢は球を上から押しつぶした様な回轉體となり、其上に平面が方形で上の大きい平頭ができ、平頭の上には裝飾として花瓣がつい

た。この花瓣は各邊の中央に一つづつと、各隅に一つづつとで、合せて八瓣にしてある。其上に四個の相輪と天蓋とがあり、東塔の方は石製水煙が幸に残つてゐる。最上部には寶珠を備えてゐるが、上のが亡くなったものか、現在は食ひ残しの團子が串にさしてある様である。但しこの團子の串は鐵製の心棒で、我國の相輪の様に寶珠諸共一石から刻みだす様な事はなく、各部を一つ一つ刻んで、夫れを上から鐵の心棒へさし込むのである。だから時には(例へば大邱に近き八公山) 第三重目から上に鐵棒がたつてゐる 桐花寺の東西石塔の如き) 場合もあるが、これは伏鉢も輪も水煙も寶珠も何も彼も亡くなり、ほんとうの心棒だけが残つたので、そのもう一つ上はこの心棒もなくなつて了つた何もないもの。これは慶州あたりへ行くと、門並皆こうなつてゐる。

序に餘計なことをかいて横道へ反れて了つたが、ここで話を元に戻す。印度の塔婆は勿論雲崗のよりも實相寺のよりも、相輪は大分に大きいし、伏鉢の上にも相當大きい平頭(即詩花)がいつの間にかできて了つてゐるの等は、可なり面白いもので(二以下附圖參照)、もう少し變化してくると、此部分が圓い平面を持つ様になつてきたのである。

* * * * *

我國現存の木造塔婆に於いて、四角な請花をもつてゐるのは藥師寺三重塔だけである。法隆・法起・法輪寺等の塔婆の夫れも、當初は方形であつたらうと思ふが、今は後補のせいか圓い。二四七・二四

八にはそれぞれその全形及び相輪を大きくだしておいた。前者は有觸れた寫眞で誰でも知つて居るだらうが、また大勢のうちにはこれまでこんな古い寺の塔なんか見向きもしなかつた向もあらうから、とにかく其全形を掲げて注意を喚起しておくのである。後者は此塔の相輪だが、殊に下の方をはつきり見せるために掲げたのである。此によると下に露盤があり、其上に伏鉢があり、四角な平頭を頂き、その中央から檼が出て、それから上は型の如く九つの圓輪・水煙・蓮座にのれる寶珠に終つてゐるのである。先づ六・七・一〇―一三・三四―三九・四二・四四・四九・五〇・五二・五三・五五・五七・六三―六五・七四―七六殊に九九・一四五等を見よ、この最後に擧げた一四五の次の型式は二四八だとしても大して不都合はない位に似てゐるではないか。それから一五一・一五二・一五九等をよく見た上、更に一六二以下一九三に至る迄、及び二二六―二二九等を觀ると、相輪の點に於いてのみ我國の塔婆と密接の關係のあることが看取できるであらう。二四八に於いて、請花は四角で花瓣はないが、これで若し瓣があれば、前記實相寺石塔との連絡がとれるのである。扱てこれには當初から瓣を缺いてゐたかといふに、二五〇・二五一に示した通り、平頭上の三段くり出しの最上部の側面に2・3・2の孔があけてあるのでみると、當初は花瓣の下部が此孔にからくりをつけてあつたが、いつかとして(又は暴力)亡くなつて了つたと見られる。初めには瓣がなかつたが、後に何もなしでは少し淋し過ぎるから、瓣を取つてようつとして、この部に孔をあけて、からくりをつけたと考へないでもよからう。敢て實相寺ばかりではない、朝鮮の古石塔には四角な平頭に花瓣をつけた例が今でも時に残つてゐる。故に當初は或は其殆んど

總てがさうであつたかも知れない。だから藥師寺のも初めからあつたのが取れて、若しくは取つて、其結果なくなつたのであらう。

孔の数が一面2・3・2だから、各面中央に3つ、各隅に折り曲げた4つづつとなる。即ち中央は花瓣が一枚づつと、各隅に一枚づつで合計八枚となるが、此數と取つけ方とは實相寺のと正に同様である。
二五二は相輪以上の見上げで、つまり此三圖を合せると完全な圖になる。此三圖に現はれてゐる太い線は針金を擦つたもので、寶珠にとりつけた避雷針の導線である。此は少し拙いながまんするとして、嘗て請花のあつたこの平頭は貴重な標本となす事ができるのである。

避雷針の導線は平頭と東側と南側とに取付けてあるのだから、北は逆光線ですりぬきにくいとしても、西側を寫せばこの様な不體裁なことはないのである。併しつかまる所がなくて、私には見込がなかつた。

この寫眞は第三重東側天窓から半身を出し、左手で露盤の蓋の下端をつかみ、右手だけで三脚の上にとりつけたコダック寫眞機のファインダーを覗いてやつと寫したもので、距離が近いので見當を誤り、右の方が惜しいところで切れたり、どこ迄も純然たる素人寫眞だが、負けておいて貰ひ度い。此寫眞をとるについては、實は大迂回をしたので、漸く撮影の承諾を得てからも、中中思ふ様に行かず、二度手紙を出しても埒があかず、思ひ切つて出かけて行つたのに藥師寺寺務所で玄關拂を喰はされかけたり、金

堂の傍にゐる巡查のセコハンだといふ噂のある堂守に案内の僧諸共怒鳴られたり、可なりなさけない目に遇つたりしたが、マアこの様な状況の下に、豫て「社長さん」から、九輪の寫眞をとり塔へ登つたりして、若し間違があつたらどうする。あんな輕業を年寄がするのはもつてのほかだ、以後やめると親切に御注意を頂いてゐたが、あれが平頭の四角な唯一の實例だから、どうしても寫眞がほしかつたので、實は内證で登つたのだから、萬一地獄行の特急へでも乗らうものなら、取返しつかないのみでなく、随分きまりが悪い。だから可なり緊張した結果、固くなり過ぎて一層拙くなり、仰向にひっくり返つたり、右の方が切斷されたりした中途半端の寫眞になつたのである。事情は正に右の通りだから、負けておいて貰ひ度いのである。

同じ奈良時代でも、後期のものになると、これは修補の所もあるが、當麻寺西塔の様なものになつてくるのが普通である(二四)。請花は實はいつのものか知らない。とにかく大正三年の修理以前からあつたのである。西塔は建保七年に大修理をされてゐるから、或は其頃のものかも知れない。併しこの種の花瓣は奈良後期にはあり得ると思ふので、ここに示して解説したのである。

平安前期唯一の意匠のものとして有名な室生寺五重塔の相輪を二五三・二五五に掲げた。此式のは支那には珍らしくないが、日本にはこれだけである。もつとあつたのであらうが、今はこれきり。近來高

野山の瑜祇塔や根本大塔でまねをしたが、こんなのは皆新しいから問題にしないでもよからう。併し室生寺のも全部が古いものかどうかわく知らない。けれどもとにかく請花には花瓣がついてゐる。

平安後期では、早いところで醍醐寺五重塔(二五)だが、元來此塔は相輪が長大で、塔身の半分以上あつても係らず、外觀頗る安定なので有名なのであるが、その上に平頭が圓形なのに花瓣がないので目立ってゐる。けれどもこれも亦當初はあつたと見るべく、其内方に少し無理かも知れぬが、瓣をとりつけた跡とみるべき突起が八方から中心に向つて出でゐる。

鎌倉時代になると、花瓣が一枚の平たいものでなく、輪郭と中央の部分とを残して其間を透彫にして、幾分でも輕快なる感を與へ且つ美的ならしめる様にした(二五)。室町時代亦然り(二五七)。桃山の例はここに示さぬが、前代と大した相違はない。さうして江戸時代になると、例へば眞正極樂寺の例に於いてみる如く、花瓣の形もそのうちの透彫も全く一變して了つた(二五八)。尙ほ平安時代に初めて出現した多寶塔と呼ぶ重層塔婆の相輪は、上部水煙の代りに、下から上へ順に四・六・八瓣の蓮花を以てせる事二六一の如くである。併しこの場合伏鉢や請花には變化がない。

* * * * *

更に我國には「相輪様」と稱する特殊の塔がある。例ひ當初の儘ではないにせよ、延歷寺の最古の型式のもので、つまり層塔の上の相輪のみを地上にたてた様なもの。だからこれには木造の構架はない。

後世になると漸く形が變り、遂に日光の輪王寺のその如きものになつたのである(二六)。かうなつて了つたのは、其元の形が判らないからいけないが、純粹なのは塔本來の形といふべく、其源を印度に發したものが上下にのびたと考へることができるのである。

* * * * *

私はここに四天王寺相輪様の寫眞を挿入しておく、同寺再建五重塔の立標は五月四日だったから、其日から數へると九日目で半端であつたが、五月十二日に行つてみた所、偶ま好晴であつたから、塔の足場の寫眞の東方からとるつもりで、位置を物色してゐる間に不圖見つけたのである。東大門を入れて眞直に行くと右手の扉の際にあつたので、今迄あの邊に用がなかつたし、誰も此種の塔婆の存在を知らしめてくれなかつたので知らなかつた。

此相輪様は其様式からみると、至極新しいものの如くであるが、とにかく輪が九つあり、前述の輪王寺のそれよりは様式が純だし、而も此寺にあるのだから特に掲げたのである。考へてみれば随分變なもので、かうなつては塔婆の本體なる伏鉢はいつか消滅して了ひ、天蓋のみ徒に發達し其數を増して九個となり、夫れだけがただ無意味にたつてゐる。あれが何のためにあるのか知らぬ人も多からうし、また相輪様といふ名を知らぬ人も相當にあらうから、あれで下に伏鉢があれば、正に塔婆の必要な部分を具備してゐるとみてよろしい、といふ事を記しておく。



四天王寺相輪標
(昭和十三年五月十二日)

私は此相輪標を石でつくった珍しい(?) 墓標を阿波でみた事がある。ここに圖示したのが即ち其一で、大正十五年春、徳嶋市観音寺墓地に於いて初めてみたのであった。どうも地方色が充分でてゐるらしい。さうして類例も相當にあるといふことである。だから或はあの邊には普通で、珍らしくも何ともないのかも知れない。とにかく圖でみる様な形のもので、此一例では總高さ地上約八尺、最下に方形の礎あり、礎の上に伏鉢あり、徑約2.8(單位曲尺) 高約1.0、此上に高さ4.0 徑約1.2の相輪がたつ、輪數九、其上に偉大なる請花がある。請花の徑及び高さは伏鉢と略同様で、其上は寶珠に終つてゐる。

年號は刻してなかつたから確定は出来ぬが、型式からみて江戸時代(勿論明治時代を含む)に屬するものである事は判断に難くない。全體としても形は決してよくはない。石工がつくるのだから、程度はこんなものであらう。併しこれには伏鉢がある。これが塔婆の本體である。だから今日各所でもみる相輪塔より、この

徳嶋市所在の拙い墓標の方が、印度塔婆の形式をよく傳へてゐるといへるのである。

飛鳥・奈良時代を通じての塔婆は、何れも石造又は木造で、前者は五・七・十三等の多層であり、三重以下の遺物がないから有無未詳である。

徳嶋市観音寺墓地所在石相輪標型墓標

(物指は曲尺の一尺・大正十五年三月二十六日)



形は決してよくはないが、塔の本體なる伏鉢があり、立派な塔婆の形式を備へてゐる。新しいものだが、古塔と密接な關係がある貴重な標本である。

後者は三・五・七・九等の層をなせる構架があり、前者に比して規模遙に壯大である。前者の相輪は石造で、柄を以て最上層の屋蓋に差込んでゐるのが普通である。ところが後者の夫れは常に金屬製であつた。尤も法隆寺に

は石製露盤の様なものがあり、*又先年奈良縣邊山郡帶解村(大字山、小)に於いて石製の相輪が発見された。これと關係して其寸尺が適するといふ點と、石質が同じだといふ點とから、或は此はやはり此廢寺にあった木造層塔 露盤であつたらうといふ推定が下されてゐる。其大きは一邊約¹⁰高さ約⁷⁰(何れも單)1. (位曲尺)3. であり、平頭では少し大きすぎるから、これは露盤説に賛成するとして、扱てさうすると寶珠は圓く上が尖り、最上部に位置してゐたとしても、其他の伏鉢・請花・水煙ほどの様な形でどの邊にどんな風においてあつたらうか。

此石製相輪は、其発見されたところは、檨礎と四天柱礎とを除去した穴が一つになつてあいて居り、且つ瓦積の基壇が残つてゐる上に、瓦片も無數に散布されてゐるから、木造層塔に用ひられたもので、其塔の層数は九輪の寸尺を比較研究の結果、總高七十五六尺のもので三層であり、心柱は礎石(これも亦たか)の上から建ち、柱底には何物かを埋藏してあつた、といふ想定が下されてゐる。

此石製相輪の発見より、ひいて遺跡の細心なる調査が行はれ、結論として木造層に石製露盤(廣義)が上げられてあつたことになつてゐる。私は實地もみてゐないし、自分では少しも調査をしてゐない。ただ相輪の殘闕をみたのみであり。それだけでこんな事を輕輕しくいつては不都合かも知れないが、當初

* 奈良縣史蹟名勝天然紀念物調査會第十回報告 所載「添上郡帶解町ドコロ廢寺石造相輪等調査」參照。
** 同報告書七四—七八頁

その殘闕をみた時から、あの様な石製の頗るきゃしゃなものを、何が故に木造層塔に用ひたか判斷できかねてゐたのである。輪の大きは元より下から上まで同大ではなかつたらうが、とにかく直徑⁶⁰—⁶⁵、(單位曲尺)高さ³²—²⁹、中央檨の通る所の徑⁷¹—⁷³、六本の輻で支へられてゐる様な、薄く大きく造つた而もあの様に脆い石では、僅かの震動にあつても、破損の虞が多分にあるし、よしや震動が來ない迄も、相當に高い塔の上で檨に挿込んでいくうちに、ほんの僅かそこいらへあつても金屬とは違つて直に壞れ勝ちである。

その上に現場には前記の如く檨礎と四天柱礎とを除き去つた穴が一つになつてあいてゐるといふだけで、側柱礎の穴の事は何も報告されてゐない。だから或はこれは初めからなかつたのではあるまいかと想像するのである。若し初めからあつたのなら、一つ位は残つて居さうなものである。残つてゐないとしても、痕跡位は尋ね得たのではあるまいかと思ふ。併し若し側柱が當初からなかつたとなると、中心に一本と其四隅に一本づつ、つまり五本の柱が立つてゐたことになる。さうして構造としては、上の方で檨と四本の柱(即ち控柱)との連絡は充分とれた筈である。さうするとこれは或は特殊の相輪塔ではなかつたらうか。特殊といふのは單層の至極簡單な方一間の建物があり、料枳は三料かせいせい出組位で、寶形造本瓦葺、内部床は塙を敷きつめ、屋根は本瓦葺としたもので、出土の文様のある鏡瓦・軒瓦は、蓮花文様を有する鬼瓦と共に、此屋根に用ひられたとするのである。

但し假にさうであつたとすると、露盤・覆鉢・平頭の様なものは、どのあたりへおいたかといふ事を

考へなければならぬ。前記徳嶋市所在の石相輪なら何でも無いが、組立てるものになってくると、さうしてこの位大きくなつてくると、擦でも相當なものが入用だし、隨所に然るべき意匠をせねばならぬし、推定復原も簡單にはできかねるが、昔の人でもあの様な石の大きな薄いものを高い所へ用ひたとは考へられぬので、右記の様なことを想像してみたのである。さうして石製の伏鉢や平頭は、無くてもすむから或は初めから無かつたかも知れぬ、が若しあつたとすれば薬師寺東塔の如きものであつたらしく、實相寺の夫れの様は大體が金囊型ではなかつたらうと思はれる。水煙が若しあればこれは實相寺式のであつたかも知れぬが、これは或は二六一の様なものに類似してゐたかも知れない。

以上の想像がゆるされるならば、喜田博士の説の様に、相輪様は既に早く飛鳥時代からあつたと見る事ができると思ふ。三重なり五重なりの構架の上に相輪をあげたのは、甚だ立派でよろしいが、築造に時日と費用とが多くかかる。相輪だけなら至極簡單ですむ。夫れが石造ならば一層短日時で出来るであらう。佛教が渡來して間もない時代の寺といふのが、普通の民家と大して變りがないとすれば、塔もやはり相輪様の様な印度塔婆の原型に近い——がみた所は大分に變つた——ものであつたと考へられぬことはあるまい。さうしてその相輪に金銅製と石製との二種があつたとみてはどうか知らん。さうしてその形式が少なくとも奈良時代前期位まであつたが、其後期に唐式伽藍の建立が隆盛なるに連れ、三重以上の構架の上に相輪をのせる様になり、相輪ばかりの塔婆は淘汰されて了つた(?)の、再び平安時代になつて支那から傳來した(?)と假定するのである。この事は何も今ここに書き連ねないでもよ

ろしいが、どうも疑問が氷解せぬので、序に述べてみた迄のことである。

一三三、結 尾

印度及び錫蘭の佛塔は、(一)伏鉢・(二)平頭・(三)相輪(寶蓋)から成つてゐたが、小型のものは方形の臺座へのる様になり、支那に入りては木造(又は石造或は磚築の)の構架の上におかれ、朝鮮を経て我國に傳へられたものであるが、同時に少しく形を變へたが、相輪様として原型も又傳來したものの如くであつた。支那には今日に於いては殆んど總てが磚築又は石築の八角多層の特殊形式のもので、間間變形印度式塔婆なる謂はゆる喇嘛塔もあるが、二四二の様な木造層塔は跡を斷つたようである。朝鮮には僅に法住寺捌相殿があるだけ。又石を以て木造を模したものならば、古く百濟時代にあり、今に二三を存してゐるが、新羅以降は型式が全く變つて了つて、最早石を以て木を模したと見られなくなつて了つた。然るに内地では多寶塔(塔大)・三重塔・五重塔と稱し、夫れ夫れ二・三・五重の構架の上へのる相輪として、長大にはなつたが原型がよく保存されて居り、また同時に相輪様といふのもあつて、よく印度佛塔の倣を存してゐると見られるのである。而してこの二・三・五重の構架は、ネバル國の一・三・五重の印度教祠とよく似てゐるところが甚だ面白いのである。尙ほ此種ネバル式のは、各重の屋根が藁葺ではあるが七重のバリ嶋に、十三重のジャツにあるが、書物に挿入の寫眞版が明らかではないのは惜しいことである。

此巡禮記の緒言をかく時分には、こんなになるとは思はなかつたのに、かいてゐるうちにいろいろになり、遂に吉例により緒言と結尾とうまく一致しなくなつてしまつた。つまり終始一貫もしなければ首尾相應もしないものが出来上つたが、印度の佛塔なるものは、大小の差こそあるが、お椀を伏せた上に、いくつかの輪を嵌めた棒をたてた様なもので、形こそ變つたが、日本の塔はそれが何層かの木造構架の上のつた迄で、同じものだといふことは讀者諸君も了解してくださつたことと思ふ。四天王寺の近所の塔といへば、勝鬘院の多寶塔で、あの相輪は二六一によく似てゐて、水烟こそないが、露盤・伏鉢(これが塔の本體)・請花に於いて、前述の通り印度の佛塔を髣髴してゐるのである。

大阪市の四天王寺塔婆にせよやはりさうである。四天王寺は塔婆が中心で、塔婆が即本堂である。だ

* "EAST FOR PLEASURE" 第140頁に面せる圖版に、"A Pagoda Temple"とじて掲げてある。此圖版にもう一つ遠景に寫してゐるが四重だけ見えてゐる。多分これは五重であらう。何れも木造らしく見える。

** "JAVA AND THE EAST INDIES" 第115頁に面せる圖版のは七重及び十一重でこの方は二つとも磚築らしい。

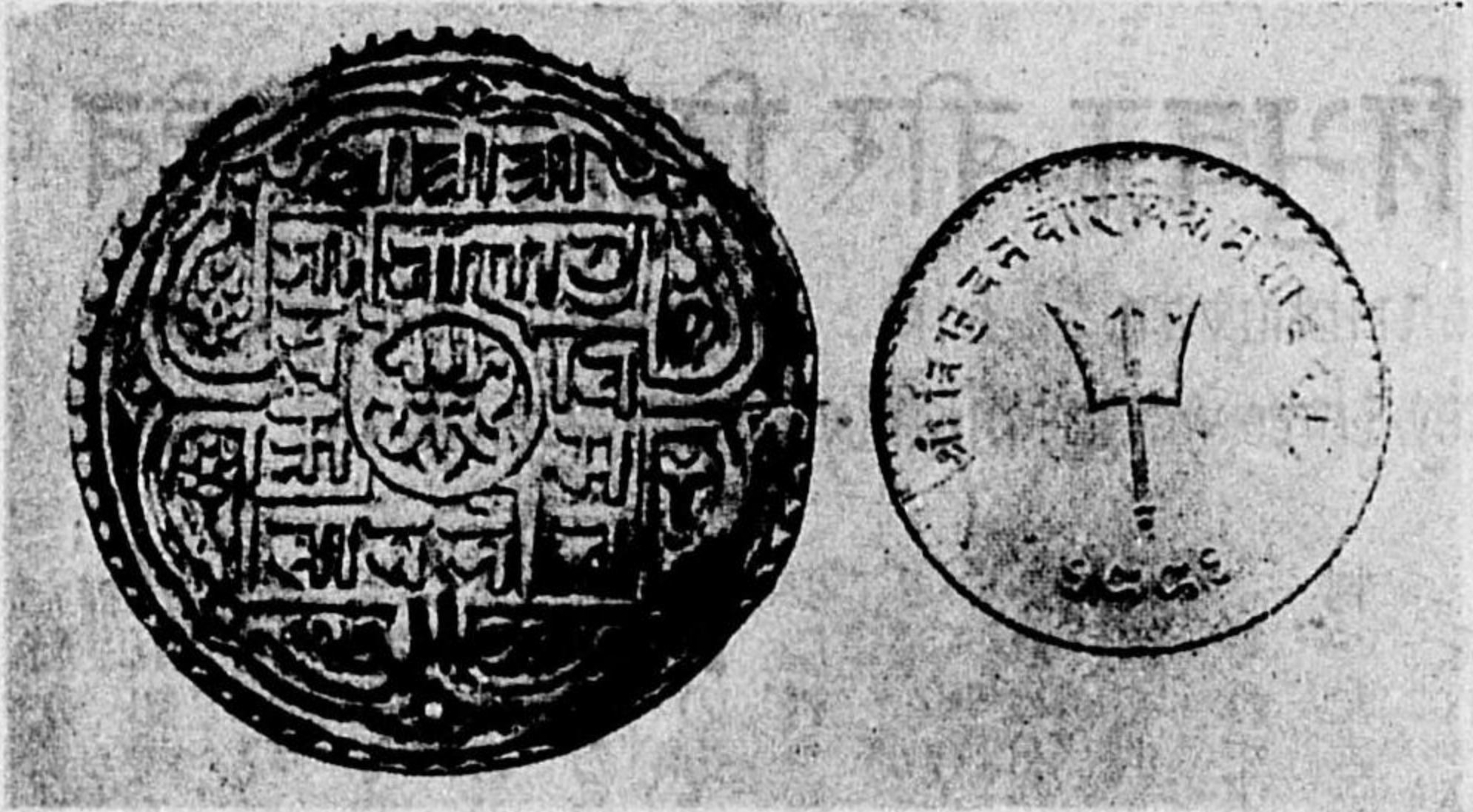
からどうしても再建せねばならないとは、大風の爲め前塔が倒壊した直後に故木下大僧正が述べて居られる。印度でも錫蘭でもネバルでも、何れも寺といへば塔婆中心で、二三の例をいへば、サンチでもアナラジャブラでもポロンナルワでも、スワヤムブナート寺でもボドナート寺でも、殊に此最後のものは塔の周圍に圓形の村落ができてゐるのは、この事をよく物語つてゐるのである。四天王寺が塔婆を中心としてゐるのは、最もよく其據で來たところを傳へてゐるのである。(昭和十三年五月三十日稿了)

上下冊を通じ、本文中に挿入せる建築の寫眞は、時には記事の補助として、又時には此機會に佛寺以外の宗教建築及び非宗教建築の如何なるものなるかの大體を示すために掲げたのである。故に其解説は僅に一頁の殘部をあてたに止り、從つて勿論不十分であるのは免れない。此等を詳細に記すのは此書目的ではないのである。

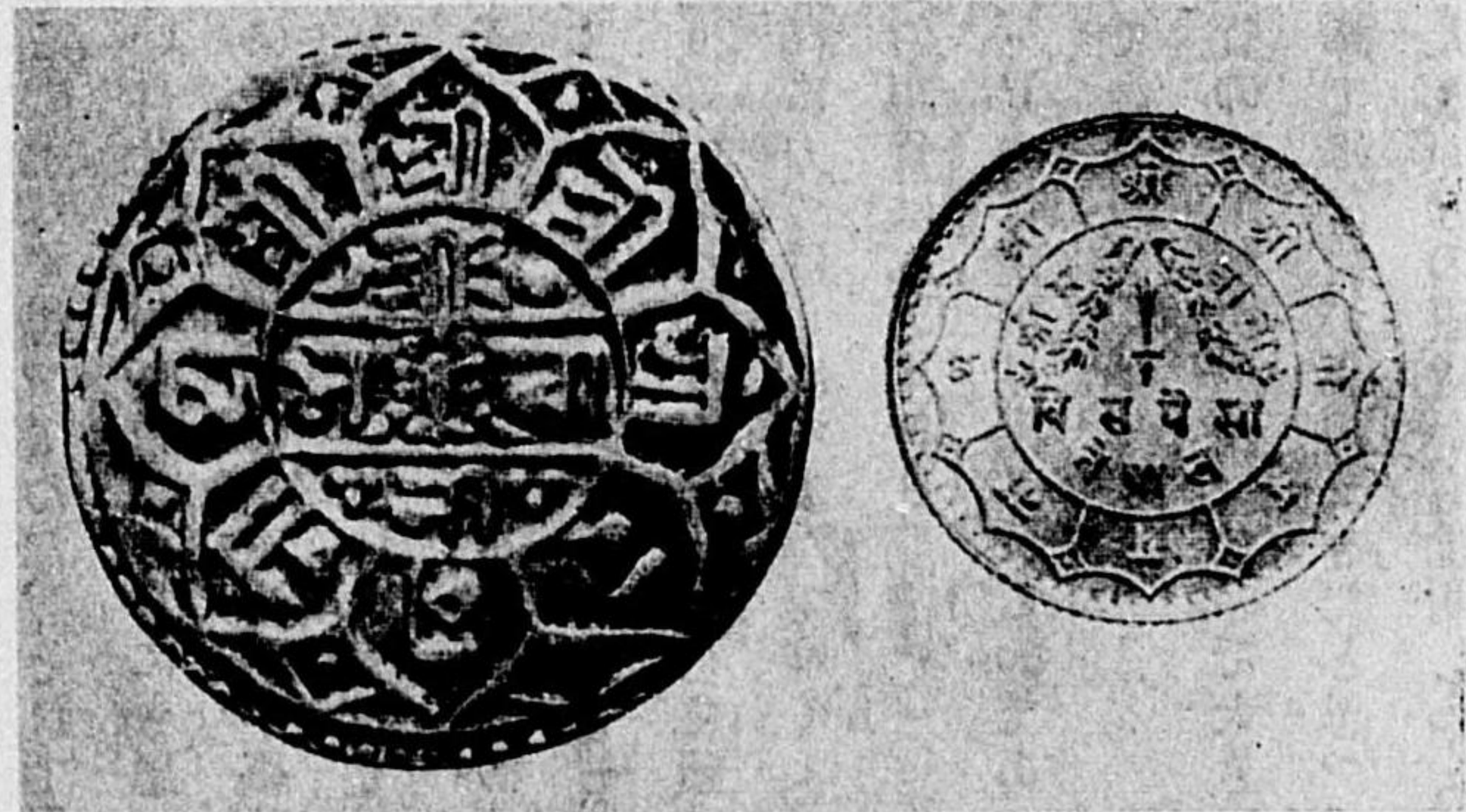
(昭和十九年九月十日追記)

附録
ネパル國の蓮花貨幣に就いて

大脇正一



第一圖ノ一



第一圖ノ二

附録 ネパール國の蓮花貨幣に就いて

大脇 正一

ネパール國は印度の北方、ヒマラヤの高原にある一小獨立國である事はとくに知られてある。而して西藏と同じく東洋に於ける鎖國で秘密國であるとせられてゐる、それで入國は非常に困難な國情にある。

昭和十一年の頃天沼博士は入國を達成せられた、それによつて私共はあかるくせられたる事は洵に愉快で欣快である。

恰も歸朝せられた際頂戴いたしたのがこの Nepal より將來して下された bis paisá である、頂い

श्री त्रिभुवन बीर विक्रम शाह देव

shri tribhuvan bir vikram shah deo
majesty three world mighty prowess king king

た時から珍重この上なく思つてゐた、それで何とかかいてあるのか讀みたいと思つたが知識のない自分には到底讀めさうにも思へなかつた、唯蓮華紋の様式や文字の配置が我が國の平安時代後期の當麻寺の中臺八葉院の曼陀羅の鏡瓦によく似てゐると思つて興味を多くそゝられてゐた、戴いてから可なり月と日がたつた、その間人にもみせ自分も何度もみた、そして何とかして讀んでみたいと思ふ欲望はつゞけられてゐた、ふと小 Paisá の方を見ると nepál の文字が見付かつた、それは大きい銀貨の方ばかりみてそれに注意を集注して讀めないと思つてゐたからでもあらう、少し判つたそれに力づけられて讀んでゆくとやうやく解讀する事ができた様である、それでこの銀貨は devanāgarī 字によつてかゝれた hindi である事が判つた、それは S に H・P の言葉が見出されるのであつて、印度語を學んだ人ならば苦もなく直ぐ判つたであらう。

それで小銀貨の方が解決がついたので大きい銀貨と對照してみた結果はすべてが判つたと云ふ譯ではないが判讀できたと思つてゐるのである。

それで先づ大きい方の銀貨から説明しやう、それは第一圖の一二の左の方である、一の一左方をみると四瓣の蓮華紋を連珠紋がかこみ、蓮華紋一ぱいの方格文様の上部の外區に shri の字が三つある、そして方格文様の中央に圓を描き、その中

श्री श्री श्री गोरग्र नाथ

shri shri shri gorāgra nath
majesty majesty majesty Lord

श्री भवानी

shri parvati
majesty

बिस पैसा

bis paisá
lotus coin

नेपाल

nepál

一ノ一右方であるに比べると、shri の次の ri の一字が省略せられ、方格様内の三四字目の二字が異體であるが、三字目の字は bhuvani の ni に均しい字に解されるし、四字目の字は五字目 bir 字が bi の下に + になつてゐるので四字目が一字字餘りとなる様であるが、それはあつても差支へはないと思

に飾をもつ三叉戟紋を出して、第二圖ノ一の表を見られると表よりこの方が shri 字が二字餘計にある、即ち shri の三文字がある、それを除いて方格文様内に十二の文字がある、それは上部左から右横に讀む様になつてゐる。表は二つ共第一圖の一二の右方の小銀貨によつて判讀しそれによつてかいたのである。それで表二ノ一はこの shri 字三字に對して一字である、そして shri 字を除外して字數の表は十三個であるが、この方は方格文様内の字は十二である、それは表第二圖ノ一即ち小銀貨

へる字であるし、それで文章の意味は同じであるとみてよいであらう。

又下部方格文様外に左右に二字づゝ数字が割かきになってある、それは 1733 とよまれる。

それから第一圖ノ二の左は、一ノ一の左の反対面であつて、同じく珠紋帯が八葉の蓮瓣をかこみ、その八瓣の中に第二圖ノ二の上の章句の shri shri shri goraganath の八個の文字が一つ一つの蓮瓣の中に入れてある、それが goragra の gra の字が異體であるが、これも意味は同じであると思つてよからう。實に短文であるが旨いものである、詩的感興をそそられる、子房は上中下と三段に區分せられてあつて、上段には shi の字がある、これは小銀貨の方に比べるとすべてが古體に出來て、書體も配字も亦さう云ふ風に思はれる、上段の部分の真中の shi の字の左に月を出し、その字のすぐ右脇に数字がある、これは 〇の数字であつて、それは shi 字を三つ重ねると云ふ意味にみるべきである、その横に日象がある、中段中央には短劍紋を彫り、それに珠紋が配してあつて、その左方には bha 字があつて、右方には va がある、下段には ro 字を真中にしてその兩脇に三つ星が記されてある。

この方の銀貨には bis paisā と nepāl の文字はない、即ち第二圖ノ二の上二段がある譯である。この銀貨は鑄込仕上げであつて、直徑二種六粒である。

次は第一圖一二の右方の小銀貨である、第一圖ノ一右は第二圖ノ一の表の章句が上方に半圓形にかゝれてあつて、中央に三叉戟がある、その下に 1991 と思はれる数字がある、この章句の末尾の deo の

語を何故に king としたかと云ふ事について一寸説明いたしたい、それは前語との關係で語呂の具合がよろしいのでさうしてみた、この言葉には deity とか god と云ふ意味があるのであるが、語呂の上からそれは king king と重ねた、又 king god となすと意味がよい様であるが音がかたくなるやうで感じがよくないからかやうにしてみた、語學上は知らぬ。

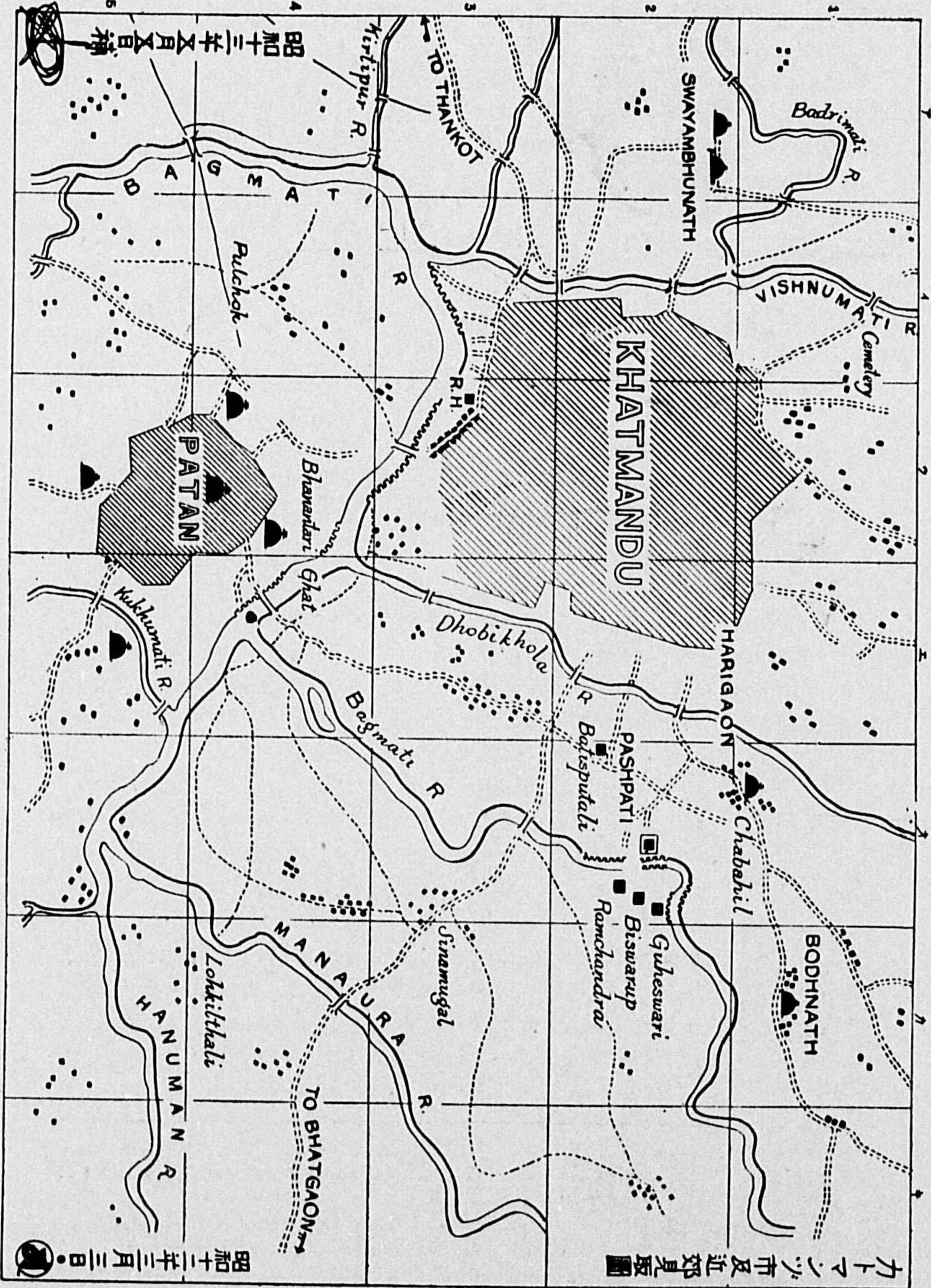
それから第一圖ノ二の右方はやはり八葉の蓮華紋で、第一圖一の右方の銀貨の反対面である、前銀貨の蓮華紋に比較すると子房の面を廣くしたために蓮瓣がやゝ扁平になつてゐる、やはり平安朝時代後期の蓮華紋にやゝ似てゐる、之は偶然の一致であると思はれる、表第二圖ノ二の上方の文字が蓮瓣の中にある字である。 shri shri shri goragra nath であつて、 goragra は himālayas とお思へるが、これは Siva であると思へる様である。子房中には中央に劍を置き、劍の頂點の邊から下向放射狀に葩をつけた沙羅樹の枝がある、その沙羅樹の雙枝左の方に shri bha とあつて、右に va ni と割りかきになつてあつて、即ち parvati は wife of shiva である。その沙羅樹の双枝の下にやゝ大きく bis paisā とあつて、その下に nepāl とある、この銀貨は打出し仕上げで直徑一種八粒である。

それで銀貨の寫眞は面積で約三倍大である、大小二個のこの銀貨の文字は用字に少しの違いがある、それは年數の差をあらはしてゐるので面白い、意味は同じであると見てよいであらう。尙ほ短文の章句を八葉の蓮華紋にかく配した事は敬意を表するに充分であると思ふ。

昭和一四、二、一八日稿

圖
版

一六〇—二六二



カトマンズ市及近郊見取圖

昭和十三年三月三日

一六〇 パーシバル・ランドン著「ネパル」所載の地図より略製したものである。

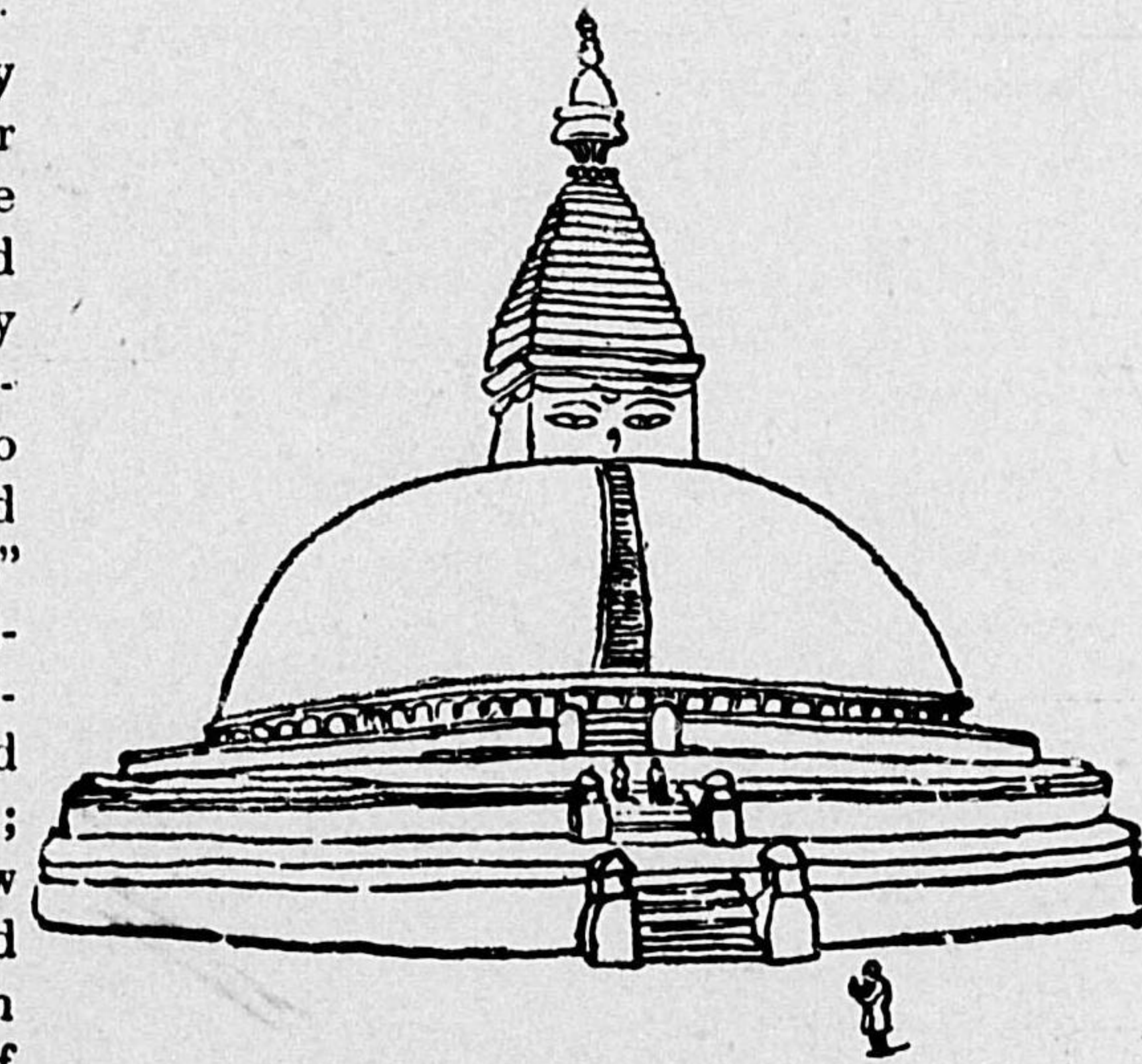


Temple of Swayambhūnāth, Nepal. (From a Drawing in the Hodgson Collection)

一六二 スワヤンブナート寺 (H. of I. & F. A. 挿圖複寫)

この圖は一八〇と並べてだした方が、現状との比較がとれていいかも知れないが、見取圖は何といつても見取圖で、實物とは大分異なつてゐるから、反て前圖と比べるに便なるため、ここに出しておいたのである。そこで先づ大體現状との相違をかいてみると第一伏鉢の形、第二に其背面の階段、第三に奉獻小塔婆の數である。現在は何かいろいろのものをたててあるので、大塔の壯觀は大分減殺されてゐる。恐らく當初は此等の小塔婆は一基もなかつたと思はれるが、その時分はさぞよかつたらう。相輪の數もこれには明瞭に 12 あるが、最上輪は大變に薄いやうである。日本流だと 11 か 13 の方がいい様である。而も現在は 13 の様だから、此圖は 1 輪少くかいたのではあるまいか。

The *Ch'ortens*,¹ literally "receptacle for offerings,"² are usually solid conical masonry structures, corresponding to the *Caityas* and *Stūpas* or "Topes" of Indian Buddhism, and originally intended as relic-holders; they are now mostly erected as cenotaphs in memory of Buddha or of



FUNERAL BUDDHIST MONUMENT
(A *Ch'orten Stūpa* or "Tope").

canonized saints; and they present a suggestively funereal appearance. Some commemorate the visits of Lāmaist saints; and miniature ones of metal, wood, or clay often adorn the altar, and sometimes contain relics.



EDLEVAL INDIAN
BRAZEN CAITYA.
(from Tibet.)

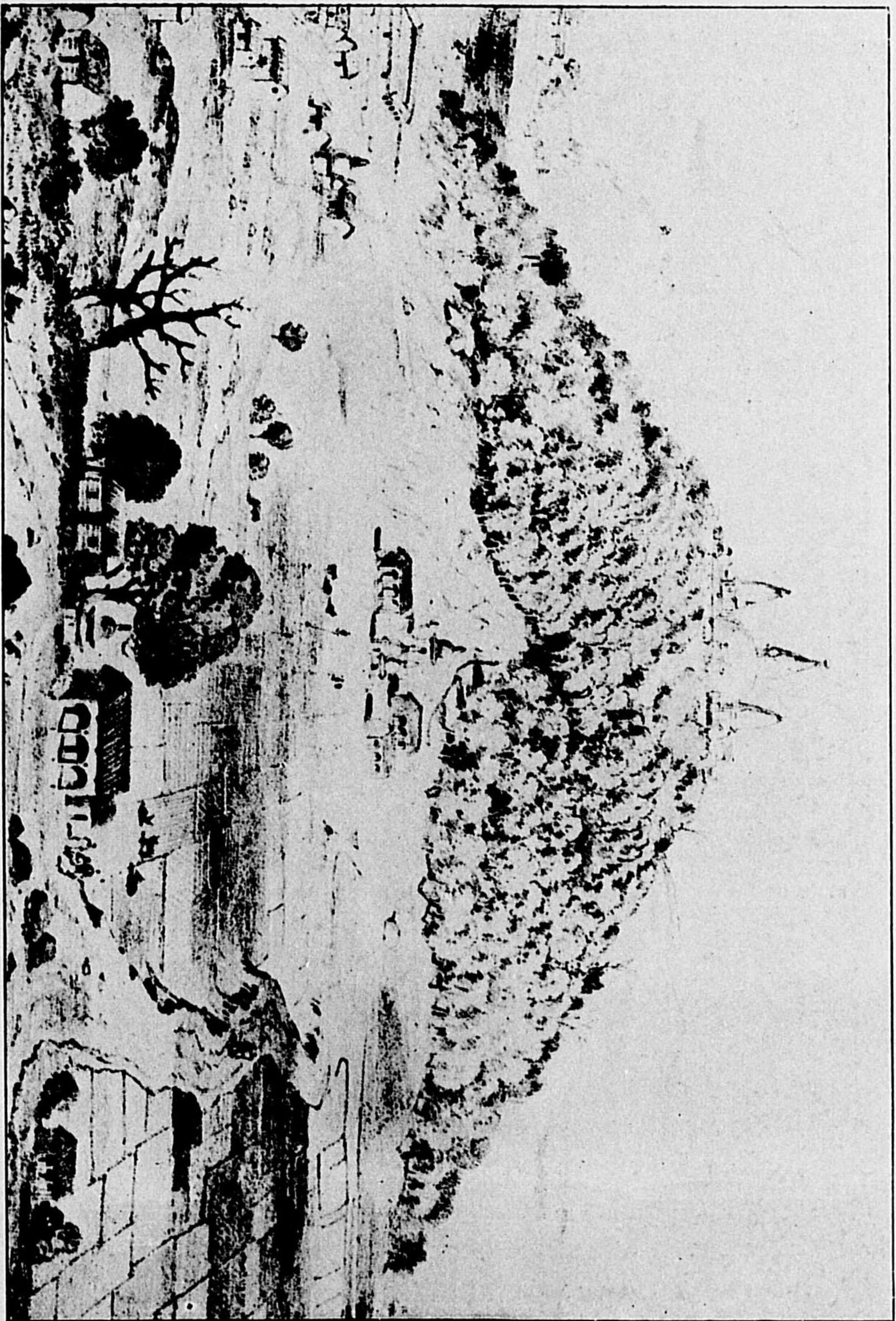
The original form of the *Caitya*, or *Stūpa*,³ was a simple and massive hemisphere or solid dome (*garbha*, literally "womb" enclosing the relic) of masonry, with its convexity upwards and crowned by a square capital (*toran*) surmounted by one or more umbrellas, symbols of royalty. Latterly they became more complex in form, with numerous plinths, and much elongated, especially in regard to their capitals, as seen in the small photograph here given.⁴

¹ *mCh'od-r-ten*.

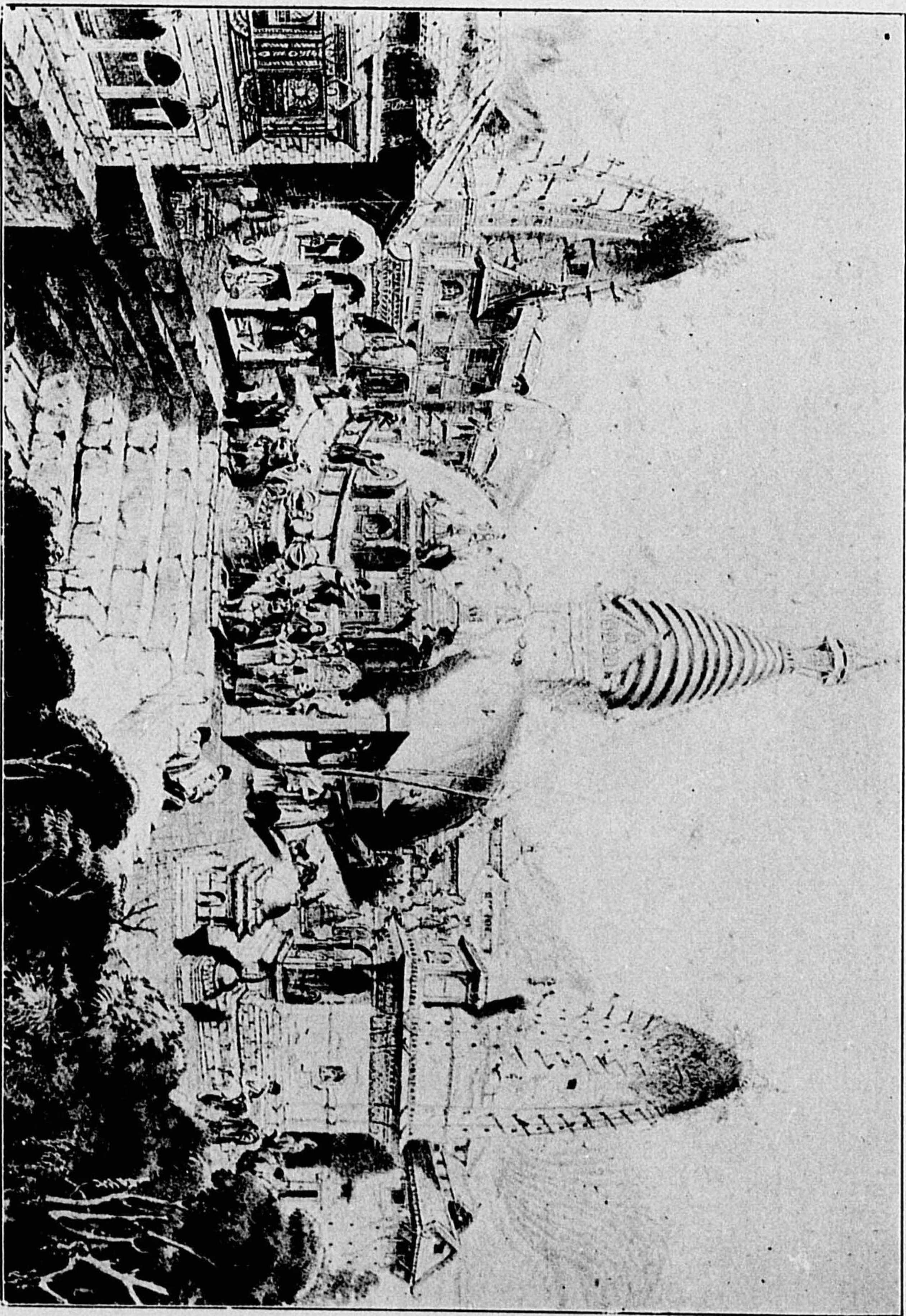
² *Skt., Da-garbha*.

³ Cf. HODGS., *II*, 30, *et seq.*, for descriptions; also his views about the respective meanings of "*Caitya*" and "*Stūpa*."

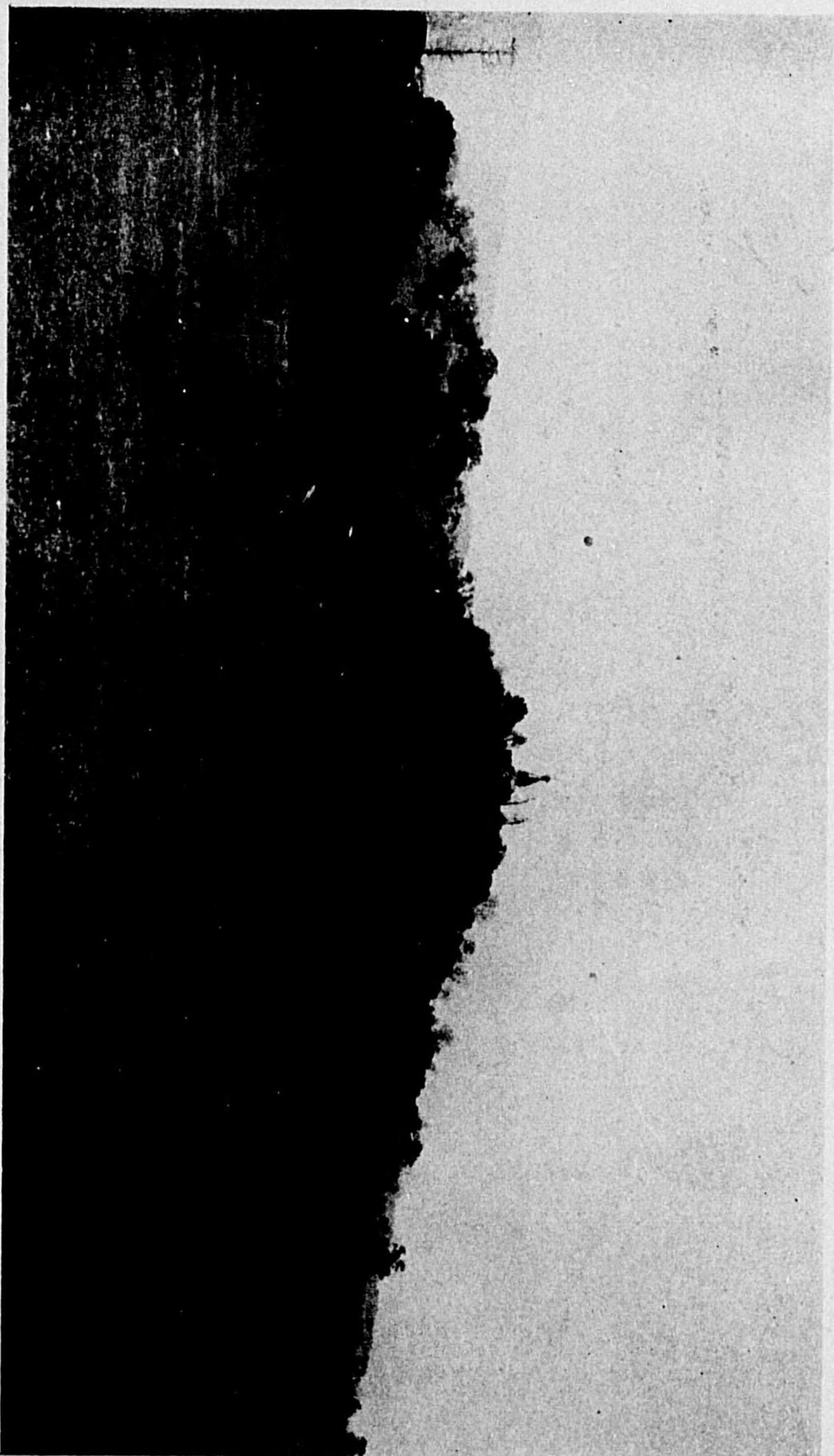
⁴ In Mr. Hodgson's collection are nearly one hundred drawings of *Caityas* in Nepal; FERGUSON'S *Hist. Ind. and East. Arch.*, 303, FERG. AND BURGESS' *Cave-Temples*; also CUNNINGHAM'S *Bhilsa Topes*, p. 12.



一六三 Daniel Wright 著 "HISTORY OF NEPAL" 所載 圖版第八複寫。
塔が大分誇張して描いてある。實際の割合は一六五参照の事。



一六四 前同書所載圖版第四複寫
繪だからこんなのが描けるので、低空飛行でもしなければ、こんな寫眞はとてもとれない。



一六五 スワンプ丘全景 共一 (昭和十一年三月十六日)

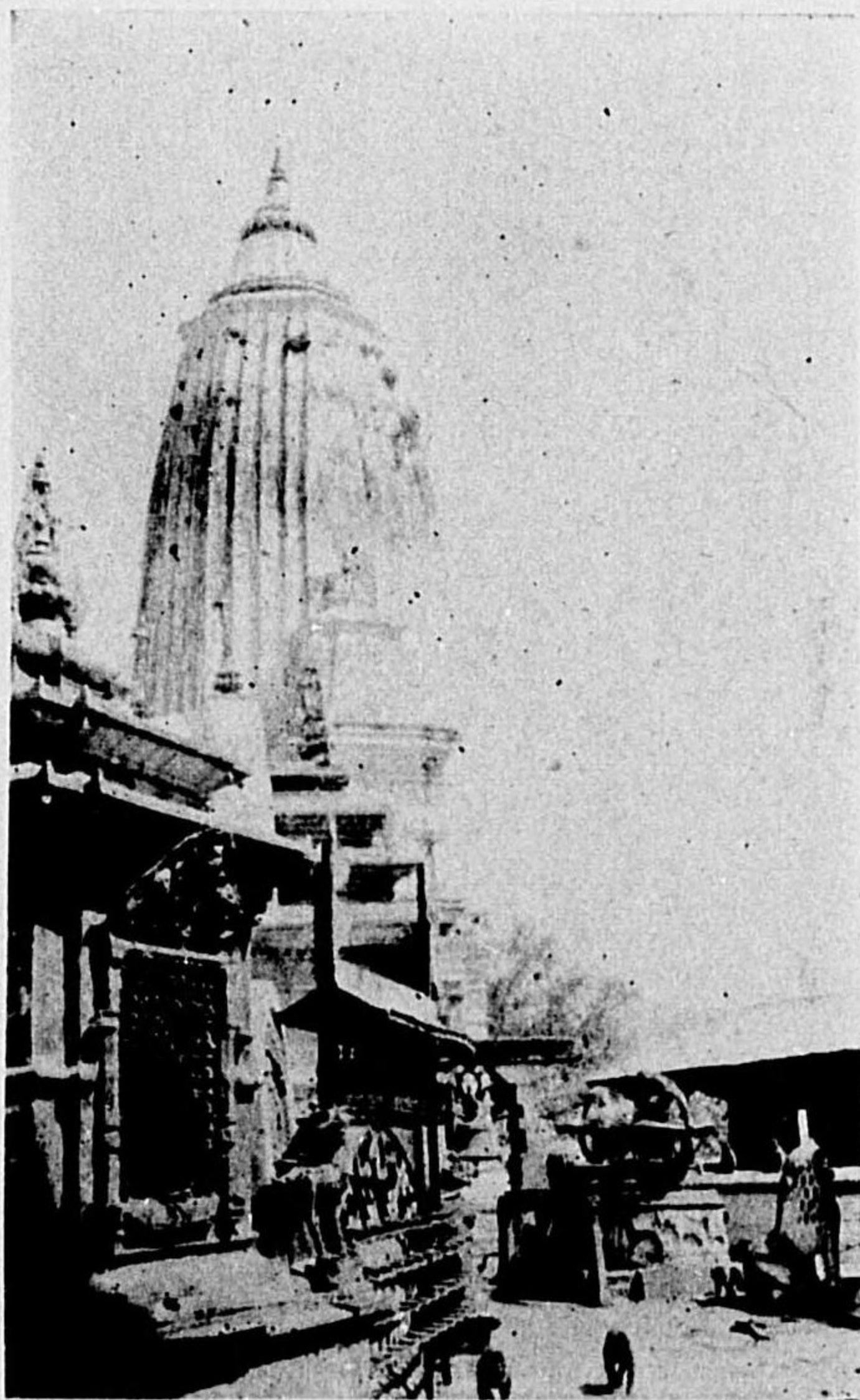
午後行ったものだから日が西方にあったため、正面からの写真がとれず、そのため一六三と比較することができないが、南方から此小丘と上の大塔との有様をよくみることが出来る。前景の平地は陸軍の射撃場である。三月二十日の午前再び行った時は、丁度實弾射撃をやっていたので、幸ふじて後方へまはることを許された位で、遂に希望してゐた正面からの写真はできませんでした。



一六六 スワンプ丘全景 共二

前圖左方近景に森が見える。其森は實はまあ並木の様なもので其下に道路がある。徒歩なら射撃場を突切った方がいゝが、馬車なら一度この道路まで出て、さうして目的物に近づくのである。其一部が即ち此圖に現はれてゐる。この道路の突當りを右へ廻れば正面、左へ廻れば丘の背面へ出て、何方からも登れるが、正面は多くの石階があり、背面は斜面になつてゐて相輪の頂上から樹の生へた古色蒼然たる小塔婆もある。

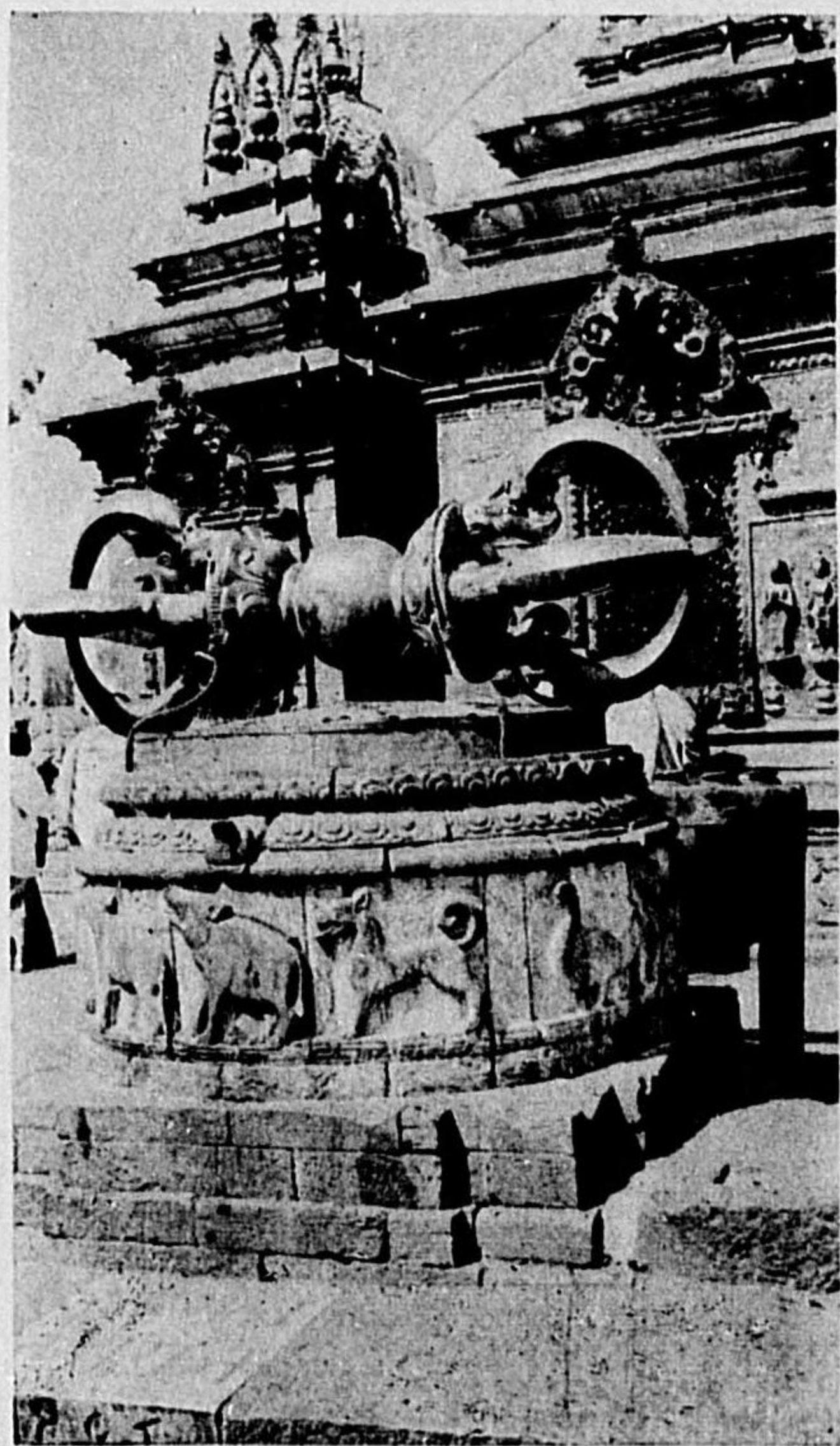
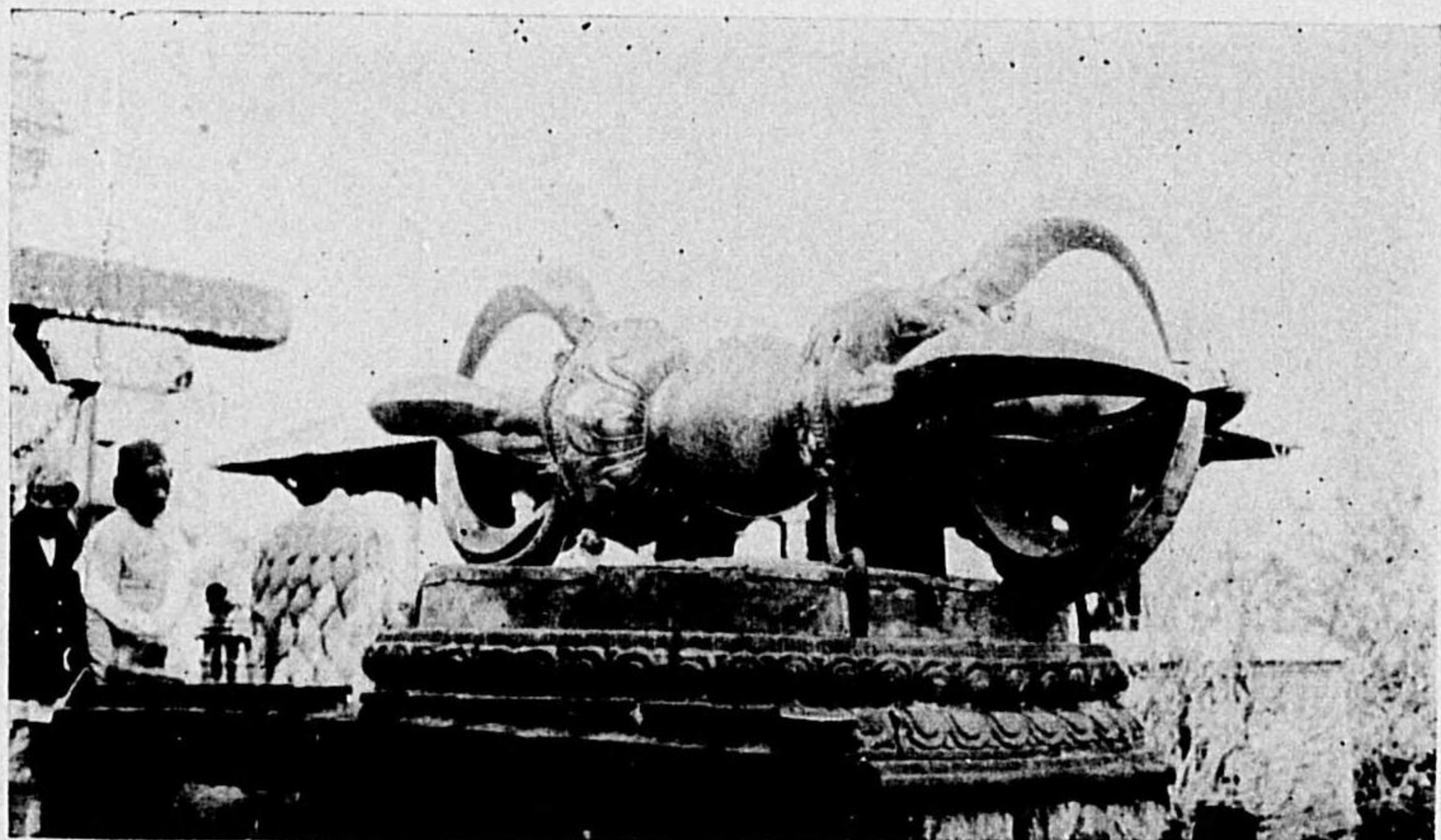
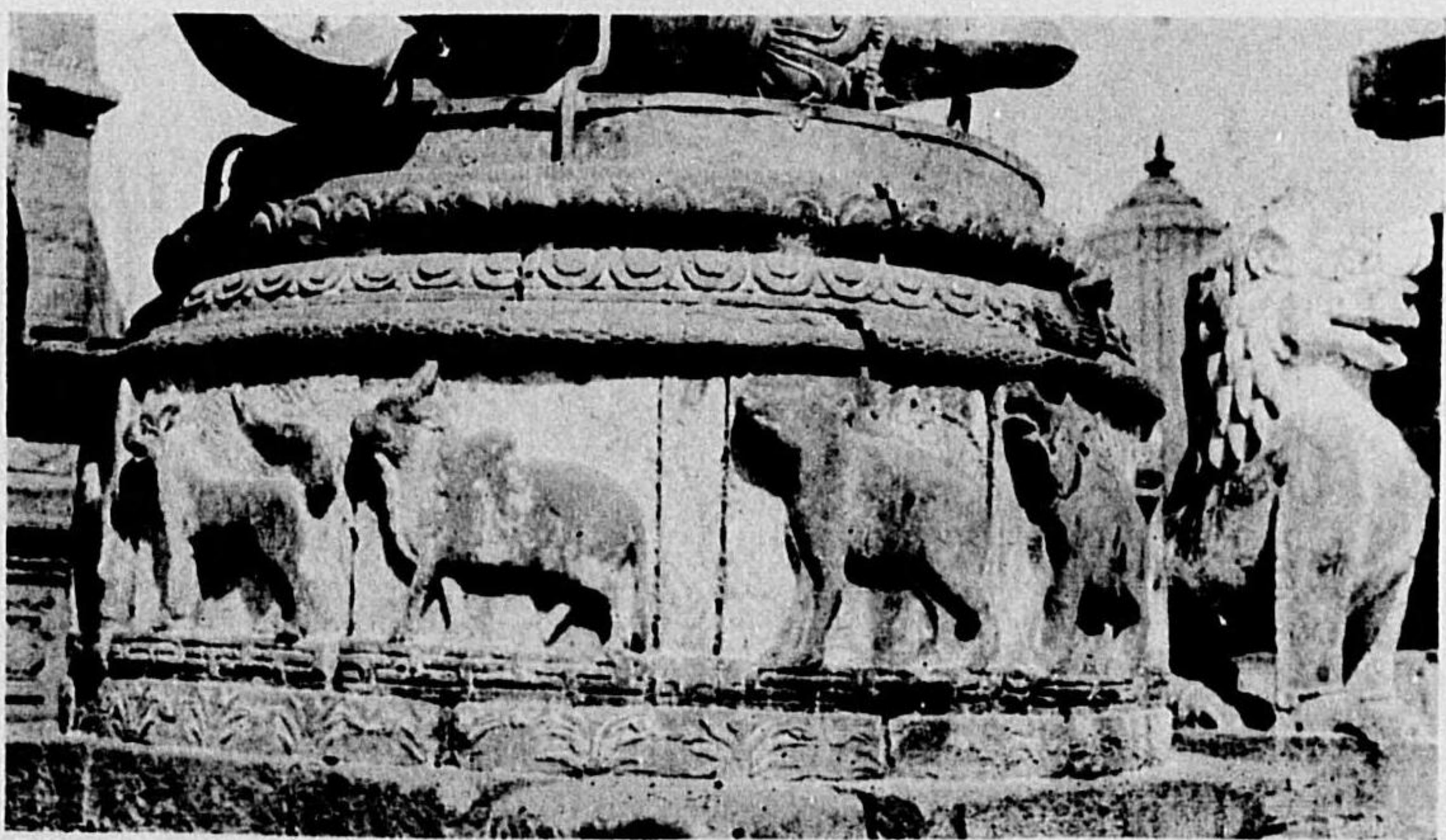
(昭和十一年三月二十日)



上。一六七 スワヤンプ丘正面の一部
下。一六八 同 金剛杵臺

(昭和十一年三月二十日)
(昭和十一年三月二十日)

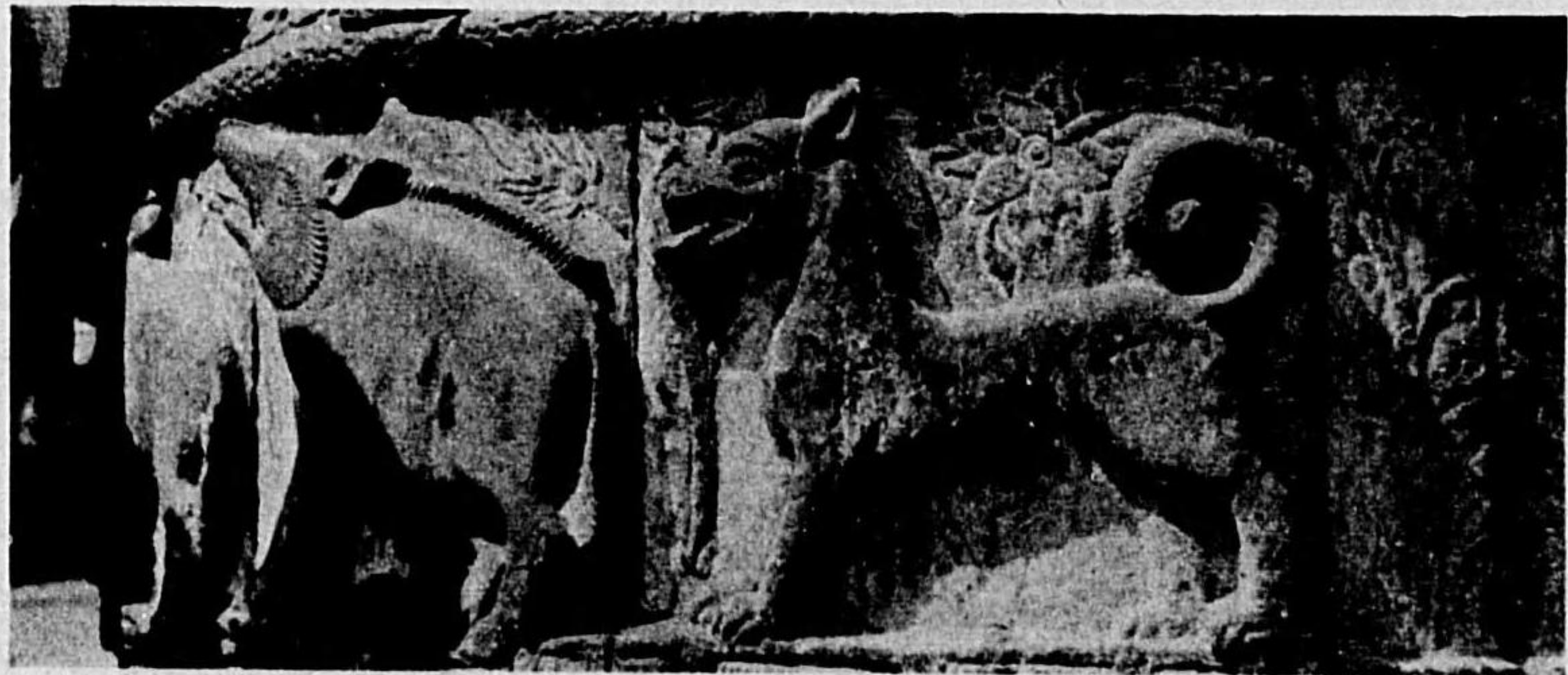
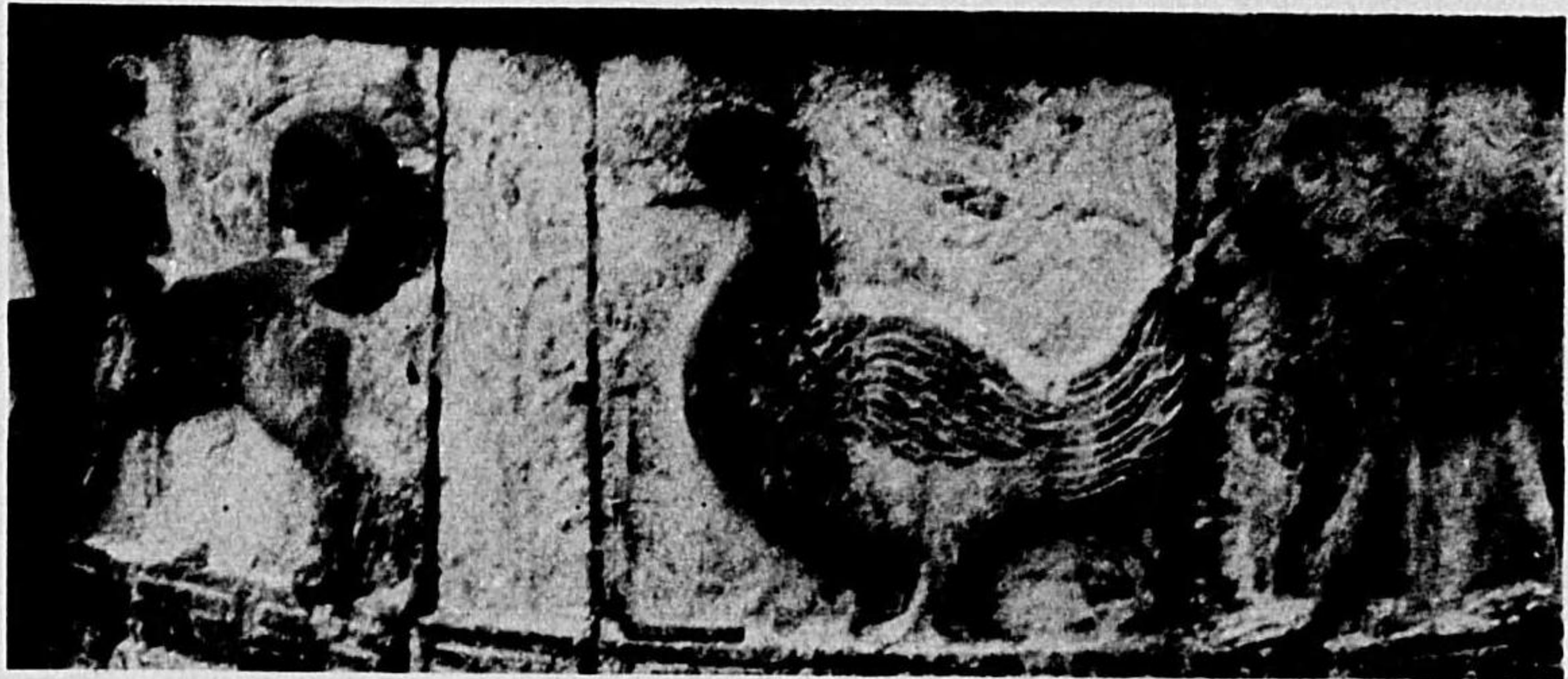
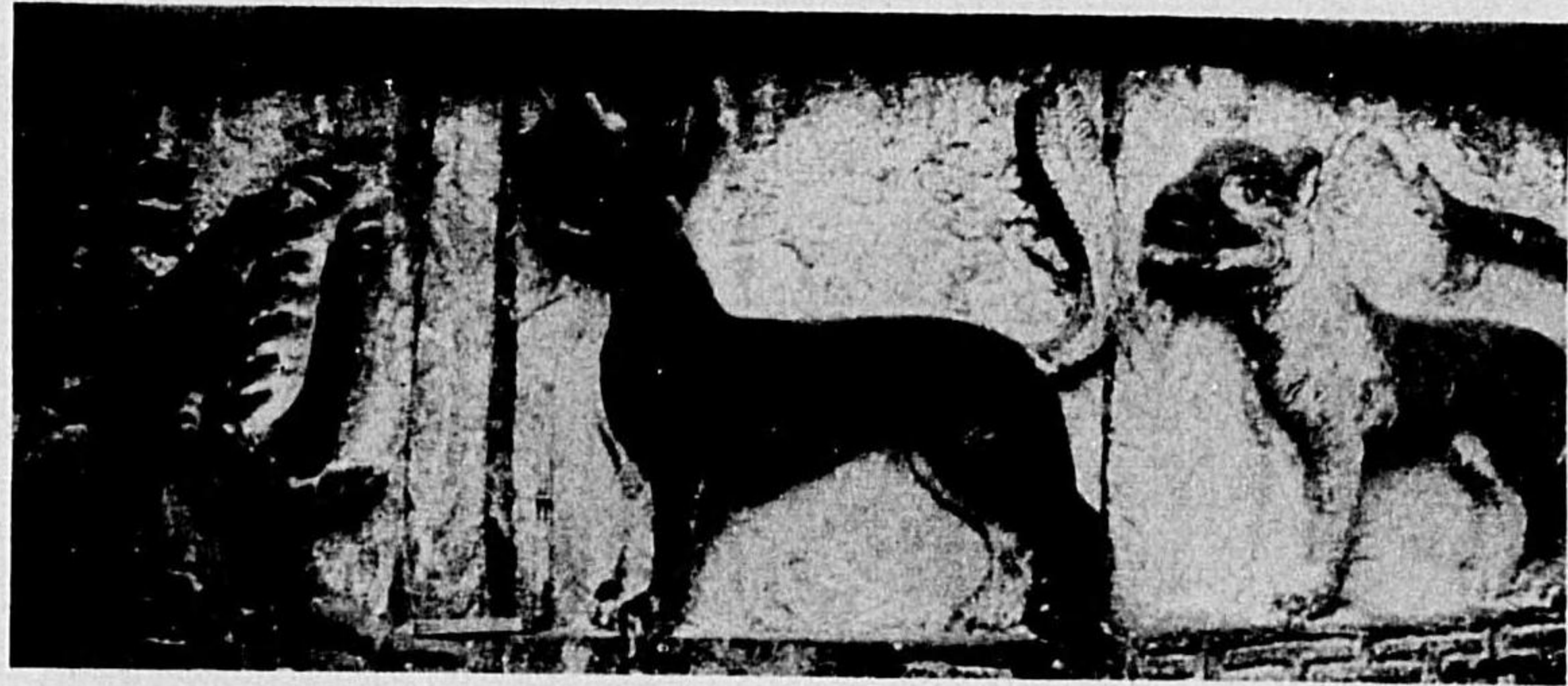
スワヤンプ丘を正面から登りつめると壇上に達し、正面に大きな白色の大塔が建つてゐる。大塔の前には圓形の臺があり、其上に偉大なる金銅の五鈷杵がのせてある。寸法は測らなかつたが實に大きく、恐らく地球上に現存するものでは、最大な實例であらう。次頁上圖背景の人物とは、少しく距離があるが、大體の見當をつけ得るであらうし、又一七一・二・三・四等に添へてある物差(次頁へ)



上。一六九 スワヤンプ丘上の金剛杵 其一
下。一七〇 同 其二

(昭和十二年三月十六日)
(昭和十二年三月十二日)

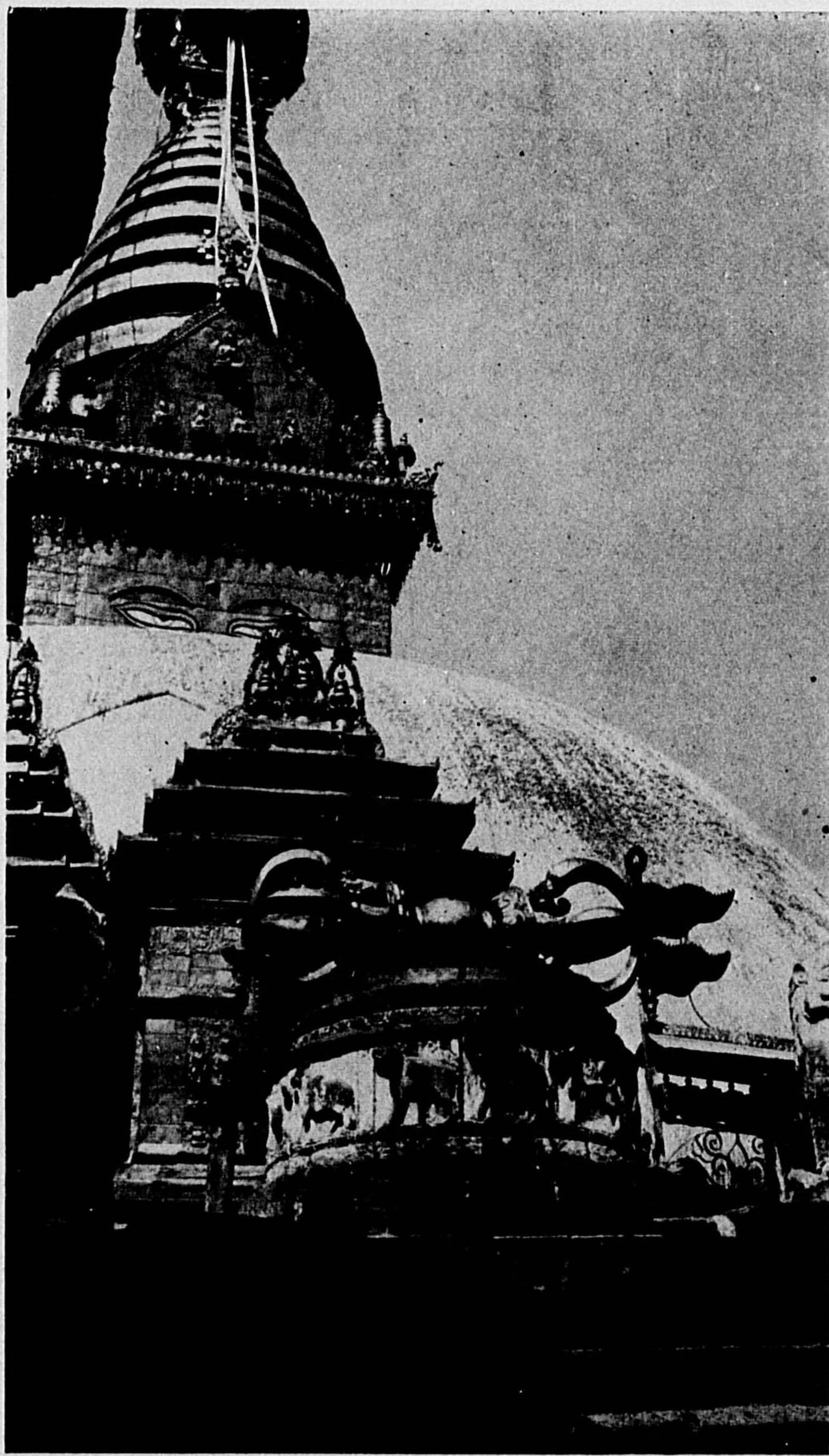
(前頁より)(六吋即約五寸)からは一層よく大きさが考へられる筈である。臺座の側面には薄肉に十二支を刻してある。鼠や兎の前肢が大變に長いことや、犬の尾が上方に渦を巻いてゐるのが面白い。牛の背中に瘤がある種即ち Zebu にしてゐるのは、さすがに印度なればこそと思へるのである。



上。一七四 スワンプ丘上金剛杵臺側面の「卯」
 中。一七五 同 「酉」
 下。一七六 同 「戌」
 (上, 中, 昭和十一年三月十六日, 下, 同三月二十日)

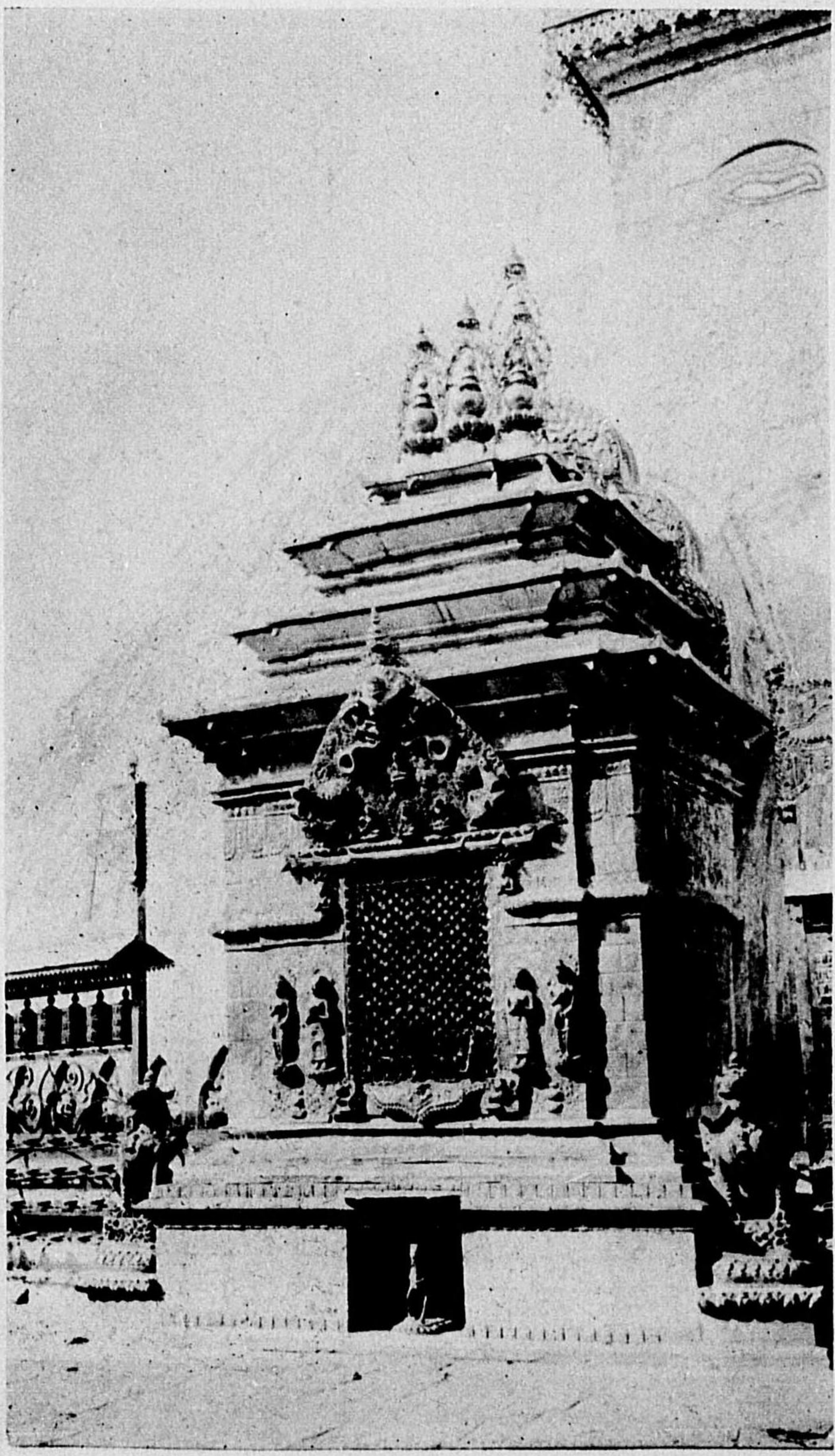


上。一七一 スワンプ丘金剛杵臺座側面の「子」
 中。一七二 同 「丑」
 下。一七三 同 「寅」
 (以上何れも昭和十一年三月十六日)



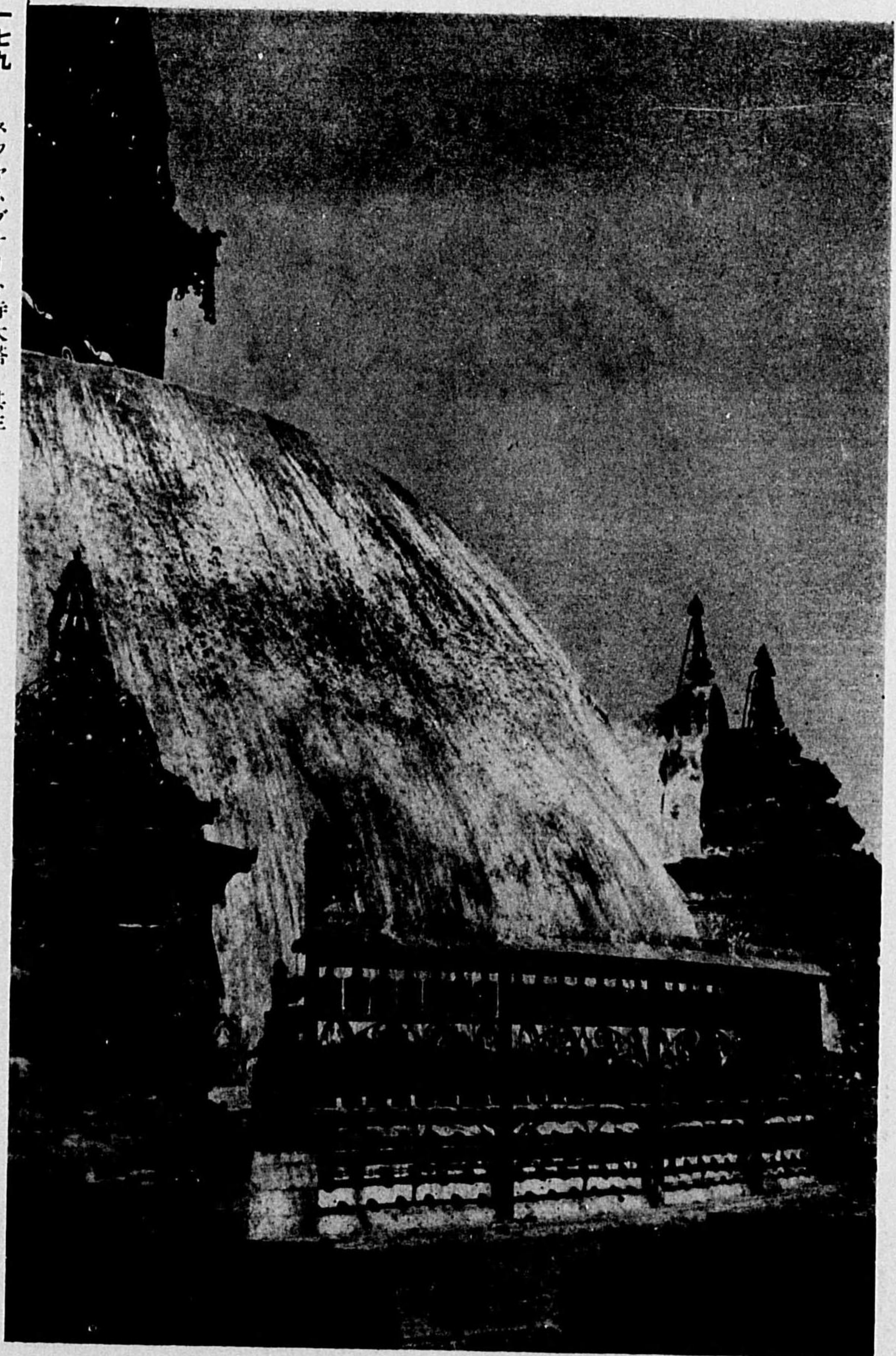
一七七 スワヤンブナート寺大塔 其一
 此は正面の多くの石壇を登りつめたところで、大伏鉢は白色、平頭からは金色燦爛として、日光の直射を受けると、少し大袈裟だが、光芒數里を罩めて非常に美しい。平頭の四方には兩眉と兩眼、其中央下に疑問符(?)の様なものが描いてあるが、後(次頁へ)

(昭和十一年三月二十日)

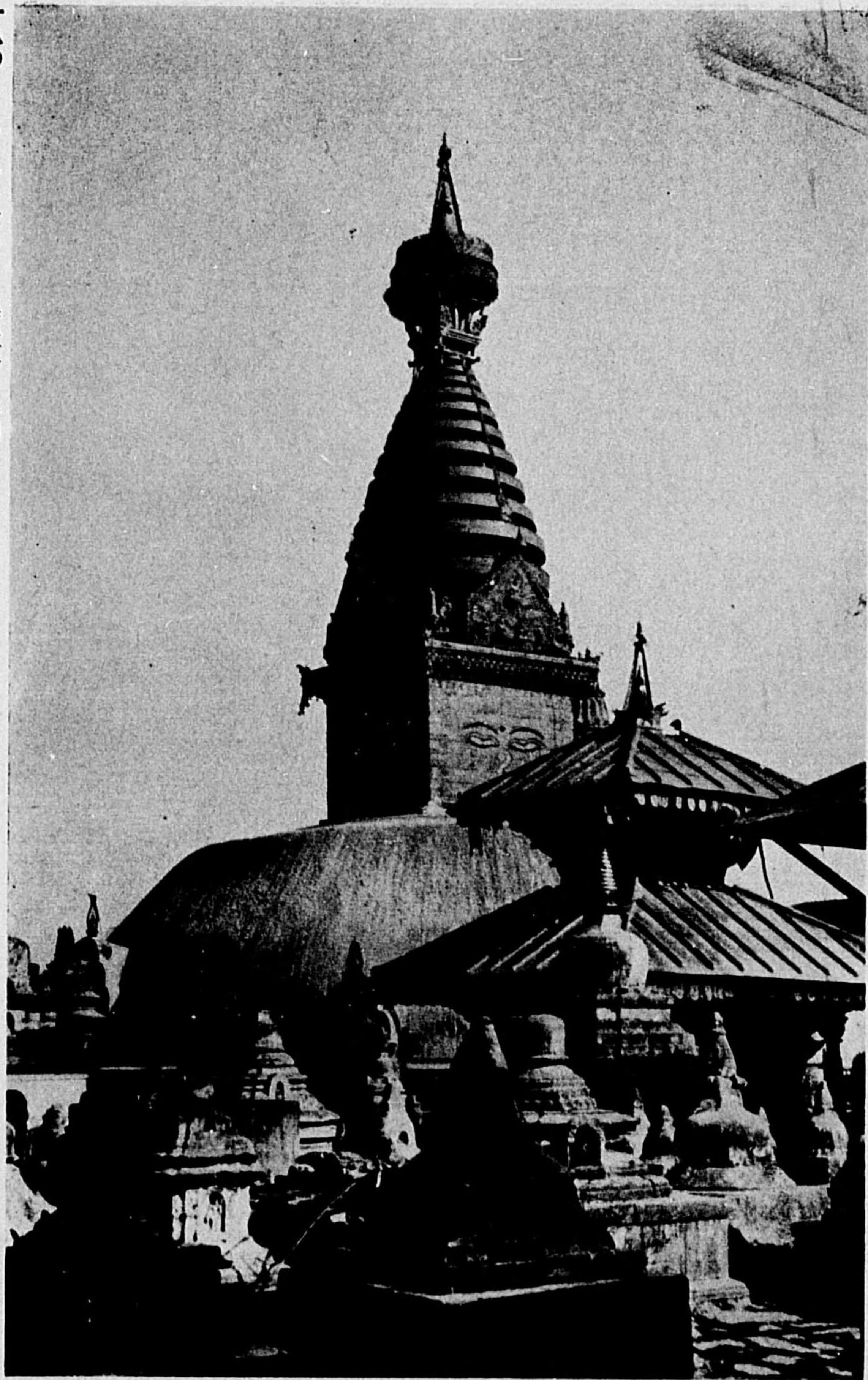


一七八 スワヤンブナート寺大塔 其二
 (前頁より) 者は鼻を現はしてゐるのであらう。眉間に白毫あり。塔身の四方(又は其以外)に小龕を設けてある。龕の正面に下げた瓔珞及び其上の三角形の飾は實に見事な金銅製のものである。

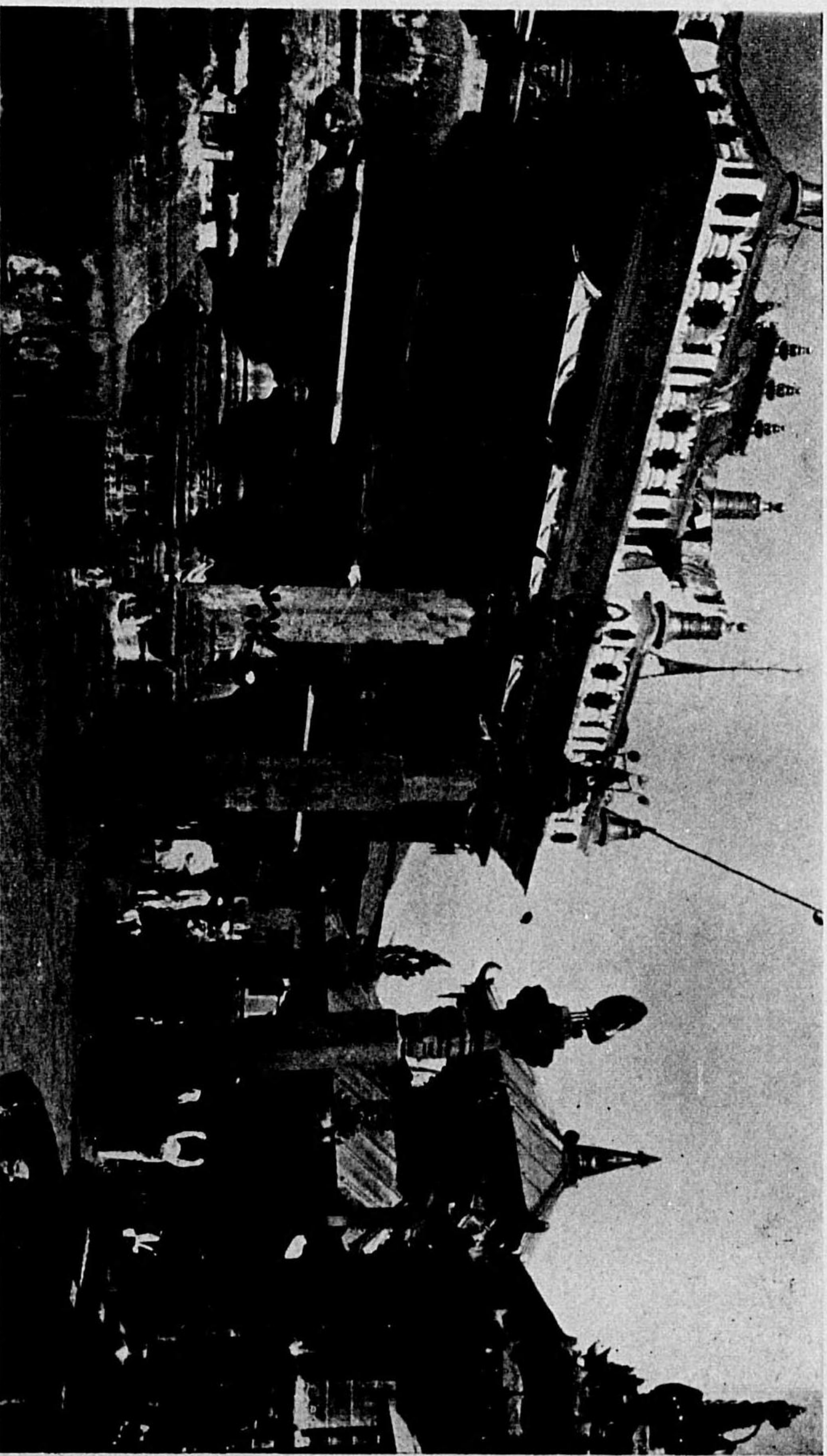
(昭和十一年三月十六日)



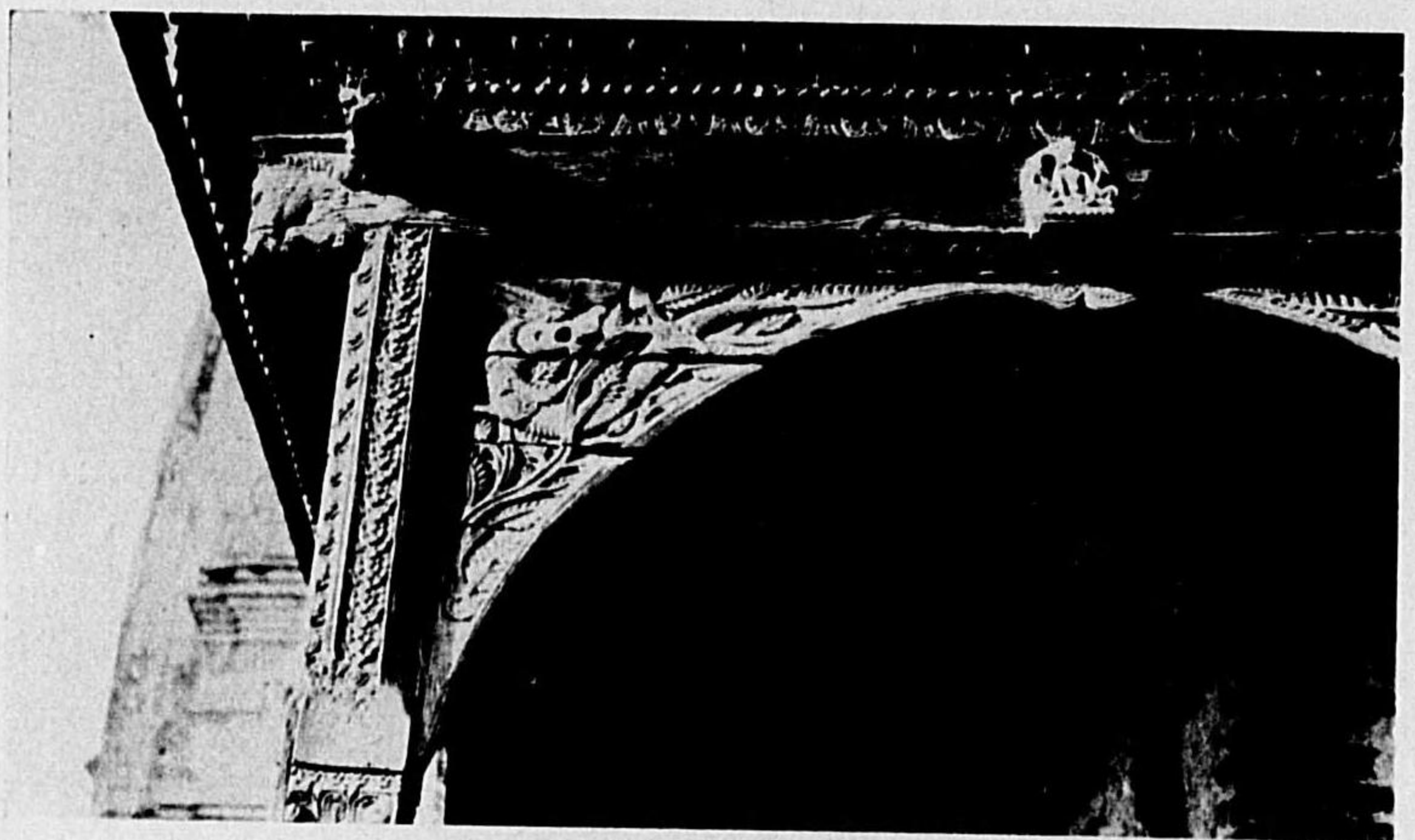
一七九 スワヤムブナート寺大塔 其三
 前圖左下に少しく見えてゐるが、大塔の周圍、龍の間に岡の如き岡壙形金銅製の回轉し得る様にしてあるもを並べてある。各各に「オム・マ・ニ・バ・ドメ・フム」の文字が記してある。近づく事を許されなかつたから見誤つたかも知れないが、大概間違ひはないつもりである。
 (昭和十一年三月十六日)



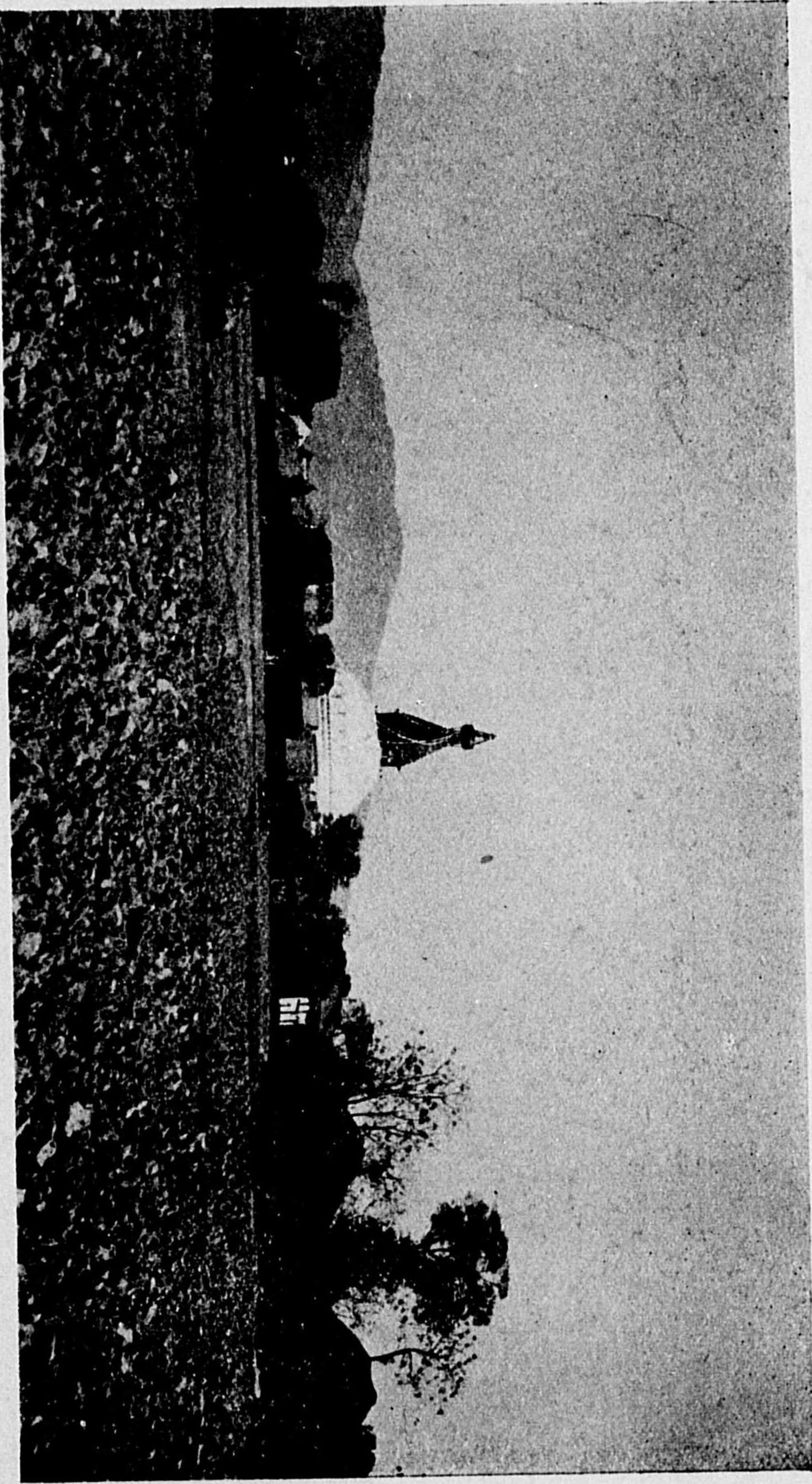
一八〇 スワヤムブナート寺大塔 其四
 兩眼の間の多分鼻を現はしてゐるらしい疑問符の様なもの、岡で見る通り階分長い。眼は下三白だから、どこから見ても人を睨みつけてゐる様で氣味が悪い。相輪は其數十三らしくよく發達してゐる。其上に方形板あり、天蓋あり、最上部に更に小型の佛塔を上ぐ。印度教の二重塔が大佛塔に近く建てるは奇觀である。
 (昭和十一年三月十六日)



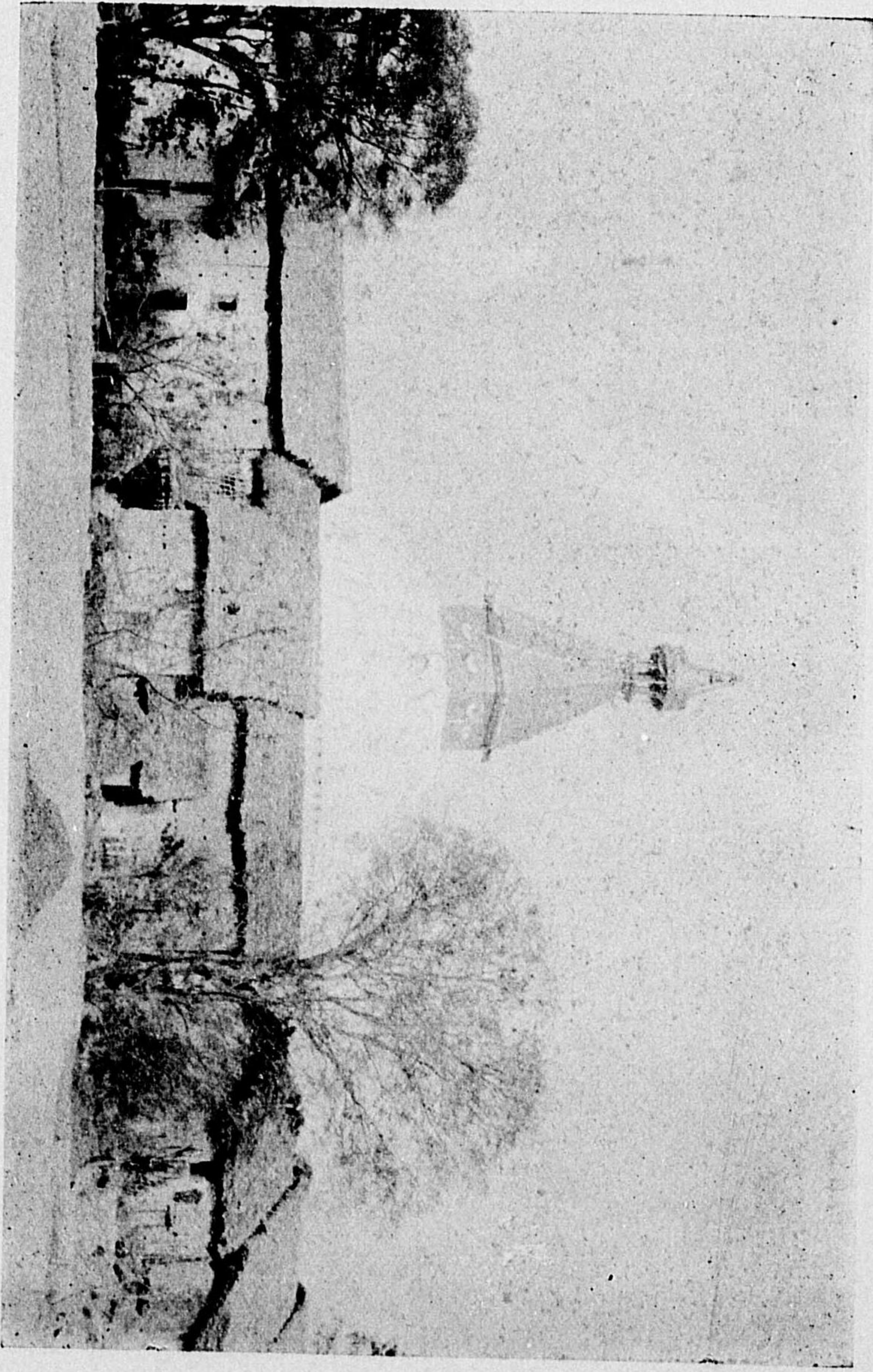
—八一— スリヤンブ丘上大塔背面 (昭和十一年三月二十日)
 前圖右下前景に寫つてゐる印度教の殿堂たる二重塔は、此圖では同じく右方後景に寫つてゐる。それで凡そ前圖との關係が判るであらう。多くの奉獻塔婆や、彫像を頂ける石柱の多くが建つてゐるが、このあたり非常に神聖な所として、我々は絶対に近づくことを許されない。



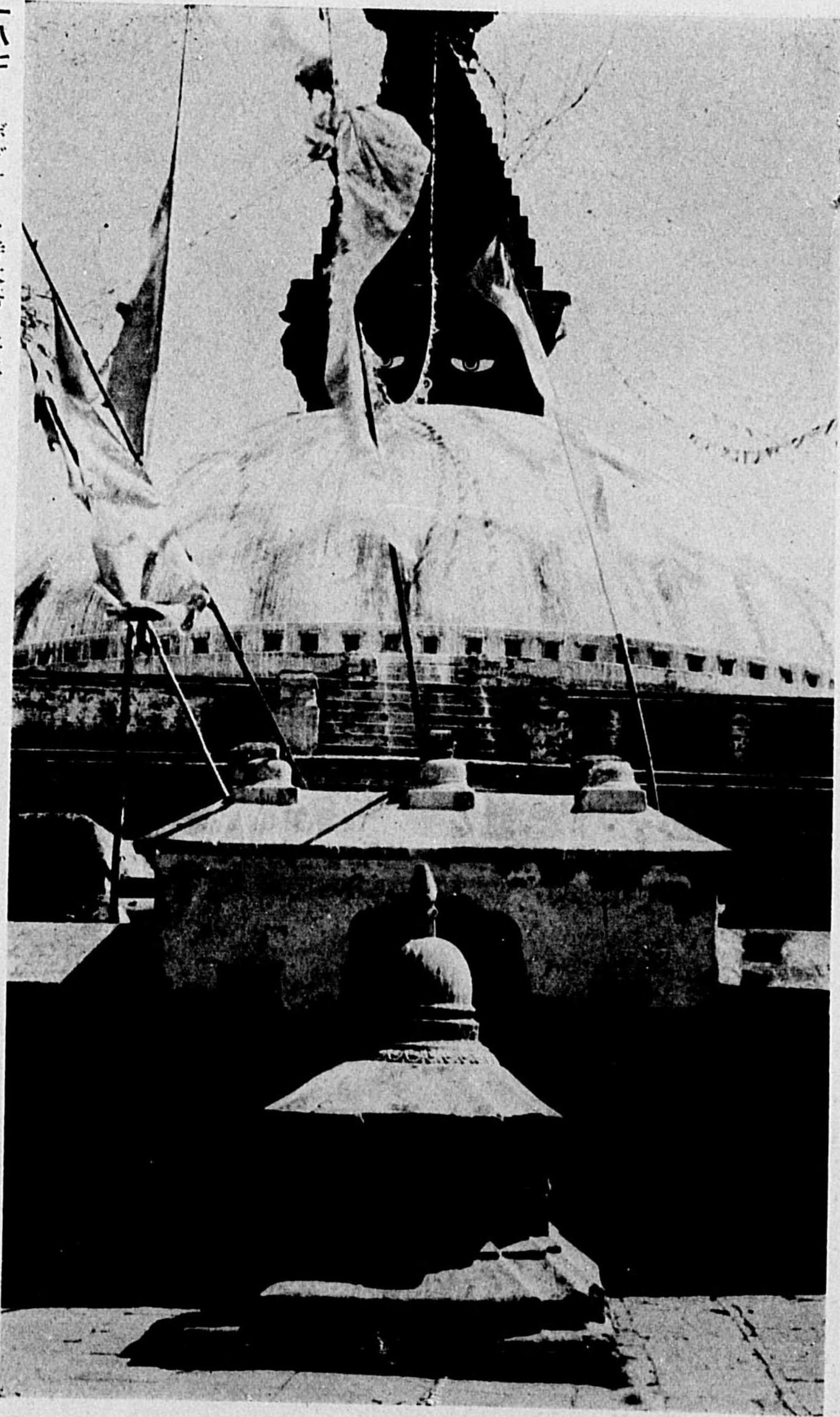
下。一八三 スリヤンブ丘上大塔前の家 其一 (昭和十一年三月十六日)
 上。一八三 同 其二 (昭和十一年三月十六日)
 正面の階段を上つた所の左側の家。坊さんの家か知らんと思つてきいてみたが、はつきりしなかつた。此ロジヤは全部木造で、非常に手の込んだ彫刻がしてある。上は半圓拱の如くなつてゐるが、夫は體裁だけで、上圖によく見えてゐる通り、實は擬拱である。上部中央上向きの茨があるのが面白い。此反對側には形容のできぬ位の彫刻がつけてある。



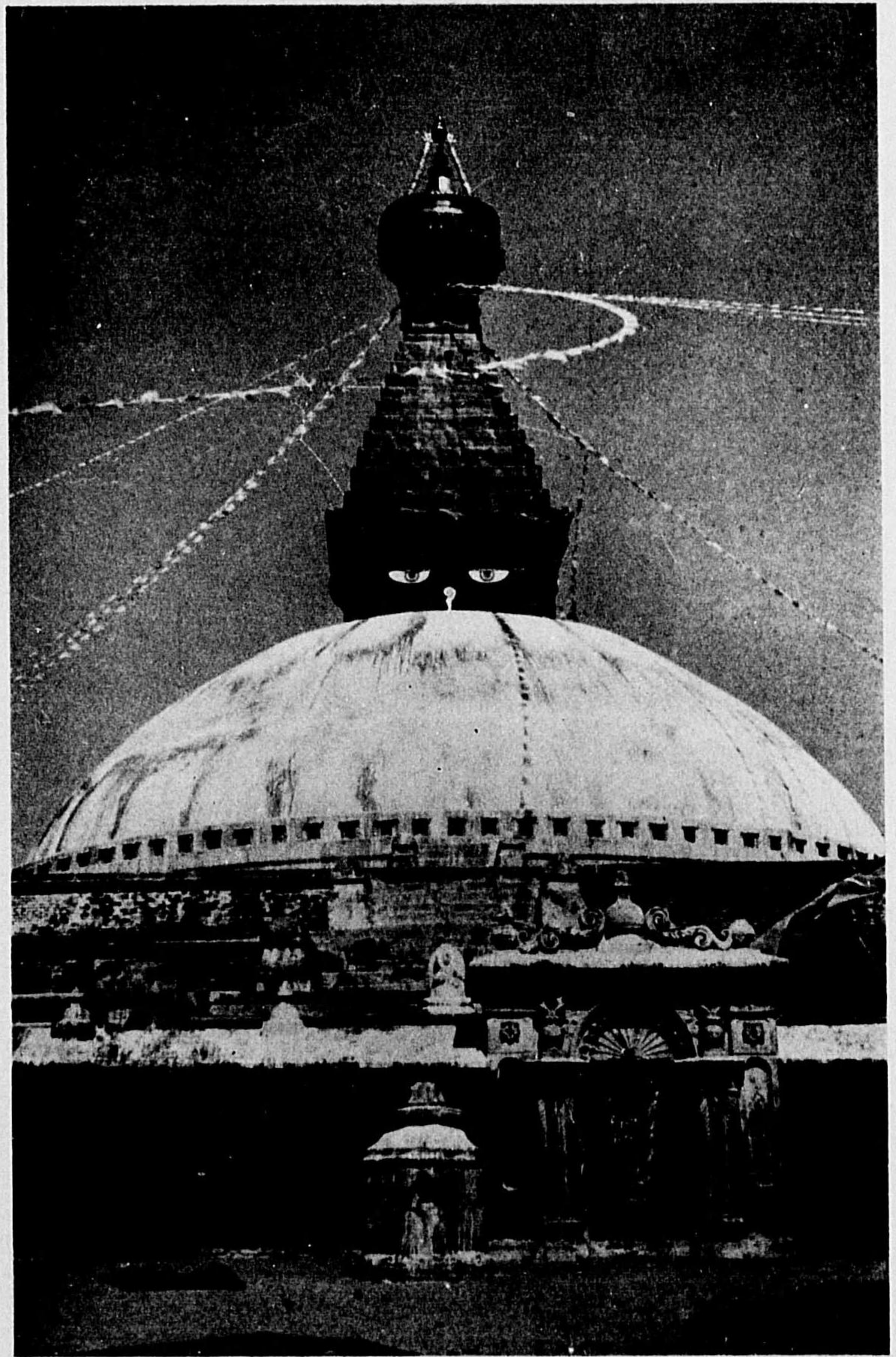
一八四 ポブナート寺大塔全景 其一（昭和十一年三月十七日）
大塔があつて、其周に村落が圓形にある。



一八五 ポブナート寺大塔全景 其二（昭和十一年三月十八日）
前圖と同じものだが、もっと近づいてみたところ。

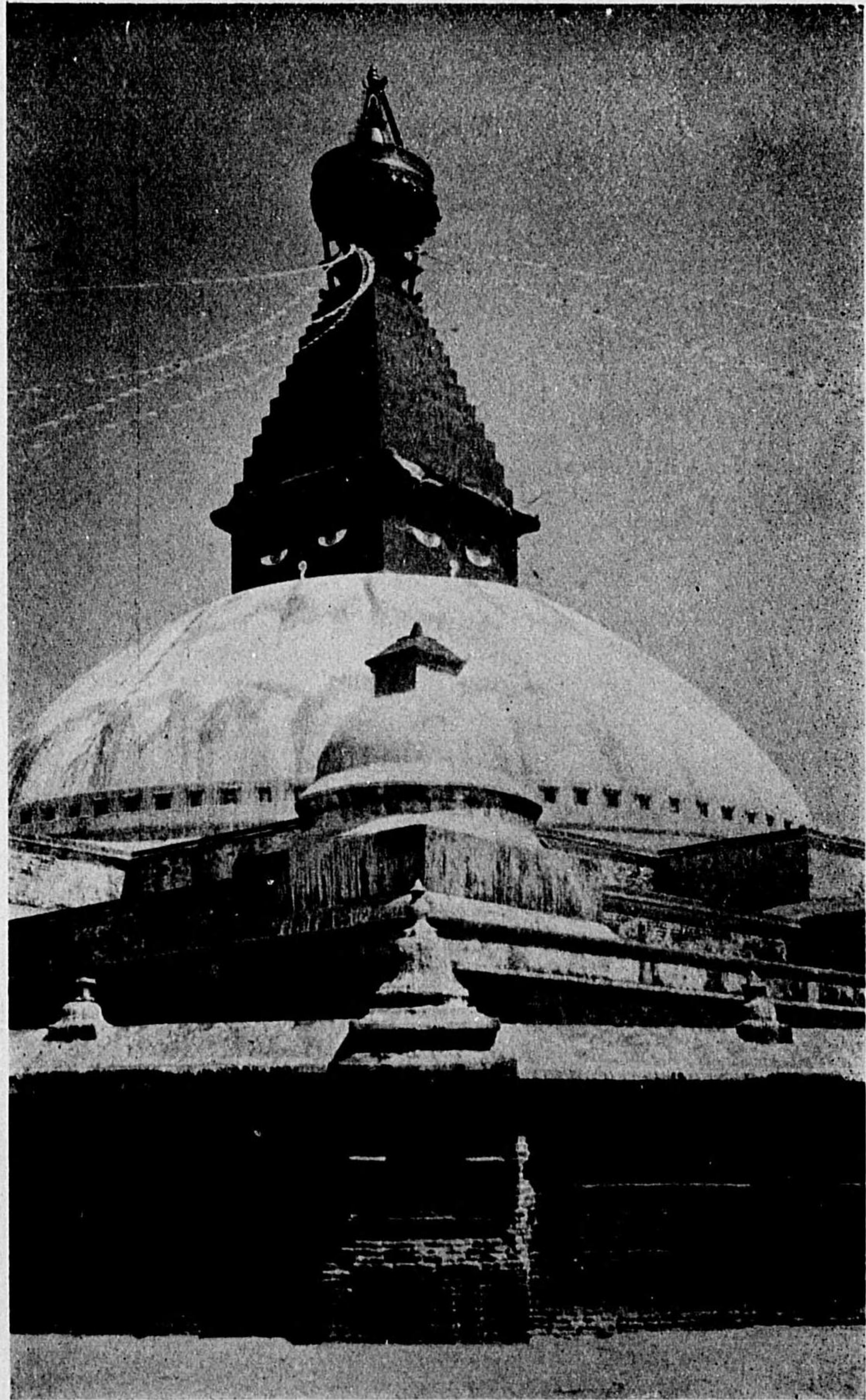


一八七 ボドナート寺大塔 其二
 正面を左の方へ廻ったところ。西面。旗幡が多くてたててあるから、ここが正面になつてゐるのかも知れない。
 (昭和十一年三月十八日)



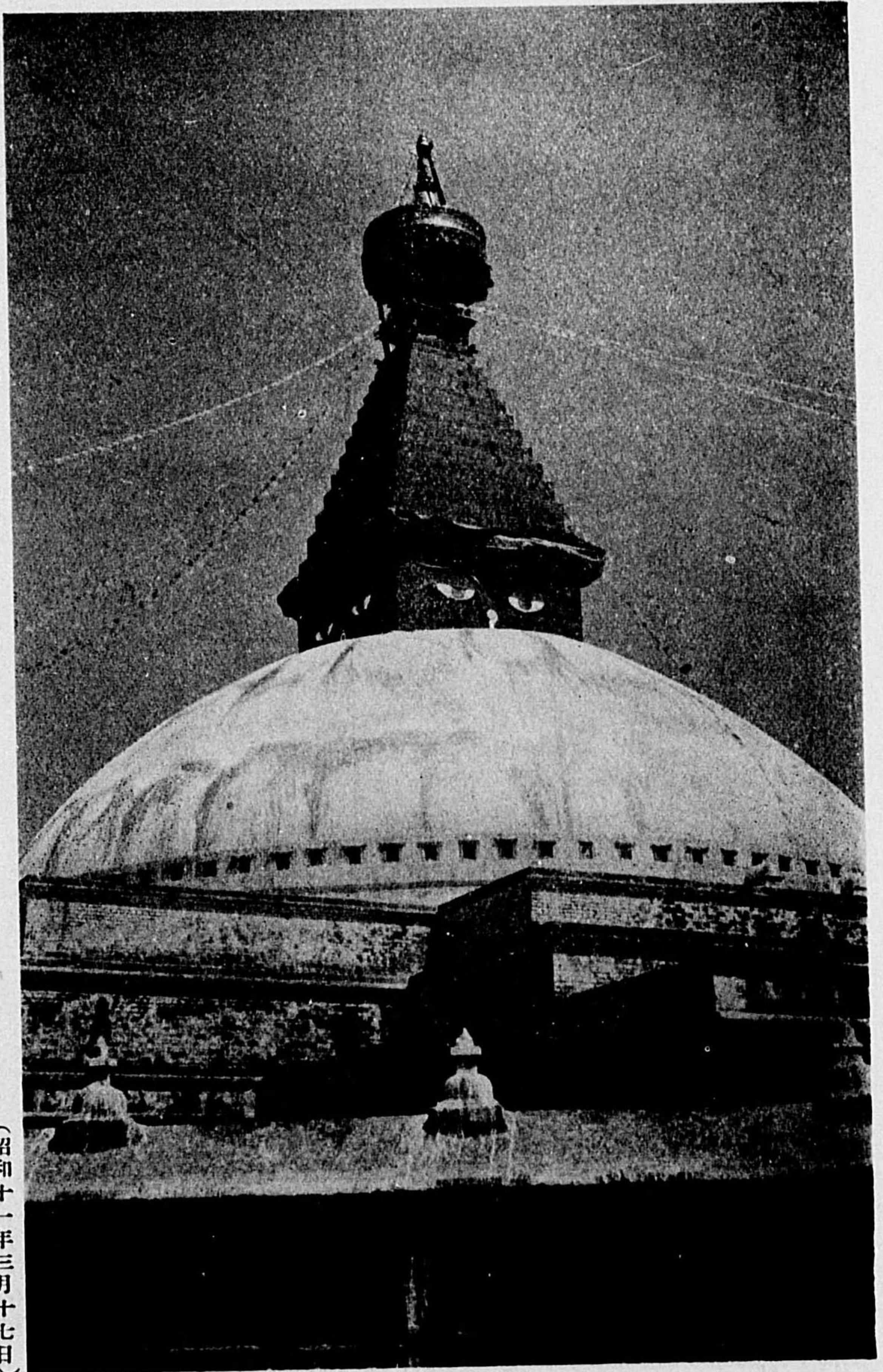
一八六 ボドナート寺大塔 其一
 正面の入口を入ったところ。南面。場所が狭くて私の寫眞機では全形をみることがとても出来ない。

(昭和十一年三月十七日)



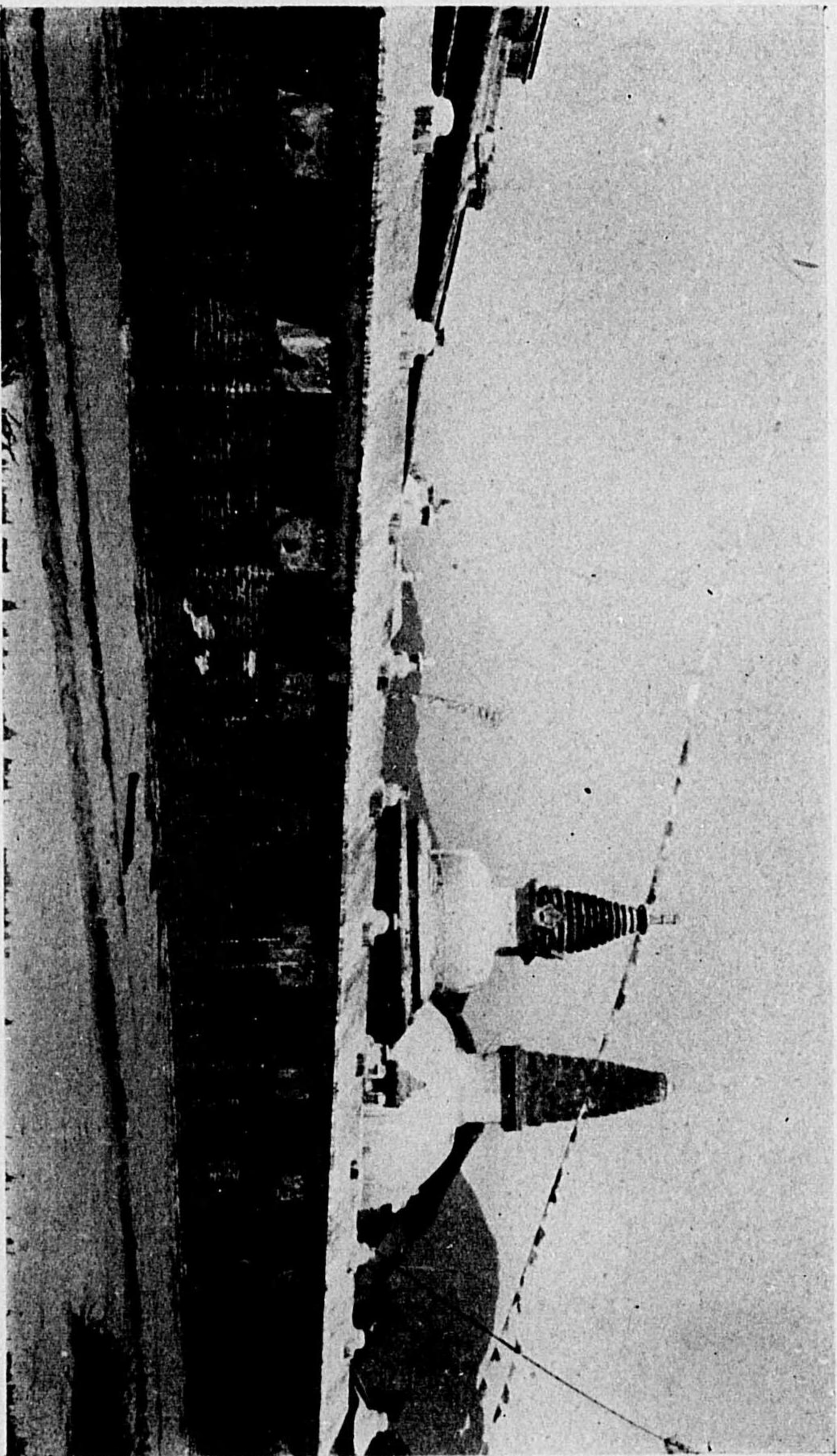
一八九 ボドナート大塔 其四
眞隅から見たもの。四隅に小塔のあるところに注意せよ

(昭和十一年三月十七日)

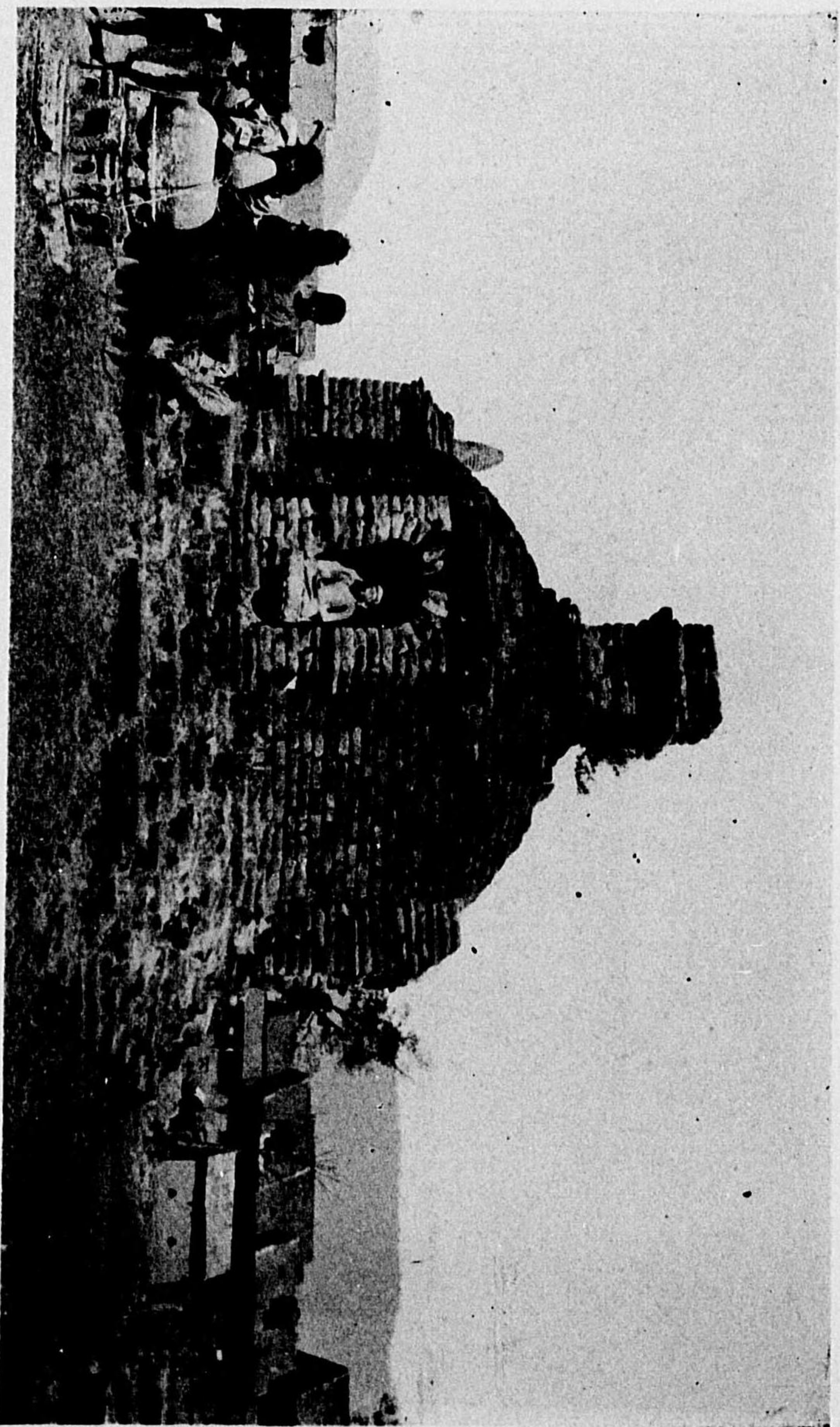


一八八 ボドナート寺大塔 其三
此圖と次圖とは、其一から其二の方へ行く途中の大塔の状況を示したものの。

(昭和十一年三月十七日)

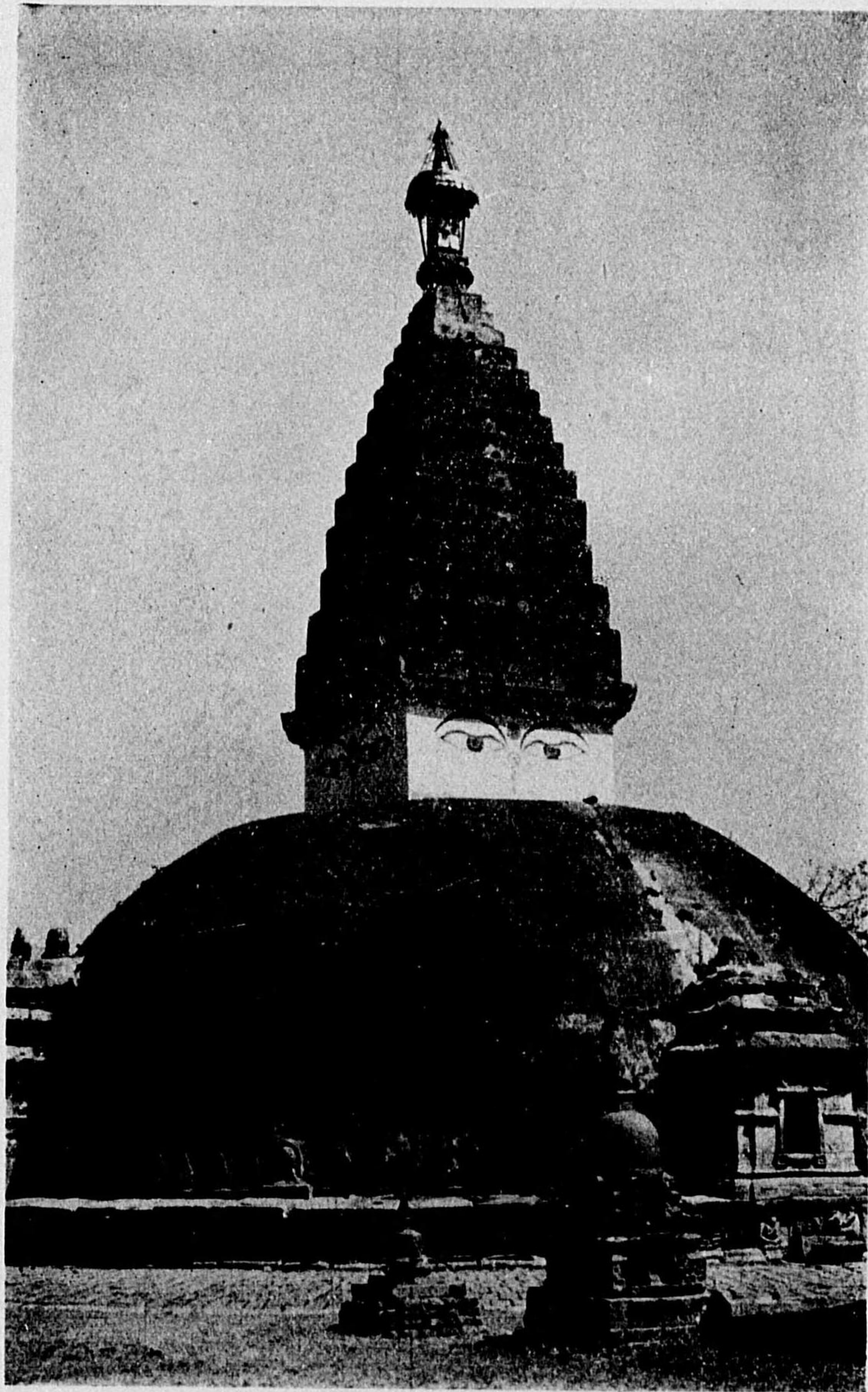


一九〇 宗ドナート寺大塔附屬小塔 (昭和十一年三月十七日)

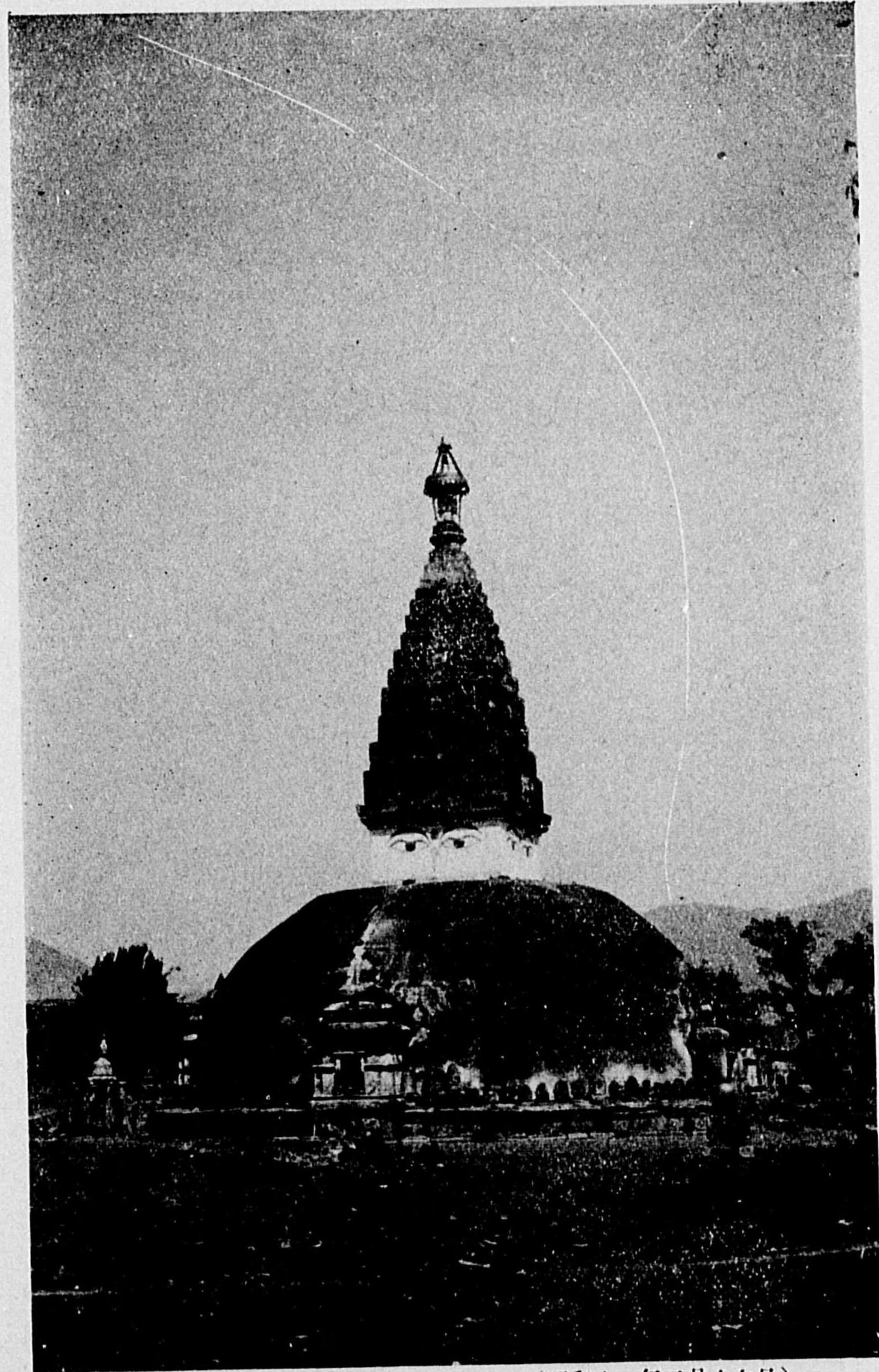


一九一 チャパール所在の廢塔 (昭和十一年三月十七日)
 次圖以下に示す佛塔の傍らにある廢塔で、上を被覆せる漆喰が全部とれてしまったので、構造がよく判る。相輪全部を亡失してゐるのは洵に惜しいものである。

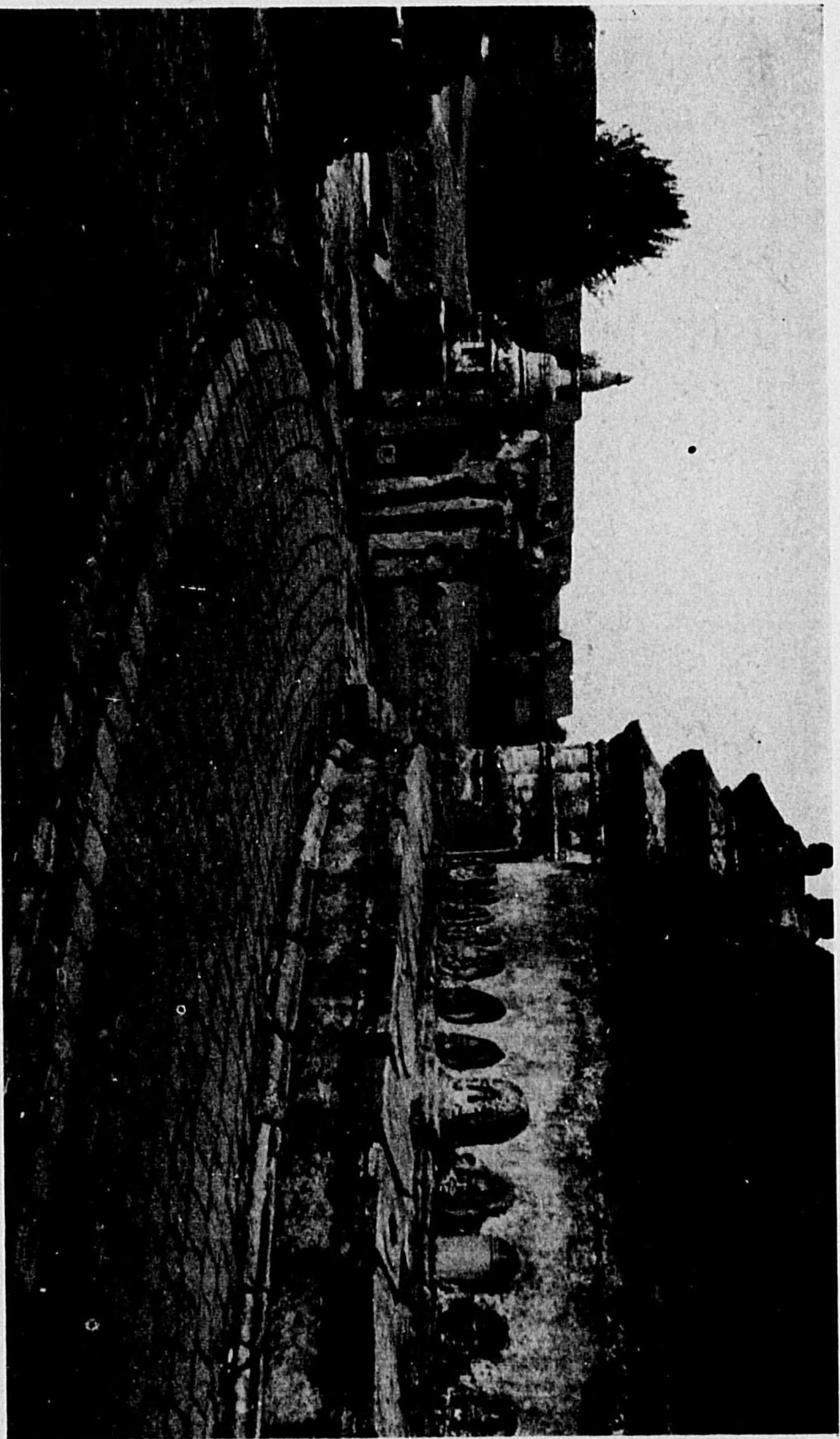
一九三 チャバイル所在佛塔 其二
 前圖の塔を少し近づいて別の方向からみたもの。ポドナート寺の大塔より此方が遙に面白いところがある。



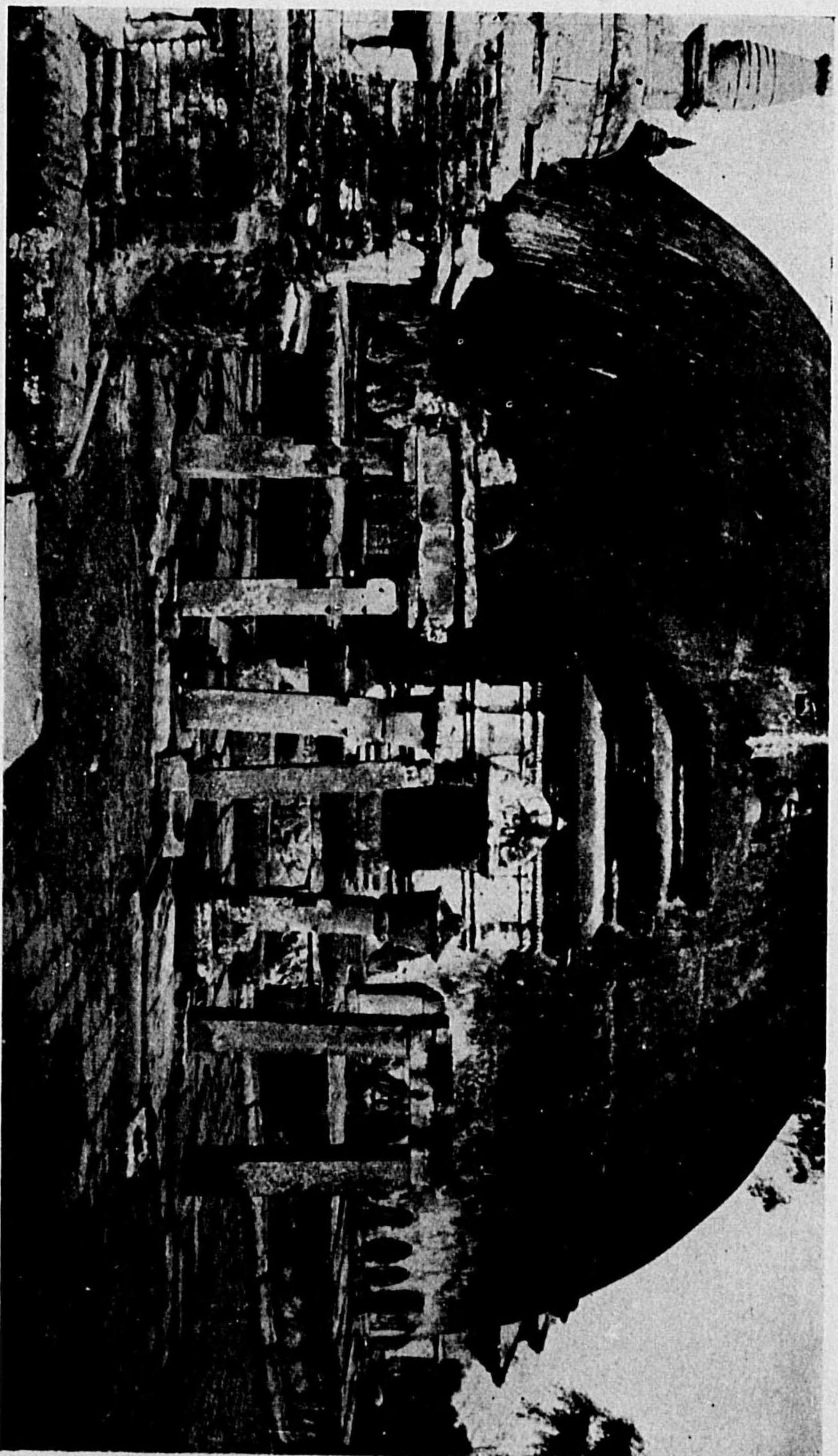
(昭和十一年三月十七日)



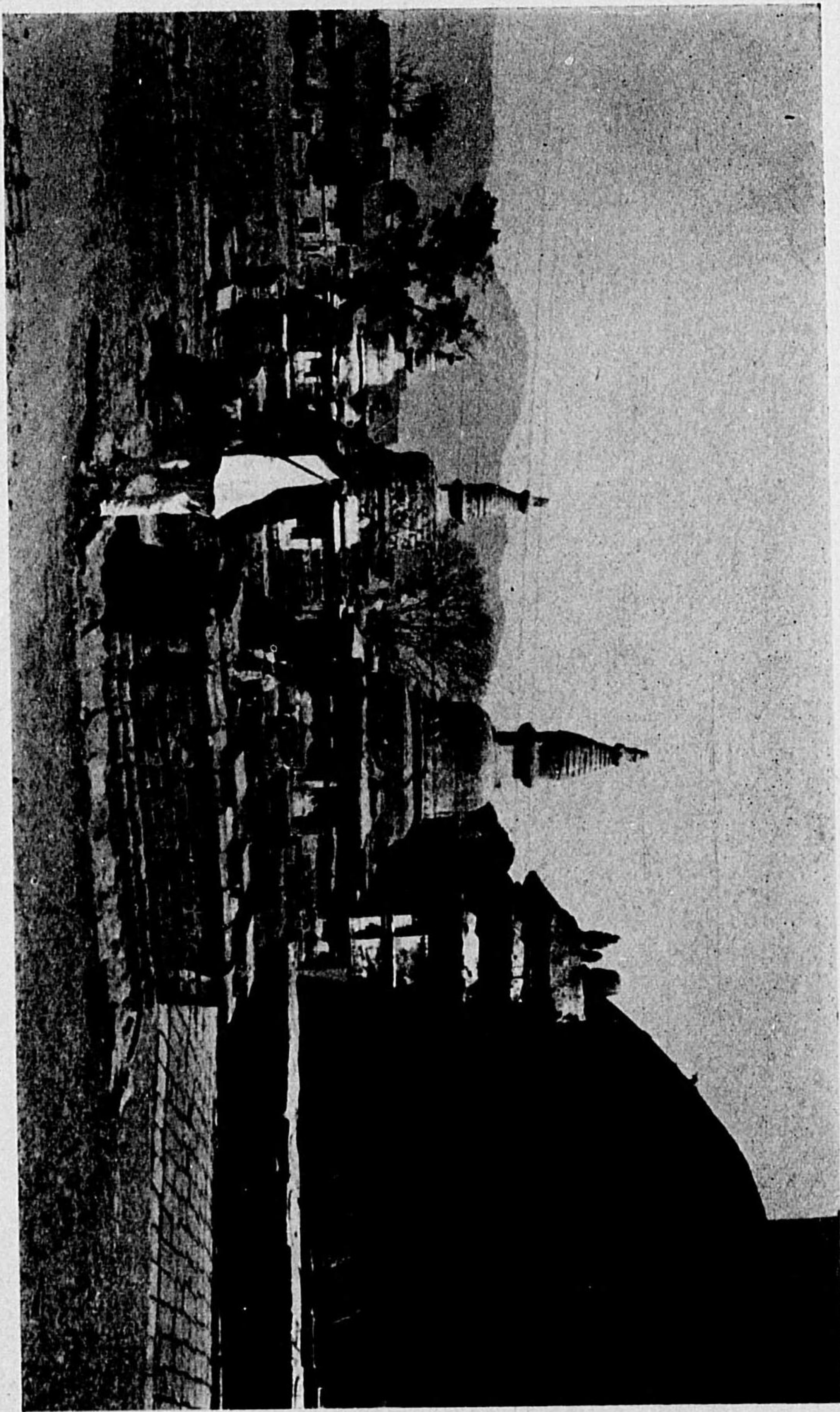
一九二 チャバイル所在佛塔 其一 (昭和十一年三月十七日)
 此塔及前圖塔の所在地はチャバイル (Chabahi) といふらしいが判然しない。



一九四 チヤバイル所在佛塔奉獻石燈 其一 (昭和十一年三月十八日)
 此塔の四方にも壑の如く四佛安置のため小籠があるが、其西方の籠の前に二基の石燈があるのは甚だ面白いことである。(次頁へ)



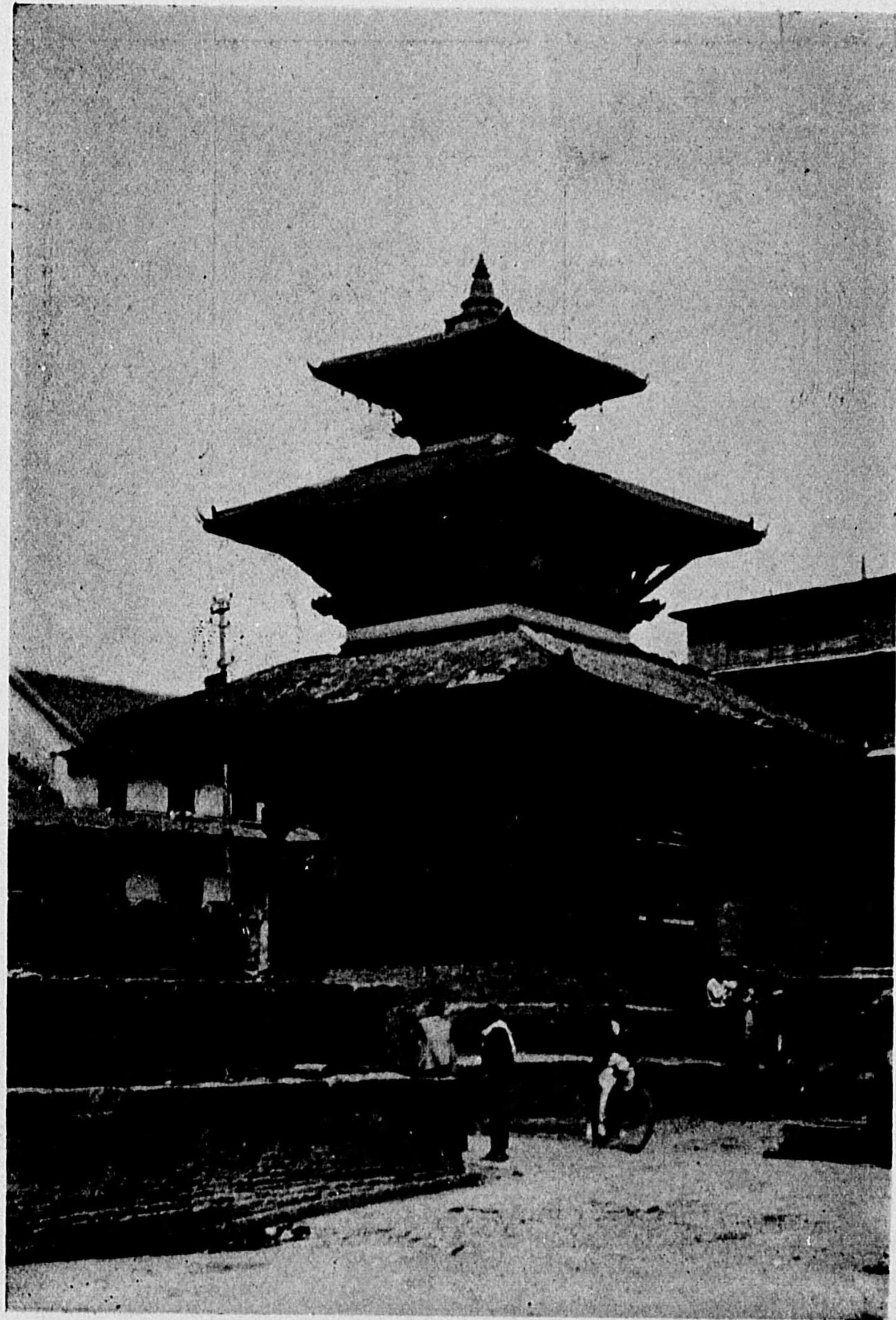
一九五 チヤバイル所在佛塔奉獻石燈 其二 (昭和十一年三月十八日)
 (前頁より)而も夫れ等の石燈は中臺がないだけで、基礎から寶珠迄を備へ、火袋は明治時代我國の大都市の街燈の夫れの如く、下狭く上廣く、窓なく火口は一方にのみあり、基盤に蓮瓣のあるものである。



一九六 チヤヤバイル所在佛塔附屬小塔 (昭和十一年三月十七日)



一九七 ビムセンタン (The Hinseintan)
此はごひらの三重塔で、従って最上重は四注造となり、金鈴・金紐・金環珞・金旗・金瓶等、裝飾が殊の他多く、美しい塔であるが、町の中であたりがせせこましいのが缺點である。
(昭和十一年三月二十日)

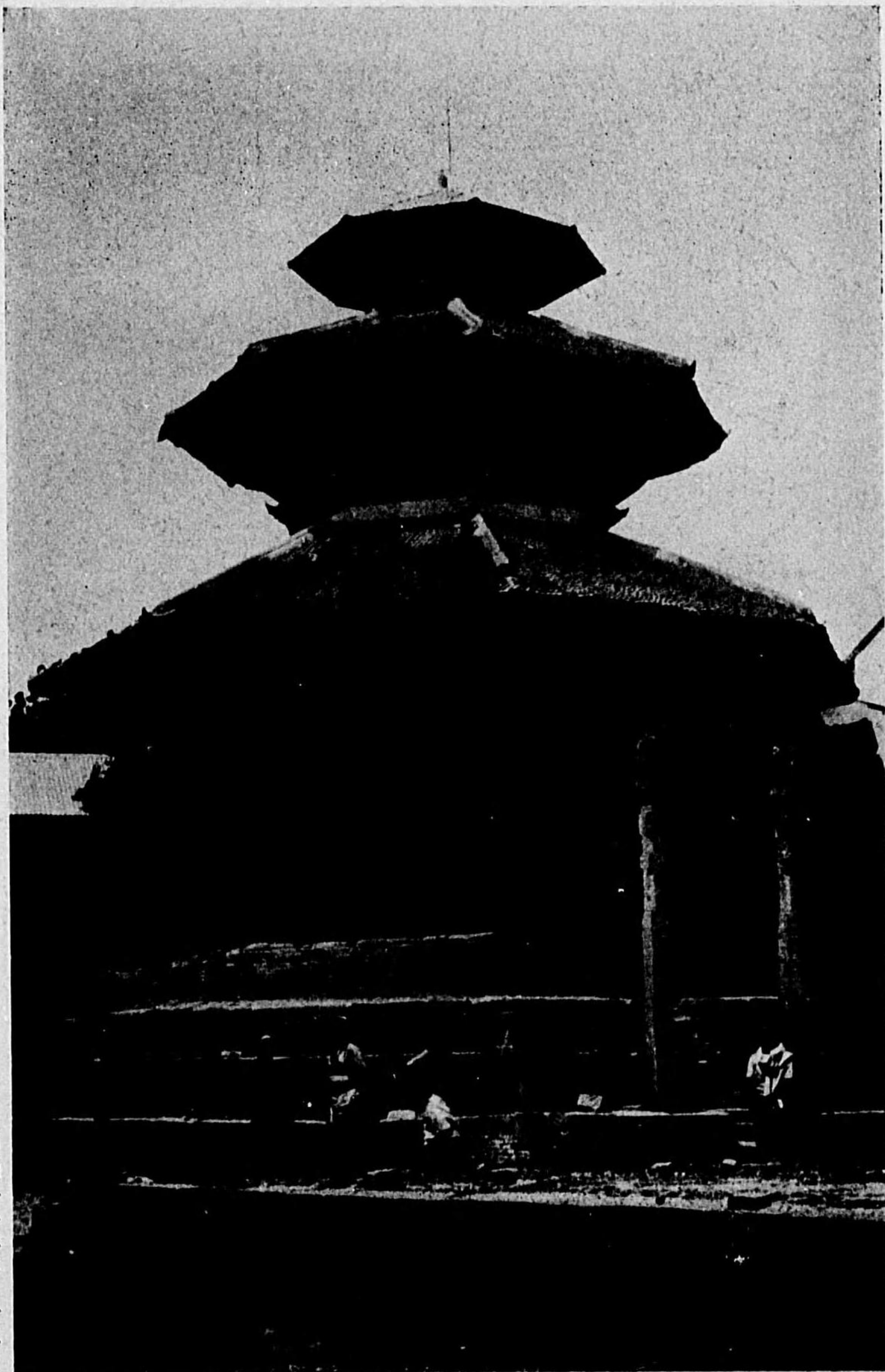


一九九 シバレー・デバル (昭和十一年三月十五日)
 (前頁より)てしまった。私はこれがネパール國に於ける三重塔中の白眉だと考へてゐる。最北端のは基壇が三重でこれは最も淋しい。其名稱は何れも確實とはいへない。



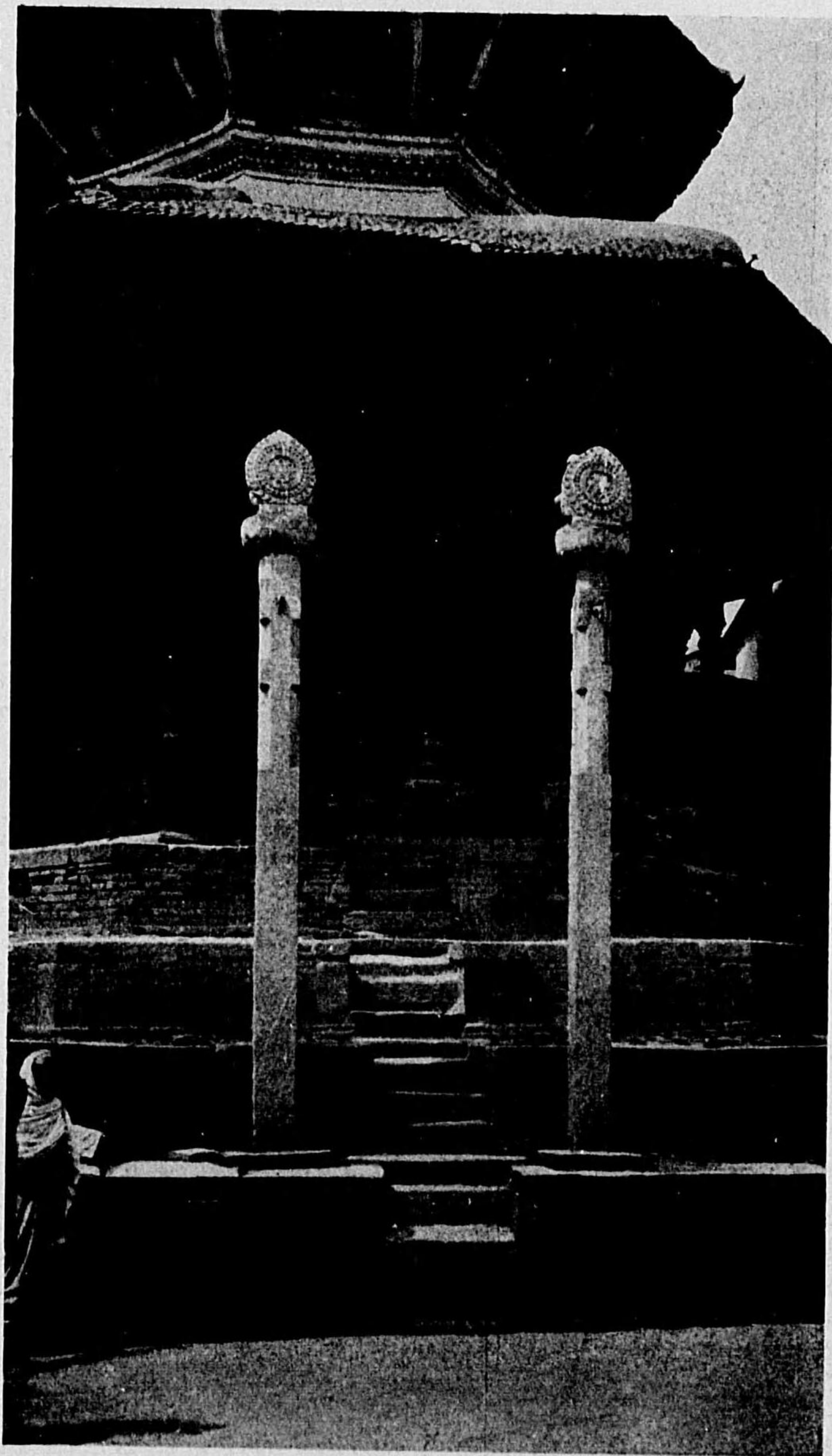
一九八 マハツ・デバル (昭和十一年三月十五日)

カトマンヅ市の中央、ダーバー・スクエアに近く三基の三重大塔が南から北へ並んで建つてゐる。第 62 頁に掲げたのは其南端のもので、ベンダルの書物にはクマリー・デバルとあったが、それは三重塔の名ではないといった。これは眞偽不明であるが、中央のが此圖のもので、最下の大壇を入ると十重の基壇上に建つもので最も立派な塔である。東側の背の高い建物と電柱とがなかったら、さぞよからうと思はれる。せめて白いのが地震で倒れればよかつたのに、誠に惜しい事をし (次頁へ)



二〇〇 八角三重塔 全景
本文挿圖ノウジャギニ・デパールと稱する單層四注の殿堂の一は右一は左に、背景に見えてゐるのと同じ建物である。

(昭和十一年三月十五日)

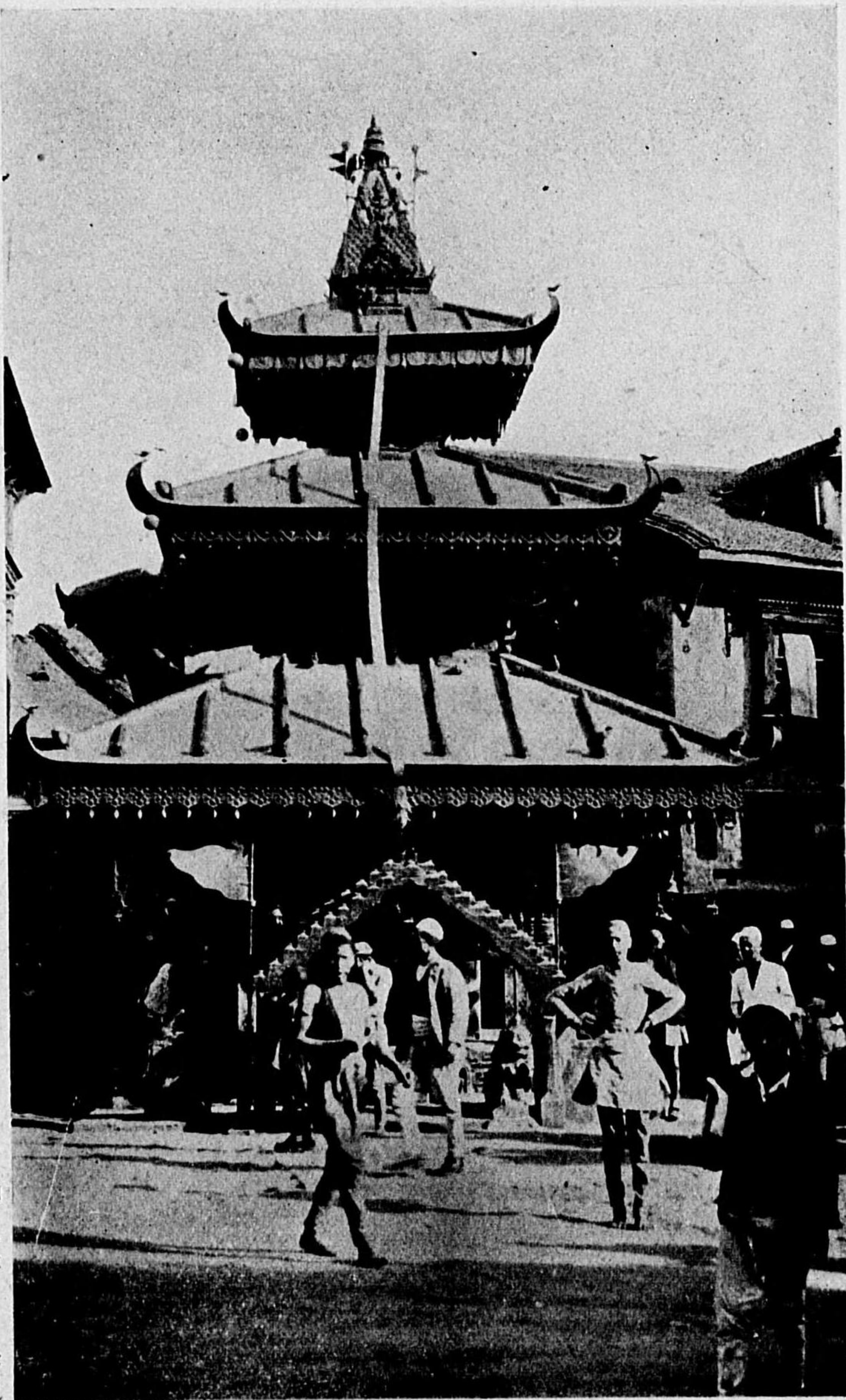


二〇一 八角三重塔 部分
現在首都にある私が見た唯一の八角三重塔。基壇が四重なものと、初重が單列周柱式なので、一層美觀を増してゐる。もう一重あつて上に相輪を頂いてゐたらさぞ愉快であらう。

(昭和十一年三月十五日)



二〇三 デオ・パークンの三重塔
 眞偽の程は知らぬが、ジェイバゲイソリ (Thebesyori) ・テンプルとふ名ださうである。初重が特殊の平面を有し、其兩側へ突出部の棟飾がスツーパー型のところが面白いのである。
 (昭和十二年二月十八日)

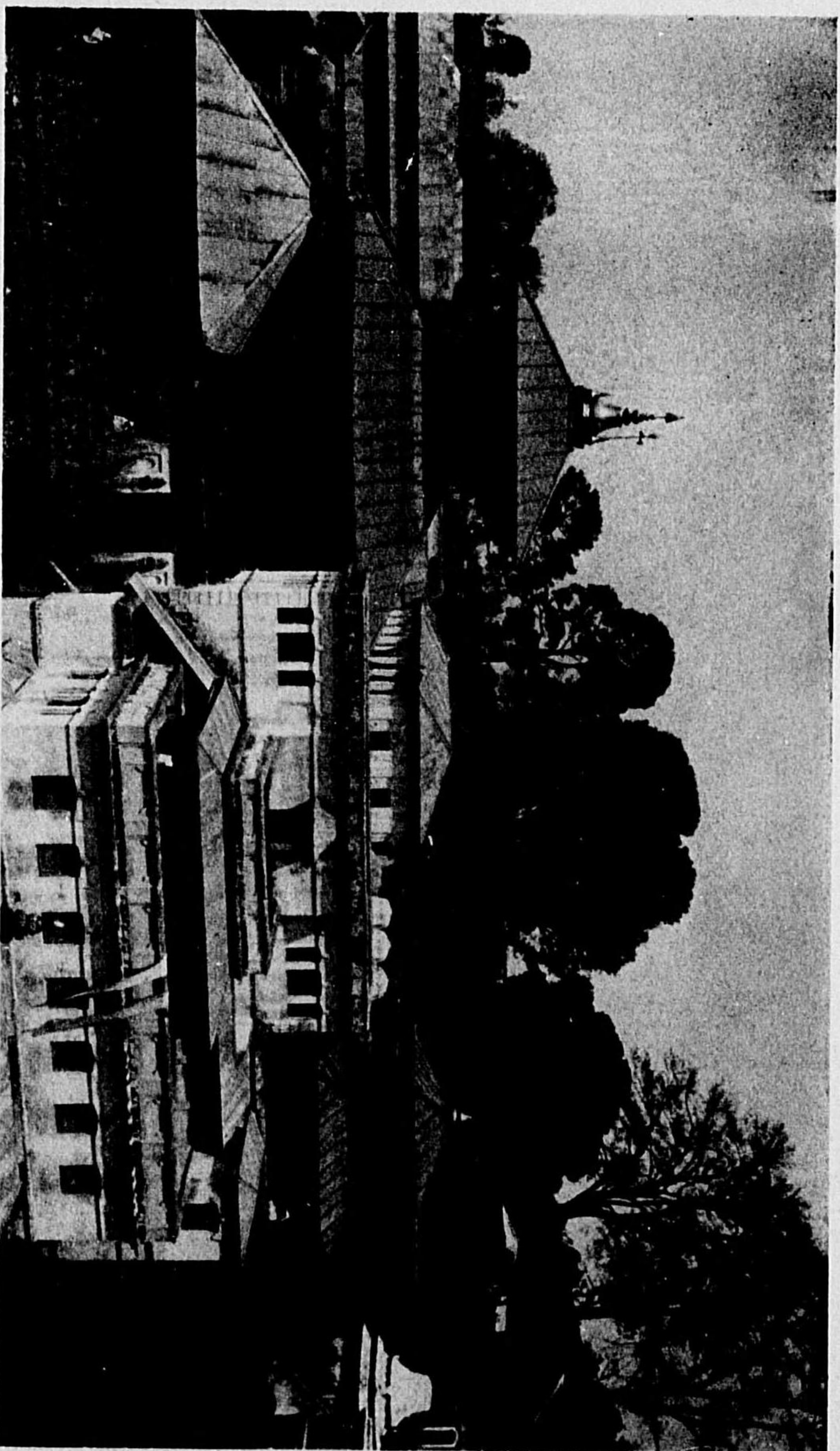


二〇二 カトマンヅ市内の小三重塔
 小型ながら非常に美しい塔。最上重靈盤の飾りが、特に手が込んでみて且つ美しい。

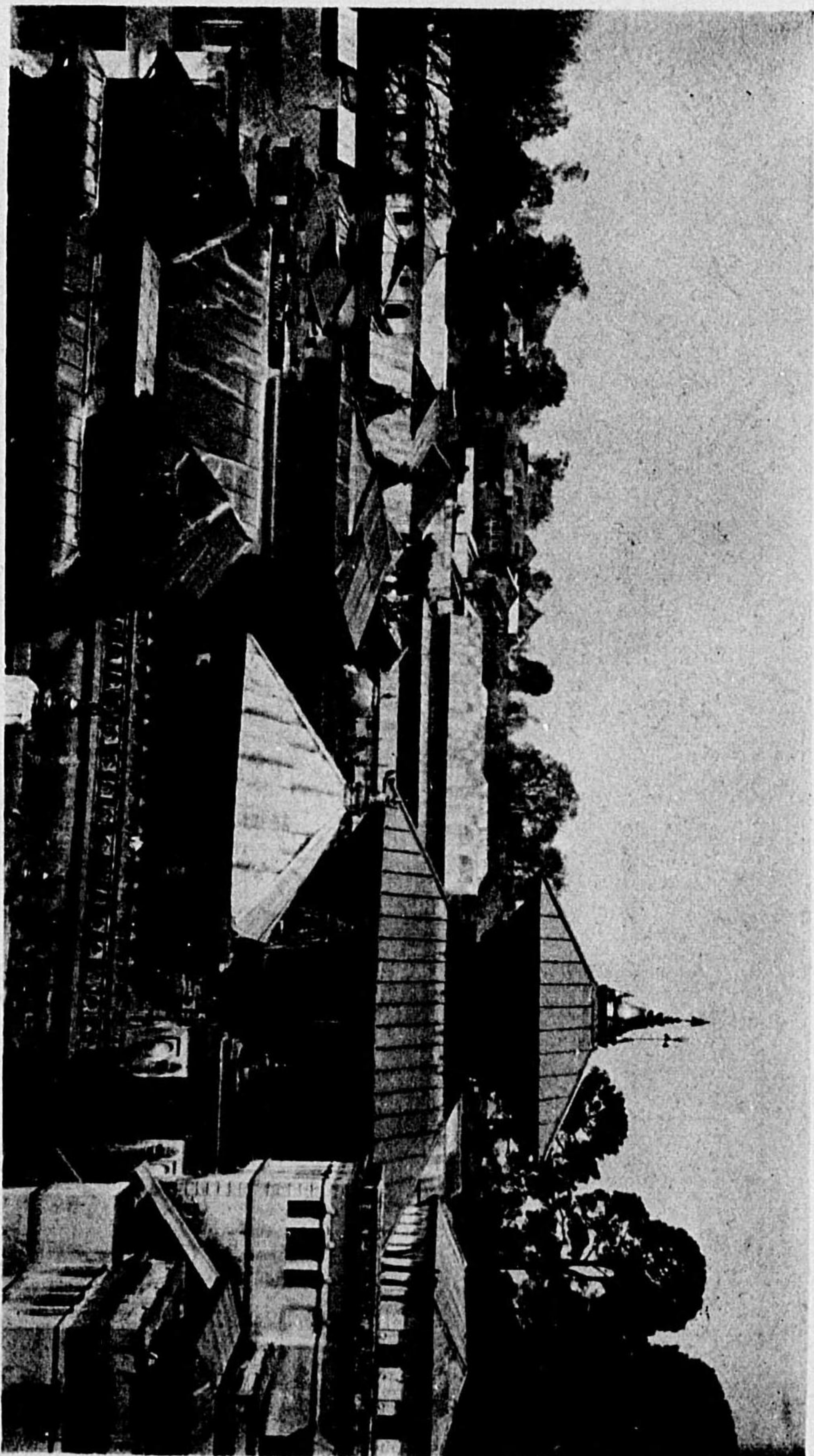
(昭和十二年三月十七日)



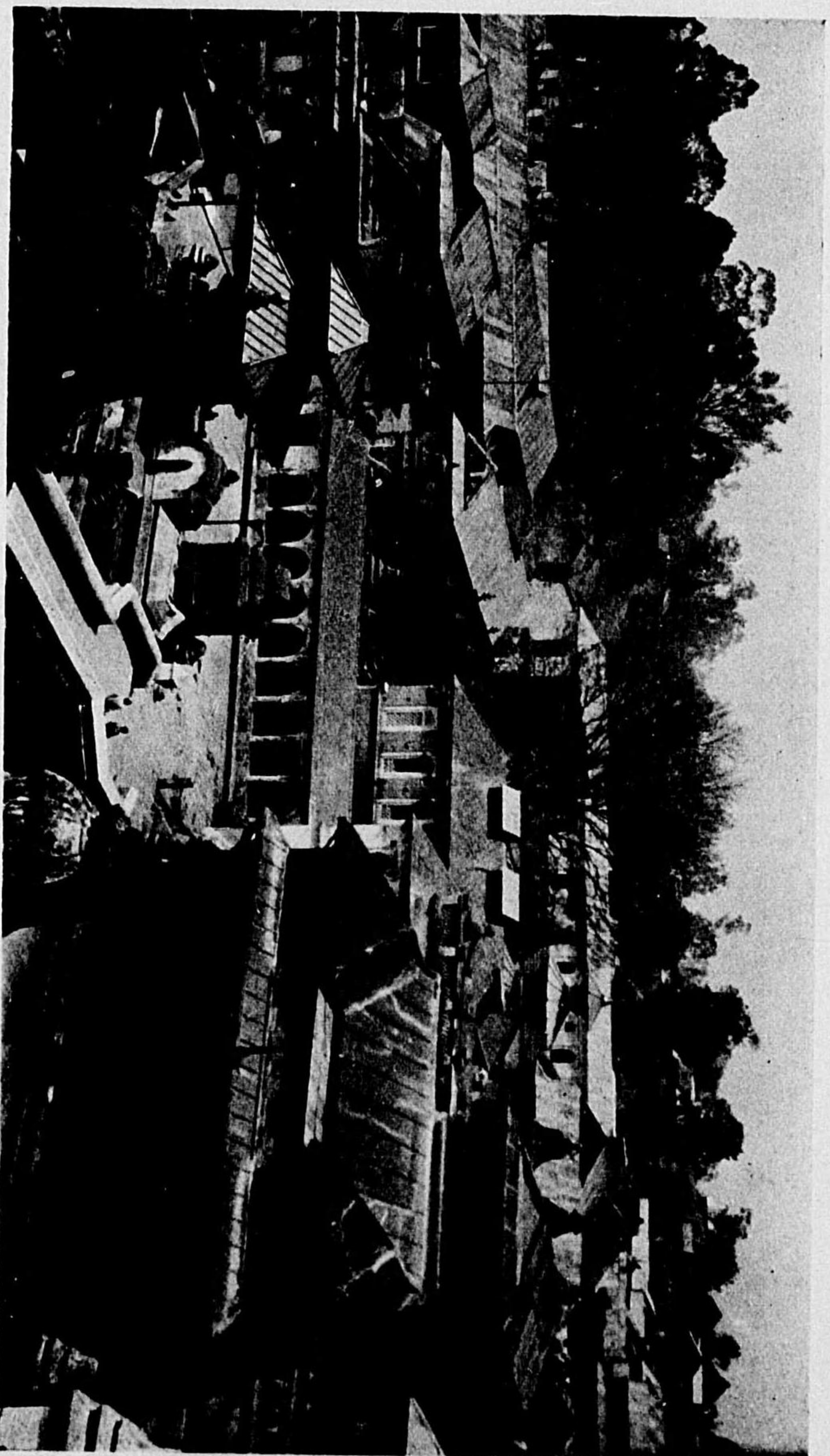
二〇四 バンシュバチナート堂 其一 (昭和十一年三月十六日)
 北方高地から見た景。岡の左方樹枝の直ぐ右方遠景に見えるのはバケマチ川畔の水浴場と火葬場で、澤山遊んでゐる。



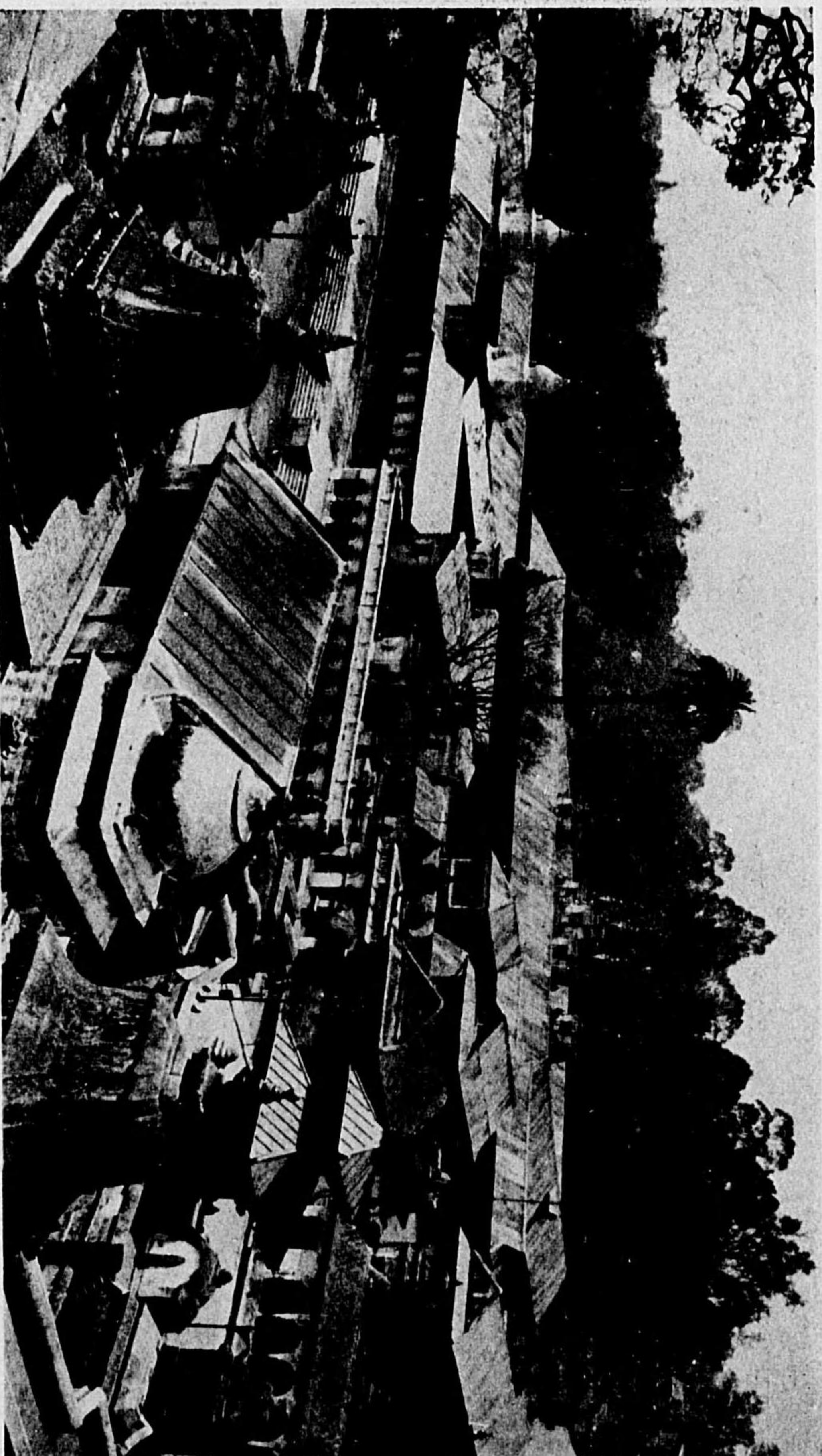
二〇五 バンシュバチナート堂 其二 (昭和十一年三月十六日)
 大堂を東方高地より見たところ。露臺上の賽の目の五式に配置されてゐる金鈴裝飾に注意せよ。大堂初重右方に極く僅かに城の一部が見えてゐるのは、シバを象徴せる二又戟である。此大堂の本尊はリンガ (Linga) で、印度教能の信仰の中心である。



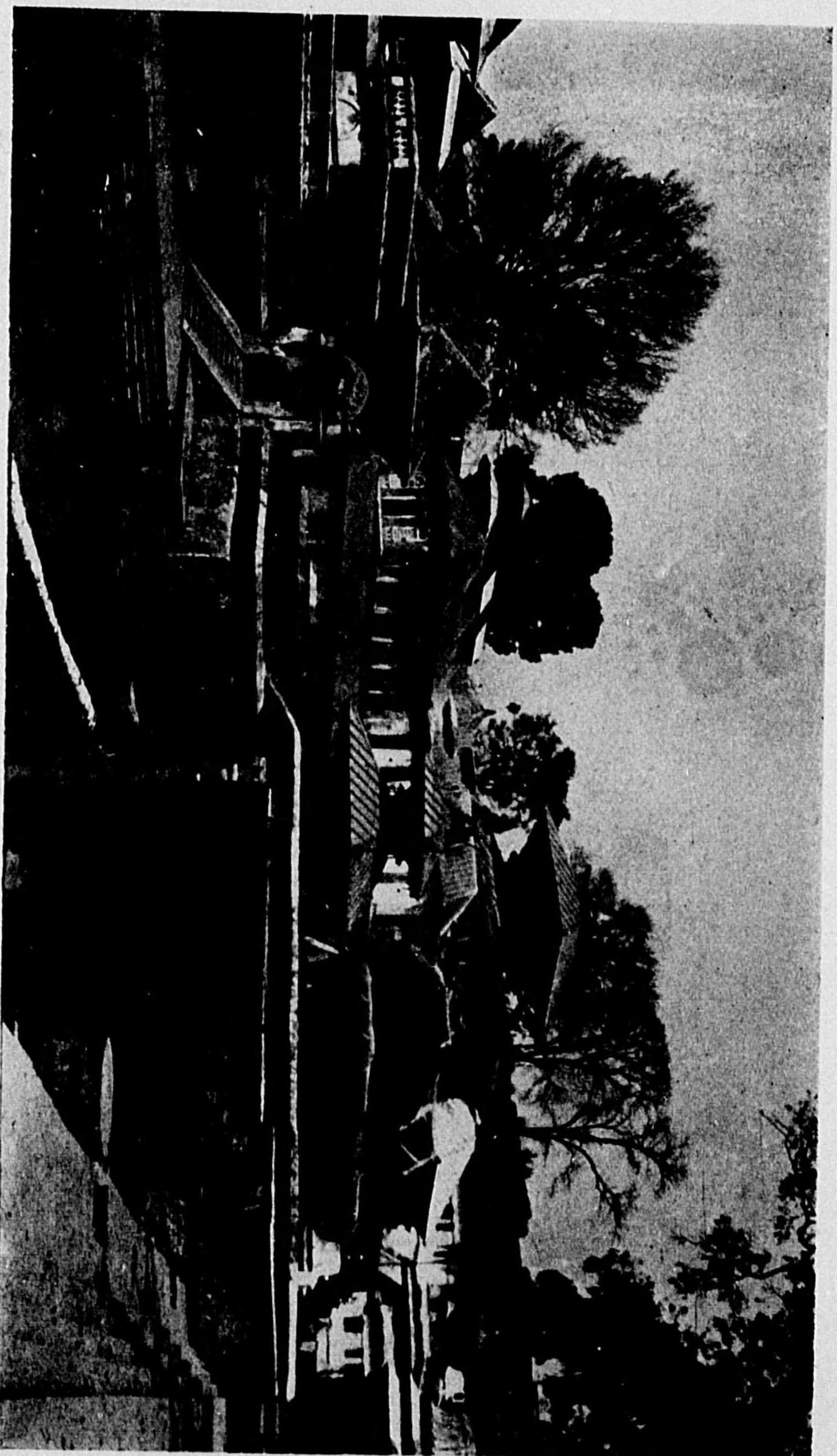
二〇六 バシユバチナート堂 其三 (昭和十一年三月十六日)
前圖の續きで其南の方の一部をみたところ。左端に近く圓形三重塔があるのが面白い。これ (次頁へ)



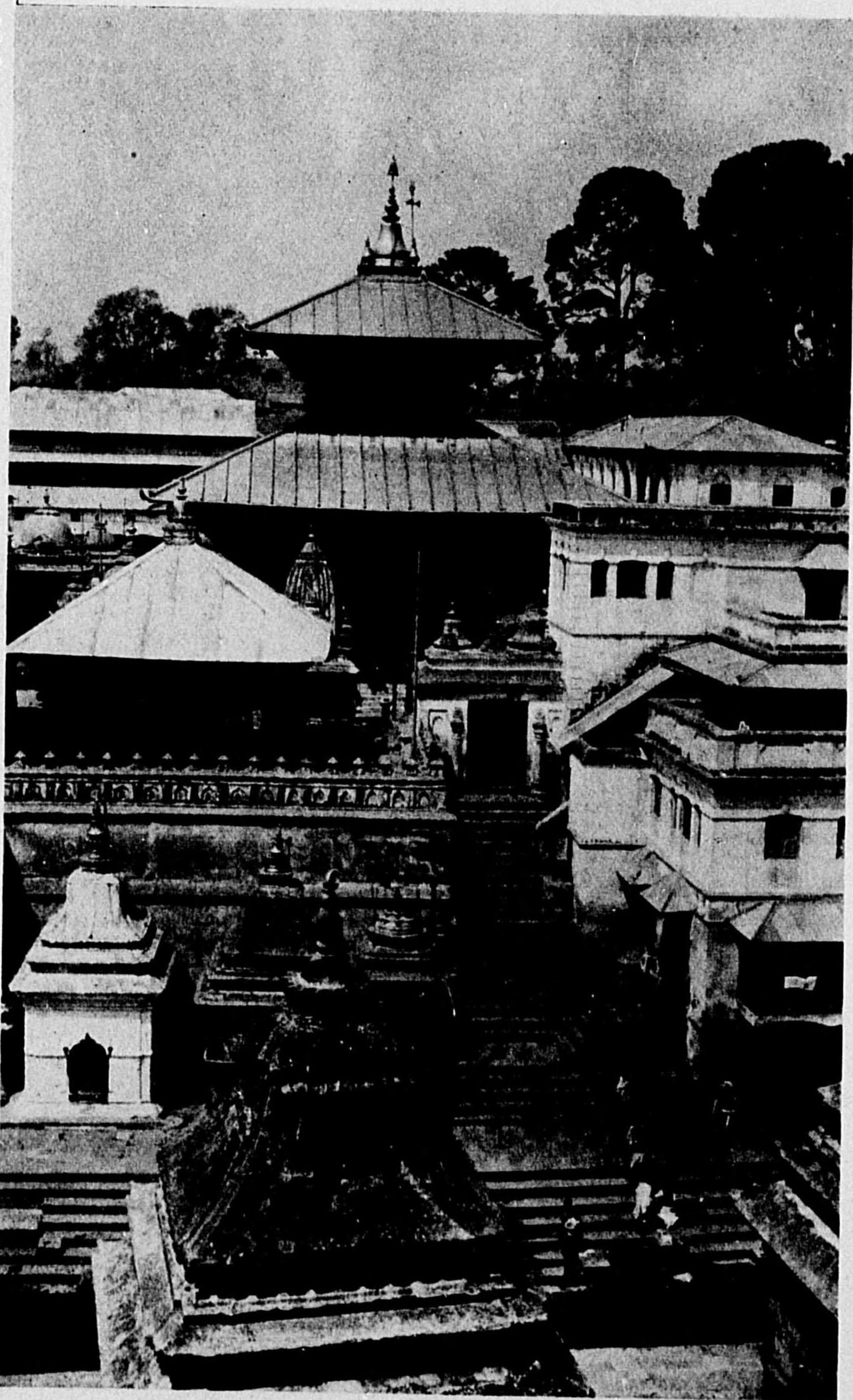
二〇七 バシユバチナート堂 其四 (昭和十一年三月十六日)
(前頁より) はまるで「からかさ」をひろげた様で、これも亦八角三重塔同様ここ以外に私は見受けなかった。



三〇八 バシユバチナート堂 其五 (昭和十一年三月十六日)
 此は前圖の左へ續くのである。前圖左端二重塔は此圖の右端に見えてゐる。左方にバケマチ川畔の(次頁へ)

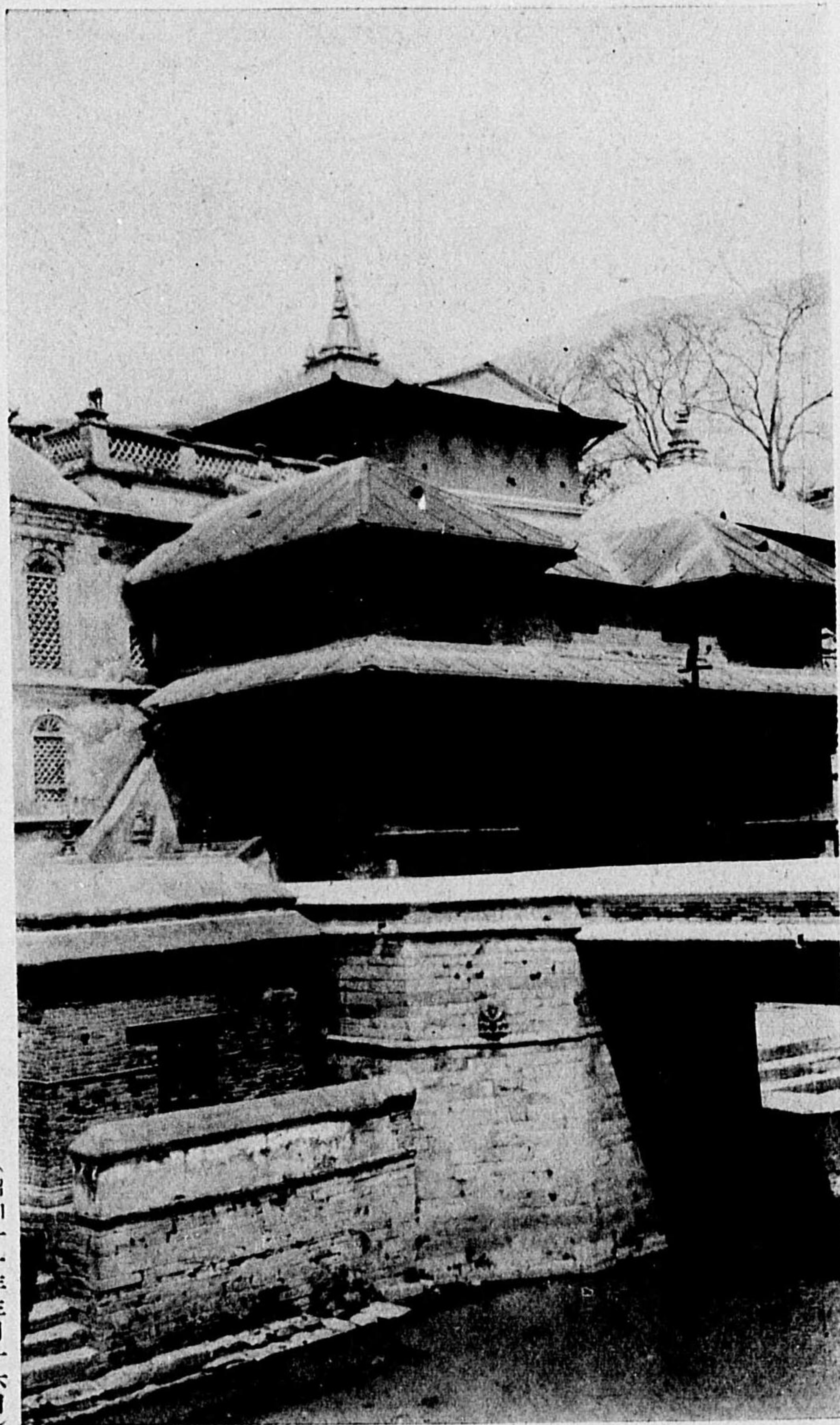


三〇九 バシユバチナート堂 其六 (昭和十一年三月十六日)
 (前頁より) 水浴場と火葬場が寫つてゐるが、これが此圖では左端の近景にでて、女が一人石段のところでは洗濯物をしぼつてゐる。



二二一 バシユパチナト堂 其八
第40頁に掲げたものと同じだが、これは縦位置にして下の方のバグマチ川のところ迄を見せたのである。

(昭和十一年三月十六日)



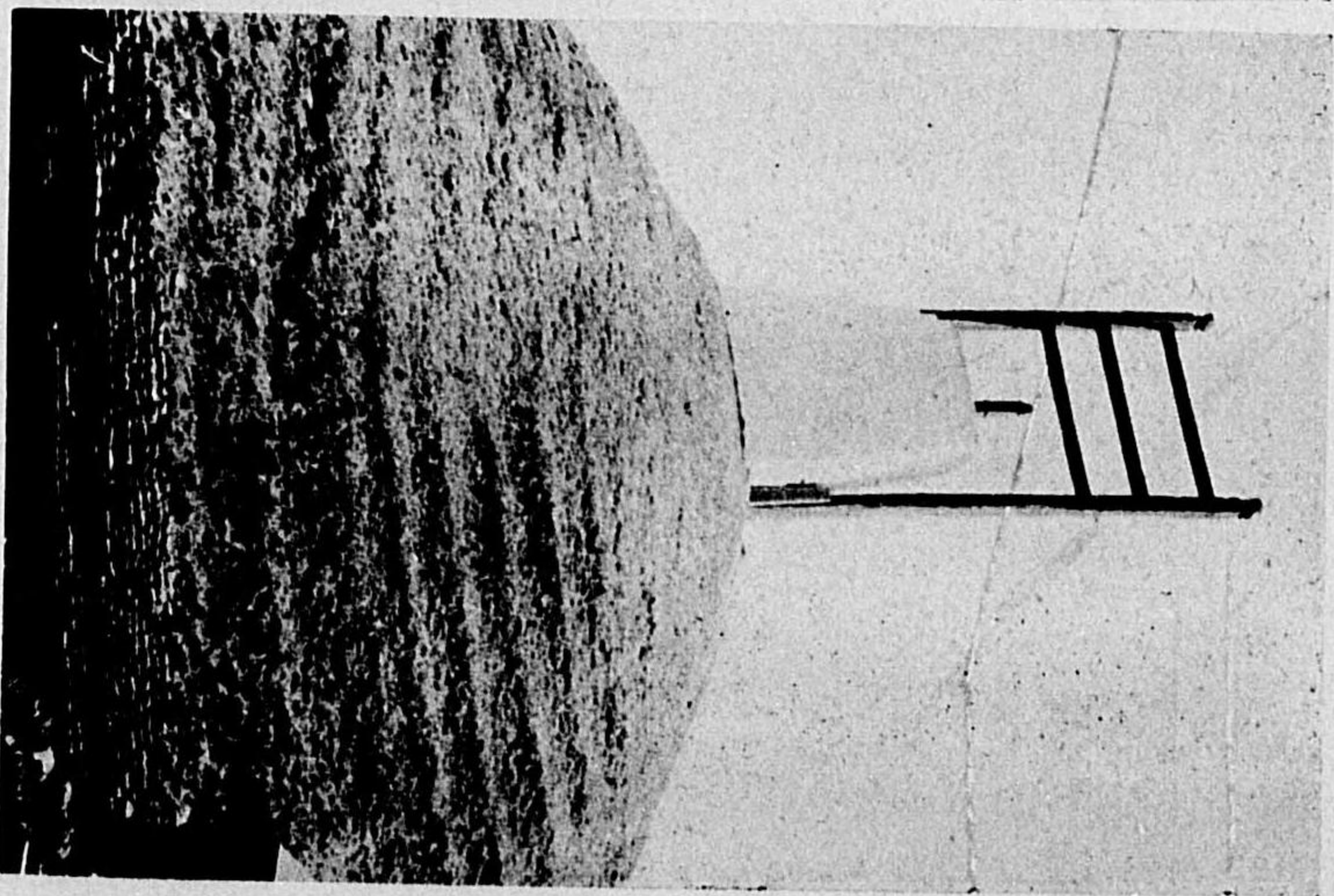
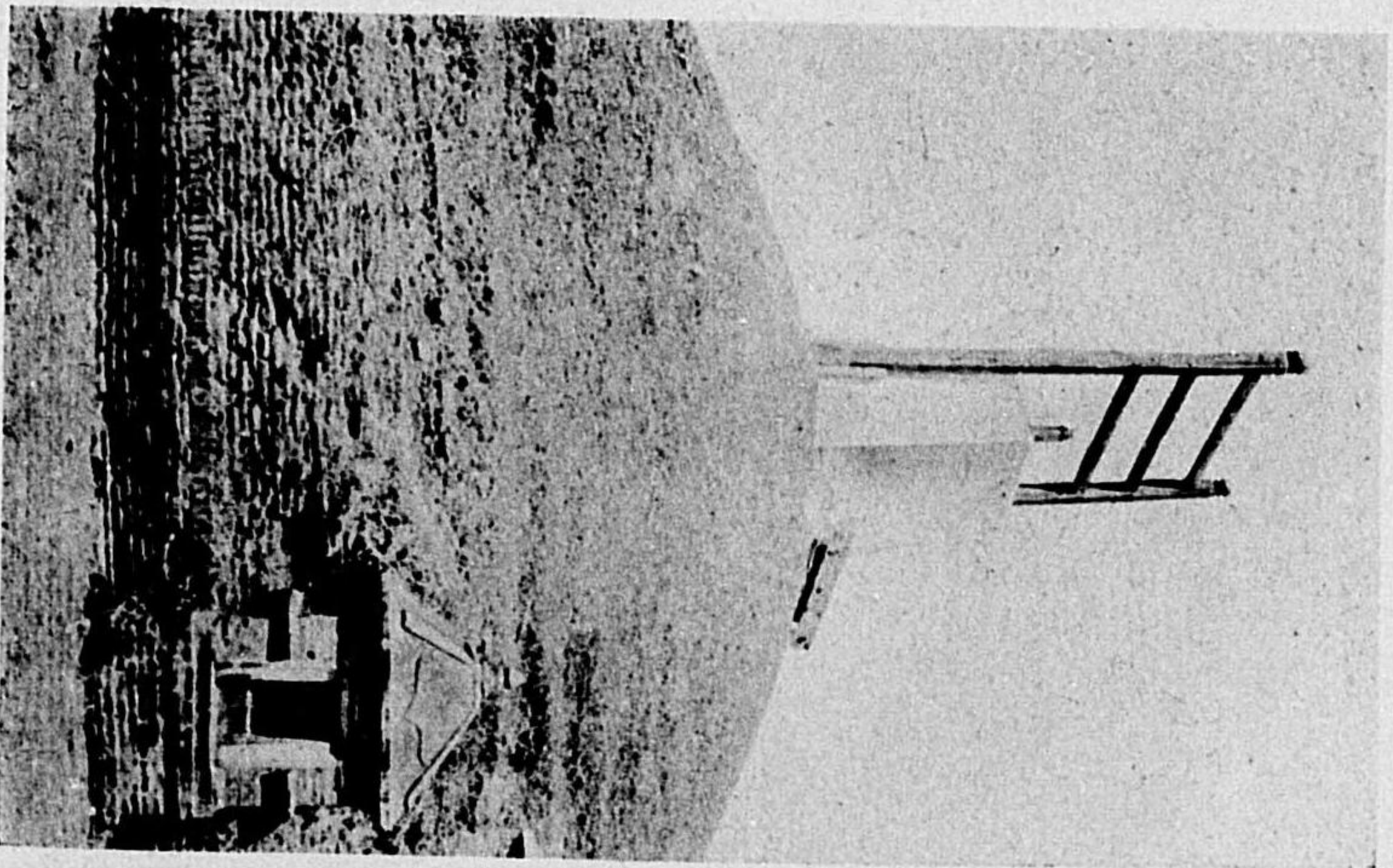
二二〇 バシユパチナト堂 其七
少し遠過ぎて僅に頂上が寫つてゐるだけだが、金鈴の賽の目の五式配置がよく判るであらう。下の川はバグマチ。このあたりは此川の最も神聖な部分。右方の橋亦異教徒は近づき許されぬ位に神聖である。

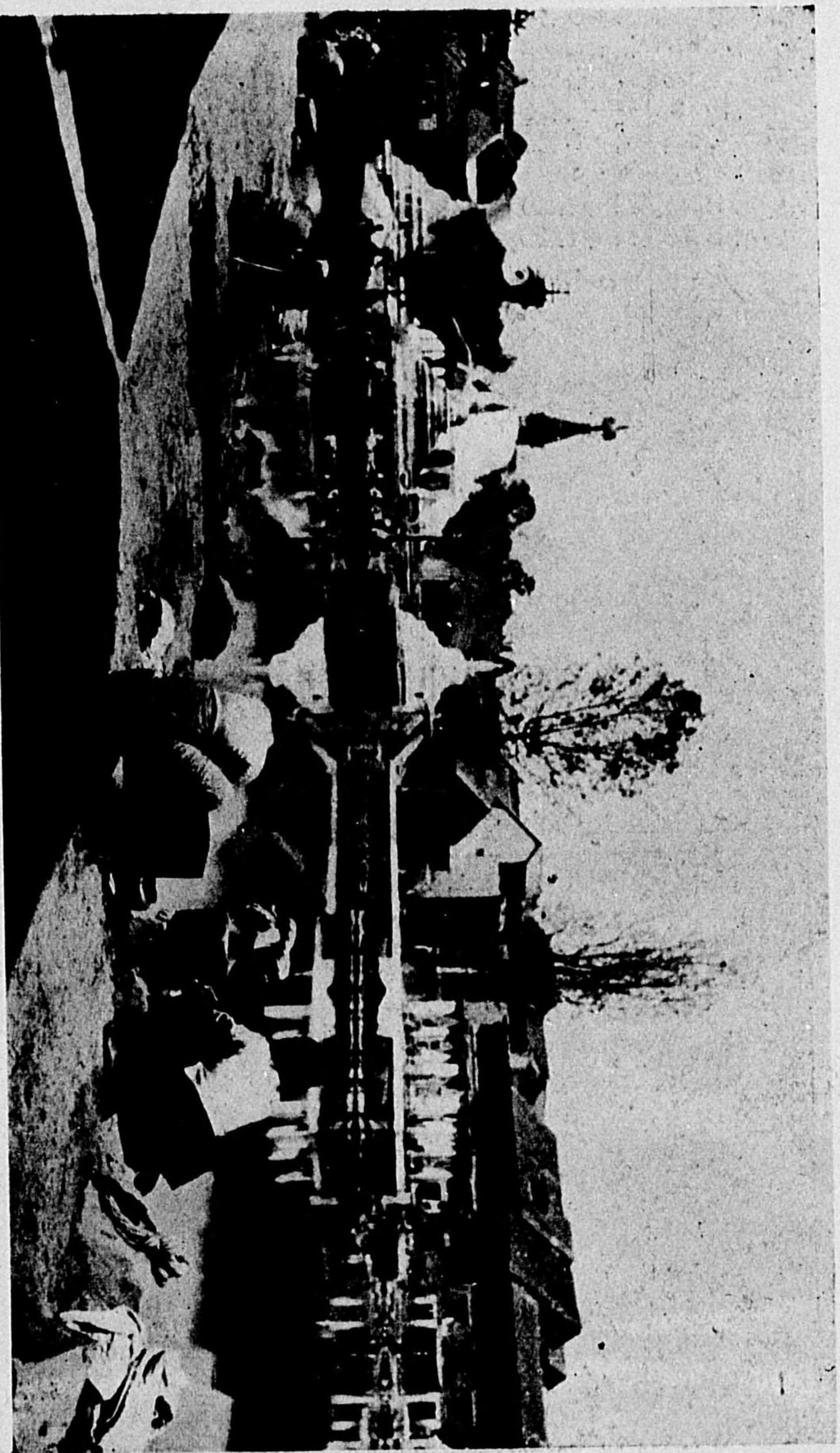
(昭和十一年三月十六日)



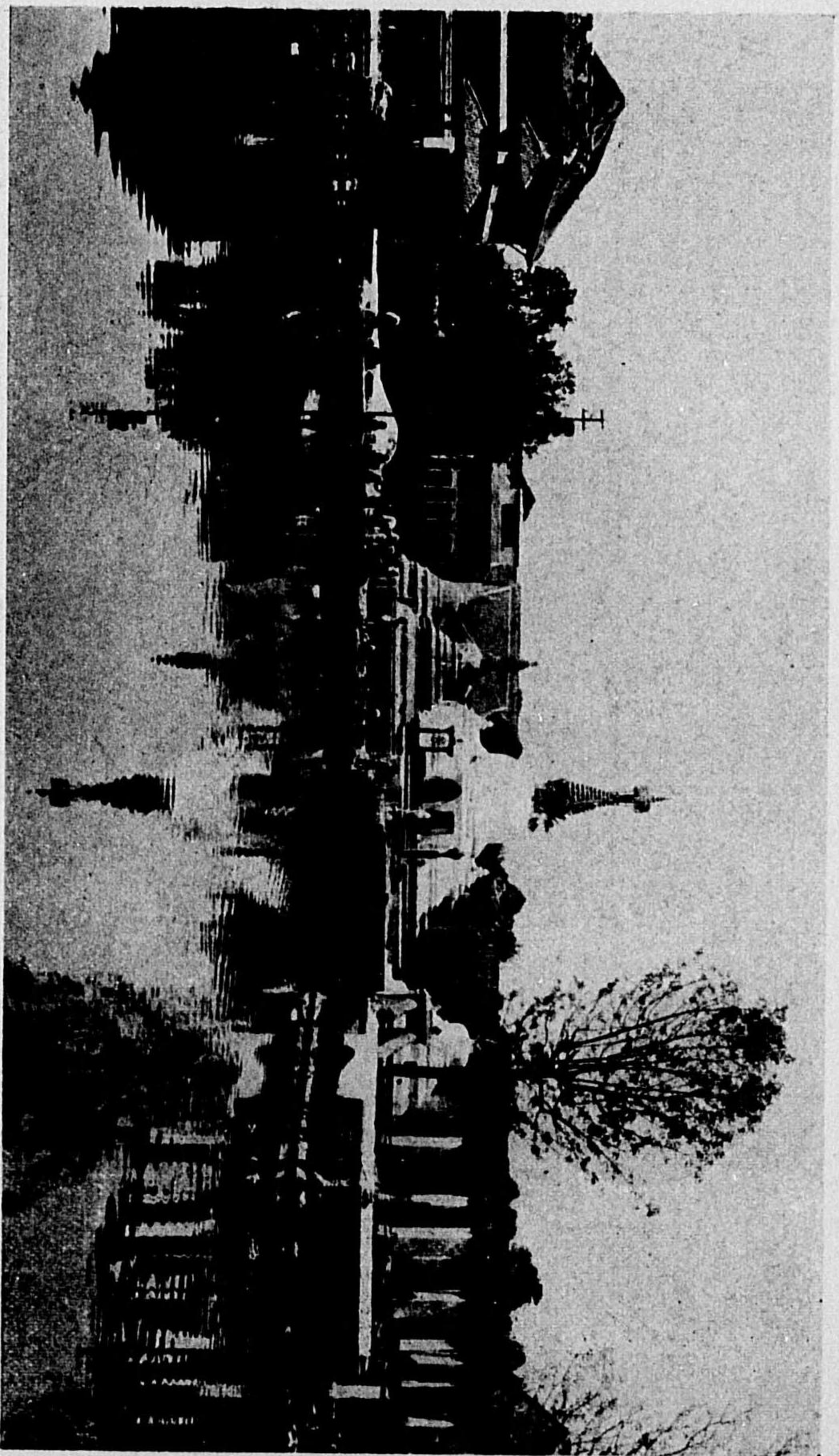
上。二二二 小禮拜堂群 其一
 下。二二三 同 其二
 (昭和十一年三月十六日)
 (昭和十一年三月十六日)
 上圖はバシユバチナート堂東方高地から西北方をみたもので、バゲマチ川の左岸には、かくの如く小禮拜堂が列をなしある。下圖はもつと東方の堂への道、坂道だ
 が其兩方にもまた同様に並んでゐる。多くは特殊な寶形造であるが、間間格段な形
 の葱花屋根(下圖右より四つ目及び二〇八に三棟見えてゐる)のものもあるが、上圖左
 から三つ目の様に、屋根を八角にしたのは、遠方からだと恰も佛塔をのせた様に見
 える。是等小建築は殉死の夫妻(五三)の冥福を祈るために、有力者のたてたもの
 だといふ(本文 182・183・185・186 頁参照)。

右。二二四 パーカン市の北塞 其一
 左。二二五 同 其二
 (昭和十一年三月二十日)
 (昭和十一年三月二十日)
 南塔であらうと想像してゐたのは誤りで、北塔であつた。ツドゥ・テムグルも誤り
 でテムビ・クワツ(Shyri Khat)がほんたうだが、普通名稱はイビ・クワツ(Shyri
 Khat)ださうな。土曜頭の上に白色長方形で遞減せる十重の平頭——これを平頭と
 みるが、或は平頭と相輪の變形と兼ねたものとみるか、或は又平頭は消滅したとみ
 るか容易にはきめられない——があり、其中央より相輪がたち、平頭をこえて貫三
 本を有せる鳥居狀の構架をたつ。周圍に四佛の小龕及び構舎がある。





二一六 タンクと佛塔 其一 (昭和十一年三月二十日)
 バータン市所在のチャヤー・バハ・タンク (Chayera Baha Tank) に沿ひて美しい持塔がたつてゐる。1886年發行のベンダルの著書 "A Journey in Nepal and Northern India" の第IV圖版に「度このところが寫つてゐるが、洗濯女はゐるけれども家や樹木や佛塔の形等も現在とは異なつてゐるところが面白い。中央親塔伏鉢は勿論、平頭・相輪・天蓋等、小さい寫眞だから誤認 (次頁へ)」



二一七 タンクと佛塔 其二 (昭和十一年三月二十日)
 (前頁より) もあらうが、大分の相違があるようである。其後何回かの修理を經たらしく、ことによつたら先年の震災後も、新しく塗りかへ川つ鍍金をしたやうである。池の水は少しにごつてゐるが、塔が水面に反射したところは何と云つても美しい。